THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年 第七號

第二百四十四號


クラブ
洗粉
KURABU.
清き水
美しき素顔
此れ美の極
前者は日本の専有にして
クラブ洗粉のフレンド
后者は東京人の特色にて
クラブ洗粉は其のマザー

哲學大辭書

特價發賣

但し短期間

哲學宗教に關する限り有らゆる方面に亘りて五千有餘の大項と數萬の細目とを密行細字の大判二千五百餘頁の裡に收め斯道のオーソリチー八十餘大家が一項一目に悉く署名して執筆せられたる責任ある大辭書＝假製全五冊但し全部完成の上は製本實費二圓を申受けて壯麗なる脊革裝釘二冊に合本＝定價金卄三圓の所**七月廿五日**迄特價**三圓**宛**五回**拂若くは**十二圓一**時拂の申込を受く＝假製第一冊は七月中旬より御申込順に從ひて送本すべし

內容見本 進呈 郵券二錢

東京市神田區表神保町
電話本局特四三七
電話本局一五三九
振替東京一一三五番

同文館

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限内ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

眞宗信徒生命保險株式會社

京都市下京區油小路御前通角　(電話　七貳貳番)　京都本店
東京市京橋區南槇町壹番地　(電話本局五壹八番)　東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角　(電話東壹貳五參番)　大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地　(電話　七貳六番)　長崎出張所
廣島市紙屋町(秦　忠兵衛方)　(電話　六〇八番)　廣島出張所

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

石丸梅外氏著 新刊

長篇小説

故郷（ふるさと）

春逝きて夏來る。京の連山紫に輝き、若葉の色愈々濃し。初夏の月影冴えて、蛙の音いたく聞ゆ。寂しき夜也。此夜、少年の春や中學生活の往時を懷ふて感慨無量、あゝ共に寄宿舍の窓に春を歌ひし友も老いたり。「故郷」一篇、余が樂しき幼春の追懷也。悲しき凋落の懺悔也。集め來りてさらに第二の幼春に醉ふ。

◎四六版二百六十頁◎

◎定價五十錢税六錢◎

小説

淡潮（あゎしほ）

再版

菊版三百頁

價四十五錢

郵税八錢

發行元 大阪市東區北久太郎町 振替口座大阪貳參九 積文社

發賣元 東京市神田區表神保町 振替口座東京貳七〇 東京堂

自園製茶定價表

▲濃茶十匁ニ付

綾の白	六拾錢
一の白	五拾錢
子日の友	四拾錢
以久昔	參拾錢

▲薄茶十匁ニ付

大園	拾八錢
上別儀	拾五錢
別儀	拾參錢
廣葉	拾錢

▲玉露二百目ニ付

綾洞	拾圓
雲脚	七圓五拾錢
龍凰	五圓
碧雲	參圓五拾錢
双鶴	貳圓五拾錢
眠鶴	貳圓五拾錢
栂の尾	貳圓
綾の玉	壹圓八拾錢
岡の露	壹圓六拾錢
衣笠	壹圓五拾錢
室の花	壹圓四拾錢
雲の錦	壹圓貳拾錢
玉露	壹圓

▲挽茶二百目ニ付

白露	壹圓八拾錢
友白髪	壹圓五拾錢
白雲	壹圓貳拾錢
白折	壹圓
明石	八拾錢
舞鶴	七拾錢
鷹が音	六拾錢
若杉	五拾錢

▲眞粉二百目ニ付

上玉眞	壹圓貳拾錢
玉眞	壹圓
上玉粉	六拾錢
玉露粉	參拾錢
喜撰粉	貳拾四錢
煎粉	拾八錢

▲煎茶二百目ニ付

三丘	壹圓五拾錢
無双	壹圓貳拾錢
双ケ岡	壹圓
岡の花	九拾錢
正喜撰	八拾錢
喜撰	七拾錢
朝日	六拾錢
常磐	五拾錢

登録商標

本店 京都市綾小路西洞院東（電話八八五番）

支店 大阪市高麗町四丁目（電話東西四二五番）

出張店 東京市日本橋區田所町（電話浪花四〇三三番）

出張店 名古屋市玉置町四丁目

杉本三丘園茶舗

（定價表御入用の方は御申越次第送呈）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新式 小說辭典

海賀變哲君編

◎全一册總クロース理想的美本

◁紙數壹千〇廿頁▷

正價金壹圓廿錢

……◀郵稅十二錢▶……

本書の內容は、遠く春の家朧氏が『書生氣質』時代より、近く二葉亭氏が『平凡』の時代に至る迄の間、千有餘の著作中より當時傑作と稱せられたるもの三百餘篇を選み、絢爛の辭句、巧妙の叙事、輕快の會話等を拔萃し、之を容姿扮裝動作會話叙情叙景構造叙事怪異滑稽の十門に分類し、所々に原作の梗槪を附記し、更に鼇頭には演劇用語、花柳通語、古文名句、現代文士錄等を收む。小說を作らんとする者の座右不可缺は勿論、一の美文集として各作家の作風を窺知するを得べき空前の小說辭典也。

空前の小說辭書

小說家及文章家座右の大寶典

(東京本町) 博文館發行 (振替貯金口番 東京二四〇番)

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

新刊の二書

文學博士
坪内雄藏著

作と評論

全壹冊洋布製紙數五百餘頁
正價壹圓四拾錢　郵稅八錢

內容の主なるものは、作(著譯)としては「ヱニス商人法廷の場」譯、歌劇「常闇」喜劇、「登ろ〳〵！」、古代希臘の樂劇エスキラス作アガメンノン以下二曲、イブセン作社會劇「亡魂」評論としては、文學藝術の三作用、半意識の夢、海苔鹿朶、文藝雜話、脚本難、俳優に就いて、女優難と作者難、帝國劇場會社重役に與ふるの書、日本舞踊の現在及び將來、日本舞踊の將來(再び)、音樂と文學、舞踊劇に對する予が作意の過去及將來、寫實式の背景等、主として劇に關するものにして何れも著者最近年間の著譯評論を集めたれば我劇壇の趨勢を窺はんとするものに取りては必讀の書也

早稻田大學講師
島村瀧太郎著

近代文藝之研究

全壹冊洋布製紙數七百五十頁
正價壹圓八拾錢　郵稅貳拾錢

序に代へて人生觀上の自然主義を論ずと題する長文は著者が人生觀上の告白にして本書の爲に新に稿を起せる者也

最近三年間我文壇の思潮は一大回轉を遂たり本書は即ち著者が此回轉に與れるの記錄にして囚はれたる文藝以下美學と生の興味より自然主義諸論近代洋畫論に及迄の諸研究十數篇を收む又時事に影響せる批評文平易親切を旨とせる現在歐洲文藝講話數十篇を採錄して著者最近の重なる作品を網羅せり

在るがまゝの現實に即して全的存在の意義を髣髴する觀照の世界也味に徹したる人生也此心境を藝術といふ是本書藝術論に總括として表紙に刻まれたる題言也

發行所　東京早稻田 牛込　早稻田大學出版部

發賣所　東京日本橋本町三丁目　博文館　(其他全國書肆)

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼一冊 定價五拾錢郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を酙酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一航英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部**（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他



中央公論第二十四年第七號目次



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

松林伯知口演

徳川榮華物語

前篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
後篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
續編 椿の巻

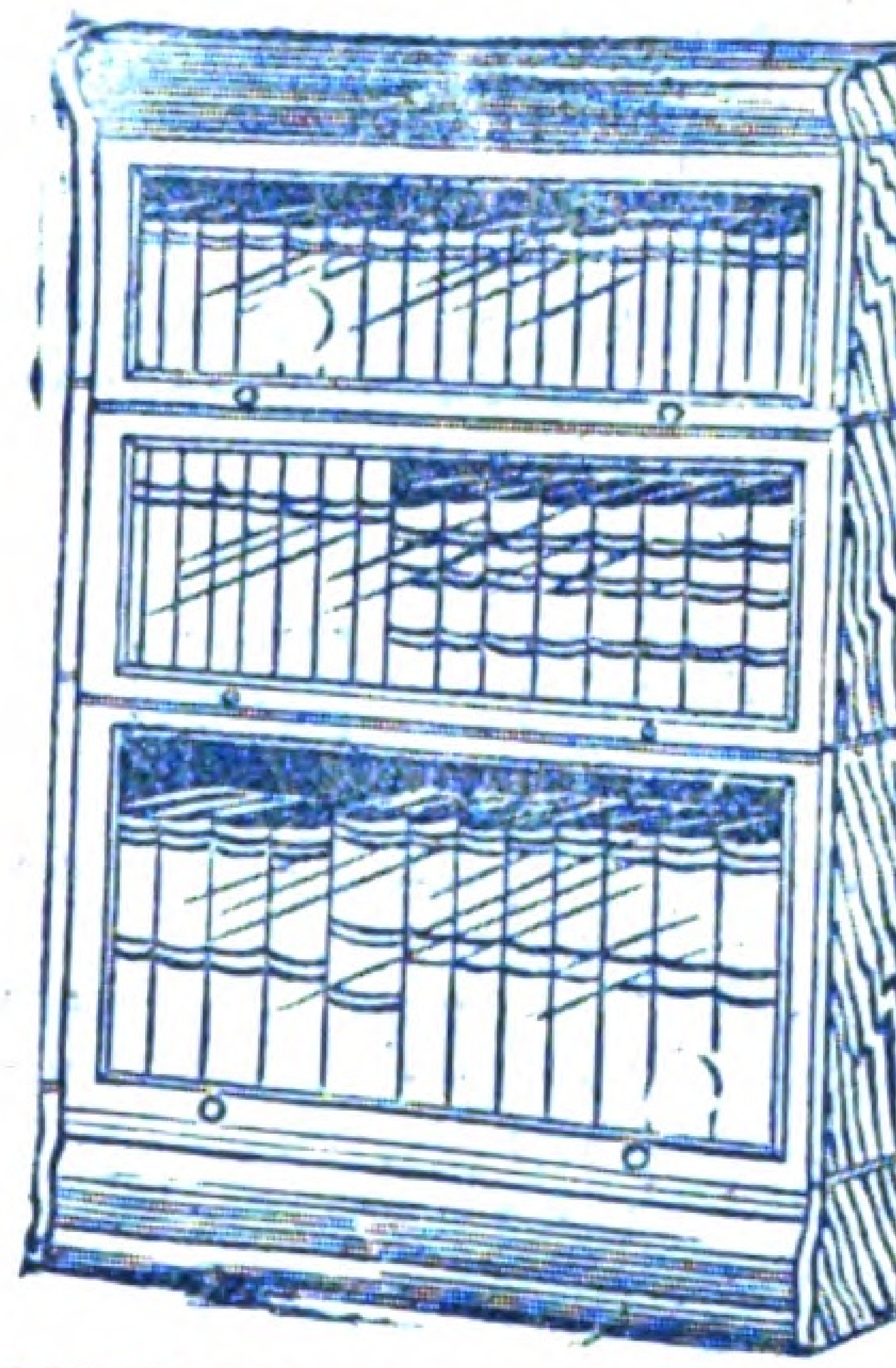
定價各冊金五拾錢〇郵税各冊六錢

組合セ本箱（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナル、ブツク、ケースよりも數等進歩したる者にて特徴は

●材料は上製には櫻並製にはナラ樫を精選し堅牢此上なし●形狀は優美にして色彩は上製は紫檀塗り並製はハイカラ塗●在來の函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり●一組の本箱は三個の段函を重ね之に別にトップ（屋根）とベース（脚底）を附するものなれば藏書の増加に從ひ随意に段函の數を増加し得べく、如何なる室にも適應すべし

一組（總高サ三尺九寸五分、奥行九寸四分、間口三尺上製金參拾圓（荷造費金壹圓）並製金貳拾七圓（荷造費不要）地方運賃御自辨



理想のデスク（本箱と机の兼用）

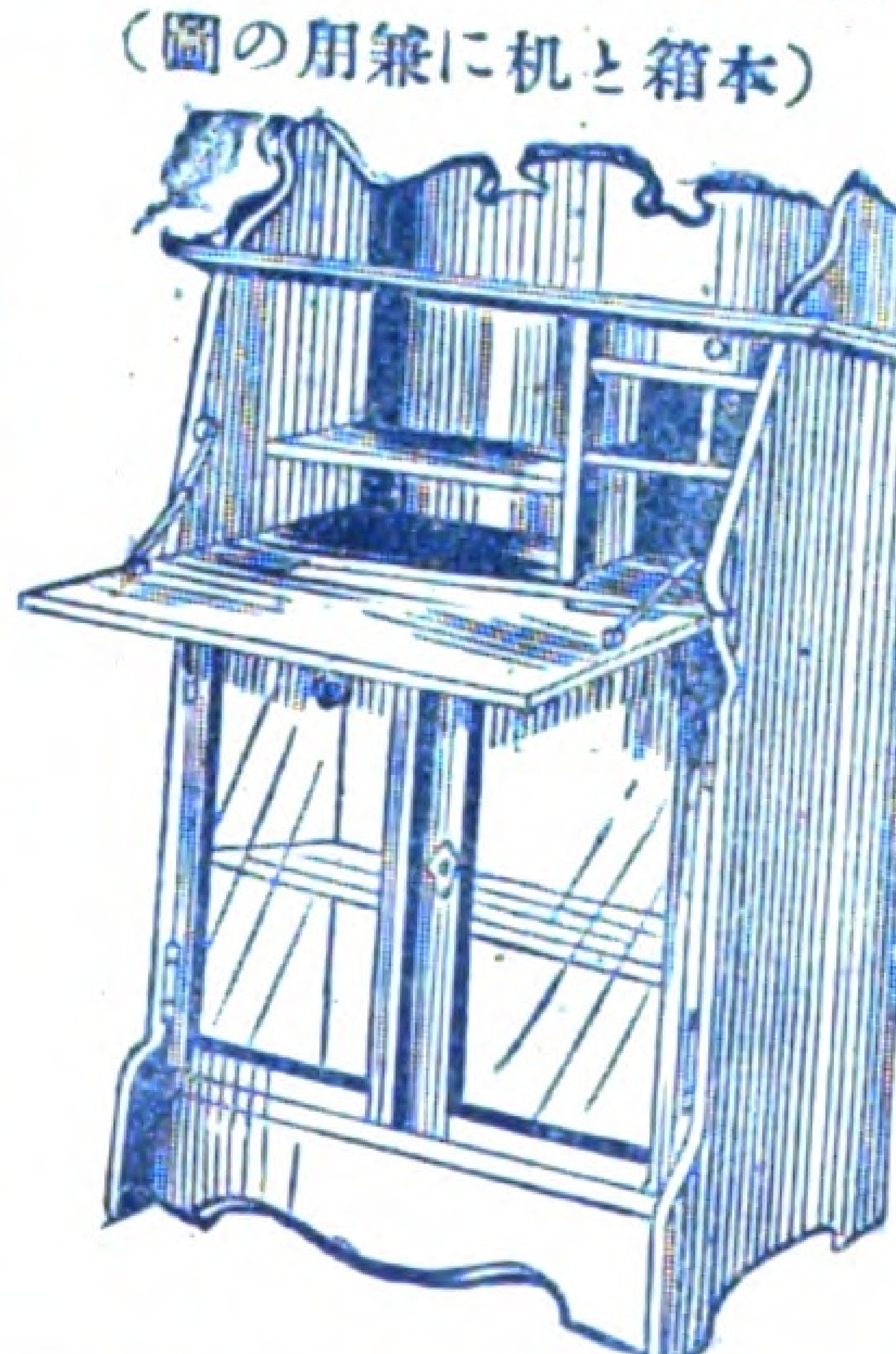
●本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最經濟的也

●上部本棚の戸は開閉自由にして開けば机板なり、用終りて閉つれば元の戸となる故、如何なる狹小の場所にも用ひられ室内面積上の經濟最も大なり

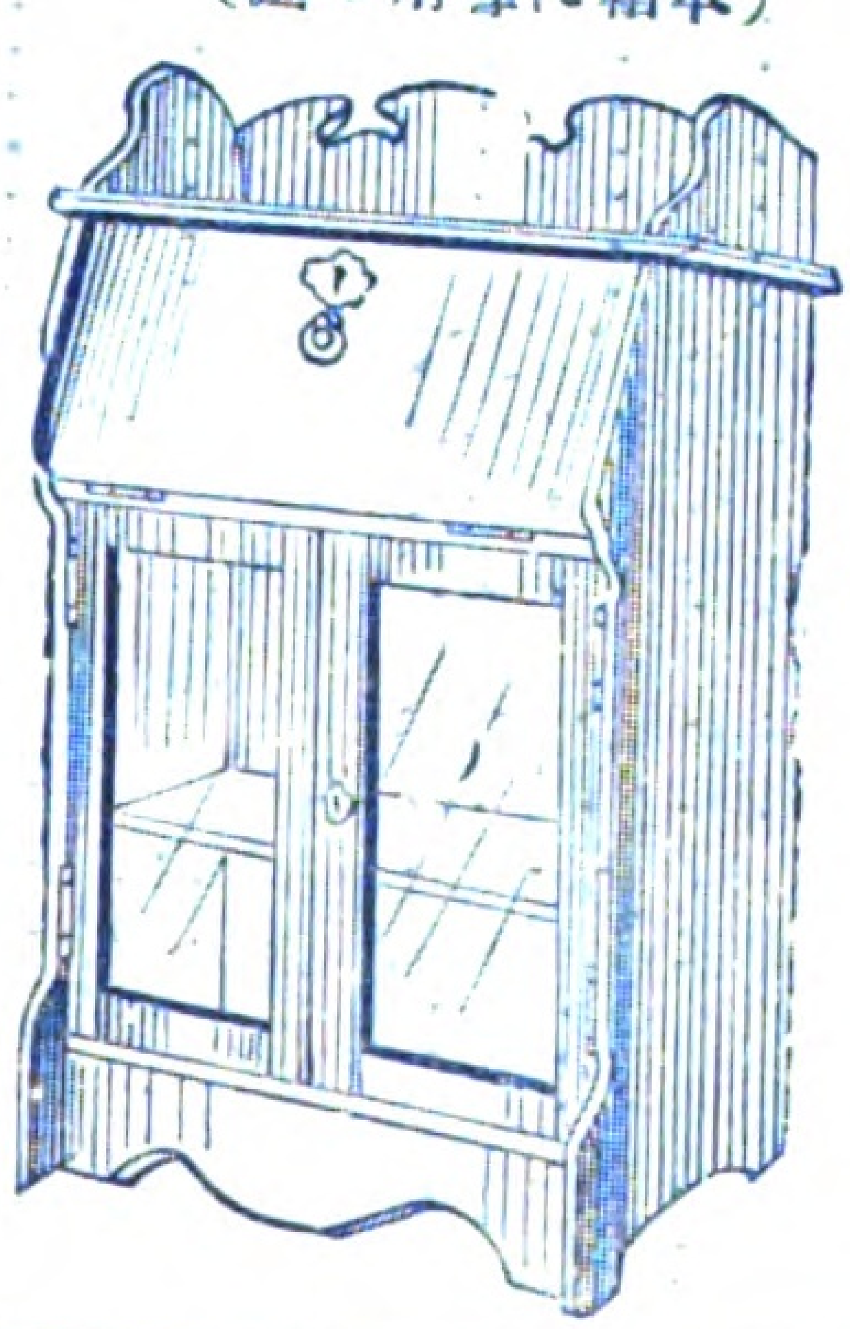
●本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書册帳簿書信材料其他一切の物を最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時を節する事著し

●實用的なると同時に色彩形狀頗る美麗にして優に室内裝飾たるに足る

●一個高サ四尺四寸、奥行一尺二尺二寸、間口（櫻製紫檀塗）金貳拾圓並製（ショージ製ハイカラ塗）金拾七圓荷造費壹圓參拾錢地方運賃自辨



（本箱と机に兼用の圖）



（本箱に專用の圖）

各種本箱製作の御注文に應ず

東京銀座大通新橋際（電話新橋三六七七 振替貯金口座二百番）

發賣 新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Landscape.



EY J, B, COROT.

前號の發賣禁止に對する
文壇諸名家の批判と
反省社全人の意見は
卷末の附錄に揭載したり



第二十四年
第七號
第二百四十四號

統監政治の根本義

（一）

伊藤公韓國統監より入つて樞密院議長に任ぜられ、曾禰子副統監より昇りて統監となれり、此の機會に於て吾人は聊か我が統監政治の本旨に就て論明する所あらんと欲す

我が帝國が韓國に宗主權を立てたるは、其の未だ獨立國たる資力なくして、從來屢々他の強大國に媚事するがため、動もすれば我が國防に危惧を感ぜざるを得ざるが故に、暫らく之を我が保護國として、以て我が邊疆を安固ならしめ、併せて我と善隣なる獨立國たる資力を充實せしめんため、文明の德澤を布きて以て其の君臣を指導する主旨に出づ



第二十四年
第七號
第二百四十四號

統監政治の根本義

（一）

伊藤公韓國統監より入つて樞密院議長に任ぜられ、曾禰子副統監より昇りて統監となれり、此の機會に於て吾人は聊か我が統監政治の本旨に就て論明する所あらんと欲す

我が帝國が韓國に宗主權を立てたるは、其の未だ獨立國たる資力なくして、從來屢々他の強大國に媚事するがため、動もすれば我が國防に危惧を感ぜざるを得ざるが故に、暫らく之を我が保護國として、以て我が邊疆を安固ならしめ、併せて我と善隣なる獨立國たる資力を充實せしめんため、文明の德澤を布きて以て其の君臣を指導する主旨に出づ

即ち統監政治の根本義は、此の大主旨より譲出されたるものにして、實に皇祖皇宗以來神聖傳統の政策たり、國を海表に立つる以上素より然らざるを得ざるのみ

（二）

伊藤公の施設したりし統監政治は、此の國是に由る大主旨を公明に宣傳したりしもの也。即ち韓國の外交權を收め、國防を我が義務として以て我が邊疆を安固ならしむるに於て、幾んど一の遺策なかりしのみならず、文明の德澤を布くに於ても、亦多く勞苦する所ありき、吾人は之を公最後の光明として既に本誌に表明したることあり

然るに我が國人中、此の大主旨を悟らず、動もすれば韓國を舉げて我が純然たる領屬と爲さんとし、隨つて公の政治を目して緩漫に流るゝとし、陰に陽に之を非議する者あり、是れ愚なるの甚だしき也

韓國君民にして我が國是の在る所を察せず、區々の陰謀を弄して屢々我が政策を妨害し、延きて韓國の治平を擾すが如きあらば、帝國は竟に認めて到底我と善隣の交誼を有すべき獨立國たる資格なきものと爲して、玆に斷乎たる手段に出て、舉げて純然たる我が領屬國と爲すも亦測る可らず、韓國をして徒らに理由なき紛擾を事とせしむるが如きは、我が邊疆を安全ならしむる所以に非ざるのみならず、韓國生靈のため到底忍ぶこと能はざれば也

有體にいへば、從前の韓國王室と其の政府とは、其の社稷と生靈とを恤ずして、唯だ君王の私心を充たし、官吏の私慾を飽かしむるにのみ汲々たりき、即ち誅斂を以て能事とし、生靈を虐するに幾んど至

らざる所なかりき、二千年來の文明を有する韓國人が、今の如く憐むべき境遇にあるは、實に其の君主と官吏とに虐せられたる結果にして、政治學者は、惡政治の國家國民を衰弱せしめたる著明の證據として、第一に韓國を擧ぐるを例とす、若し武王の出づるあらば、殷紂の討伐を免かれざるや論莫きのみ、我が帝國は深く韓國の生靈を憐み、其の救治に全力を注ぐと雖も、然かも其の王室と政府とを扶掖して、眷々至らざるなき所以は他なし、之をして其の本然の責務を悟りて、眞に統治の大義に反らしめんことを庶幾するのみ、故に望む所は素より其の王室政府が能く其の生靈を恤て心より之を治むるに至るにありと雖も、私心私情依然として渝らず、却つて我が帝國の本旨を忘却し、生靈を孤注として、單に其の私心を充たし私欲を飽かしめんがため、愚民を煽動し、陰謀譎策を弄して以て無用の紛擾を起し、我れを累すると共に其の生靈を損するが如きあらば、帝國は斷乎として武王の事を行ふべし、是れ韓國の生靈を救ふ所以にして、又實に我が邊疆自衛のため已むことを得ざるものなれば也、眞に世界の平和のため、人道支持のためなれば也、我が百萬の兵を動かし、前後二十億の資を投じ、血を流し骨を積みて二大戰を敢てしたるも、畢竟韓國に對する我が列聖傳統の政策を宣する國是に外ならず、此の大主旨は我が國家の存在する限り、斷じて之を抛つこと能はざれば也

然れども韓國の王室と政府と我が誠意を諒解し、區々の陰謀を弄せず、所在に紛擾を醸さゞる以上、我れは十分に之を誘掖扶持して以て文明の恩澤を敷き、其の生靈を救治すると倶に、其の王室と政府とを導ひきて、以て永く我が善隣となるべき獨立國たる資力を養はしむるを要す、王道茲にあり、人道亦

茲にあり

伊藤公の精神茲にあるを察せず、其の溫和平穩の態度を目して韓國の君臣に媚ぶるものと做すが如きは、思はざるも亦甚だし、思ふに駐韓軍隊の一部が曾て公の政策に快からずと傳へられ、而して居留民の一部また往々にして公の軟弱を非難するものありしが如き、亦唯だ此の大主旨を解せざるのみ

（三）

韓國を以て永く現在の如く我が保護國たらしむるにせよ、將た純然たる我が領屬地と爲すにせよ、韓國の生靈は十分に之を救治せざる可らず、彼等をして生命財產の安固を得せしむると共に、其の智能を啓發し、富力を涵養して以て文明の恩澤に浴せしめざる可らず、是れ政治の要道にして而して世界人道のため也、武王の志を志とする我が帝國の仁義に外ならざれば也

故に統監政治の韓國を御するや、韓國の生靈をして其の所を得せしむるを主眼とす、韓國の王室と政府とを扶掖し誘導する亦此がためのみ、然かも彼等頑迷不靈にして治者たる本分と職責とを解せず、依然私心私慾に駈られて生靈を擾亂し苦惱せしめ、我が帝國仁義の精神に戾るが如きあらば、直ちに武王の志を行ふべきのみ、要は韓國の生靈を救治すると共に、我が邊疆を安固ならしむるに在り、然り、統監政治の根本義は茲にあり

韓國に居留する我が臣民にして、動もすれば韓國人民の貧弱無智なるを侮るものあり、其の蒙昧なるに反して狡猾なるを惜むものあり、隨つて獨り利權を壟斷し、韓國人民を奴隸にするも友人とせず、之

を排斥し驅逐するも協同調和せず、專ら韓國人民を虐待し壓迫して以て居留民のみの利益を謀るべきを主張し、帝國の對韓方針宜しく茲に在るべしと做し、此の見地よりして伊藤公の施政を譏謗したりしものあり、想ふに曾禰子統監たる後尚ほ斯る志想を有するもの少からざるべし、是れ實に帝國の大主旨大精神を解せざる者也、世界の文明と人道とを解せざるもの也、吾人は我が臣民中今日尚ほ斯の如き徒輩あることを慚愧せざる能はざる也

韓國人民は貧弱無智なるに相違なし、而して又蒙昧狡猾なるも事實なり、然れども是れ歷代の王室と政府との惡政治に由て、虐待に重ぬるに虐待を以てせられし結果のみ、高勾麗時代の韓國人民は文化甚だ進み、其の工藝產業大に視るべきものありて、一時は實に我が師表したりしことありき、韓國人民豈生れながらにして今の如くならんや、故に教育を普及せしめて其の智能を啓發し德性を修養し、併せて司法制度を確立し、其の生命財產を保障すると共に、產業を奬勵し、交通の便を開きて以て其の富力を蓄積せしむべし、統監政治が宮中府中の別を立て、國民教育の制度を定め、裁判所を設け、鐵道を通じ港灣を修め、諸種の產業發達の方途を講究する、實に此の目的に出づ、今其の効果を思はず、直ちに韓人の無智貧弱を侮り、蒙昧狡猾を憎むが如きは、寧ろ人情なきもの也、幾んど獸心を有するもの也

韓國に在留する我が臣民等、深く帝國の大主旨大精神を瞭解し、併せて文明人道の大本に考へて、自から執る所を誤まらざらんことを要す、私心私慾のため韓國人民を虐するが如くんば、其の從前の王室政府と何の異なる所かある、共に武王の誅伐を免かれざらんとするのみ

帝國の大主旨大精神は、今や略々韓國の王室と政府とに瞭解されたるが如し、少くも將さに瞭解されんとするが如く見ゆ、而して列國の政府を始め、韓國に在留する歐米人民も亦略々我が統監政治の本義を看取し、其の公明を感賞せんと欲す、唯り我が居留臣民にして然らざるが如きは、寧ろ甚だ慚愧すべきにあらずや

今や統監の更迭と倶に、我が對韓政策の進行は列國の注目を惹き、韓國の王室と政府とを衝動すること少からざるに似たり、吾人故に我が統監政治の根本義を宣明す、統監其の人を更ゆる幾回なるも、我が帝國の大主旨大精神は牢乎として泰山の如く、其の公明なるまた炳乎として日星の如し、帝國は曾て此がため清國と戰ひ、露國と爭ふことをすら辭せざりき、此の志豈永く變す可けんや

文部大臣責任論

（一）

高等商業學校學生の同盟休校問題は、學生の復校によりて一旦解決されたるが如きも、其の實尙ほ懸案たり、學生に對して調停者たりし所謂三團體委員と政府との交涉如何に由ては、再び舊態に戻るの懸念あるのみならず、其の事正さしく一個の政治問題として貽さるべき性質を有すれば也、是れ今日に於て吾人が本問題に對して胸臆を披瀝して、以て江湖識者の參考に供せんと欲する所以也

吾人は學生の態度を非難し、其の教授及び先輩たる校友會の措置を痛嘆し、併せて新聞紙の態度を攻擊すると共に、學政當局の責任を問はざるを得す

（二）

大隈伯は口を極めて同盟休校を敢てしたる學生を賞讃し、甚だしきは日本固有の武士道の精髓に出でたるかの如く放言したりき、今や政治家たるよりも寧ろ教育家として推稱せられ、現に早稻田大學總長たる伯にして、例の煽動的輕佻の放言を爲したりしとせば已む、果して心より斯く信じたりしものとせば、吾人は實に嘆惜せざる可らず、寧ろ伯をして教育界以外に退隱せんことを望まざる可らず

其の學校が大學と爲ると否とは、素より學生の利害に關係すと雖も、之を好まざれば就學せざるまでの事のみ、其の大學たり大學たらざる制度を非難して、學政の當局に反抗し、反抗の極同盟休校するが如きは、斷じて學生たる本分にあらず、其の最上級者は近く今夏を以て卒業すべく、次年生は僅々一ヶ年の後を以て卒業するに拘らず、同盟して退校するが如きは、全く九仞の功を空ふする所以にして、啻だに其の父兄の望を失はしむるのみに非ず、又實に社會の所期に反する也、思ふに生徒自身と雖も、自から愚なることを辨別するや明か也、然かも君國のため、正義のため、一身の利害を捨てゝ自から犧牲たりとせば、洵に已む可らざる武士道の意地とも謂ひ得べきも、其の反抗的態度の不正なること明白なるに於て、斷じて献身的義擧と爲すことを得ず、否、輕佻なる大隈伯及び伯一流の煽動的政事家新聞記者の外は、之を賞讃せざる也

學生の或るものは、學政當局に反抗するがため、先づ新聞記者を歴訪し、其の筆を藉りて輿論を動かさんとを企てたりき、是れ一種の政治運動也、現行法令の精神よりいふも、學生の本分に叛くもの也

ストライキは衆を恃みて少數者を壓せんとする一種の暴行也、資本主に對する勞働者にして之を爲す、勞働者として僅かに寛恕せらるべきも、智識ある學生にして之を爲すが如きは、斷じて容赦す可らず、彼等學生自から勞働者の暴擧に傚ふ、是れ墮落也、然り、最も恥づべき墮落也、其の心事の卑しき、當に唾棄すべし

所謂三團體委員の無條件復校を勸誘するや、彼等尙ほ紛々として傲語せるも、竟に之に聽從したりき。當時彼等は仲裁者の誠意に感激し、己れを空ふして之に從へりと稱するも、若し彼等にして之に從はずんば如何ぞや、彼等は學界の破戸漢となりて右往左往して、竟に其の醜態を晒すべきのみ、然かも自から潔く復校したるが如くに裝ふ、其の演劇的脚色は以て世の瞶々者流を瞞すべし、具眼者をして却つて嘔吐を催ふさしむるを知らざりき、愚なる哉、而して又稚なる哉

(三)

高等商業學校の教授某々は、歐洲に留學して其の商業大學なるものあるを羨み、其の制度を模して學校の資格を大學に昇進せしめんと欲し、機會ある毎に之を主張したりき、而して學校卒業者の團體たる校友會も、亦大學昇格を欲し、先づ新聞紙の聲援を求め、次て議會を勸誘して其の建議を提出せしむること兩度までに及びたりき。

彼等の主張は一應道理あるに似たり、然かも畢竟は一個の虚榮のみ、單に大學なる名を好んで實を顧みざる虚榮心の發作のみ、彼等にして眞に商業教育の向上を欲せば、先づ學科を高くして内容を改良することを主とすべし、其の名義の大學たると否との如き、必らずしも問ふに足らざるのみ、看よ、慶應義塾、早稻田專門學校は、共に自から大學と稱すと雖も、其の經濟科商科卒業者と、大學の名義なき高等商業學校の卒業者とは、其の實力に於て定評あり、後者の前者に勝さるも劣らざると蔽ふ可らざるにあらずや、教授及び校友會にして、眞に實着なる識慮あらば、而して心より商業教育の發達を欲せば、大學の名義の如き必らずしも問ふに足らず、其の學科を高くすると容易にして、寸毫も新聞紙の勢力を借るを要せず、素より議會の後援を恃むを要せざる也、然るに悖々焉として單に大學なる名義を貴び、一個の文部大臣を動かすがため、好みて自から勞苦す。是れ根本に於て彼等の謬まれる第一義とす

教授某々等は又文部省が大學昇格に就て己等の意見を徴すべしと自信したるも、其の事なくして却つて豫期以外の結果を見るに至るや、憤然として辭表を提出すると共に、其の次第を吹聽して以て學生の感情を煽動し激發したりき、夫れ學生にして同盟休校の如き愚かなる暴擧に出づるとき、教授たり教授たりしものは百方之を訓誨し教諭して以て之を止むるを當然とす、眞に學生のために思ふもの素より然らざるを得ざるのみ、事玆に出でず、却つて學政當局を攻擊して以て血氣定まらざる青年學生を煽動し、恰かも薪に注ぐに油を以てして、竟に暗愚なる暴擧の火の手を揚げしむ、要する所自家の我見に執し、其の成らざるを怒りて人の子を賊するを顧みざる者也、紳士としても恕す可らず、況んや教師たるをや、

校友會に至ては、文部省の措置に激昂するの極、更に衆を恃みて必らず之を挫かんと欲し、一方には學生等と共に政治的色彩を帶びたる運動を爲し、一方には學生等に同盟休校を慫慂し、之に要する費用を支出し、且つ激勵するに決死の覺悟を爲すべきを以てしたりき、去れば學生等の運動殊に同盟休校の如き愚かなる暴擧を差止むべき父兄並びに保證人すら、一齊に起ちて此等に雷同し、遡まに學生等に聲援するに至りし也

一個の大學なる名義を贏ち得んとする虚榮心を滿足するに足らざるが爲め、斯の如き紛擾を生じ幾千の生徒をして殆んど方向を誤まらしめんとす、敎授某々及び校友會の擧止の愚妄にして狠藉なる、寧ろ學生の上に在りと謂べし。

（四）

本問題に對する當時の諸新聞紙の態度は、殊に吾人の遺憾とせざるを得ざる所也

事は幾千の學生の方向を誤まるや否やの大問題なり、之を觀察し論議し、記述するにも、十分シリアスならざる可らず、果して社會の木鐸として一世の人心を指導する抱負あらば、必らずや斯くあらざる可からず、然るに多くの新聞紙は、面白半分に之を所謂三面種とし、强盜、殺人、情死、掏賊、詐欺、脅嚇と同一欄内に塡めて、然かも熾んに學生を煽動するの態度を執れり

彼等が學政當局者を攻擊したるは良し、然れども學政當局を攻擊するの極、學生の行動を徹頭徹尾賞讃し、其の同盟休校をば恰かも正義軍の如く書き做し、血の沸きて而して心淺き學生等を煽動したるは何ぞや、或る人は曰く、學生等の同盟休校は早稻田と慶應との利益なり、何となれば彼等退學の後は此の兩校に分れ入ると必然なれば也、故に兩校のためにする記者等極力學生を敎唆して同盟せしめたるの

みと、是れ必らず齊東野人の妄語にして、正さしく新聞紙を侮辱するもの也、然れども奇なる哉、慶應早稻田の兩校出身者に由て指導せらるゝ新聞紙の多く學生煽動派にして、然らざるもの、概して中正穩健の態度を支持したりしとを

夫れ敎師に敎唆せられ、先輩たる校友會より煽動せらるゝ外、更らに新聞紙の多數によりて持囃され愚かなる暴擧を敢てするに隨つて彌よ義人らしく吹聽せらる、血氣に趨りて常識を失へる學生が、翕然として益々邪路に入れるも素より其の所のみ、近時俗人衆愚の新聞紙に煽動せらるゝもの殊に多し、而して新聞紙が燒討的暴擧ある每に、之を煽動するも曾て穩健なる方向に指導するとを爲さざるは、是れ一種の時代的流弊たらずんば非ず、吾人は恒に慊して以て慨す、堂々として彼のタイムスたる能はず、滔々相率ひてアメリカナイズするは、寧ろ新聞紙の墮落ならずや

本問題は自然政治問題たるべきもの也、故に政治家たるもの徐かに成行を視て以て之を政治問題として解決するの機を捉ふるを要す、然るに代議士若くは政黨幹部員にして、政界に重きを爲す人々が、動もすれば學生の保證人と號し、自から紛擾の渦中に投じて出頭沒頭し、黨の本部員等また或は囂々として調査し推問すといひ、或は一種の決議を爲さんと唱へて其の草案を或は出し或は潜む、其の態度の沈着ならずして動もすれば紛擾に心目を眩惑せらるゝの觀あるは、政界に事あれかしと覗ふて、曾て輕重理非を擇ばざるに似たる、吾人は寧ろ陋なりとして之を惜まざる能はざる也

（五）

吾人は本問題を目して敢て政治問題といふ、彼の學生の擧動素より愚にして暴なるや言を俟たず、其の父兄保證人の常識なくして、而して敎師及び先輩たる校友會の煽動あり、新聞紙の敎唆に兼ぬるに彌

次馬的政事家の音頭取りと、俗人衆愚の喝采とに由て、彌よ其の紛擾を大にしたるものなりと雖も、然かも此がため之を政治問題と爲す可らざるの理由は有るとなし

然る所以は他なし、學政當局たる文部省の措置また實に宜しきを得ざりしものあれば也、單に理を推して之を論ずれば、眞に商業教育を上進せしめんには、現在の高等商業學校に改良を加へ、其の學科を高くするを當然とす、是れ華を去て實を採る所以也、文部省にして若し此の主意を支持せず、輿論殊に議會の建議に聽きて之を大學に昇格すとせば、宜しく議會の建議を採納して直ちに之を大學とすべし、假令集中主義を執るといふも、之を帝國大學内の商科大學として、彼の農科大學工科大學と共に鼎立せしむべし、今の一ッ橋校舍を以て帝國大學の分校とすると、例へば駒場札幌の農科大學と同じくして可なるにあらずや、然るに之を法科大學の中に加へ、法科の學科中に僅々商業科を混入するも、全然商科大學の名義を失はしむるが如きは、單に彼の學生を失望せしめ、教授校友會を憤怨せしむる所以なるに止まらず、又實に議會の建議を無視するに齊しき也、斷じて輿論殊に議會の建議を聽納する所以に非ず

若し或は一分科とすると、經費之を許さずとする乎、然らば則ち何ぞ之を次年度に於てせざる、議會既に商科大學設置の建議を爲すと兩度、何ぞ其經費の協贊を吝む可けんや、文部省にして眞に輿論を重んじ、議會の建議を尚ぶと言はゞ理素より斯の如くならざる可らざる也、然るに急遽事を斷じて然かも議會の豫期せざりし所に出て、全く商科大學の名目を失はしむ、何人か之を文部省至當の措置といはんや

其の措置の至當ならざるがために、反言すれば行政上の失當處分(敢て違法處分とは言はず)のために延きて幾千の學生を紛擾せしめ、世をして少からず驚異せしむ、假令其の紛擾を過大なりとし、而して過大なるには別理由ありとするも、文部省の措置實に第一義に於て過まれりとせば、責任の在る所多く

論ぜずして明白ならずや、而して事の政治問題たる亦必らずしも多辯を要せざるにあらずや

（六）

文部省の措置は或は果斷なるべし、之を秘密の間に內決し、單に法科大學に諮問したるのみにして、高等教育會議にも、又學校教授にも、學校評議員會にも諮問せざりしの一事は、必らずしも失當ならざるべし

之と酷だ相似たるものは、農商務省が突然四十五年度の大博覽會を中止したりし一事とす、農商務省は大博覽會評議員にも計らず、幾んど其の共同者の如き地位にある東京市の當事者にも告げず、甚だしきは其の大博覽會長官にも語らずして、秘密の間に閣議を定め、突如其の中止を公表して世上の耳目を駭かしめたりしは、幾んど文部省の措置と相似て酷だ相近し、即ち農商務省の措置は正さしく政治問題たるべかりしも、議會竟に之を問はず、囂々たりし俗論また何時の間にか靜止するに至りしは他なし、博覽會の中止其のものは、實に至當の處分なれば也、理義に於て一點の非難すべきものあらざれば也、文部省の措置は然らず、文部省一個の意見を支持するにもあらず、議會の建議を聽納するにもあらずして、商科大學の名だも存せざる處分を行ふ、何人も視て以て理義爭ふ可らずと爲すものは非ず、否、何人も非難する所のものたるに於て、其の結果や到底大博覽會の中止と同歸趣なる可らざる也

大小輕重素より甚だしき徑庭あるも、彼の明治三十八年秋の燒討事件を看よ、非媾和論の短見にして、其の集會の愚なる識者を俟つて知らず、殊に燒討の暴行を敢てするの言語同斷なる、何人も之を認めざるは莫し、然かも日比谷公園を閉鎖したる過失あるがために、內務大臣、警視總監は竟に責を負ふて其の地位を去りしにあらずや、日比谷公園を閉鎖したればとて、必らずしも燒討を行ふの謂れなきとは猶

ほ文部省の措置を悦ばざればとて、同盟休校を爲さざる可らざる謂れなしと同じ、然かも焼討事件が政治問題となりし以上、同盟休校事件も亦純然たる政治問題として、當然文部大臣の責任に歸すべきにあらずや、思へ、斯の如き稀有の紛擾あつても、尙ほ責任なしとせば、行政官なるものは竟に全く無責任となるべし、行政上の責任は、幾んど絶無となるべし、是れ立憲政治に於て斷じて有る可らざる事也

（七）

同盟休校事件は、少からず當時の世を騷がしたるもの也、之に對して行政上の責任を免除すべき理由ありとせば、之を政治問題と爲す可らずとせば、其の前提として少くも文部省の措置の妥當穩正にして、寸分だも錯誤なきことを明白にせざる可らず、即ち大博覽會中止と同一視すべき理由なかる可からず、敢て問ふ、誰か文部省の措置を是認するものぞ

文部省の措置は決して已むを得ざるものには非ず、假令輿論に反し、議會の建議に背くも、極めて賢明確實なる處分にも非ず、之を大博覽會中止とは到底同日に視る可らざる也、聞說、大浦農相は大博覽會の中止に對して責任を一身に引受けて議會の衝に當り、其の男らしき態度は、殊に心あるものをして推服せしめたりしと、小松原文部大臣また當さに必らず然かずべき也、吾人は敢て斯く期待す

區々の商科大學問題を以て、一個の政治問題と爲し、延きて内閣の輕重を試みらるゝが如きは、吾人の痛惜する所とす、然れども駟も已に及ばざるを奈何せんや、今や所謂三團體の委員たる澁澤中野の諸氏、頻りに善後策を政府者と交渉しつゝあり、吾人は兩者が理義を明かにして以て事體を誤まらざらんことを期し、兼ねて本問題に對する從前の世論を正すがため、敢て呶々して玆に至る、識者希くば之を諒恕せん乎　（六月廿二日稿）



關稅問題

稻田周之助

一、總說

今日世上の問題中關稅に關するものほど陳腐爛熟なるはあらず。世界各國の政治家實業家は言ふに及ばず、學校の教師より田舍演說家に至るまで自由保護の得失、關稅同盟、關稅戰爭の利害を云はざるはなく、語るべきは語り悉くし、說くべきは說き盡くして殆ど餘蘊を留めざるなり。之を以て今に及で之を口にし之を筆にするもの皆其言を求むるに苦めり。言なきにあらず、新たに言ふべきもの鮮きが爲めなり。

頃者中央公論記者瀧田君、予の關稅問題に關する意見を求む。是れ即ち予の最も言ふに苦む所なり。併ながら此問題は世間多く語り多く說くのみにて更に其要領を得ず。解釋益々多くして益々最後の解釋と相遠るの情あり。是れ即ち予をして此に數言を挿ましむる所以なり。

二、何をか關稅といふ

試に先づ此主題の何ものたるかを云はん。予の見る所を以てすれば關稅は國家が其の畫きたる境界線に觸るゝ貨物に課する租稅なり貨物の此線に觸るゝ狀態より區別すれば、內より此線に觸れて出る物に課するは輸出稅、外より此線に觸れて來り再び出て去る物に課するは通過稅、外より此線に觸れて內地に入る物に課するは輸入稅なり。併ながら輸出稅は植民地に於て間間これ有るを見るも、今日の文明國は概ね此租稅を課せず。通過稅亦稀有の異例にて各國民皆輸出及び通過を獎勵こそすれ、租稅を課して之を阻止することなし。從て實際上關稅といへば則ち輸入稅を意味す。

輸入稅は何ものが之を負擔するか。通說に依れば內地の消費者之を負擔するものなり、然りと雖も輸入者

即ち外國人は相互に其の商品を賣り込むことを競爭し、內地製造工業者及び商人亦外國輸入品に對して營業競爭を爲す場合に於て關稅は遂に輸入者に對する直接稅たる場合甚だ多し。且其の賦課の場所は則ち內外經濟界を分割する境界線上にあり。是れ其の普通の租稅と相同からざる所以にして、立憲國の常經を以てすれば、總て租稅は法律を以て之を定めざるべからざるに拘はらず、關稅のみは條約を以て之を定め、勅令又は行政命令を以て之を加減改廢するを妨げざる所以なり。

大日本帝國憲法第六十二條に曰く「新に租稅を課し及稅率を變更するは法律を以て之を定むべし」と。本條は租稅法の原則を示すものにして、之と憲法第二十一條の「日本臣民は法律の定むる所に從ひ納稅の義務を有す」といふ明文とを合せて是を見るときは、法律以外の規定を以て租稅を課するは憲法に違ふが如き觀なきにあらず、是れ世間往々關稅協定に對して疑義を挾むものある所以なり。然りと雖も條約締結の事は憲法第十三條に依りて天皇の大權に屬し何等の制限あるに非ず。此大權に依つて締結したる協定關稅は則ち憲法に照らして有効に成立せるものたり。且輸入稅は國外より入り來る貨物が境界線に觸るゝ時に課するものにして、其の直接の納稅義務は輸入者にあり。是れ日本帝國のみならず他の立憲國に於ても關稅のみは法律の外に條約又は命令を以て之を設定し及び之を變更するを許す所以なり。

三、國定稅と協定稅

關稅を定むるの道二あり其一は法律、其二は條約なり。前者を國定稅、後者を協定稅といふ。專ら協定稅を用るものあり、專ら國定稅を用るものあり、二者併用するものあり。併用者中にも國定稅を主とし協定稅を以て之を補ふものと、協定稅を主として國定稅を以て之を補ふものとあり。後者は甚だ稀れなれども、日本帝國の如きは則ち此稀有の例に屬せり。

何故に日本帝國が此稀有の例に依るかは歷史を以て

之を解するの外に其設なし。乃ち日本帝國に關税あるは安政五年英佛蘭米四國と協定したる貿易章程に始る。貿易章程は船用器原料品上等酒類三割五歩、其他の商品二割の重税を課するの約束なりしが、慶應二年改税約書を以て五歩に減じ、明治二十七年日英條約改正成りて後各國との條約を改め、英佛獨諸國と日本に輸入する百二十種の貨物に就き關税率を協定したり。之を改税約書に比すれば五歩税より進みて一割税となりたれども、仍ほ安政五年の貿易章程の高きに若かざると遠し。且此協定は日本帝國が其の輸入品に課する税率を定むるのみにして、對手國の輸入税に就ては何等の約束なし。是れ世人之を目して片務的協定税と爲す所以なり。

而して我國定税は明治三十六年一月一日實施したる明治三十年法律第十四號關税定率法に依りて其形を現はし、同法は明治三十九年の改正を經て現行法たり。關税定率法は協定税目に漏れたる貨物に適用し、及び關税條約を締結せざる國よりの輸入品に適用するものにして我にありては則ち協定税の補助作用を爲すものと謂はざるべからず。但し關税定率法附屬輸入税表には約五百三十八種其税率亦五割六割若くは其以上に及ぶ。

夫れ關税は租税の一種にして之に依りて國庫の收入を得んとするものなり。故に國家より之を見れば收入の多きを願ひ其の寡きを願はず、從て課税品目の餘りに寡く税率の餘りに低きは決して望ましき事にあらざるなり。且關税高きときは輸入品の價格を貴くして、內地の產業者をして外國品と競爭して利便の地位を占め、及び其生產品を內地にて高く賣るを得るの益を有せしむるを以て、關税を農事又は製造工業を保護するの政策に利用することあり。所謂保護的關税の名是より生ず。是れ今日世界到る處關税增加論の流行を見る所以なり。

四、關税協定の必要

頃者世間或は日本帝國は最早協定税を設くるの必要

なし、現行條約終了の後は國定稅のみに依るべしと云ふものあり。

日本の協定稅は五分に始りて一割にまで進みたれども、今の世に當りて最高一割といふ低稅は世間殆ど其例に乏し加之名は協定といふも所謂片務的約束にて我のみ其拘束を受けて對手國は此協定に依りて何等の義務を負はざるが如き亦文明國間に其例を見ざる所なり。故に明治四十四年以後に設定すべき關稅條約は必ず相互的なるべし。我を拘束するあらば彼をも拘束すべし、對等なるべし、雙務的なるべし。是れだけは日本帝國の面目に懸けても飽まで主張せざるべからざる所のものたり。而して既に相互的なりと云ふ以上は、必ずしも稅率の高低を設くるの必要なきが如くなれども、一割は餘りに低きに失せり、相當の程度まで、之を引上ぐるは亦彼我兩國の利益ならざるべからず。

併ながら今日各國を通じて國定稅は稅率甚だ高きに對して協定稅は甚だ低く、既に關稅を協定するといへば關稅の輕減を意味するの實あり。從て今後の條約改正に依りて關稅の加重を望むは甚だ難しと云はざるべからず。是れ關稅收入を增加せんと欲する者の協定稅を止めて專ら國定稅に依るべしと主張する所以なり。

夫れ非協定論必ずしも理由なきにあらず。然りと雖も是れ到底實行すべからざる者に屬せり。今日とても專ら國定稅に依るの國なきにあらず、然りと雖も一たび關稅條約を結びたるものは其の外交政策上若くは經濟政策上より、其の條約關係を持續するが常にて、若し一たび結びたる條約關係を破毀し又は條約終了のまゝに打ち棄て置き新たなる條約を取結ばざるときは意外の困厄を湧起することなきにあらず。往年佛伊間の通商條約終了するや伊太利の農業及び製造工業は莫大の不利益を被むり、僅々二箇年間に佛國への輸出は其六割一分を減少し、又佛國人が其の伊太利に投じたる資本を回收すると七億法に上りたり。伊太利財政經濟困難の原因一二にして足らざるべし、併ながら其主因は則ち佛國との關係善からざるにあり。其後千八百九十六年十一月二十一日佛伊通商條約にて輸出入に關

する協定ありてより、伊太利の商業勃興の色あり。忽ちにして輸入に一億法輸出に二億法の增加を見るを得たり特に千九百年獨逸の恐慌延いて伊太利を襲ひ、一大困厄を來たさんとするに際して佛國銀行パリ、コムトアルデスコムト及びバンクドパリが羅馬市場の危急を救ふて事なきを得せしめたるは今尙ほ世人の記臆する所にして、伊太利人は佛國輸入品に高率の輸入税を課したることが如何に彼等に禍したるかを知るに於て惑はざるべし。且之を各國の實例に案するに、一國と他國との間に通商條約を結びて相互に其關税を輕減し、交通貿易の利便を開くといふとは、每に此國と國との間の親近又は同盟の先驅を爲し、親近又は同盟は其の經濟的共助を確保するの實あるは近時の外交史を繙くものの善く知る所なり。然れば日本帝國の如く開國の初より通商條約關税協定を以て國際關係の連鎖と爲したるものが、今に及て忽ち關税協定も拒絕し專ら國定税に依りて輸入品に課税するといふが如きは帝國の外交政策の許さざるところなるのみならず、又財政及び經濟の危險を招くの虞なき能はず。且從來の片務的條約を改めて相互的條約を爲すとは蓋し難からず。又税率を多少引き上るとも亦爲し得ざるの道理なしと雖も、税率を高くし、税目を增すがために國定税を專用せんとするが如きは餘りに無謀なり、餘りに無分別なり、政府當局者恐くは之を敢てせざるべく、國民亦之を要求せざるべし、或はこれ有らん、併ながら之を容るべき限りにあらざるなり。

五、財政及び經濟上の要義

關税を談するもの今仍ほ自由主義保護主義の窠臼を脫せざるは笑ふべきなり。今の世に當りて絕對的自由主義を執るものなきと等しく保護主義亦一貫の理にあらず。且英國は自由貿易を主義と爲すも、彼の關税は甚だ高く、關税收入は彼の國庫の第一財源たり。而して此財源に據りて凡百の保護政策を施しつゝあり。彼が自由主義なりといふは內地に產せざる貨物に重税を課するを云ふにありと雖も、國家の一般政策に就て之を

相比較すれば他の保護主義を執るものと五十歩百歩のみ。米國及び歐羅巴大陸諸國は保護的關稅政策を執るといふも、是等諸國亦關稅收入に依りて歲計を立つるものならざるはなく、所謂保護政策なるものは內地產業を發達せしめて外國品の輸入なからしむるを以て理想と爲すに於て、其輸入減少し又は絕無とならば彼等の歲計亦依りて立つ所以を失ふべきなり。

關稅亦租稅なり。租稅政策の要訣は稅率を高くするよりは稅源を豐ならしむるにあり。關稅を課する直接の目的は國庫の收入を得るにあり、收入を增加するの道は稅目稅率を增加するにあらずして、輸入品を增加するにあり。負擔者の苦痛に依りて國庫を富ますは逆にして、負擔者の繁榮に依りて國庫を富ますは順なり。順逆の數を明かにせずして租稅を設くもの其言や必ず窮する所あらん。

尤も關稅の賦課徵收は他の一方に於て關係國民の產業の上に重大なる影響を及ぼすは自然の數にして、米國の關稅法が同國の製造工業の發達を促がしたる、英國の關稅法が同國の農業を衰退せしめたる、獨逸佛蘭西諸國の關稅法が諸國の農業と製造工業との權衡を維持するに於て大作用を示せる、一々徵證すべきものあり。然りと雖も租稅が民生日用の事に重大なる作用を現はすとは敢て關稅のみといはず、如何なる租稅も大小こそあれ其の國民の產業に影響を及ぼさざるはなきなり。豈獨り關稅に就て政策を云々するの陋を爲すべけんや。且租稅を重くすることが一策ならば、之を輕くするとも亦一策にして、時と場合とに依りて其宜を制するは爲政の要道なり。自由放任の下に國民の主要產業の衰滅を招きたるを不可とせば、保護關稅の壘壁の內に醞釀せる製造工業の運命亦疑ふ可く、大凡不自然不權衡といふとは、經濟社會の禍根たらざるなきを想へば、財政經濟上の事復た執一を許さず。

啻に之のみならず、關稅を重くして、國庫の收入を求め若くは內地產業を保護するといふとは專ら國定稅に就て之を云ふべくして、協定稅に就て之を云ふべからず。既に關稅を協定するといへば、協定者相互に其

輸出入の増加商取引の發達を圖るを意味す。輸出入の増加、商取引の發達を圖るといふ以上は、復た關税の壘壁を高くすることを云ふべからざるは勿論なり。

日本は開國以來五分税一制税の下にあり。而して其の農業及び製造工業は、此間に長足の進歩を贏ち得て、殆ど遺憾なし。往年協定税の補助法として、國定税を設け、非常特別税設置の際、國定税亦幾多の改正を見たれども、固と是れ國庫の收入を増加するを以て目的と爲したるものにして、保護政策を行ふが爲めに作爲せるにあらず。此國定税の爲めに或産業が保護せられ、或産業が利益したりといふも、是れ皆偶然の結果にして、立法の趣旨此にありとは云ふべからず。尤も他日或は農業政策、工業政策、若くは歳計補塡の必要上關税を増加せんとすることもこれ有るべし。其場合に於て手を着くべきものは、主として此關税法及び關税定率法にして、協定税は常に是等政策又は便宜論の外に立つものと思惟せざるべからざるなり。

六、複税制度

前の議會に於て、我國の關税制度を根本より改めて、複税法を制定し、關税法に最高最低二限を設けて、此二限の間に於て協定税を設定せしむるの議を建つるものあり。衆議院の多數は略ぼ此に一致し居たるものの如し。

複税法を初めて採用したるは、千八百七十七年西班牙關税法にて、千八百九十二年の佛蘭西關税にて其面目を全くし、千八百九十三年露國關税規則亦之を依倣す。今日世間の耳目を集むる米國の新關税法案亦此制度を取りて起草せるものなり。

熟ら考ふるに複税制度は固と專ら國定税を用ゐるの國に於て時に國際協定を爲すの必要あるを見て、機宜に處するの計を求むるに出づるものにして、法律は税率の最高最低二極度を定め、政府當局者をして時に臨みて其宜を制せしむ。且條約を國會の決議に附せざるべからざる國にありては、外交上及び商業上の利益が議院の黨爭の犧牲に供せらるることなき能はず。此危險を

防ぐの方法として、法律を以て一定の裁量を政府に委任するは、亦至當の計たらざるべからず。

然りと雖も、日本帝國の如く協定税國定税竝び行はれて、相戻らず歴史上及び事實上協定を主として、國定は其の補助作用を爲す處にありては、此制度を設くるは全く無益の沙汰なり且之を實例に稽ふるも、最高限なりとて無限に高き税率を設くる能はず。最低限なりとて、餘りに低くするとも出來ず。實際他國と協定するに當りては、最低限よりも低くするを必要とする場合あると等しく、關税戰爭開け又は禁止税を設くる場合には、最高限猶ほ低きに過ぐるとありて、帶には長く、襷には短きの不便を見ると數ばなり。是れ財政學者が複税制度は、今仍ほ試驗中にて其得失未だ知るべからずと云ふ所以なり。或は憲法の矛盾を避くるが爲めに、複税制度を設くべしと云ふものあれども、是れも愚論なり。憲法は條約締結權の完全を認めて、之を制限せず。又明治二十七年以來の改正條約は、憲法の解釋を確定して、些の疑議を遺こさず。今にして複税法を設けたらば、寧ろ憲法上の大權を侵奪し、一たび確定せる解釋を紛更するの議を招くべし

七、結論

今日世界を通じて、關税問題の研究に忙はし。乃ち英國にてはチエニバレンの提議に依りて、千九百四年五十二人の關税調査委員を設けて、普く調査研究を悉くすを期す。今日までに國内工製會社及び會社より提供したる文書一萬五千通、口頭にて證明せるもの四百件、商業及び農業に關係あるものゝ調査報告百四十七件農民及び農業會社に就て取調ぶるもの二萬一千三件に及べり。佛國にては千九百六年七月代議院の決議に依りて、關税調査委員を設く。委員總數七十名、クロツを委員長に、チーリーを副委員長に、ジエンモーレルを書記長に任じて各當業者に就て、取調ぶるところあり、近頃に至りて其報告を公にせり。他の歐羅巴大陸諸國、亦或は調査機關を置き、或は委員を設けて、其研究に怠らず。北米合衆國は、則ち今日新關税法制定の

事を以て天下の耳目を集中しつゝあり。是等と相比すれば、我は明年現行條約終了の通知を發し、明後年は新條約を見ざるべからざる場合となりたるに拘はらず、昨年十月政府部内に、條約改正準備委員會なるもの組織せられ、委員の一部の事務として、關稅問題を管掌するあり。民間にては、日本工業協會が、幾度か眞面目に關稅問題を調査するといふのみにて、東京商業會議所の如きすら只委員を設たりと云ふも、何事を爲しつゝあるか世間之を知るものなしといふ有樣なるは、相顧みて轉々索然たるの感なきを得ず。關稅問題は、我にありても陳腐爛熟なり。併ながら、是れ無責任の言論多きが爲めにして、眞面目なる調査研究は、未だ至らざるなり。學者論客が專ら他國の陳腐爛熟せる舊套を襲ふが爲めに、語り悉くし說き盡くして新たに言ふべきものなきに似たりと雖も、國民の各職業、各階級の要求の何にあるかは、未だ之を取調べたるものなく、又取調ぶるの方法さへ備り居らざるは意外千萬ならずや。

唯物史觀（マルクスの說）

藤井健治郎

唯物史觀は決してマルクス一人の考ではなく、マルクス以前に彼の先驅者があつて、彼は此等を集めて、その說を大成したに過ぎぬのである。それに猶、唯物史觀て云ふ語を今少し廣義に解釋して、マルクス系統の歷史を經濟的に解釋するといふ、思想以外にも亘らしむると、彼以外にも唯物史觀を唱へた人々は多いのである。それゆゑバルトの如は、此系統以外にも色々の學說を含めて說いて居る。然し今は唯物史觀を狹義に解釋して、單にマルクス及びその系統の思想を講究するのが目的であるから、その以外は暫く省く事とする。

マルクスの唯物史觀はマルクスの經濟原論及び人文批評を建設する所の根本思想の一つであつて、彼の著述の諸所に散見して居るのである。今此等の意見を拾

ひ集めて見ると、著作の年代に從ひて、その思想の間に多少精粗の別もあり或は說明の相出入する處もあり、亦その說の應用せらるゝ範圍にも多少の違ひがある樣である。故にマルクスの唯物史觀を調べやうとすれば、勢彼の諸作の一々について見ねばならぬ。そこで今その兩三種の著述に就いて、大略を試みやうと思ふ。

第一には「神聖家族」。といふ書中に見えたる思想である。之は一名「批判的批判の批判」と名くる書物で千八百四十五年に出版されたもので、エンゲルスと共著で出した第一書であるからマルクスの思想に取つては夯々重要なる位置を有つて居る所のものである。先づ此書物を書いた由來をザット言ひますると、此書物はブルノー・バウワーの思想を駁せんが爲めに書かれた書物である。バウワーと云學者は當時獨逸の哲學界に全盛を極めたヘーゲルの弟子の一人で、餘程師ヘーゲルの唯心論に左袒して居つたのであるが、晩年に至るに從ひ所謂左黨の思想に與し、段々唯物論に傾いた思想を抱いた人である。マルクスは此バウワーの唯心論の立脚點に反對せんが爲めに此著をなしたるのである。此書の由來斯の如く、殊更らに唯心論に反對せんが爲めに出來た書物であるだけそれだけ、彼の唯物的思想を分明に現はして居る。從て唯物史觀の思想も亦此著述中に極めて分明に體現せられて居るやうである。(しかし斷つて置くが、此の著述は僕自身之を持たない、又圖書館なども探して見たが矢張りない、未だ其原書を繙くこと出來ずに居る。從て今茲に叙述する所の者は、メーリングヤ、ヲルトマレヤバルトやその他の著述で讀んだ處を綴り合せたに過ぎない、故に多少隔靴掻痒の感に堪へない異日原書を得た時に、猶訂正する機會あるであらう)さてマルクスがバワー及びその一派の唯心論を攻擊するには、矢張り同じくヘーゲル派の左黨に屬して居るフヲイエルバッハの「人間的唯物論」(アントロポロギッシエル・マテリアリスムス)てふ立脚點を採用して、その點から批評を試みて居るのである。

此「神聖家庭」の序文に曰ふ「獨逸に於ける眞の人本主義の最も危險なる敵は、唯心論若くは思辨的觀念論

てある、此唯心論若くは思辯的觀念論なるものは、現實實在し居る個々の人間の代りに、所謂自覺とか或は精神とか言ふものゝ以て實在となす、又宗教家と同樣に凡て一切のものをして生命あらしむるは精神で、肉は之に與らぬと主張する所の考である。是れが眞の人本(フマ)主義(ロスムス)の最も險惡なる敵である。さりながら彼等の所謂自覺若くは精神なるものは只彼等の空想中に存在するもので、決して實在し居るものでない、吾人がバワーの「批判的批判」に於て反對する所のものは、バワーは批判をなすと言ひながら、而かも眞の批判をなさず、宗教上の所謂超越的權力を以てそれに代えて眞の理性批判をなさぬといふ點に在る」と、マルクス此の如く、先づブルノー等の立脚地は、兎角空想に耽り居る所宗敎家のそれと擇ばぬと罵倒し、そして眞に實在する個個の人間なる立脚地を立てゝ批判するで無ければ、正當の解釋を得ることは出來ぬとの意見を洩して居る。

そこでマルクスは有らゆる所謂精神的文明なるものも、畢竟は吾人の經濟關係から生れ來るものである、經濟關係を精確に究むるに非んば、到底その起原を明かにすることと出來ぬといふ注意を拂つて下の如くに言つて居る、「今日の私有財產制度はその經濟的運動中に於て、遂にそれ自ら滅亡に至らなければならぬものである、併しその私有財產制度の滅亡に至るは、その私有財產より全然獨立して居る、そして無意識に吾人の意思に反對して存在する處の、事實そのものの本質によりて制約せらるゝ、その發展の道行によるのである。何となれば、今日の貧民は今日の私有財產制度の爲に貧民となつた事を自覺して居る。從つてそれが爲に彼等の精神上肉體上の悲慘の狀態に陷つたことを自覺して居る。而かもそれを自覺して居るその事が亦一つの大なる悲慘である、彼等は今日の制度の爲に殆ど人間にして人間にあらざる狀態に居るそして之を自覺して居るのだから、何とかしてその制度を改めなければ彼等は到底滿足する事は出來ぬものである。從つて今日の私有財產制度は何時かは廢止せられなければならぬ運命を有つて居るものである。或る處では今日の

賃銀勞働者は、彼等は最早人間らしい性格を凡て取り去られて居る事を自覺して居る、人間にして人間にあらざる絶頂に居る事を自覺して居る、而して此等の狀態が何の故に來れるかをも、單に理屈の上にて知れるのみならず、更に斯くては實際恢復し難き悲慘のドン底に永住せざる可からざるとも知つて居る、勢ひ彼等は今日の狀態を破壞せねばならず、又破壞し得る力を有つて居るのである。今日彼等が彼等自身を解放せんと欲すれば如何しても今日は彼等の生活狀態を破壞せねばならず、之を破壞せんと欲すれば今日の彼等を人非人的狀態に置く制度からして破壞せなければならぬのであるといつて居る。

　彼の右の如くに言つて居る、之は直接に唯物史觀の思想を現はし居るとは言ひ難いけれど、彼が直接に習つたヘーゲルのディアレクチックの哲學を物質の方面に應用し、その研究によつて物質的方面にも、所謂正、反、合の過程の無ければならぬ事を言つた者であることは明了である。彼は此唯物論法辨證法によつて、現代の制度の必ず變化し行かざるべからざることを論究して居るのである。それ故に、マルクスの唯物史觀は所謂唯物論的辨證法の上に基するものと言つて宜かろうと信ずる。彼は即ち此論法を以て、今日の賃銀勞働者の、所謂市民の社會の經濟的生活狀態から生じ來つたのは實に必至の勢であるので、經濟的關係上然らざるを得ずと見て居るのである。それゆゑマルクスの考ては決してバワー一派の考へるが如く、所謂精神なるものが今日の社會狀態を產んだのではない、否精神そのものこそ、却て經濟的事情によつて動かされて起るものである。即ち精神なるものは常に階級の意識(クラッセン・ベウストザイン)て、被壓服者が壓服者に反抗して立つ所のそれに反應して居るに過ぎないのであると論じて居る。

　彼は又その書の或所に次の如くに言つて居る、「佛蘭西の所謂平等主義は總て獨逸の所謂自覺主義てある、それ故獨逸の所謂自覺と云事は、只純粹思考の中に於て、人間がそれ自身平等だといふ事を示して居るもので、平等といふ事は實踐の要素に於て、人間がそれ自

身に就いての自覺である。換言すれば人間の本質の統一、若しくは人間の種意識、若くは種動作、約言すれば人間は實踐上全く同一のものであるといふとは佛蘭西流にて平等といふのである。即ち人間と人間との社會的關係若くは人間關係をば平等といふのである。それ故從つて從來獨逸に於ては肉の無き精神或は人間の無き自覺などいふものを立て、之によつて一切精神文明の批判を試みて、すべて實存する所の者を破壞し去つたのであるが、フヲエルバッハに至りて、始めて是等の抽象的自覺、抽象的平等を棄て、眞實實在せる人間なるものを中心として、精神文明を解釋するやうになつたのである。それと同じく佛蘭西では、人間を離れた平等といふものを以て佛蘭西の社會、佛蘭西の人間を破壞したのである。それ故に、吾人は法律、政治、哲學、文學等を批判するに、只抽象された意識、人間を離れた平等と言ふ如きとを以て批判する事は出來ぬ、否却つてその反對に、或は產業或は商業なるものが、基督敎或は道德以外に家族の幸福を作り、又社會市民の安寧を保護するものなるとを考へねばならぬのである」と。又彼はそれ故に人間の一切の歷史は飽く迄經濟的關係から解釋せられねばならぬとて次の如くに言つて居る。「吾人は果して人間をば、自然若くは自然科學、若くは產業から引き離して、歷史の一語をも了解し得るか、又吾人は果してその當時の產業が如何の狀態にありしかを會得せず、或は當時の社會に於ける生產の如何をも會得せずして、歷史の一語をも了解し得べきか、吾人は精神と肉體とを全然引き離す故に自分等自身をも此世界から全然引き離す、自分等自身を全然此世界から引き離す故に、從つて精神を產業或は自然科學から引き離すのである、從つて又歷史はその出生地を此物質的生活の中に於てせずして、寧ろ茫漠たる天上の濛霧深く鎖せる所に求める樣になるのである、がこれは甚だ見當違て、吾人の與し能はぬ所である」と。此の如くマルクスは此書物の中に、專ら唯の精神の代りに人間を置かねばならぬ、此人間の上に一切の統一點を置かねばならぬと言つて居るが、これは明にフヲ

イエルバッハの考に本いたものである。

次に彼の著述中にて注目すべきものは「哲學の悲慘」（エーレンド・デヤ・フイロソフイー）なる一篇で千八百四十六年の著に係るものである。是より前、千八百四十五年に、佛蘭西の社會主義者のプルードンが「悲慘なる者の哲學」（フイロソフイー・ドラ・ミゼール）といふ書を公にした。當時マルクスは少からずプルードンの著述に注意を拂つて居た時代であるので此ミゼール、ド、ラ、フイロソフイーもマルクスの目に觸れたのであるが、マルクスは如何してもプルードンの説に同ずることが出來ず、遂に其書の批評を試みて此著述をなしたのである。即ち此書も以前の「神聖家族と同じく、他人の説に對する批評であつて、直接に自分の思想を述べたものではない、それ故積極的に唯物史觀を書いたものとは言い難い。けれども所々に彼の唯物史觀が散見して居るのである、その一節に曰ふ、「生産の方法の變ずるに從つて社會の關係と亦一變するものである、所謂彼の手磨時代にはそれに相應の社會がある、即ち封建制度なる者があつたが、それが蒸汽磨時代になると、最早や此社會は封建制度に止まる事が出來ず、所謂資本制度の世となつたのである。物質的生活に相應する諸の社會關係を作る人は、又その社會關係に相應する諸の範疇觀念を作る所の人である。此觀念、原理、範疇なるものは、決して或る一派の哲學者等の信ずる如くに永久のものではなく、歷史的のものである、一時的のものである、その生産の狀態に連れて生じたものである」といつて居る、これによつても明に唯物史觀を有して居たことが知れる。彼は又或る場所に於て、社會の生産的方法の現はるゝ關係そのものも亦永久不變のものでなくて、人間及人間の生産力の變化に連れて始終變るものであるとして居る。

彼は此見解をば、從來の商工業の發達史に一々實際に當てゝ自分の考を證據立てゝ居る、從來農工商等の發達する順序に就いては、經濟學者の所謂舊派の間には凡て或る一定した考が立てられて居たのだが、マルクスは凡てそれ等を排斥し去つたのである。マルクスはプルードンを稱して、彼は人間が或る木綿、麻、等を

生產するは、すべて或る一定の生產的關係の下にするのであることをば了解して居る。しかしながら彼の未だ了解し居らぬ點は、社會的關係は等しく是れ人間の產物である事、恰も木綿、麻等と異ならぬといふ點である。凡そ人間社會の諸關係は生產力と密接の關係あるもので、此處に新しき生產物があれば新しき色々の生產方法が生ずる、此新しき生產法が生ずれば、又生活を支ふる新しき方法が生ずる、生活を支ふる新しき方法が生ずると、此處に又社會上にそれに應ずる新しき關係が生ずる。前にも述べた如く手磨時代には封建制度が作られ、蒸汽磨時代となれば今日の產業的社會組織が作られるのである。それ故ブルードンの如く、或る一種の觀念、理想、原理を立てゝ、それによつて社會の變遷、歷史を說くのは至らぬのである。此等の觀念、理想、原理は一種の社會的生產物で、社會と密接なる結合をなし、斯くて生滅變化し、時としては聽て消えて無くなるものである。我々人間は常に此生產力の絕えず發展する運動の中に生れ來るのである、從つて社會的關係の生滅變化已まぬ所に生れ來るのである、それ故又我々は色々の觀念の生滅變化止まぬ所に生れ來るのである、如何なる者でも世に流轉變化のせぬ者はない、若しありとせば、そはそれは一切が流轉變化する者であるといふ抽象的の諺のみである。然るにブルードンは此ゝる抽象的の者からして一切の社會の體裁關係を說明せんとして居るのは、甚だ不當の事である。ブルードンは此の如く或る永久不變の觀念からして經濟を說いて來て居るから、所謂土地私有、及び土地の地代なるものに就いて說明が出來ず。遂には下の如き說を立てるに至つたのである。彼は曰ふ「此土地私有及び地代は、心理上若くは倫理上の關係から生じたものである、而して此心理倫理の關係は全く經濟事情から獨立したものであるとして居る」と。

右に對してマルクスは次の如くに言つて居る「地代は畢竟今日の產業時代の形に直した所の土地所有に外ならぬ、換言すれば市民的生產の條件に從ふ所の、封建的所有に外ならぬ、リカルドーの考によれば、凡て

商品の價格はその生産費用によつて規定されるものである、換言すればその物を生ずるに要する所の勞働時間に基くものであるとして居る。然るに價格なるものは、今日の製造工業に於ては、最少限の勞働で製造されたものの價格か標準となり、同性質の他の商品の價格をも定めて行くのである、即ち今日では最も廉い而かも最も生産力のある生産方法を無限に殖し行かうといふ事が豫想されて居るのである、從つて自由競爭なるものが畢竟今日の市價を惹き起して居るのである。換言すれば、今日に於いては、生産費用が種々に異つて居つて、價格はすべて同一ならんことを豫想して居るのである。然るに農業時代に於ては、之が全く反對で、最大限の勞働で生産せられた生産物の價格が、それと同性質の一切の生産物の價格を定め行くものである。土地は製造工業の場合と違ふ、製造工業ならば、何處までも生産を殖して行けるが、土地になるとそうは行かぬ。その生産を無限に殖すといふ事は出來ぬ、又それのみならず、土地を無限に豐饒に改良し行くことも出來ぬ、從て段々人口の增加するに從ひ、餘り豐饒でなき所、即ち生産力の薄い所をも耕して行かねばならぬ必要が生ずる、さて此の地味の瘠せる土地は、よし最初の土地に施すと同一の資本を掛けても到底最初の土地程には生産物を擧げることは出來ない、それ故又人口の增加するに從つては、如何にしても、生産の極めて少い仕事をすら、多數のものが已むなくせねばならぬ。從て人口が增加すればその需要品も餘計になる、從つて之を生産する丈の勞働力を要する事も明である、非常な生産費用を掛けて僅少な生産物を得るに止まる土地からのものも、僅少な生産費用を掛けて多大の生産物を得られる土地からの者も、一樣に此人間の經濟關係中に入り來るのである、生産費用を澤山掛けて僅少の生産物を得れば、價格も從つて上らぬを得ぬが、之に反して僅小な費用で澤山の生産物を得る者は、生産に要する勞働力からいへば價格は廉くても宜かるべきであるのだ。けれども實際の市場の價格は最も高價の者を標準として定められるから、勢ひ安く

て宜しきものの價も、その並に自然に增加し行くのである。從つて良き土地を有つものは多くの利益を得る事となる、即ち良き土地の地主は、自分の要する生活費以上に自分の生產物を賣るといふ結果になるのである。その以上即ち剩餘が聽て地代なるものとなるのである。本來から言へば、若し土地の生產力が同樣で、そして生產費用も亦同樣であるとすれば、穀物の價も等しく同樣になる譯である、從つて地主は只だその生產費用に要した丈の報酬を受けて已み、地代なるものは無いことになる譯である、それ故にマルクスは、地代なるものは今日の自由競爭時代に於ける封建時代の遺物だとするのである。

　右の考は明に彼の剩餘價値の考を示すものである。彼の所謂剩餘價値なるものは、今日の製造工業の時代に於て資本家の受ける利益を言つたものであるが、之が聽て地主の收むる地代と同性質のものである事を說き明かして居る、彼は一面に於ては此地代、他の一面に於ては剩餘價値、此等二つのものの爲に世に貧富の階級が出來、それの出來た爲に政治上法律上教育上に又色々の形が起つて來たと說いて居る、それであるからこれも矢張り唯物史觀の考を表はすものと見る可きである。彼は又斯かる事を言つて居る、「人間の勞働なるものは、その勞働に使ふ道具の如何によつて色々の組織を有し色々の形態に分れ來るものである、即ち例の手磨時代にはそれに應ずる分業があり、今日の蒸汽磨時代には、亦それに應ずる分業がある、今日製造業に使ひ居る器械も、經濟的眼光から見れば一種の經濟的範疇に過ぎぬ、農業時代に於ける犂を挽き居る馬も又一種の範疇に過ぎぬ、されば器械を應用せずに立ち居る製造場も畢竟ずるに亦經濟的關係に外ならぬ、即ち經濟的範疇に外ならぬのであるといつて居る。彼は此の如く論じて此生產に要する器械なるものは、所謂生活の狀態を改良するものである、生產の術は勞働そのものの組織を變じ、分業を變ずるものである、勞働組織の變化は生活の一般狀態の變動を來し、これが又一切の社會の現狀を變化するものとなるのであると、斯樣

なる考からして今日の所謂唯物史觀の本を說いた。彼は彼の「哲學の悲慘」なる書中に、プルドンが多少唯心的の議論を立て、範疇を立てゝそれから演繹的に說くに反對して、之を批評したのが此の一著である。

右の書に次いで現はれたのは、千八百四十七年に書き千八百四十八年に發表した、彼の所謂「共產主義者の宣言書」といふ書物である。これは千八百四十七年に倫敦で萬國勞働者大會を開いた際、その大會の依囑を受てその會の爲めに會の宣言書を、マルクスとエンゲルスと兩人の協同で書いたものである。かやう名目はエンゲルスと二人の名で刊行はして居るものの、その實大部分はマルクス自身の書いたもの、エンゲルスは極めてその小部分にのみ手を下したのである、此の事實は後にエンゲルス自身が明かに告白して居る。さてこれは名の如く宣言書であるから、書物といはんよりは寧ろ片々たる小冊子に外ならんけれども、マルクスの思想史に於ては實に見遁すべからざる程の重要の意義あるものである。といふのは、彼は或は新聞に或は雜誌に或は著述に、或は社會の批判者として、或はその運動者として盛に筆を執つたのであるけれども、凡てが斷簡零篇能くマルクスの思想を統一的に示したものとては一つもなき有樣であつたのだ、前に述べた彼の「神聖家庭」の如き、或は「哲學の悲慘」の如き、成る程一部の著述には相違なきも、此等は唯他人の學說の批評に急であつて、自己の說を表はす事が少し雜になつて居る。よし雜ならずとするも、彼の積極的の立場を說明するものとしては極めて不完全のものである。然るに此「共產主義者の宣言書」はこれ迄論文乃至著述に表はした彼の思想をこれて統一的に纏めたと見て可なるのみならず、將來に發展すべき萌芽が凡て此一篇中に收まると言ふも宜いのである、その後に出た「經濟學批判」の如き、彼が絕大の名著といはるゝ「資本論」の如き、要するに此「宣言書」を敷衍し精密に論述したに外ならぬものて、その淵源は實に收まりて此一書中に存すといふも可なるのである。

以上の意味に於て、「宣言書」はマルクスの思想史上

極めて重要なる位置を有すと言つてよいのである。此書は全體が四篇に分れて居る、マルクスの思想全體を叙述するには、此四篇共に重要なるものであるけれども彼の唯物史觀に關する思想を見るには、特にその一篇が重要である、それゆゑその梗概を話さう。

それは題して「市民及賃銀勞働者」といへる章である。その劈頭は第一に述べて曰ふ「これ迄の人間社會の歴史は畢竟階級戰爭のそれに外ならぬ、即ち自由民と奴隷、貴族と平民、君主と、臣下、親方と丁稚などいふ階級の爭に外ならぬ、換言すれば壓服者と被壓服者、權力者と無權力者との爭に外ならぬ、此被壓服者無權力者が、他の壓服に堪えずして、遂に立つて現制度を破壞し來りしことが、軈て人間の進歩であるとして居る。斯くて今日の資本制度の世界、即ち市民時代自由競爭の制度が出來たのも、それが爲めてある。即ち中世の終に至つて、第一に學術の進歩の恐るべきものがあり、その爲に直接には器械の發達となり、從つて勞働力の増加となり、これ迄生產費用に極めて多額を要したものが極めて小額で濟むことゝなつた、又間接には武器の改良の結果小王國が亡びざるべからざる事となると同時に、航海の術が大に開け、從つて亞米利加の發見或は喜望峰の迂回航路の新通がある、歐羅巴の通商貿易の範圍は頓に增加された、猶一面には此等の國々と殖民地間の通商貿易が盛になる、他面には內地の生產が容易になり、人間の慾望が頓に刺激され大きくなつて來る。此の航海並に內地の交通の發達、器械の發明、從つて通商貿易の範圍の擴大等が、益々市民の發達を促し、資本の激增を來したのである、此の如く市民が漸然發達し資本が激增するに從つて、彼等の社會上政治上の權力なるものが益々發達したので、之に伴つて其處此處に自分等自志の團結を營み、自分等同志の自治團體を作るに至つたのである、伊太利の如きは此自治團體が多く存し、所謂自由都市なるもの、發達が、此に於て汪盛を見たのである。即ち一面に於ては交通の範圍が擴がつて市民の移動の活潑となるに從ひ、到底元の小諸侯の割據では新なるその事

情に應ずることが出來ぬ、斯くて小諸侯は自ら存在の意義を失ふ樣になり、次第々々に大國家の發達を成したのである、此の如く市民の發達に連れて社會の狀勢が全然一變したのだ、第二に著しき現象は、從來所謂貴族平民の階級が峻別され居り、貴族は平民より自然の優秀なる權力を有つて居るものであるとの考を抱いて居たのだが、今やその自然の優秀なる權力が烟散霧消したのである。そして人と人との間は平等關係となり、少しも階級を認めぬ事となれば、又一面には宗教或は哲學などいふ方面にも少からぬ影響を與へた、由來宗教なるものは一種の熱狂より成り立つもので、之なくば宗教は殆んど無意義のものであるが、凡て利害關係は平等なりといふを原理とする事が、宗教に要する肝腎な熱狂を冷却したのである、哲學も亦然りである、これは元と冷靜なる思索より成るものだとはいへ、その冷靜なる思索そのものに對する熱情が、矢張り存在せなければならぬのであるが、その熱情をも同じく奪つてしまつたのである、又從來の社會では、宗教界に於ける僧侶は言ふに及ばず、或は醫者或は辯護士、或は詩人、或は科學者といふ如きものは、矢張り物質以外に超然として社會上に一種の優秀なる地位を占めて居たのであるが、此等も亦市民の勢力を受くるに從ひ、彼等の勢力も皆金によつて計算せらるるに至り、等しく一種の勞働者となつてしまつたのである、要するに此市民の發達は、凡ての人を赤裸にし、凡ての人を無恥にし、凡ての人を動物にし、凡てを金錢關係で說ける樣にしたので、社會に於ける一切の姿を變へてしまつたものである。

此市民の發達が軈て資本の發達を意味して居り、資本の發達が軈て亦第二級團、即ち貧民の增殖を意味して居る。即ち今日の例へば弱い方は今日の所謂市民制度若くは資本制度の必然の結果として現れ來たものである、彼等は彼等の或る仕事を見出し得る限り、その生活を持續する事が出來るので、若し之が出來ぬならば自然に死を待つより外なき階級である、然るに彼等は所謂資本即ち彼等の仕事をするに必要なるものを缺

いて居る、從つて彼等は彼等の仕事を見出す爲に、その勞働力をば仕事をする條件を具有する資本家に對して賣らねばならぬ、即ち今日の賃銀勞働者なるものは諸の物品同樣、一種の商品として、資本家にまで賣買されて居るのである。それに又一方から見れば、器械の發達又は分業の進歩は、勞働者をして只或る仕事の一部にのみ興味を有せしめ、全部に向つての興味を失はせたのである、器械の發達は總て勞働力の増加を意味し、勞働力の増加は自然に又その市價を引下げて、賃銀勞働者をして餘儀なくその勞働力をも益々安くするに至らしめた。斯くて分業が盛になり器械工業が發達する、從つて勞働賃銀は益々下落するの有樣となる、加之、彼等は日々その資本家の爲に、或はその工業の器械の爲に、或は又工業の監督者の爲に全然奴隷扱さるゝに至つたのである。而かも彼等は猶ほ自らの勞働力を賣らねば生活出來ぬといふ事情があるから、その虐待をも忍んで生活を續け行くのである、併しながら此等の賃銀勞働者の人々は貧窮悲慘の極點に達するに至れば、自ら又一方の血路を開いて經濟の回轉を圖らねばならぬ、その氣運の回轉は今日の所謂資本制度の社會が、それ自身に立つて破壞を試みねばならぬ運命を有して居る。今日の生産は社會的生産であるから、生産者は自己自身の爲に物を生産し居るではなく、他の消費者の爲に生産するのである、即ち御得意の爲にするのである、然るに御得意は無限に殖ゆるものでもなければ、又殖やすことの出來るものでもない、加之その消費者の重なるものは今日の所謂貧民勞働者である。此れ等の人々には唯僅に己の生活を支え行く丈の外餘り多くの餘力を有せぬから、彼等の購買力は甚だ微弱のものである、故に一方には益々生産を盛にしたにせよ、その生産物の消費者を見出し能はざる時が來るであらう、すれば又今日の生産は自ら止まざるを得ぬであらう、否今日の生産は止まるべきではない、今日の生産が已に所謂社會的生産になつて居る以上は、從つて分配も社會的分配にならねばならぬ結果に及んで居る、即ち今日の私有財産制度が、それ自身に破滅

せられざるべからざる理由は、益々此處に本かねばならぬといつて居る。

第二章は貧民と共産主義といふ題で、これには賃銀勞働者の人々は、その將に來るべき筈の社會を豫想しそれの成るべく早く實現されんことを希望する爲に、所謂共産黨なるものを要するのである、共産黨のなす所は必ずしも空想を抱いて社會を改造せんとする如きものではなく、科學上當に來るべき氣運を只一日も早からしめんとする丈である。猶此共産主義者の會合は他の諸種の賃銀勞働者の人々の會合と決して相背馳するものではない、唯彼等は國民的差別なるが、此會合は、全然國民的差別を撤して、廣く世界の賃銀勞働者と結合し、その一致の力の下に、當に來るべき筈の社會組織を促進するを希望するものである。と述べて居る。第三章には專らこれ迄の社會主義者の見解及び運動を批評し、第四章は以上の結論として所謂共産主義者の今日既に成り立ち居る種々の政黨政派、乃至その他の諸の徒黨に對する關係を述べて居る。既に說いた如く此宣言書は、唯物史觀の見地よりいへば、就中第一章が最も大切なもので、第二章第三章はそれを各方面から敷衍して、第四章は總括りを付けたに過ぎぬのだから、今は此等の詳細は略することゝする。

扨て以上第一章に述べた如く、第一歷史は階級競爭なりとの考、そして今日の階級は資本家と勞働者とであつて、此二つが分れたのは一種の然らざるべからざる必然の過程によつてである。そしてその爭が軈て今日の法律、政治、道德、文學、宗教、哲學といふ方面の變化を惹起したものである、次には今日の市民が中世の封建制度から生れ、今日の市民の社會は自然に賃銀勞働者の發生を促す樣になり、そしてその結果市民が滅亡して別に或る組織が作られねばならぬと說いて居る處は、如何に彼れマルクスがヘーゲルの辯證法に興味を有せしかを見ることが出來る。

「宣言書」の次には千八百五十九年に出した「經濟學批判」といふ書物がある、此中にもマルクスは例の唯物的辯證法を用ひて諸所に唯物史觀の考を發表して居

る。けれども之は唯物史觀の考を纏めて發表したものてないから今は暫く省いて置かう、最後に言はねばならぬのは、彼の大著「資本論」である、「資本論」の第一巻は千八百六十七年に出たが、之で完結して居たてはなく、千八百九十四年即ちマルクスの死後八年にして初めて出版されたのであるから、初の五十九年からは十五年を要したもの、頗る大部の書である。が唯物史觀の方から見るに、その初めて出た第一巻の如きは餘り重要なものでないと、セリグマンなどは認めて居る、セリグマンは千八百九十四年に出た第三巻を最も重要なるものだと斷つて置いた、之には委しく第十八世紀の英國に於ける經濟の發達を研究し、それに本づけて説明して居る。それゆゑ、その方が唯物史觀から重要であるといふて居る。しかしその方面に於てもマルクスは、專ら經濟的結果のみを述べて法律、政治、道德、文學、哲學等に於ける研究をば餘り判然言はぬのである、が兎に角重要なものは矢張り之であるとセリグマンはいふて居る。著述の由來の梗概は此様なものである。

セリグマンの見方も一應尤もであるが、しかし「資本論」は至る處唯物史觀の考を以て充たされて居るといつても必ずしも過言でないのである。スタムラーが批評したやうに、マルクスの社會説は、唯物史觀の研究法によりて遂げられたものである。それゆゑ、詳しくいへば、第一巻より第三巻下に至るまで、終始一貫してその傾向が現はれて居るといふても差支ない。しかし、此書は甚だ尨大たる大冊である上に、確かにマルクス畢生の心血を披瀝したる著述である。故に今茲に極めて無雑作に簡單にその内容の一々を摘示することは出來ぬ。又簡單な敘述ならばむしろ上來敘述した色色の書物に散見して居る事だから、説かなくも宜い位である。故に「資本論」は筆硯を改めて敘述するのが適當と信ずる。

以上述べたマルクスの唯物史觀は、その年代により多少思想を異にし居るけれど、通じていへば、彼は世界觀では唯物論を唱へ、隨て人間の行動を必至なりと見

て自由を除き、又社會の變動に對しては所謂先天觀念とか範疇とか稱するものは毫も之に關知する所てないとの考を有つて居る、それ故マルクスの所見は、之を批判するに當つて幾つかの問題に區分し研究する事が、頗る緊要の事と思ふ。

詩文繪畫の精神

志賀重昂

詩と云はず、文と云はず、畫と云はず、銘々の作品は直ちに銘々の精神を寫すは誰れにても知つて居る、即ち作品が最も正直に最も露骨に作者の內心を寫すことは、恰も鏡なるものが明かに其人の顏を映す通りにして、片眼の人が鏡に對し兩眼あるものと映らしめんと、何程焦慮たりとて、正直なる鏡は矢張り片眼に映すと同樣に、作品は其作者の精神を有りの儘に映すものてある。然れば如何に推敲したりとて、又如何に糊塗したりとて、各自の精神にして矯飾あり、至誠至情より發するに非ざれば、決して人を動かすべき妙詩、名文、好繪畫は發し得られぬものである。

さて薩摩に遊び、西鄕隆盛(南洲)の墓を鹿兒島の淨光明寺に弔ひ、夫れより城山岩崎谷の洞に入り、案內者の德重休太郎へ(壯年の頃、東京なる南洲翁の邸の僕となり、翁の周旋にて兵士となり、明治七年、征韓論破裂し、翁の鹿兒島に退隱するや、隨伴して歸鄕し、翁の關係せし私學校の小使となり、翁の兵を擧ぐるや、始終從僕として隨伴し、城山の洞にありても翁の爲めに水を汲み飯を炊ぎ、翁が臨終の際まで忠々しく仕へ、亂の平ぐと共に鹿兒島磯の監獄に囚へられしが、放免後、鹿兒島にありて、今は小菓子など商ひ居る六十餘の壯健なる老人、即ち西鄕南洲の言行に關する唯一無二の活字引)に向ひ、南洲翁は此洞の內にて何を爲して居られたりやと問ふや、休太郎老人には、每日々々鐵砲を擔いで鳥打ちして御居てになりました、其內に官軍の彈丸が餘り劇しく落ちる樣になりますと、洞の內

に入り、誰れの彼の相手構はずに碁を打つてばかり御出てになりましたと答へた。そこで私はハット思ひ起した、官軍が城山を陷れたる後、此洞を鑿ちて「百戰無功半歲間、首邱幸得返家山、笑儂向死如仙客、盡日洞中棋響閑」とありたるは、正しく南洲翁の作にして、咄々死生の間に縱容せる大先生の眞面目を現はしたるものなる哉と、更に又思つた、世に傳ふる「孤軍奮鬪突圍還、一百里程壘壘間、吾馬旣僵吾劍折、秋風埋骨故鄉山」とは、餘りに切迫して、胸中少しだに餘裕なく、前詩は初め謙遜して後は悠々迫らざる處を現はし、後詩は初め自負自尊して後には突如と小丈夫の面目を呈露せる處など、兩詩が根柢より思想を異にし、各々別人より出てたる如きは怪しからぬことなりと、然し能く〳〵調べて見れば、是は當時の團々珍聞記者たりし故總生寬翁の作なりとのことである。如何にも然らん、まこと詩と云ふものは、機微の間に其人の志を言ひ現はすものである。

旅順口攻圍軍司令部の所在地より西一里弱、一深水の右側に草庵がある、長春庵と呼び詩にすべきまで風雅の名である、庵に入らんとすると、左側に泰山府君の石碑か立つて居る、苔は石を蒸し字を蝕して、刻文は半ば以上讀めない、內に入ると、蘿葛は毀れたる牆に纏ふて居る、蛩は佛壇の下で鳴いて居る、處々に剝げたる佛の塑像が立ち並んで居る。此の寂靜なる幽玄なる處が步兵第三十六聯隊の大行李となつて居る、二名の主計、一名の計手と二名の下士とは、予の入り來りたるをも氣付かず無音にて執務し居る、一人は兵士の給與表を此處彼處と頻りに調べて居る、一人は紙幣と軍用切手とを絕えず勘定して居る、一人は兵士に配達する數千の郵便を處理し、戰死者と後送者への郵便は夫々附箋して內地に返送する手續をなし居る、一人は簿記帳を前に置き、顏を下に向け手を頭に當て、何にか餘念なく考へて居る、一人は恩賜の酒と海苔とを分配する爲め幾回となく算盤を彈いて居る、其間に電報は二三通も着く、特務曹長が何にか督促に來る、支那人の勞力が用辨に來る、言語が通せぬから通譯を

呼んで來いと云ふ、驢馬の車は幾臺となく石段の下に集りて用事を待つて居る、炊事當番は何にか請求に來る、凡そ人世の煩、雜、繁、忙の四を極め盡くせる光景である。煩、雜、繁、忙の極致は無言であるが、五名の人々は殆んど無言で居る、偶々應答などするにも極めて語が少い。此の煩、雜、繁、忙の極致として無言なる人々が、無心なるが故に無言なる佛像と相對し、寂靜幽玄なる内に人世の有らゆる錯綜紛擾を入れたる處などは、其の對照が面白い、誰れか一代の名手に此の景趣を書いて貰ひたいものだと思つた。然かも此の如き複雜なる景趣は漢書にて寫し得べきや否やと思つた、斯う云ふ境涯は西洋書に限ると思つた、若し漢書にて此の境涯を寫したれば、結局の所、王禹偁の「陽山山下草庵深、寂寂香燈對碧岑、莫恠相看總無語、座禪爲政一般心」と云ふ詩を書にするより外には出來ぬと思つた、即ち簡潔ではある、執着は無い、然かしこれては何んとなく物足りぬ、誰でも十分とは思はぬであらう。要するに漢書は漢文と等しく長所は簡潔にあり、西洋書は西洋文と同じく長所は複雜なる所を寫し得るのにありとは、誰人も稱ふる所である。さて又長春庵より東方約七百米突に攻城砲兵司令部がある、司令官豐島少將は堅硬なる石英岩の峻はしき岩山の頂上近くを削り、此處に天幕を張つて駐在して居られたるが、此の天幕のある境涯は英語なれば weird の一語にて盡くすことが出來る、少しく通俗に云へば cunning の一語にて盡くせる、然かし漢文や日本文にて weird なり cunning なりの如くを一語にて盡し得る字ありや否や、否能く數語を連ぬるとてもこれに通ずる語は尠く無い。又此の如く天幕が巖の上に張つてある狀態は perch の一動詞さへ使用すれば、千言萬語を使用するよりも十分である、即ち The General's tent perches on pinnacle of rock と書けば、書くが如くに其の景趣が現前に現はれて來る、總じて高き山の頂なりに點らせる小屋などは、鳥に關する事を以て形容すれば最も讀む者を動かす、然ればマッコーレーの「古羅馬行」の長篇の内にも、此の如き山頂の屋舍を Like an eagle's nest

on the purple Apennines と形容してある。然るに若しこれを漢文にすれば、將軍帷幕在ニ巖頭一、其狀似ニ鳥之棲止一とてもするのであるが、如何にもダラ〳〵として冗長でもあり、且つ全體に於て語を成さぬのである。以上の如くなれば一概に西洋文は複雜に長じ、漢文は簡潔に長ずとも言はれぬのである。さて豐島將軍には山頂の掩蓋の處に案内せらて、ドーです、パノラマの樣でせうと云はれた。パノラマと云ふ一語にて此の山頂よりの眺望の全班は誰れ人にも判かる、然るに之を漢文にすれば、語少く書いても山河在ニ一目一とせざれば通ぜぬ、而かも之ですら意味は廻はり遠い、パノラマなる語の方が遙かに直截にして鋭く頭腦に感ずる。

以上の如くなれば、西洋文にも簡潔なる所がイクラもあるが、然ればとて漢文は果して複雜なる所を寫し得ざるか、否敢て然らずと思ふ、例へば明の馮夢龍の文を讀め、

其山幅員數百仞、林箐深密、疊レ石爲レ城、外樹ニ木柵一、當レ道穿ニ坑穽一、仆ニ巨木一、布ニ渠答一、夾以ニ守障一連營數十里、直至ニ玉壁城下一、城南起ニ土山一、欲ニ乘レ之以入一レ城、城上先有ニ兩樓一、直對ニ土山一、孝寛更縛レ木接レ之、令ニ極高一、歡遂于ニ城南一、鑿ニ地道一、又于ニ城北一、起ニ土山一、攻具晝夜不レ息、孝寛掘ニ長塹一、簡ニ戰士一屯レ塹、每ニ穿至一レ塹、戰士輙擒ニ殺之一、又于ニ塹外一、積レ柴貯レ火、敵人有下在ニ地道一者上、便下ニ柴火一、以ニ皮排一吹レ之、火氣一衝、咸即灼爛、城外又造ニ攻車一、車之所レ及、莫レ不ニ摧毀一、雖レ有ニ排楯一、亦莫ニ能抗一、孝寛令ニ縫レ布爲一レ幔、隨ニ其所一レ向、布懸ニ空中一、車不レ能レ壞、城外又縛ニ松于一レ竿、灌レ油加レ火、欲ニ以燒レ布焚一レ樓、孝寛使レ作ニ長鉤利刃一、火竿一來、以ニ鉤刃一遙割レ之、城外又四面穿レ地、作ニ二十一道一、分爲ニ四路一、于ニ其中一、各施ニ梁柱一、以レ油灌レ柱、放レ火燒レ之、柱折、城並崩陷

と、攻守兩方の作業の最も複雜せる所を最も好く寫して居る、若し夢龍をして地下より喚び起し、日露戰役中なる旅順口攻守の實際を見せたるなれば、彼れは漢文を以て日露兩軍の複雜なる情勢を輙ち綴り得たり

と思ふ。果して然らば漢文は複雑なる所を寫す能はざるものなりと一概に思ふのは、是れ亦た誤れりと思ふ。

既に西洋文にも簡潔なる所あり、漢文も亦複雑なる所を寫し得と云ふや、或は曰く、漢文將た漢文より脱化せる日本文の長所は莊重にあり、典雅にあり、西洋文は莊重なる所、典雅なる所を缺けりと。然り日露戰役中なる陸海軍戰鬪の公報には莊重なるものあり、典雅なるものあり、而して其の最も莊重なる部分、典雅なる部分は一見漢文より脱化せる所に多しと思へども、これ敢て然らず、能く生死の間に出入し、感激極りて發したる文字なれば、自ら莊重典雅ならざるを得ない。人は今の米國人の卑俗なるを云ふ、而かも其の獨立の檄文を讀め、莊重なる所、典雅なる所は實に唐宋時代の封文にも優る所あるではないか、是れ全く死生の間に出入せる志士が熱血を濺ぎて作りたる文字の故である。漢文と西洋文との長短を云ふ勿れ、簡潔と複雑とを比較する勿れ、孰れか莊重なり典雅なりと說くこと勿れ、要するに千歳の名文は死生の間にある者より發す（戰爭と限るにあらず）、死生の間にありては人は自然の儘となり眞面目となり至誠となる、即ち人を動かす文字の此處より起るは偶然でない。見よや戰役中にありし尋常將卒の手紙の方が、現代の所謂文士の推敲せし文字よりは、人を動かす點に於て遙かに優る所ありしにあらずや。試みに石本歩兵少尉なる人が突撃の前夜に當り其の實兄に寄せたる鉛筆書きを見よ、

御送附の防水マント確に有難く頂戴仕り候愈明日は攻撃にて當中隊は第一線東鷄冠山へ突撃仕り先登第一の名を殘すべく〔何等の豪快〕假令へ戰死するも決して名を汚すが如き事なし御安心あれ〔何等の悲壯〕小子の行李中には蓋の右のカクシに金子五圓及過日の望遠鏡は右の方に有之候間兄上御使用被下度〔何等の用意〕尚行李中には靴下、ハンケチ、シヤツ、手袋等有之候間御使用を乞ふ〔何等の緻密、而かも亦兄弟の情掬すべきを見る〕尚小子の死體は火葬して後（出來得れば）自分の國旗にて遺骨を包み東京へ御送りを乞ふ〔何等の決心、何等の悲慨〕其他は皆過

日中上置候如くに御座候兄上より御送のマントは行李の上にあり先は最後の御願迄〔餘音嫋々〕
佐々木君にもよろしく願ひ候　敬具

十月二十九日　愚弟　權　四　郎

兄　上　様

（文中の批點と〔　〕中の批評とは予の加へたるもの）

此文は鉛筆にて紙片(かみきれ)に走り書きせるものに過ぎずと雖も、讀む者、聽く者をして感激極まらしめ、正に一代の名文となすに足るてはないか、英文に直譯し見よ、

Dear Brother,

Duly received the water-proof cloak you sent me with many thanks. At last we shall make a general attack tomorrow, and our Company will rush against the East Cock's comb Hill as the first line, so to make me keep back the honour of the first charger. Though may be killed, be easy that I will never dishonour my name. In the rightside pocket of the lid of my trunk you shall find five yen in cash and the field-glass you sent me other day; these you dear brother may make use of. Also you may use my stockings, handkerchiefs, gloves, etc. in the trunk. Besides I ask you to cremanate my corpse if possible, and send the bones over to Tokyo wrapping them with the national flag I was carrying. As to the other things please do that I had told you before. The cloak that you dear brother sent me is on the trunk. Adieu so much for the last favour in my life.

Please give my best regards to mr. Sasaki.

Your humble (loving) Brother,

Gonshirô.

以上は全くの直譯なり、「愚弟」とは西洋の文想の中に無き所なれば、唯これのみには括弧を附して loving と云ふ原文中に無き一字を加へたるが、字丈けを除きては原文と一字一句だに増減せぬ、然しながら此の英文を讀みて感激せぬ西洋人とては無いと信ずる。果して然らば漢文將た日本文と西洋文との優劣を論じ長短を比較するが如きは全くの末なり、況んや文士先生な

る者が呶々と文章の巧拙を講述するが如きは末の末なり、神來の文は自然より來り、至誠より發し、精神上より出づと知らずや。

又繪畫の一例を見んか、水師營に於ける乃木ステッセル二將軍の會見を書くに、兩將軍共に肋上に多數なる勳章をば眼眩きまでに陳列し、且つ乃木將軍には反り身となり、傲然とステッセル將軍に對し居れども、其實本人の乃木は儀例として佩用せざるべからざる一等勳章のみを左肋に掲げ、最も簡素なる風采もて、傲らず侮らず、敗戰の將軍に對し無限の同情を表はして會見したのである。然るに畫家には自己が品性の陋劣なるより、己れが乃木になつたら有る丈けの勳章を佩び、意張つてステッセルに會見して遣らんと云ふ精神を抱き、畫家が自分の乃木を書きたるより、此の如き下卑たる乃木將軍の畫が現はれたのである。畫家は固と天地と通じ、造化と默契し、高尚の最も高尚なるもの、功名を以て念とせる武人などよりは其の地位千百層も高く居らざるべからず、而かも此の如し、何たる口惜しき事ぞや。

要するに詩、文、畫は至情より發するにあらずんば、如何に推敲したりとて、如何に飾り立てたりとて、如何に彩色を施したりとて、永久に人を動かし得べからずと確信する。美術上の或る紛々たる批評論を讀みて感興が生じたれば、此一篇を起したのである。

貴族院論

尾崎行雄

近來貴族院が何となく色めいて來たについて世間にいろ〳〵の批評があるやうであるが、私は之に對して極めて平凡にして簡單なる意見を持つて居る。元來貴族院は政黨以外に立つべきものと思つてゐるのが第一の間違ひである。又己れ獨り帝室の藩屏を以て任ずるといふのも間違ひであり、且つ僭越でもある。日本の帝室は決して貴族の一階級をのみ藩屏としてゐるもので

ない。國民全體の上に立ち、國民の總計によつて重きをなしてゐるのが日本の國體の他に勝れたる點てある。其れを貴族獨りが藩屏なるかの如く思うてゐるのが、事實に齟齬したる僭越沙汰てある。世の中には善意あつて惡果を生ずるの例も少くないが、彼等若し夢にだもかく信ずるならば矢張同樣の例に洩れぬてあらう。五千萬の國民悉く帝室の藩屏にして、君國の爲めには一死猶辭せざるは日本の現狀てある、實狀てある。此點先づ貴族社會の注意を要すべきものてある。

世の中が今よりもずつと進歩して、人間が皆公平無私不偏不黨になることが出來れば、政黨以外に獨立して政治を行ふことも出來るてあらう。勿論今ても或特別の個人についていへば政黨以外に立つことが出來る。けれども一院三百有餘の人が悉く政黨以外に立つて中正の位置を衡の如く維持して行くといふ事は決して出來ることてない。其れを出來ると思うてゐるのが是亦僭越てある。人間は多く感情に制せられ、又行掛に制せられ易いものてある。全體が黨派以外に獨立するといふことは口にいふべくして實際に行ふべからざることてある。今貴族院の現狀について見ても、研究會といひ、木曜會といひ、一種の黨派をなして居る。若し政黨にあらずとすれば、明黨てある。公黨にあらずとすれば私黨てある。黨派を作らざるならば即ち止む、已に黨派を作つたならば、政黨若くは公黨が、朋黨若くは私黨に勝ることは言はずして明かてある。政黨を捨てゝ朋黨を取り、公黨を罵つて私黨を貴するが如きは其愚眞に及ぶべからざるものてある。私黨朋黨は黨派の最もあしきものてある。政黨公黨は黨派の最もよきものてある。現今の貴族院は未だ私黨朋黨に近くして政黨公黨に遠いものてある。吾輩は貴族院が一日も早く眞の政黨となり、公黨とならんことを希望するものてある。

吾輩の斯く論ずるのは決して貴族院を批難攻撃する爲めてはない。實は貴族院は今、將來何れの方向に進むべきかについて迷ふてゐるのてある。其れを氣の毒に思ふが故に、正理のある所を示して、彼等の反省を

求めたのである。

貴族院論

池邊吉太郎

今の處では貴族院の方が衆議院よりも有力であるといへるだらうと思ふ。何故かといへば、今の内閣には衆議院の代表者といふべきものは一人もゐない。貴族院の方にはある。研究會の中から岡部さんを拔いて大臣にしてゐる。のみならず、最初は確かに貴族院から二人入閣させるといふ計畫であつた。今一人はどの團體から誰を取る筈であつたか、それはよく知らぬ。が二人取るといふ計畫は確かであつたと私は信ずる。それから想像して見ると、今の内閣は、衆議院の方はどうにかかうにか操縱てやつて見やう、やつて行ける。が貴族院はさうは行かない。と思つてゐたらしい。尤も西園寺内閣でも研究會から一人、木曜會から一人、都合二人を拔いた例があるから、それで二人取ることにしたので、若し其例がなかつたら、さうせなかつたかも知れぬけれども、兎に角貴族院を御することは容易ぢやない。何時でも味方をすると限らない。そこで何か新らしい計畫でもすれば、——殊に桂内閣では——どうかすると衆議院よりも貴族院に先きに相談して其同意を求める。固より隱微の間に行はれることとて表向きには分らぬが、どうもさういふ傾向があるらしい。が、それにも拘らず、貴族院の方は確かとはいへぬ。何時でも貴族院の同意を得らるゝといふ極まつたものが何もない。殊に研究會は一種の政黨になつて居る。決議を以て其會員を拘束し、之に違ふものは除名する。主義政綱は發表してゐないが、問題ある每に其れに對する態度を決議し、之によつて立つてゐる。此點殆んど政黨と變りはない。であるから政府の方針が研究會の決議と合はぬことが動もすれば起る。例へば鐵道國有問題の如きそれであつた。あれは西園寺内閣の時に起つたのであるが、あの案は桂と相談の上でやつたも

のて、桂の案を西園寺が實行したといふてもよい位のものである。あれを幸倶樂部では贊成したが、研究會では殆んど危かつた。いろ／＼の手が入つて、いろいろの魂膽を盡した。そして其魂膽は多く桂がやつたらしい。結局修正といふ事でやつと纏めたのである。

それは研究會の事だが、勅選議員でも何時でも政府案を贊成するとは限らない。勅選議員に缺員が出ると何時でも五人と十人と競爭者が出る。そして有力なる後援者を頼んで出る。其時に、若し議員になれば、お前の案を贊成する、といふやうな事で、一種の契約勞働者として出る。處が出て了ふと實際さうは行かぬらしい。で後援者も度々肝癪を起す樣な事が出る。幸倶樂部は勅選議員で纏めて居るが、積極的に反對はしなくても、缺席位は直ぐやる。何か問題が起ると、地方又は近くの別莊あたりに居る議員に電報を打つ。けれども自己の意に滿たぬ案には、上京せぬ。缺席する。反對をせぬまでも贊成はせぬ。勅選議員までも、かういふ風で思ふ通りにならぬ。

けれども私は、いつの時代にしても、さうエライ政治運動は貴族院から出やうとは思はない。貴族院の或部分、殊に伯爵、子爵、(男爵を加へてもよい)あの邊の互選の選擧で出て來る活力ある分子、あれば政治上の運動を起す丈けの力がある。あれ等の大きな團結からは內閣に代表者を出すといふ事にならうし、現になつてゐる。けれども貴族院では貴族と同數の勅選議員が出ることになつてゐる。そして其勅選議員の方には政治上の活力がない。大抵官吏の古手か又は民間の老輩であつて、働いて／＼働き拔いてから議員になつた連中で決して目醒しい働きが出來ない。今では官吏の古手が最も多いが今後も矢張りさうであらう。この部分からエライ政治上の活劇が演じられやうな事はあるまい。そして此等の連中は政府の推薦によつてなつたものであるから不服があつても、どこまでも其命令を聽かぬといふ譯にも行くまい。自己が推薦された政府にもさうであるし、又其政府を繼承した政府にもさうであらう。此勅選議員あるが爲めに、貴族院の政治上

の活動力が衆議院のそれに同じ樣になることはあるまいと思ふ。此制度の存する限りは依然として以上の如き狀態を維持するであらうと信ずる。そして此勅選議員に對しては今の內閣が最も有力である。伊藤公の內閣の時に勅選となつたものは極めて少い。若しなつても契約勞働者にはなつてゐないやうだ。之に對して山縣系若くは桂系と目すべきものは數が多い。又其裏には多分約束があるらしい。之れが現內閣が貴族院に有勢なる一因緣をなしてゐる。其上貴族院の有力なる團體を取逃がさぬやうにやつてゐる。研究會には元、淸浦が居り、今は波多野が居る。波多野は前の桂內閣の一員ともなり、或意味からいへばお目附役とも指導者ともいふことが出來る。そして今でも曲りなりにもどうにかかうにか逃がさずにやつてゐる。

曾て伊藤內閣の時代に、勅選議員も研究會も反對して伊藤公に七重の膝を八重に折らしめた事がある。其時は所謂政友會內閣の時であつて、衆議院には多數を占めて居つたからそれが癪に障つてやつたのかも知れない。兎に角山縣系の勅選議員と研究會の始末が附かなかつたので、京都に居る山縣公に矢繼早やに電報を打つて援助を求めた。山縣公は遂々上京してどうかかうか纏めた。が其時の權幕はなか〳〵激しかつた。其時に伊藤公はこれぢや行かん、貴族院をどうにか改革せにやならぬと思ひ立つた事が確かにあつたと思ふ。詰り自分で建てた貴族院を建直さんと深く思込んだのであつた。そして其時は重もに勅選議員に手を着ける氣であつたらしい。終身のものを或一定の年限附にするといふやうな事も其中にあつたらうと思ふ。又研究會の方にも手を着ける氣であつたらしい。然しカイセイのカの字も言ひ出すことが出來ずに了つたらしい。で今後も貴族院令の改正といふ事が折々問題になるだらう。或部分に對して貴族院令の改正が必要の事もあるであらう。公平にいへば存外願はしからぬ勢力も貴族院にあるから、時として理不盡の事もし兼ねない傾もある。此弊根を拔くには院令の改正が必要であらう。然し此貴族院令の改正といふ事が六つかしい。何でも

三分の二か四分の三かの同意がなければ改正が出來ぬ事になつてゐる。伊藤公は此方式によらずに改正せんとしたものらしいが、手がつけられなかつた。そこで貴族院の半分の貴族仲間は政治上の活力を發揮しつつ、他の半分の勅選仲間は之に引摺込まれて暫らくの間は相變らずの貴族院として行くであらう、現今の狀勢から見れば先づ其位の處と思ふ。

近頃貴族院に於て目醒しいのは秋元子爵一派の運動である。これは研究會一派が自ら敵と作つたともいへるだらうと思ふ。やり方がどうも酷かつた。この連中の盡力次第ではどうなりますか、大分變つた形勢が出て來るかも知れん。然しそれは貴族院の半分しか居ない貴族の議員に限られて、他の半分の勅選議員には及ぶまい、及んだ處でグイ〳〵及んで行くといふ事はあるまい。然しそれはそれとして一番どうかと思ふ事は貴族院も腐敗しはしないかといふ事である。あの互選制度といふものはどういふものであらう。あの制度には理屈から押すと危險な所がある。失禮ながら、貴族院にも、政治上にさうエラクない人も可なりある。二千圓欲しい人も入つて居る。さういふ人が財政整理の目的で貴族院に入るといふやうな事になれば、運動の餘地が生じて、腐敗の源を開く。夫れ故に貴族院から政治上の活力が出る希望あると同時に腐敗しないかといふ恐もないでない。此腐敗丈けは成るべくないやうにするのは貴族院の責任である。貴族院が、若し腐敗したら丸で取柄がなくなる。



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある英米露等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

有史以前の滿洲の民族

鳥居龍藏

有史以前(プレヒストリツク)の滿洲には如何なる民族が棲息して居つたか、之を研究するのは面白い事と思ふ、が有史以前の滿洲を研究する文獻上の材料は支那の書物に依るより外ない、けれども支那の書物の古いものは記述が大あらましてである、其他は滿洲と支那と關係した事件の有つた時だけ書かれるといふ次第であるから、之に就いて研究するといつても固より斷片的の引用に過ぎぬ、それ故有史以前の滿洲を知るには今少し事實を知ることをせねばならぬ、此點に於ては歷史時代よりも却つて有史以前の方が知り得べきかも知れぬ、此方の研究は所謂有史以前考古學(プレヒストリツクアーケオロジー)の方法によるもの、即ち土中に存在する古代の掃溜、塵捨場といふ可き貝塚、或は遺物包含地を發掘し、その中から色々のものを取り出すか、若くは只畑を耕す際掘り返されて表面に暴露し居る古器物などに依るかして古代の樣を知る材料とするのである、此樣な方法で滿洲を研究したなら面白い事が有らうと思ふ。

滿洲の有史以前の民族の研究は、大部八釜しい問題となつて居り、老鐵山の麓から石鏃石斧等を發見したのである、私も此點に就いては已に十年程前から考を有つて居たので、滿洲をば今回ともで前後三回旅行したのだ、第一回と第二回の時には金州附近、貔子窩、普蘭店、熊岳城、蓋平、薩尓滸城附近、興京附近、懷仁附近、鐵嶺、法庫門の間、康平等に於て石斧、石槍、石杵等を發見した、尚ほ普蘭居に於ては有力なる一大遺蹟に遭遇し、此處で色々調査をして大體南滿洲に住んだアボリジンスに關する少多の智識を得た、其後は

昨年の十二月まで凡そ三ヶ年ばかり、シラムレン及び興安嶺方面に調査的旅行をし、其處に於ても亦手掛りを得て置いた、三回目の此度は尙ほ一層老鐵山附近大連附近て此等の遺蹟遺物を調査し、更に進んで太子河畔、渾河々畔を調査した、先づ以上の事實によつて考へて見るに、滿洲に古く居つた民族は旅順の岬角からして奉天附近迄のものは殆んど同じいと言つて宜い、それは石器の形式土器の形式等に於て言ふことが出來る、特に著しい事實は鏃石の構造である、內地より出る鏃石は既に人々の知る如く打ち缺いて作つたものだ、が南滿洲にある鏃石は、何れも石盤石の如き、石を扁平に磨り減らし、長方三角形に作つて居る、それがその特色と言つて宜い、尙ほその民族の特色を發揮し居る土器の如き、その形式その模樣等の上に於ても一樣て、表面に幾何學的模樣を施し、壺に把手を付けて居る、此等が又一つの特色てある、特に注意すべきは、旅順から出た石斧の石質を見ると、此石材は旅順附近の關東州には存在せぬ、それは火山岩てあるので、山東省と旅順との間に存在し居る廟東列島附近から取つたものと思ふ、此等の事實から考へると、大古滿洲に棲息して居たアボリジンス、或は廟島列島を足場として山東省方面に及んだのかも知れぬ、然るに之を遼河の上流地たる東蒙古のものと比較するに較々形式を異にする樣に思はれる、例へば鏃石に就いて言へば、蒙古方面のものは寧ろ日本的て何れも打碎いてあるし、土器の形式模樣も多少違つて居る樣て、未だ確といふ事は出來ぬけれども、南滿洲のものと東蒙古のものとは稍々民族を異にするので無いかの感がある、然るに此處に不思議なのは渾河々畔、特に撫順附近の丘陵上に存在する石器時代の品を見るに、その土器などの上から東蒙古、老哈河附近のものと多少似て居る所がある、此點から考へ見るに渾河以南と渾河以北との間に差があるてあらうか、此等は最も研究すべき事に屬して居る、私は此等の事實を調べん爲に、尙ほ北方に向つて調査的旅行を續け樣として居た所、測らずも父の死去の報に接して倉皇引返した譯てある、滿洲の石器時代民族の研究は奉天より以北に遡り、松花江流域を確め、尙ほ山東省方面の者との比較を始めるならば、滿洲のアボリジンスに就いては多少參考とならうと思ふ。

次に注意すべきは蒙古の石器時代の遺跡である、予は遼河の流シラムレン、興安嶺方面を調査したが、此

方面にも有史以前の事實が認められる、此處に存在するものは如何言ふものかといふに、それは住居跡であつて、之を掘れば色々のものを發見する、倘ほ此等の遺跡は至る處に存在するから、往々その遺物を途中で拾ふ事も出來るのである、私は現在生活し居る家の數、人の數よりも、此遺跡の方の數を餘程多い樣に思ふ、昔時此方面に實際多くの人民が生活して居たのであるか、又は長き年代の間生活して居た爲に此遺跡が多いのであるか、それは研究を要すべきものである。

此等の遺跡を留めたのは如何なる人種かといふに、彼の支那歷史上に名高い東胡族で、倘ほ委しく言へば鮮卑、烏丸等の人種である、此等の形式の品物は南は內蒙古の南端から北は黑龍江の上流の區域に達する、即ちハイラル又はチチハルの附近にも及ぶのだ、此者が、東の方に何處まで延び居るかを知るは將來の研究で、滿洲に於ける最も大切な點だと思ふ、彼の遼河の流域、特に撫順の方面で發見したものは此等と多少手掛りがあると思はれる、昔から能く、此滿洲の肅愼が石器を使ひ、特に石鏃を使つたといふが、此肅愼鏃は如何樣な形式か、これ迄に一向確めたものが無い樣である、先づ此研究に就いては長春若くはハルビン方面の東方の松花江流域を調査する必要が有らう、蓋し此方面は彼等肅愼の最も根據とした處である、これより出づる遺物は南滿洲のもの及び蒙古のものとの比較等には面白いであらうと信ずる、吉林通志その他の漫筆類を見ると、松花江の流域から鏃石を拾い出すといふ話が能く書いてあるが、少しもその實物は記して無い、今後此方面を研究したなら面白いであらう、此松花江流域から出る鏃石は、南滿洲の形式か、東蒙古の形式か、面白い宿題であらう、若し南滿洲の石鏃と同じものが松花江流域から出るとせば、それ等は肅愼族と同じ民族であらう、が今日まだその斷定を下す迄には行つて居らぬ、倘ほ滿洲には肅愼の南、東胡族の東方に扶餘といふ民族が古から生活して居る、此方にも注意を要するものがあらう、倘ほ支那の最古の歷史、書經、特にその中の夏書の禹貢によると、山東省には嵎夷萊夷等が居つた、兎に角禹貢の時にはまだ山東省の登州附近は、漢民族以外に一種の蠻族であつたらしく思はれる、この嵎夷若くは萊夷は如何なる民族に屬するか、此等は餘程注意すべき問題であらうと思ふ、その方面の調査が行屆いたならば又南滿洲と連絡せしむる事も出來やう、山東省と南滿洲との連絡は今日に於ても知れるの

て、山東省の移住氏が多く南滿洲に存在して居る、又支那の歷史の此間に關係多いのも知れ居る事だから更に此方面に向つて研究すべきである、山東省と旅順の岬角との間には島嶼が碁石を敷いた樣であるが、此等の島嶼を昔から足場として互に往來したものだと考へて居る、現今でも支那ジャンクが山東省から南滿洲に向つて來るには矢張り此島傳ひてある、此島を特に廟東列島といつて居るが、此處には日本の金毘羅とか船玉とかいふ樣な神、天后宮を祀つて居る、そして往來する船は皆此處へ賽錢を上げて行く、これ等を見ても山東省と南滿洲とには互に連絡する事が知れる、旅順で得た石器時代の遺跡の石斧が、その石材を廟東列島から取つて來た者であるらしいのも、之を確むる値ある材料たるは前にも述べた通である。

　兎にも角にも滿洲に於ける有史以前の研究は之から取掛るべきもので、尙ほその比較として、常に南は山東省、東は鴨綠江方面西は蒙古、北は黑龍江の上源地の研究が必要であらう、此等の比較がうまく出來るならば、滿洲の民族の有史以前の研究が學術的に說明し得られやう。

海外消息

五月三十一日巴里より

無念庵

●謹啓　バルカン半島の風雲全く事なきに終りたる事は、前々號に於て詳述致し置きたる筈に候が、其後去月下旬を以て奧太利も勃牙利も公然二州合併の顚末を其國民に告示し、玆に總ての手續を完了致し候。然るに此結果として塞爾比の王位に聊か悲觀すべき影響を及ぼしたるは誠に是非もなき次第とも申すべきか。

●塞爾比の王位　太子アレキサンドリア親王の更迭去る三月を以て斷行せられしも、現王室は此度の事件に關して甚しく民望を失ひ、現王ペートル陛下は安心快からず、國力微弱にして常に意の如くならざるを以て大く今後の成行を悲觀せる者の如く、バルカン事變結末後は一切の政治を見ず、國民は王の廢立を希望しつゝあれば、近き將來に於て此處にも又一大更新行はるべしと、専ら噂せられ居り候。

●和蘭王室の慶事と列國　現女王ウイルヘルミナ陛下は獨逸メクレンブルグ、シュウエリンのハインリヒ親王を迎へて其配偶者となしたりしが、久しく嗣なく、オレンヂ、ナサウ家の王統玆に全く斷絕せんとするより、國民及び關係列國は、歐洲の權力平均維持の上より、

大く之を憂ひ居たりしに、去る四月三十日朝陛下は無事玉の如き女兒を擧げられたる由電報あり、關係者は何れも愁眉を開らき申し候。

●英國藏相の豫算補充案　英獨海軍競爭の結果英國は今明年中に大々的海軍擴張を斷行せざるべからざる羽目と相成、從て豫算に大不足を生じたる事は前々號に於て申述べ置き候ひしが、藏相ロイド、ジョージ氏は愈々去る四月二十九日を以て歳計不足補充案を議會へ提出し四時間に渉る大演說をなしたり。案の內容は不足總額千六百萬磅を主として富豪に負擔せしむる方針を採りたるものにして、印紙稅相續稅煙草稅酒稅等の稅率を增し、自動車及び之に用ゆる燃料等に重稅を課したるものなりとの事に候。藏相は平素下流社會に氣受け好きため、自然上流社會には疎んぜらるゝ傾向あり、今度の不足補充案の如きも一般人民側には好評を博し居るも、上下兩院を見事に通過し得べきや否や甚だ疑問なりとの事に候。

●露國內閣の動搖　首相ストリピン伯反對派の政治家數名、現政府の施政に嫌らざる議員等を煽動して、首相が國民議會に提出せる海軍參謀部改革案は皇帝の大權を侵害するものなりと稱して、極めて激烈なる中傷を試みたりしが、皇帝は何思ひけん同改革案の裁可を拒絕せる爲め、茲に早くも現政府瓦解の風說を聞くに至りたり。由來海軍參謀部の腐敗は一朝一夕の事にあらず之を改革するとせざるとは偏に露國海軍力の盛衰に拘はる譯なれば、首相が之を斷行せしは、露國百年の大計とも云ふべきものなるも、海軍部內腐敗の中心とも云ふべき獨逸人墺太利人等は之を見て、自家の勢力擁護に死力を盡すの止を得ざるに至りたる次第なり。露國文武官吏の三分ノ二は獨逸人にして、之に反對せられては藏相も如何ともする能はず、遂に辭職を闕下に伏奏するに至りしが、賢明なる皇帝は之を聽許し給はず、首相若し辭職せば外相及び藏相も又連袂內閣を去らん意向あるを洩し居るを以て、首相の辭職は內閣の更迭となるべく、其結果として露國の外交財政方針に面白からざる現象を來すべければ、兎もあれ、此處暫くは皇帝も首相留任を熱心に希望すべしとの事に候。但し海軍參謀部改革案の成行はまだ遽に斷じ難しといふ。

●佛獨接近問題講演　巴里の有力家にして目下伯林出遊中のエトゥネル男は、熱心なる伯林市民の希望を容れ、佛獨の接近と題し長時間の講演を試みたり。普佛戰爭以後兩國民感情の行違は要するに無意味に屬す、之が爲に兩國民の益する處幾干ありや、而して之が爲に兩國が受けつゝある損失は果して幾千なるや等を虛心平氣に考一考するあらば兩國民接近の利害如何は思半ばに過ぐるものあるべしと論じたるものにして、宰相ビュロー公も傍聽席にあり、講演終るや、ビュロー公は男を招いて晩餐を共にしたる由、されど巴理の市民等は之を見て寧ろ冷笑し居る傾きあり、一般新聞紙も取るに足らずとて相手にせざるものゝ如くに候。

●獨帝の維府訪問　バルカン半島の諸問題、思ひ通りに成功せるを以て、聊か之が祝意を表せん爲めか、獨帝の維府訪問は、獨墺兩國

外相の間に商議せられ、維也納（ヴエンナ）府に於ては、盛なる歡迎準備に着手したり、歡迎準備は獨帝より前以て盛大なるべしてふ注文あり之れ獨帝が、バルカン問題に於ける獨帝の援助の如何に有力なりしかを中外に意識せしめん下心より出でたるなりとの說もあり、甚だ笑ふべき事に候はずや。伯林の諸新聞殊に、アルサマイネ、ツアイツングは獨帝の維府訪問を以て、公々然バルカン問題に於ける外交上の懸引が遂に首尾能く兩國の勝利に歸したると、及び兩國外交の如何に鞏固なりしかを祝するに最も適當なる機會なりと論明したり。

▲獨帝の維也納に到るや墺帝は蒼惶之を迎へて離宮に招じ、大晩餐會を開催し、席上獨逸が幾多の危難を冒して世界平和の維持に盡悴したるを稱贊し、殊に何等の軍事的行動に出づるなくして、半島の紛爭を解決し得たるを多とし、之れ偏に獨帝の平和に熱心なること、及び獨墺兩國同盟の確固たるものありしに依ると述べられたり。

▲次て墺獨兩帝は之を機とし伊太利皇帝に慇懃なる電報を送り、三國同盟の不變なる團結を祝し、伊國皇帝も又同意味の答電を發したり。されど英佛の諸新聞は、一般に獨帝の平和維持云々の報を冷笑し、反て獨墺兩帝の會見を意味ありげに論評せり、世に滑稽なる事少なからず、東洋に泥坊の番人といふ語もあり、獨帝の平和維持てふ言葉が同意味の熟語とならずんば幸なりとは愛蘭の一新聞紙の言ふ處に候。巴里の某外交事務官は獨墺兩帝の會見は、露國の對獨準備に對する一種の示威運動に外ならずと申し居り候。

●ニカラグア共和國の日本同盟論　南米の一小共和國ニカラグアがホンヂユラスと事を構へて、戰端を開きたりし事に就ては曩に報道する處ありしが、其後ニカラグアは之に關する米國の干涉を解決せん爲め、大使ゴンザレス氏を米國に遣はしたり、猶ニカラグア大統領の機關新聞は目下盛に米國を攻擊し、中央亞米利加は早晚米國に併呑せらるべし、而して之を免がれんとするには日本と同盟するに如かず、吾人にして地峽横斷運河の開鑿權を日本に讓與すべしとの提議をなさば、日本は必ず相談に乘るべしと論じたる由に候。

●波斯現下の形勢　波斯が財政上の危機に迫りて、一方英露兩國の援助を乞はんとするに意ある事は、曩に述べたる處なるが、皇帝も愈々頑冥なる從來の主張を飜して、英露兩國の勸告に從ひ、憲政を實施せんとする模樣あり、露國政府は波斯駐屯軍司令官リアコフ大佐に命じ露軍をテイランの西方三十哩の地點に擁守して首都に入れしめず、更にタブリッツ守備兵を增員して秩序を維持しつゝありしが、波斯國民は之を悦ばず之れ領土侵害の目的に外ならずと揚言し居る由、されど自由派の内閣は露國と波斯皇帝の默約に依り組織せられんとする模樣あり。

▲默約とは借金の事なり、皇帝は宮庭の生活費にすら窮しつゝあるを以て、露政府は十万磅を貸與すべしとの事に候。但し右十万磅の使途に就ては露政府嚴重に監督すべき條件附きなる由に候。

▲英國議會は此報を得て、政府に質問する處ありしに、外務次官マクキンノン、ウツド氏は、露國は成るべく早く、ダブリツツ駐屯軍を撤退すべく、又波斯皇帝に憲政保護を誓約せしめたる上、十万磅を貸與する事に決定せるも、之れ決して、英露協約に悖るものにあらず、露國は英國の利益にも改革運動にも何等の損害を與へざる事を確知し政府は滿足したりと答へられ候。

●佛國郵便事務官の罷業

増給示威運動として郵便事務員等突然休業し、一切の郵便事務全然中止せられんとする有樣となり巴里は一大恐慌を來したり、之れ電燈の罷業よりも悲觀すべきものなりとて、官民協力し彼等を就業せしむに努めたりしが、五月十七日に至り罷業者の頑強なる者五百四十名を免職し、其他は復職を希望したるを以て其要求を聽かんことを約し免職者漸く二百名の後任も定まり、從前の通り郵便事務を取扱ふ事となりたり。政府會社銀行等及び其他公私一切の蒙りたる被害は莫大なるものなりといふ。

●日墺提携論

ツアイト新聞は露國反對の目的を以て日墺相提携し、双方共に對露防備の懸念と費用とを輕減せしむべき日墺協約は目下有力なる外交家の間に討議せられつゝありとの報道を掲げたり、之れ固より根も葉もなき道聽途說に過ぎざるべきも、報道の突飛なるため一時朝野の注目を惹きたり、墺國外相エーレンタル男は往訪の某記者に向て之を否定致したる由に候。

●伊太利商業の發達

伊太利の商業政策の振はざるは、政治外交不振の一大原因として數へらるゝ處なるが、タイムスの最近ローマ通信は伊太利商業の發達著大なるものなりとて、四月十日付伊國藏相の報告書なるものを發表したり。該報告書に依るに、一八七一年乃至一八七五年間に二十二億五千万リラを計上せし貿易額は一八九六年乃至一九〇〇年に至り二十五億リラに增加せり、而して一九〇六年には四十四億一九〇七年には貴金屬を除いて實に四十八億の莫大なる額に激增せり。又一八七一乃至一八七五年の五年間に於ける輸入平均額は十億七千三百万リラなるも一九〇七年には輸入額二十八億八千一百万リラとなれり、伊太利の貿易は斯の如き割合を以て年々增加しつゝあるを以て、將來誠に侮るべからざるものあるべしといふ。

●英國二名士の新聞紙論

本月上旬英國の二大政治家は外交上に於ける英國新聞紙の自由に就き大評論を試みたり、其一は現外相エドワード、グレー氏にして他は前外相ラウンスダオン卿なり。グレー氏は主として外交上の記事に關する政府と新聞紙との關係を論じ、他國にありては多く外交上の記事は政府より出て又政府の意を帶して掲戴するものなれど英國にありて然らず、英國の新聞雜誌は此の點に於て全く自由にして、新報論說共に彼等自身の努力と頭腦とより出づるものなれば、列國は之を了するを要すと述べ、更にラウンスダオン前外相は此意味を體めて、外人は我英國新聞紙を以て政府の見解を忖度する向きもあれど之れ大なる誤りなり英國の新聞紙經營者は外交上の記事を政府若しくは政府に關係ある者に依りて得る事を甚しく樂しみ居り彼等は只自己の機關に依りてのみ之を得つゝある有樣なれば、英國政府は他國に於て見るが如き新聞紙の操縱の術策を施す事を得ずと論じ口を極めて政府と新聞紙との全然沒交渉なる事を述べたり、之れ近來稍もすれば獨逸の諸新聞が態とらしく英國の新聞の輿論を種子に英國政府の外交關係を中傷せんと試みるより、英政府が之を防止せんとする底意より出でたるものなるべく候。



現代人物評論（十八）

曾禰統監論

△曾禰新統監

三宅雪嶺

曾禰子は普通の官吏連と少し違つた所がある、官界に居るものは高官でも次第に事務官流になり、輪廓が明である、自分で才を誇り變則な事を敢てするものもあるが、側から見れば如何なる道を蹈み來つて如何なる道に向ふか、先の到着點が略ぼ分つて居る、必ずしも當らぬだらうが、當らずと雖も遠からずである、別段之ぞと云ふ程のことがない、輪廓が知れて居る、知れて居る所では餘り大きくない、先づ小さいと言ふべきである、事務に堪能であつても、器が小さい、小器である、面白味といふ事は無くても善いが、兎に角面白味の無い連中である、見渡す所大概事務で手一杯の事務官達であるが、その中に幾分か毛色の變つて居るのを求むれば全く無いでも無い、曾禰子は即ちその一人である、子はまだ相場が定つて居らぬ、相場を定める程値打の無いものとも見られて居つたけれど、又頗る侮る可らざる如く感ぜらるゝこともある、才は有つても面白くないとか厭な奴とかいはれるのは少くないが、馬鹿と見られ又は大馬鹿と言はるゝは稀である、曾禰は場合によつて大馬鹿の荒助と言はるゝ事がある、併し只の大馬鹿でない事は許さねばならぬ、故高橋健三氏が官報局次長であつた時、一局凡て其の子分の如き狀態であつた、處へ曾禰が新に局長となつて來た、高橋以下その何の必要があつて局長に命ぜられた

かを解せない、曾禰畢竟何者ぞ、無用の長物である、若し彼れ此れ命介がましき事をすれば擧つて止めて仕舞ふといふ樣な勢に見えた、然るに曾禰は平然として相關せず、何も爲す所なくして過ぎる、反抗するものも手持無沙汰であつた、此平然たる處が別段の事で無い樣で尋常人の爲すを難んずる所である、彼は難局と見えるものをも左迄に思はぬ、彼に之を處分する能力の有るか無きかは判斷し難い、又大に技倆を現はしたりと見るべき程の事もない、けれども困難と見える事に平然として當る、而して相應に遣り遂げて行く、初期議會に書記官長として最初の日に議長席に坐つた時の如き、相應に役目を果した、その後佛國の公使と爲つたり、司法大臣と爲つたり、大藏大臣と爲つたり、馬政局長官と爲つたり、色々の事をした、何が長所といふ事も分らずに殆んど如何なる場合にも當るを辭せぬといふ有樣である、而してそれが相應に勤まつて行く、故西郷侯は殆んど何の役にも當るを辭せぬ方であつた、陸軍にも文部にも海軍にも農商務にも何にても當つた、内閣の都合次第何にてもなり、そして別段遣り損ひをもせぬといふ點は似て居る、遣り損ひがあり、少くとも責任を負ふべき事があれば何時でも去る、餘り頓着せぬといふが如き處は此邊に見らるゝのである、けれども西郷侯は必要に應じ如何なる場所にも當るものゝ、己れの長所短所を知つての事か決して總理大臣にならなかつた、爲ろうと思へば容易に爲り得たのであるが、飽く迄之を避けた、之が或る人には大なる智者といはるゝ所である、井上侯も首相たるを避くる方であつたが、臨時總理大臣となつて議場へ出て遣り損ひをした、故後藤伯などはその狼狽さ加減を冷笑して居つたのである、西郷侯は大抵に首相の任を果し得たと思はれるが遂に當らなかつた、曾禰子は今日首相職の相談が出れば今日直に受けるやも知れぬ、若し受けねば他に事情の有るが爲であつて、首相たるを避くるが如き念慮は少しもない、首相となる事、猶ほ大藏大臣となり、馬政局長官となるが如き心得であらう、彼は普通の大臣であるから如何の、總理大臣てあ

るから如何のと差別する程のもので無い、此邊が輪廓の明ならぬ所である、彼は尋常人の有する丈の知識や才能は有る、けれども尋常人の躊躇する場所に臨んで平然たるは妙である、ウヌボレと言はうか、シャーックと言はうか、何に致せ人間の當るべき如何なる職務にも堪へる樣な心持をして居る、確に一種の度胸を有して居る、今回伊藤公の後を承けて韓國統監となつたのも亦左樣である、或は二人の聲望の大に違ふ事を言ふ、或は曾禰には勤まるまいとさへ言ふ、けれども彼れ曾禰はその邊に平然たるのである、伊藤公の後を承けたとて何とも思はぬ、統監府の官吏で彼に不平なものが少くないにせよ彼は平然たるのである、遣り損へばそれ迄の事として居る、彼の心の眞底を叩けば如何樣なものかは知れぬが、先づ外に現はれた所では官界に珍しい程輪廓の漠然たるものである、後藤男は多々益々辨ずるといふ調子であつたが、一度び遞相となつて力の限が知られたかに見える、曾禰子は今も分らぬ、統監となつた、が之も一生を委ねて東洋の平和の爲に盡すといふ如きではない、餘り長い事とは豫定し得られない、二三回内閣が動搖して首相となるやも計られぬ、或は勢が變じて全く異なる方面に向ふやも測られぬ、けれど何にせよ茫漠たる處がある、そして今日迄現れた所では可なりの見識があり、可なりの膽力がある、左程物の分らぬ方でもない、統監としても大抵に遣り切る事が出來やう、若し困難ありとすれば、前統監でも困難があつたのである、場合により前統監よりも能く遣り切る樣な事があるも知れぬ、伊藤公の韓國人に對する、老練は即ち老練である、けれどもそれは略ぼ彼等の思つて居つた通である、が曾禰子には一分測り難き處がある、事によつては如何なる猛斷をも爲し兼ねまじき調子がある、太皇帝は伊藤公に對し、敬意を拂ひつゝ安心して居られたらしい、が曾禰子に對して敬意を拂ふ事は斯く迄で無く、或は賤めて居られるだらうが、どれ丈か底氣味惡く感じ、却つて控目になる樣の事もあらう、新統監は案外何か小さな事から面倒が生じて職を辭するの已むを得ぬに至らぬ

とも限らぬが、今の處は大抵の程度に遣り切つて行くと認めて差支ない、實に曾禰には何處となく輪廓の大きい處を見る、が、然らば彼に大政治家たるべき資格ありやと問はれるならば、然りと速斷する事は出來ぬ、彼は何にも當る、西鄕侯の避けた首相たる事さへ何とも思はぬ、彼には難局に臨みて平然たる度胸がある、少くとも爾か見ゆる處がある、餘裕があつて而も時としては果斷猛決する、けれど何處となく不安心な處がある、西鄕侯は殆んど何の職にも當り、萬屋たるの觀はあつても、何處となく頼もしい處があつた、人を知り己を知り國家の爲に己の爲すべき分を忘れざる處があつた、茫漠たる中に極めて確實なる處があつた、曾禰子は或る程度迄はそれが備つて居るが何時も賭博心が伴つて居る、馬政局長官となつたのは單に馬匹改良の爲とは思ひ惜い、彼れ自身に爾か思ひ居る樣ても、他より見れば本來賭博心が有つて、その一部分が現はれたのに過ぎぬ、統監となつても大なる失策も無いと察せられるけれど、何處迄も帝國の爲、東洋の平和の爲に謀るものと考へ樣としても考へ得られぬ、失敗すれば其れ迄といふ點では器が大きいと言へば大きいとしても、何時如何なる不都合をせぬとも言はれぬ、何かしら不安心である、不安心は彼の賭博心に對して無くする譯に行かぬ、彼は輪廓が漠然たる割に物事が分つて居るのである、不得要領で要領を得居る樣な事もある、がいつその事何とか賭博心の始末を付ける譯に行かぬか、果斷猛決は或る點に於て賭博に似て居るが、普通の賭博と性質を異にして居る、之を混同する樣では到底重大なる職務を果す事は出來ぬ、彼の如き人物は近頃珍しい方であるから、何とか旨く發達し行く樣に有りたい、賭博の外餘計な風流氣を見する事も餘り望ましく無い、先づ成るべく職務に忠實ならんと勉むるが肝腎である。（談話筆記）

△曾禰子の人物

富士見亭主人

衆議院書記官長とも爲つた、其の副議長とも爲つた、佛國公使とも爲つた、農商務大臣、司法大臣とも爲つた、大藏大臣と爲つて日露戰役中の財政の衝にも當つた、一時は外務大臣を兼攝したこともある、韓國副統監から近く統監にまで昇任して伊藤公の後を承けた、而して常に世間から兎や角いはれるに拘らず、到る處甚だしく名聲を損ぜぬやうである、素より赫々たる成功もない代りに、甚だしく不適當との定評をも受けぬのは、我が曾禰荒助子である

予は一般に不得要領の人物として認識せられる、大岡硯海氏曾て雄辯術を問はれて曰く『松田正久君の不得要領は實に巧いものである、我輩も近來頻りに其の眞似をしやうとするが、如何にも思ふ樣にならぬ、實に松田君には敬服する』と、果して然らば不得要領も亦政事家に必要な一資格であらう、然り、人に長たるには、其の管轄する人物の見分けが付かぬやうても困るけれど、餘りに賢愚能劣が見へ過ぎても困る、少し位ゐのアラは見へずに、耳も能くは聞えず目も能くは見へぬ位ゐて、何處となく大マカな處がなくては衆心を收攬されぬ、殊に政黨首領として多くの黨人を率ひ、虛々實々の駈引に油斷がなくて、昨是今非、到底一筋繩ては〆括りの付かぬ政治界に在て、大政黨を背負て立つには、最も此の資格が必要である、原敬氏は剃刀のやうに能く斬れる、何人が如何なる難題を持掛けて來ても、即坐に之を裁決して、出來る出來ぬを斷言する、其の黨當は黨人連の驚嘆し推服する所ではあるが、併し原氏丈けては政友會を持切れぬ、必らずや松田氏の不得要領も無ければならぬ、謂はゞ原、松田の兩人ありて始めて能く政友會が存立し得るのだと斷定して宜い

我が曾禰子は不得要領なとに於ては實に松田氏に讓らぬ、然れども又俊敏にして機を視ると恰かも神の如しとまで或る一部には評せられて居る、其の巴里駐剳

中には彼のアノトー氏と親交があつた、素より三國干渉の來ることを確と突止め得なんだけれど、列國の干渉の來るべきことは之を豫想して居た、尤も曾禰子に限らず、余の知る所を以てしても、彼の河村伯の如き、品川子の如きも、全勝の後必らず歐洲から干渉が來易いから、速かに見切りを付けて、早く戰局を收拾せねばならぬと言て居た、陸奥伯も確かに左樣に考へて居たと思ふ、我が曾禰子は此の點に於て獨りエライとは勿論言はれぬが、併し子は他年一日、歐洲から不意の干渉などを受けぬやうに、平時に於て豫め密接な關係を結んで置くが宜いといふ意見て、而して佛國と露國との關係の、經濟上から切ても切れぬ間柄なのを目擊したので、作用は茲にありと悟つて、日本も歐米の經濟界に入交つて、此の方面から切ても切れぬ關係を結んて置かねばならぬと信じた、露國が若し戰ひに負けるとか、內亂か外患かて其の國が成立たぬやうになれば、其の政府に幾十億フランクの公債を貸付け、又其の民間事業にも少からぬ投資をして居る佛國人民は、全く破產せねばならぬ、即ち佛國としては、全力を盡しても露國を保全せねばならぬのだ、是が露佛同盟の深い〳〵所以て、切ても切れぬ間柄にある所以なのだ

我が曾禰子は日本が恰かも淸國に勝つて、國勢の頓に膨脹すべきを豫想し、其れに伴れて金融も汎くなるから、今の中央銀行を擴張して其の資本を幾倍にするが宜い、其れには政府が一割までの保證をして、資本の半額を佛國から輸入するが宜いといふので、或は內實アノトー氏邊の手を透して下相談をも試みて置たらしい、其れて歸朝すると、第一に當時の大藏大臣てあつた松方侯(其の時は伯)を叩いて、熱心に財政の前途を說き且つ論じて、歐洲市場と經濟共通の狀態にまで進まねばならぬとて、其の中央銀行擴張說を提出したが、子に其の時聲涙併せ下るの慨があつたので、松方伯も大分感動したといふことである、但だ子の意見は當時實行を見るに至らなんだけれど、日露戰役の時からは、自然に英佛米と經濟共通の端緒が開けて、而して

其の交情も益々深く爲つた、佛國を透して露國とも協商するまでに至つた、露國と眞に永く平和を維持しやうとすれば、我が國は佛國と經濟關係を益々深くするばかりでなく、又英米とも然かくすべきである、我が曾禰子の意見は乃ち十年の後、十餘年の後に至つて漸く現實されたのだ、早く其の意見々實行して國を救ふ手腕の有無は別問題だけれど、子が機を視ると神の如しといふ一部の傳說は、必らずしも好む所に佞するものとばかり言ふとも出來ないやうだ

日露戰役中、大藏大臣としての我が曾禰子は、銀行家仲間などには餘り評判が宜い方では無かつたやうだ、勿論松田正久氏ほどでもなかつたも知れぬが、併し伯仲の間にありとする方が公平かも知れぬ、幸ひに如才の無い而して財政通たる桂さんが居る、其れに後見役たる井上松方兩侯などが一生懸命に肝煎られたので、甘く財政の遺緖が付いた、併し戰時の財政は寧ろ戰後の財政よりも巧いと迄言はれたのは、必らずしも桂さんや井上松方兩元老の力ばかりでもあるまい、曾禰子にも何處か甘い處があるに相違なからう、尤も曾禰子は、銀行家などを相手に應酬して評判を取るよりは次官局長の手仕事である、龐統は百里の才にあらず、國務大臣は國家の大政を燮理すれば宜いのだと言ふも知れぬ、誠に其の通りである、我が大藏大臣に斯樣な見識があつて、而して銀行屋仲間にもブー／＼言はせぬやうにするとは最も望ましい

偖て現在韓國統監たる曾禰子の前途は如何であらう、有體にいふと、子の貫目は到底東洋の大政事家として世界に響いた伊藤公に及ばぬ、大勳位公爵元老元勳たる點からばかり言ても、伊藤公の貫目は曾禰子と比較にもならぬ、隨つて韓國の王室や政府に對して聊か貫目の不足な氣味はあらう、是は曾禰子に取て少からぬ損失である、併し伊藤公の骨折で統監政治の型式は略々定まつた、制度の大本基礎も据られた、此の先きは唯だ之に則つて急かずに而して休まずに進みさへすれば宜い、子の貫目假令伊藤公に及ばずとも、背後には儼として日本政府がある、伊藤公も未だ目を塞が

ぬ以上、韓國の王室や政府に思慮あるものが居たろう、必らず些少だも動揺せぬであらう、唯だ政権に渇して居る雜輩共が多少の小細工を弄する位ゐのことはあらうが、其れも高の知れたものだ、到底曾禰子の心配すべき種子とはならぬであらう

　但だ併し余輩の掛念に堪へぬのは、曾禰子が果して人材を用ひ得るや否やの一事である、伊藤公は法を定むると商鞅の如く、統監政治の型式を拵へたり、制度の大本基礎を造ることが巧みて、現に明治政府以來の經驗て、文明的制法は御手に入たものと敬服の外はない、併し其の作り上げた制法を實地に應用する所の人物を選用ずる一段に爲ると、伊藤公は随分ズボラを免がれぬやうだ、統監府の下に在ても、木内氏や岡氏は如何てある、石塚氏は如何である、下僚が動もすれば暗闘する傾きさへある、且つ伊藤公は十二分に人物に一任することが出來ずに、時には自から方角違ひなものに逢つて、直接に自分の考へてズンズン裁決して了つて、爲めに當局の吏僚に口を明かさせることがある、是は井上侯なども同一筆法て、公は規則の制定や責任論を八釜しく言ふに似ず、往々此の破格なことを遣る癖がある、氣に任せて事をする謂はゞ元老の一種の癖て、他からは却つて干渉に過ぎるなどゝいはれる、其の癖又トンと遣放しにして措いて、監督し引締むべきを放棄することも多い、鶴原氏が辭任したなども恐らくは公の此の癖に堪え得なんだ故てはあるまいか、一言にして評すると、公は人物の選用に不注意である、此の不注意のために往々失敗する、統監としても確かに此の形迹は蔽はれぬ

　玆になると、故兒玉大將などは流石に違つたものだ、軍人丈けに帷議立案の參事官的能力が少いから、制度や型式に拘泥せずに、專ら人物の選用に注意したものだ、苟くも人材と見込んだものには、其の方面を一任して少しも掣肘せぬ、自分は唯だ高い所から見て居るばかり、頓と頓着する容子を見せぬ、其れてあるから、臺灣の治績は彼のやうに著しく擧げられたのてある、後藤男の如き俊材も、大將の下に在ては力一

杯、思ふ存分に腕を揮ふとが出來たのだ、即ち其の任用されたものは、方面を一任されて、聊かも干渉や掣肘をされぬから、悦んで其の智勇辯力を盡したものだ、全力を傾倒して愉快に其の職守に勵んだものだ、隨つて吏僚間に暗鬪や不平があらう筈もないのだ

伊藤公は惜い哉、此の點に於て兒玉大將に一歩を讓らざるを得ぬ、我が曾禰子は公に近いか、大將に近いか、今日までの子の徑路を見ると、格別に人材を選用した例がない、唯だ强ひて擧れば檢事から仲小路廉氏や長森藤吉郎氏を拔擢し、美濃部達吉氏を信任し、賀田金二郎氏を識た位ゐて、其の左右には隨分如何はしいものも見へる、子は必らずしも人を識る明なしとはいはぬけれど、又人の能力を鑑識するに長じても居ぬやうだ、イヤ少くも瓦礫の中から玉を拾ひ上げるとか、汎く天下の英材を招き集めるといふやうな熱心のない丈けは事實てある、孰れかといへば、伊藤公のやうにズボラらしい、是れ統監として子第一の缺點て、子に果して失敗ありとすれば、必らず此の缺點から失敗するであらう、余は今敢て斯く豫言するとを憚からぬが、願ふ所は子が茲に心付いて、鋭意人材の選用に努め、統監政治の實蹟を擧ぐべき向後の大眼目は、實に適材を適處に配するにあるとを悟つて、專ら茲に遺憾のないやうにして、余の豫言をして水泡に歸せしむべき一事てある

△曾禰新統監

尾崎行雄

曾禰子の人物については私は深く知らぬ。從てお話する程の材料も持て居らぬ。只、曾禰子の人物評を求められたるを機として、統監更迭に關する所感を一言して見やうと思ふ。

大體からいふと私は今度の統監更迭を歡迎せぬ方である。今は其時機ぢやあるまいと思つてゐる。今日の朝鮮はまだ、あの半島丈けの朝鮮と見る譯に行かない。又日本丈けの朝鮮と見る事も出來ない。朝鮮は對世界

の朝鮮である。朝鮮人に都合がよくても世界の人が満足せぬやうな政治もいかんし、世界の人が満足しても朝鮮人に都合のわるい政治もいかぬ。世界も満足すると同時に朝鮮人にも都合よい政治を布かねばならぬ。然るに世界は未だ朝鮮の細かい事を知らず、多くは感情によつて之を批判し、時あつては誤りたる報導によつて辯難する。而して此感情若くは誤りたる報導より出でたる記事が多くの反響を與へる。斯くの如き秋に當りては爲政の局に當るものは世界が認めて以て安心する丈けの政治家でなければならぬ。今日の朝鮮には實よりも聲が必要だ。伊藤公がやつてゐれば、世界が安心してゐる。何か訴へるものがあつても伊藤公はそんな事をせまいと云ので多くの場合取合はぬ。取合つても輕く見過して了ふ。伊藤公以下の人になれば世界の人が頸を傾けて事實の調査にあたるといふ事になる。伊藤公は世界の政治家の試験に已に合格してゐる人であり、曾根子は之から試めされる人である。其點が今日の朝鮮に對して餘程重大な意義を有してゐる。曾禰子は朝鮮自身に對しては或は伊藤公以上にやれるかも知れない——私は決してさうは思はんが——若しやれるとしても以上の點に於て非常の不利があると思ふ。私は今度の統監更迭に對してどうも贊成し兼ねる。

△統監更迭について

白頭翁

統監政治の失敗といふ事が天下の輿論となつて居るぢやが、此輿論の出た源は何處ぢやと思ふ。アレはみんな山縣系桂系がやらした藝當ぢや。伊藤と山縣桂との對韓政策といふものは根本的に違つてゐるんぢや。處が曾禰は初めから全く山縣桂と同意見——二人の意見の代表者であつたので、大抵の事は曾禰にやらせる積てあつた伊藤が何一つ曾禰に相談もせず、何も彼も自分一人てやつたのサ。さうなると伊藤も曾根に不平、曾禰も伊藤に不平、兎角二人の間は面白くなかつたのぢや。伊藤も例の厭きつぽい性質だのにどうも旨く行か

んもんぢやから、もうウンザリして去年あたりから早く罷めて歸りたかつたのぢや。けれども伊藤の罷めるのには山縣も桂も大不贊成ぢや。もう少し伊藤に手古摺らせて、朝鮮の事はもう乃公には出來ぬといはして冑を脱いで詫びて來るまでやらせるといふ意見であつたのぢや。さういふと山縣桂は馬鹿に意地惡るいやうぢやが、さうばかりでもないんぢや。彼等の意見にも大いに理由はある。何故といふと伊藤が餘りしくじらぬ中に罷めると、今後韓國の事にいろ〳〵口を入れる。韓國の事に對する元老になる。さうなると誰が行ても思ふやうに仕事が出來ない。それが厄介だといふので、伊藤が韓國の韓の字もいへぬ迄しくじらせるといふので、伊藤を罷めさせぬ樣にしてゐたのぢや。處が伊藤は雲の上のお許しを得て罷めて了つたので山縣も桂も勿論どうすることも出來なかつた。伊藤に賜はつた御聖旨もある事であるし、今後も伊藤はいろ〳〵韓國の事に世話を燒くんぢやろう。曾禰がどういふ風にやつて行くかはやつて見た上でなければ分らんが、どうせ大した事が出來るものか、いゝ加減な處でしくじるんぢやないかと心配だよ。其位でよからう。餘り年寄をいじめるなよアハヽヽヽ。

△曾禰荒助子

器川老漁

○曾禰荒助とは如何なる人乎、不得要領の占有者は單り松田正久氏のみでは無い、曾禰子も此の不得要領の御見舞を被つた一人で有るが、曾禰子は果してヌラリ、クラリの捉へ所の無い所謂要領を得ぬ人物乎、吾輩は決して、然りとは謂はぬ。

○彼が佛國に留學中、當時巴里で矢張り學問をし居つた一代の奇傑光明寺三郎と一夕酒樓に登りて快飲した、然るに揚句の果に大喧嘩を遣つて曾禰は怒氣滿々として貴樣が愚圖々々言ふなら此の二階から投げるぞと威嚇すると、光明寺も負けては居らぬ、美事投げるなら投げて見ろと謂ひも終らず、ウヌと光明寺の襟首を

摑むでホントに投けんとしたので流石の光明寺面色土の如く靑くなつて遂に降服した、夫から以來光明寺は曾禰には一目を置いて曾禰の樣な蠻勇は珍らしい、實に物騷な奴じやと私かに恐れて居たと謂ふ話が有る、不得要領と云へは間拔面の代名詞だが、蠻氣橫溢せる曾禰は決して不得要領じや無い、一寸見ると平板で何等の奇趣なき間拔面はして居るが、露骨に評すれば只男振りが惡いと云ふに過ぎぬのじや。

○初期議會の幕開きに曾禰は衆議院書記官長に任せられ、議會は未だ適法に成立せぬ開會第一日の初舞臺で彼は議長代理として議長副議長の選擧から其の他種種の事務を整理した、當時は初めての事で有るから、憲法も議院法も滿足に分からぬ、何もかも皆目不知案内の議員を統御する事は容易で無い、然るに彼は兎に角無難に整理を付けた。

○其の時一議員が議長は何を標準にして多數と認めたかと質問すると、彼は無言で自分の眼と頭を指して見せた、其の議員は成る程と合點して沈默した、是は眼で觀て頭で判斷したと謂ふ意を示したのだ、只是れ此の一事、當時の議員政治家等に曾禰といふ奴は存外分つた男だといふ印象を與へた、無言の手眞似は禪味を帶びて頗る面白い、不得要領のボンクラで出來る藝當じやない。

○議長になつて一番苦しいのは議場整理の困難よりは十時間でも十二時間でも議事の續く間はチツトも座席を離れる事の出來ぬのに在るさうな、議員は勝手に茶を呑みにも出かけれるが議長はさうはいかぬ、萬止むを得ぬ時は副議長に托する事は出來るが、曾禰が議長代理の時は未だ副議長も無い、其處で彼は午後一時から夜の九時過まで八時間ブツ通ふしに寸刻も席を離れずに辛棒した、當時彼は前日より其の事ある可きを豫知して二日も前から流動物は一切飮まずに我慢して居たさうな、無論小便に往かぬ樣に豫め用心して居たのだ。小便の用心などは頗る振て居るてないか。

○曾禰は喧嘩相手を二階から衝き落す程の蠻勇、善く謂へは果斷決行の勇氣が有る、無言で眼と頭を指す

様な禪味も有る、八時間も九時間も小便を堪へる我慢も有る、加之彼は又機を見るに敏な所が有る、彼が司法大臣をして居た時に議會に地租増徴案が出て民吏両軍論戰具最中の當日、彼は官邸でチビリ／＼獨酌を遣りつゝ、吏黨から頻々として到る報告を聽て居る、報告する者は僅かの多數で吏軍の勝利に歸すると有る』彼は頭を掉て負けだ、敗軍だと豫斷して毫も報告を信ぜぬ、果然開票の結果大多數で民軍勝ち、地租増徴案は否決せられて伊藤内閣は美事に瓦解した、彼が危急の場合に機を見るに敏なる往々斯の如き事が有る。

○神奈川縣片瀬村華族曾禰荒助と云ふのが彼の肩書じや、若し彼に名望の有無を知らんと欲せば須らく片瀬に往て問へ、片瀬の百姓漁夫の間に於る彼の名望といふ者は實に素晴らしい者だ、若し韓人の間にあれ程の名望が有れば韓國の事は談實に容易で曾禰統監は得意の端唄でも作て遊で居ても伊藤公に倍した成功は信して疑はぬ、片瀬に於ては彼は慈父の如くに親まれ、神の如くに尊敬されて居る。

○彼は洋行から歸ても、韓國から歸ても、必ず一寸した手土産を提げて貧富貴賤を問はず、軒別に訪ねて『留守中は色々厄介になつて有りがたう』と挨拶して廻はる、質朴な田舍者は夫を非常に嬉しがつて曾禰の旦那のお歸りだといふので漁夫は味噌漉笊に鯵の二三匹も入れて之を旦那に進上するとて持て來る、百姓は手打ちの蕎麥などを携へて來る、彼は又夫を心から悦んで受納するといふ風だ、彼は郷に入て郷人と無邪氣に交際する、此の時、彼は前公使でもなく、前大臣でもなく又韓國統監でもなければ華族でもない、純然たる片瀬村の一住民で有る、此處等が彼の美質の最上で名望の有るのも素因が有る。

○片瀬で名望が高いのは彼の情愛が厚いからで有るが、彼は又常に予に七人の阿爺が有ると謂つて居る、其の譯を聞くと彼が若い時に世話になつた人達で彼は是等の人々に絶へず金を贈つて居る、彼の貧乏して居るのは人の知らぬ處に奇麗な金を遣つて居るからで澆季の世の中に話を聞ても眞とに愉快である。

○曾禰の趣味と來ては頗る廣い、併し甚だ淺薄だ、園藝を遣る、端唄を作る、詩を作る、書畫骨董を愛玩する、佛國に公使をして居た時に一生懸命に手習ひしたとかで一寸字も書く、成る程書いた者は度々拜見したが、碌な書てはない、あの位の字なら田舎の郡長や村長にも書き手は幾らも居る、統監とか子爵とかの肩書が無かつたら誰も見て呉れ手も無からう、又頼み手も有るまい、只淺薄なりにも總てに通して居るのが感心とでも賞めて置かう。

○曾禰の日本語の話は極めて下手だ、あの平板にして奇趣の無い間拔面で、拙たな話を聽て居ると折角話の材料は珍奇でも頓と面白く感ぜぬ、之に反して佛蘭西語は極めて流暢に語るさうな、佛蘭西に公使をして居る時に佛國の大官と巧みに交際し、特に時の外務大臣たりしアノートとは親密て兩國の國交上に少からぬ利益を寄與したといふのは全く佛蘭西語を巧みに話したからで有らう。

○世間には萬能有て一心足らぬといふ人物が少くない、右の如く觀察すると曾禰は眞とに申分の無い好個の紳士で有る樣だが、其の實彼も亦一心足らぬ人物で有る、彼は賭博を好むといふ卑夫野人の如き惡癖が有る、彼が一たび賭博を始めると友人はサテ置き、妻子眷屬まで顧みぬ、若し彼が片瀬の村莊て賭博を遣て居る時に態々東京から訪ねて往ても何とか口實を設けて面談せぬ、實に惡い癖だ、癖と謂ふよりも寧ろ病ひと謂ふのが適切かも知れぬ。

○曾禰の賭博を好む病が彼が從來遣て來た仕事の上に幾らも現はれて居る、彼が前桂內閣の大藏大臣たりし時に案出した例の割增金附貯蓄勸業債劵なる者は彼の賭博病から產み出した妙案で、國民の射倖心を煽揚して零碎の資金を吸收せんと企てた者に外ならぬ、次て卅九年の末に發布になつた競馬會規則に馬劵賣買を公許したのも彼の提案が採用されたので、今度の桂內閣が馬劵の惡風は捨て置けぬと見て其の發賣禁止を斷行すると彼は憤々怒つて馬政局長官の職を辭してしまつた、彼の賭博病は既に骨髓に入て居る、あの齡てあ

れては死ぬまで直らぬは請合だ、曾禰は連城でも有るまいが兎に角賭博は彼の大瑕瑾たるに相違ない、可惜好漢、賭博病で台無しだ。

○曾禰の性格は大略斯ふで有らう、政治上に於る彼の系統及び從來彼の爲した事、且つ彼の未來は何うで有らうか、世人は曾禰を山縣系の人の如く思つて居るが、彼の經歷を見ると必ずしも然らずだ、彼を佛國公使に推擧したのは伊藤公で明治三十一年の春第三次伊藤内閣の司法大臣に拔擢したのも伊藤公である、次で伊藤内閣が轉覆して第二次の山縣内閣には彼は農商務大臣の椅子を與へられた、其の次には桂内閣では大藏大臣となつた、こんな鹽梅で彼の態度はどつち着かずの首鼠兩端、曖昧至極で殆んど端睨す可からざる處があるが、彼の蠻勇果斷の性格より謂へば山縣公に親しく多く世話を被つたは伊藤公だから先づ山伊雜種兒と見るが至當であらう。

○彼の遣つた仕事は大抵碌な事は無い、競馬の奬勵、勸業債劵の發行の如き感心する程の者は無いが、只一つ彼の前生涯に異彩を放つた頗る快心の事業が有る、夫は彼が司法大臣時代に斷行した老朽無能の司法官の一大陶汰である、元來司法官は法律上終身官たる保障が有るから、老朽の輩が全國に蟠居して居て始末が付かなかつた、然るに彼は斷乎として大審院判事北畠治房を始め全國に亘りて老朽無能の輩を片つ端から馘りて大廓清を遣つた蠻勇振りは實に見上けた者であつた、其の他農商務大臣となるや林野整理法、耕地整理法等を制定して大に産業政策の基礎を定めたる如き甚だ稱す可きである。

○此の蠻氣に富み、其種々の經歷を有する政治家は第二世統監として韓國に赴任した、未來は果して如何であらう、彼自からは、韓國の施政は急速には遣れぬ、十分腰を据へて徐ろに確實に進歩を圖らねばならぬ、少くとも今後五年間熱心に勉强したら大體の目鼻は着くであらう、予は決して成功を急かぬと謂て居る、善哉言乎、急いては事を仕損ずる、吾人は暫くお手並を拜見して居らう。

△曾禰荒助

早川鐵冶

曾禰の閲歴を先づ語ると、彼は御維新の頃には長州萩藩の士官であり、御維新後には兵部省の小役人であつた、あれて佛蘭西へ留學もしたので、歸朝して飜譯をして居た、次いで太政官書記官參事院議官補となり、又文書局長ともなつた、その時に部下に高橋健三が居り、彼を局長に戴くのは怪しからんとて追ひ出したのだが、追ひ出されても彼は平然たるもの、嫌ふなら出て行くと言ふ態度で去つてしまつた、それから法制局參事官等となり、衆議院の始めて出來た時に、彼はその第一期の衆議院書記官長の椅子に凭つた、その後には彼自身も山口縣より選出されて代議士となつて、打つて出た、故品川彌二郎子や西郷從道侯の部下に付き、國民協會を立て、星亨の下に立つて副議長をも勤めた、その後佛國に全權公使として赴任し、罷め歸りて暫く無任所公使として居つた、それから三十一年に始めて司法大臣の職を奉じ、次いで農商務大臣、大藏大臣に移り更に韓國副統監に轉じ、今又伊藤公の後を承けて新に韓國統監となつたのである、

彼人間は極めて淡泊で、磊落物に拘らざるものである牛込若松町に居た頃、何でも官報局長か何ぞの時と思ふが大きな體軀を運んで子供と一所になり、紙鳶なんぞ揚げて遊んで居たものだ、以て一般を推すべしで、酒も盛に飲む、家などを見ても以前に赤坂新町の楠田英世の借家に住んで居つた頃は、案内を請ふて玄關に立つと、直眞向に飯櫃やら膳椀やら、器什の散亂し居る臺所が見える、目を少し斜に運ぶと直ぐ側面の一室に巨大漢が兀坐して居る、それが即ち主人公の曾禰であるのだ、謁を求めて坐に就くと疊は古色が染み込んで眞つ黒である、敲けば輙ち埃が舞ひ狂ふといふ風であつたと聞いて居る、而かもそれが早や國務大臣當時の事なのだ、彼の無頓着さ加減は此の如くである、然り只無頓着なのである、私邸などは今でもお粗末なもの、規模の狹小なもの、之が統監の邸宅かと思はれる

程てあるが、去りとて深い思案があるてもない、斯くある一方には今又片瀬に別莊を營み、莊麗なる建築何ても坪百四五十圓を掛けたと言ふ事だ、總體て五六百坪程の屋敷な相だ、質素とも言へぬ、豪奢とも言へぬ、只物に拘らぬのてある、大藏大臣をして居た時ても、大藏省の事などは、足既にその門を出るとサラリ忘れて仕舞つて、頭に無一物だと稱して居た相だ、斯かる氣質だけに決斷力には富んて居る、だからするとなつたら勇往邁進する、がその缺點を言へば彼の特長てあり面白い處てはあるが、その無頓着な點てあろう、今度統監になつたが、伊藤公の後を辱めずに相應には成績を擧げ得樣と思ふ、只憂ふる處は日本の政治は何時も元老が世話を燒き、局に當つたものをして十分にその腕を振はしめぬのだから、又山縣とか井上とかいつた元老連が老婆心を出して蔭て操つらうとはせぬか、其樣な事をせずに十分彼に任じ切つてその思ふ存分に此度は遣らして見たいと思ふ、昨今の統監政治は大分外人の受けは宜しい、朝鮮てメソヂスト教の監督教師をして居たハリス氏に逢つたら、伊藤公の統監政治には我々も安心して居るといつて大分謳歌して居た、朝鮮の政治には常に彼の外教徒を眼中より去る譯には行かぬ、彼等朝鮮人には元と〳〵大なる愛國心などのあるてはないが、只事大主義て勢力の强さうなものに阿附し、之によつて往々私心を遂げ樣とする、最初布教事業て功を奏したのは佛國てあつて、その加特力教が勢力を占めたのてあるが、今は大勢は推移して米國の傳道事業が優勝の位置を占めて居る、それはメソヂスト教てあつて韓國民の信徒は百萬の衆を數へる程てある、之も米國の富强にして何となく賴むに足るといふ樣な考から萠して來た事と思ふ、宗教の勢力なるものを日本内地と同樣に心得たら大間違だ、名は一宗教の一監督牧師といつても、その背後には彼の如き多數の勢力があるのてあるから、彼等との感情の融和は決して等閑に付すべからざる事てある、朝鮮の我保護國と定まつた當時、萬國平和會議に密使を派したなどいふ如き事も、矢張り時の監督牧師ハルバルトの胸

中に穏かならぬ所あり、遂に韓人との間に劃策された る密計てあつたのてある、韓人は由來小智に長けて居る、表面服するが如くに見せても、内に邪心を包藏して色々な仕事をやる、曾禰の此邊の事情に十分顧慮して萬遺算なき樣に、然る後に勇猛果敢ならんことを欲する。(筆記校閲濟)

△曾禰荒助論

茜陵隱士

馬場南峯といふ人が曾て曾根の寫眞を見て其人相を判じた事がある。此人は非常に福運の強い人だ。乞食をしてゐても大名に拾ひ上げらるゝし、竊盜をしても間男をしても罪をなさぬ。それで人にそれ程信ぜらるゝでもない、又重きを置かるゝでもない、又自分から重きをなすでもなく、強きをなすでもない。さうして自然に人に用ひらるべき地位が向ふから開けて來る。けれども此人には病がある、非常にボンヤリして無頓着のやうだが、然し非常に神經質であり、非常に修飾がないやうだが、邊幅を氣にする底意がある。これが此人の爲めに非常によい處とわるい處とに變化する――こゝまて南峯がいつて來た時に、此寫眞の主が當時の衆議院書記官長曾禰荒助たることを聞いて其後の批評をいはなかつた。

故の品川子が自分の親族のものを曾禰の處に嫁入らせ、自分の幕中にした。さういふと品川子は餘程曾禰に重きを置いてゐたやうだがさうてはなかつた。曾禰の馬鹿たる所以はよく知つてゐた。此事を知てゐるものは同じ穴の狐てあつた小松原と寺內てあるといふ話てある。

統監府の或重要な地位に居る人の話に、伊藤公のに行て見ると、自分の功を誇てなか〳〵馬鹿げた事をいふ。夫れ丈け尻から煽ると上がつて行て、之に乘じて自分達もよく行く事がある。曾禰子の處に行くとボンヤリして要領を得ずに歸ることがよくある、伊藤公は長い間貴族の生活を續けて來たので刀一本買ふにも

値段をいはね、いくら懇意な人でも客間で金の話をするのを聞いた事がない。曾禰子の所で長話をすると何時でも三圓とか五圓とが尾漏千萬の語が出る。

一體日本が朝鮮を經營するについて、第一流の人間を統監に置くのは何の必要があるか。英領にしろ佛領にしろ獨領にしろ、二千萬圓位の歳入しかない處を治めしめるには少佐か精々で大佐位が關の山である。伊藤は元勳を以て統監となり、其下に澤山の官吏を置き、朝鮮をして恰かも役人製造所たらしめた觀がある。曾禰が行つても情實といふ名の下に暫らく今日と餘り變つたこともやるまい。情實以上を談ずることは當分ヤメにして、其情實の下に反抗力のない統治國の上に、軍事上から是非共形を附けなくてはならぬ狀態になつてゐるではないか。農業商業の不振といひ、土匪の濫發といひ、宮中の陰謀といひ、現下の形勢は一つも喜ぶべきものがない。曾禰がどれ程遣り損つても大勢の上に別段の響きを生ずる譯もあるまいし、又摺鉢の底に小魚の動く位で東洋の平和が攪亂される譯でもあるまい。で南峯の見た通り曾禰は功を樹て名を成すといふ結果を見るであらう。曾禰の爲めには誠にお目出度い事である。けれど朝鮮の爲めに百年の基礎を正して前統監伊藤の失政を恢復し、そして日本の北防計畫を明かにするといふ事を曾禰に望むのは大間違である。曾禰といふ人間はよく賭博を好み、女を好み、永年役人としての頭腦の下に藩閥的習慣の範圍の仕事をして行く丈けの人間であるから、若し彼が强硬武斷の政策を行ふやうな事があれば、彼の發意に出てたるにあらずして尻押共の仕事と見て差支ない。

最後に一寸附け加へておきたい事がある。東坡の詩に「空花誰開落、明月自朏朒」といふ句があるが朏朒とは目尻を指先で押せば、物が二つに見えることをいつたもので、南峯も曾禰の人相を評したあとで、此朏朒の意義と同一の「眼を押して二つに見ゆる秋の月」といふ事をいつた。私も亦此論の後に此句を附して、物は見やうに依て違ふといふことを明かにして置かう。

△曾禰荒助論

柯公

○日韓協約訂結當時僕急ぎ京城に入り某旅館に投ず、侍婢交々至りて皆盛んに長州辯を弄す、僕乃ち館主の長人なるやを問ふ、婢言ふ「朝鮮は長州のもの、上統監、軍令司官皆長人たり、長人豈に威張らざるを得んや」と。

○後副統監の置かるゝ長人曾禰荒助出てゝ任に就く、僕當時私に婢の誇張の昔日に數倍すべきを想ひて微笑を禁じ得ざりき。

○而して軍令司官長谷川去り、公伊藤亦遂に退く、朝鮮將に長州のものたらざらんとして副統監子曾禰新に統監服を着けて獨舞臺に立つ、此時に當りて彼を月旦する、亦聽くべきに非ずや。

（一）頑健兒

○畫伯不折の「建國刱業」及近作「すゑものし」を見る、筋骨隆々、裸體畫の神に入るもの、今の在朝名流中曾禰荒助を取て彼が裸體を不折の技に上ぼす、想ふに得難き好モデルを得ん。

○侯井上が老體を以てして嚴冬尚ほ外套を着けざるは人皆知る、子曾禰生來未だ傘を用ゐず、彼や暑を恐れず雨を厭はず。

○横濱太田の兵學校は明治三年兵部省の所設に係る、聘傭の師佛國大尉ビーランあり、集り來り學ぶもの皆是各藩の俊髦、曾禰荒助は生徒群中體格優秀の健兒たり。

○兵部省が第一期留學生として佛國に送りたるもの小阪千尋、大久保春野、楢崎賴作、柏村庸、小國盤、船越熊吉、床次正三郎等あり、當時皆俊才と稱せらる。

○明治五年第二期學生を送る、員に加はるもの湯川温作、弘虎一、池田少介、曾禰荒助外數人たり、而して十數者の俊才が四十年の星霜に遇ひて無名に終り老耄し去れるに反し、獨り曾禰荒助が今より鋭意勵精韓國の事に任ぜんとする、是豈に資質頑健の賜なりとせ

ずや。

○彼佛國に留まる約七年、其留學科目として命ぜられたるもの陸軍會計學なるも、彼の學べるは却て彼に在りて之に在らず、歸朝後陸軍省會計局六等出仕たる暫時にして參事院議官補に轉ず。

○當時參事院の先輩及同僚なるもの井上毅、平田東助、小池靖一、清浦奎吾、山脇玄、荒川邦藏、木下周一、牧野伸顯、牧朴眞、蒲生仙等あり。

○井上は死し、平田枯れ牧野甚だ振はず、木下臺灣に斃れ、牧漁夫界に隱れ、山脇の如き夫人の名寧ろ聞えて世多く博士玄の名を記せず、小池靖一の如き曩に政友會總務として半民半官の態あり、近時亦聞かず。

○參事院全盛時代より今に至る二十六七年、當時の英才逸足皆老ゐ、而して曾禰、清浦の二人者、世既に中元老の稱を作す、一は是れ長州の石像、他は則ち東肥の鐵骨、功名豈に壽と健とに因るなしと言はんや。

(二) 風流韻事

○若し片瀨なる子曾禰の別墅に遊ぶ、西湖子の半面を窺ふに足る、門前先づ感を惹くもの古香秋月種樹の舊庵あり、丈餘の石碑は是れ一代風流の跡を留めたる古香の一絕にして、碑文は西湖の撰、書に係る。

○固有の日本家屋は白木造りの二階建たり、瀟洒の裏亦輪奐の美を見る、由井ヶ濱一帶の白沙青松は東南に聯り、相南を隔てゝ遙に富岳に對し、一長橋を堺して江島を望むべし。

○屋内の各室多くは狹迫せず、客室三間の大床每に支那物の長幅を見る、若し夫れ主人西湖と一夕の對酌を共にする、調理皆純萩流の風味、加ふるに湘南の鮮と佛國の古葡萄酒あり、佳話雅談の主客の間に湧く偶爾ならずとす。

○西湖子は瀟洒なると陶庵に似、物事の大を好むと隈伯の亞流たり。

○含雪公は和歌と書とに得、春畝老は詩と書とに誇る、而して詩に歌に書に俗謠に縱橫なるは我曾禰西湖なり。

○彼詩に於て多く短篇を好む、されど詩歌共に見る

に足るべきなし、只彼近來閑を得るや、中古韓人の書風を習ひ揮毫稍見るべきあり。

○長州人にして俗歌俚謠に得意なりしもの故品川彌次郎あり、トコトンヤレ節の作に名を得、維新前伊藤俊介井上聞多の洋行を餞して「君が刀の下緒にすがり、忘れしやんすな此の姿」、辭句情致雙なから佳。

○韓國水產誌は農商工部水產局の編纂に係り去月刊行せらる、子爵彌得意の俗謠を同書に題して言ふ「出汐まち〲船とどめ、蓬をかむりて波枕、龍宮界の夢ならで、遊ぶ心地のせられけり、水鳥の船端近く鳴く聲は、櫓楫とれとの知らせなるらめ」、實業上の書冊に戲作の謠を題す、得意の境を脫して狂態に變じたるもの。

○西湖子の菊を造る參事院議官補時代よりの嗜好たり、當時議官に水本成美あり議官補曾禰の盆梅と菊花を愛するを聞き曾禰に謂て曰く「足下の氣性到底養菊に堪へず」と、西湖子憤慨す、彼が養菊を半生の樂事と爲すに至りたる動機爰に在り。

○彼、內閣記錄局長時代同好の僚友と秋香吟社なるものを作りて頻りに菊花の培養に腐心す、其菊見の會を自邸に開く、一升德利を坐邊に据ゑ衆と共に秋香に醉ふ、彼が邊服を飾らず、能く士に下り衆を容るゝ則ち彼の美德たり。

(三) 兩個の美性

○子淸浦は事に當りて必ず技工を加ふ、子曾禰の事に應ずる自然の儘にて極めて無造作なり、子淸浦は神經質を包むに鷹揚の風を以てし、子曾禰は茫々洋々の性を飽迄も表露す。

○子曾禰の特長は規模の大に在り、度量の宏に在り、徵兵令改正の議に彼が元老院に大氣焔を吐き、竟に血税の件を解決して壯丁皆兵主義の實施を見たる子曾禰の力與つて功あり。

○日露の役彼大藏大臣として大事に任ぜんとして御前會議に陛下の御決意を拜し決然として立ちたる、初期議會の劈頭に假議長として之に臨み三百議員を土偶視して頭を冷せと放語したる技工者流の畢に能くすべ

きに非ず。

○彼の內閣記錄局長たる法規分類大全編纂の大業を企始す、此書元と維新以來百般大小の法規を分類蒐聚せんとするもの、其大と要と蓋し明治年間官廳編纂物中の宗たり、惜哉小才野卑義人奧田なるもの後同局に現はれて大業頓挫す。

○曩日莞島森林問題の起る、副統監曾禰見て以て問題視せず、言ふ「三萬五萬の眞價に過ざるもの韓國の企業上殆んど問ふを値せず、若し出願者ある、猶豫なく之を許可すべし」と、彼や斷じて世評を恐るゝ程の小心者には非ず。

○彼は每に門戶開放なり、苟も閑ある、知ると知らざるとなく引見談笑す、而して人に接する上下の別を設けず、子曾禰が政治上社交上比較的敵を有せざる所以たり。

○子寺內の人に接する一點の愛嬌なし、况んや面識なきものを引て直に文事を談ずる子曾禰の雅懷の如き豈に之を子寺內に求むべきに非ず。

○侯桂の人に接する滿面の愛嬌あり、自在の談笑あり、而も客の堅實なるもの鑑識あるもの未だ遽に推服を致し得ず、子曾禰には自然の愛嬌あり、辭令態度皆眞率なり、其淡泊洒落の幾分は思ふに佛蘭西留學の賜乎。

○蓋し規模の大と門戶開放とは公人として又私人として子曾禰の二個の美點たり。

（四）好個のモナコ王

○總面積六方哩、公民八百名、常備軍七十五人警官五人、以て一國を成し國王之に君臨す、斯の如きは是れ正に夢想兵衞小人國の好圖解たり。

○而も歐洲の一獨立國モナコ王國は是なり、モンテカーロなる官設賭博場は國內唯一の名物にして、白哲人種の爭ふて蟻集する所。

○副統監曾禰の今春北韓巡遊を爲すや、小汽船光濟號內に花札と美人とを携へ熾に弄花に耽る、光濟號は韓國燈臺巡視船なり、曾禰の弄花折花を船內に擅にせりと傳られて、以後亦燈臺守の巡視船を恐るゝものな

きに至れりと。

○一切の賭博は荒助の最も愛好する所、彼が忘るべからざる競馬の創設者たるも亦之に基く。

○彼佛國公使時代馬匹改良に關し多少の調査を致し、歸來馬匹改良の策として一般農民に馬匹飼育の風を興すの要を説く、偶々三十七年日露の役中山縣松方の二老、至尊の御下問に奉答して馬政の任に當るもの子爵の右に出づる者なしとして彼を奏薦す。

○乘馬を好み賭事を愛する曾禰荒助の如きは蓋し馬政局長官として二老の奏薦を辱めざるもの。

○吾輩は所謂新聞の三面記者なるものより子爵に對する婦人關係の傳聞を殆んど聞きたるとなし、言ふ彼の婦人を侍せしむるは折花のためならずして弄花を共にせんが爲めなりと、眞乎。

○片瀨の別業には愛妾あり、一女一男を擧く、子爵夫人てる子の婦德高くして些の嫉思を其間に挿まざるに因ると云ふも抑も亦彼が斯點に於て潔清の人たらざるを證するに足らずや。

○京城に於る婦人關係は多くのものの皆前統監公伊藤の光に依りて蔽はるゝ、猶ほ星光の月夜に見得ざるが如し。

○されど前軍司令官大將長谷川の謹厚を以てして尚且妓五郎を司令官邸に入れたるの事實、當時彼の友大將乃木をして顰蹙せしめたり、曾ては木挽町の待合長谷川を梁山泊とし、今の愛妾を此の境より抜きたりし子爵豈に必しも春畝老人の下風に萎縮せんや。

○京城に旗亭花月あり、妓文子男嫌ひを以て聞ゆ、而して俚謠子の粋腕は容易に之を手折りしと傳ふ、恐くは眞なるべし。

○されど子爵の眞嗜好は、弄花に在りて折花に非ず、近時モナコ國民賭博場への自由出入を自國民の上に許可すべしとして國王アルバートに迫り、天下泰平の小人國に革命の機運を見る、子爵の如き或は鷄林入道に統監として臨まんより、去て南歐の賭博國に君臨せんとの寧ろ先天の資に合せずや、否乎。

（五） 武斷乎無爲乎

○「藤系か山系か」、是れ子曾禰が統監就任前に於る疑問たり、「武斷か無爲か」是れ子曾禰が統監就任後に於る大疑問たり。

○日本銀行調査役林養三は公伊藤の郷里周防熊毛の豪農、公と離るべからざる生家の姻戚たり、而して林は苦學生より子曾禰のために救はれて曾禰の長女を娶り、又嘗て藏相曾禰の秘書官たり、かくて子曾禰は公伊藤と姻戚の關係を有す。

○子曾禰は横濱太田の兵學校入學當時より公山縣の提撕する所、荒助の放膽にして武人肌なる公は彼を自家系統の裡に收めんとしたり、公伊藤に至りては子を遇する竟に巳代治、堅太郎の下に在り。

○若し子曾禰本來の性質に見る、彼は寧ろ公伊藤の豊公然たるに私淑するありて、公山縣が家康の跡に似するに添はず、されど子曾禰には本領あり必しも二人者のものたらず。

○二人者のものたらずと云ふも畢に二人者の力に依りて今日の大を致し將來の大を致し得るものは子曾禰なり、侯桂や否、彼は能く二人者を離れて立ち、寧ろ二人者を離れて將來の大を致す。

○子曾禰が含雪、春畝二公を離れて濶歩し能はざるは猶ほ子寺内が含雪將軍を失ひて今の價値を半減するが如し、世陸軍の長人正毅を比するに海軍の薩人權兵衞を以てす、思はざるの甚しきもの。

○莞島問題以來岡次官は子曾禰の股肱なりと稱せらる、然り統監府内新曾禰系たるもの唯一岡を見るのみ、在任以來悠々詩遊して亦政務を見ざりし副統監曾禰には未だ是非すべきの事蹟無し。

○在韓邦人、實は久しく公伊藤の韓人本位主義に厭く、而して曾禰が來歷と態度は在韓邦人をして彼が武斷主義を測斷せしめたり、這個測斷の當否は正に是れ鷄林入道安危の分岐點。

○大將長谷川は一進會を敵視し壓迫したるもの、韓人本位の春畝老が稍々一進會を輕視し來りたる軍司令部一派の献案寄策に因る、而も曾禰や、曩日韓人本位に慊焉たるありと雖、彼尠くも一進會を善用するの途

を解す、武斷主義を標榜するが如きは斷じてあらず。

○寄語す新統監曾禰、卿の弱點は愛錢の一事に在り、卿にして統監として初めて京城に入るの日若し斯の弱點を深く銘記する、思ふに卿の他の美點は保護國の治者として聲名を中外に放ち得ん、在韓の長人數千を以て算ふ、冀くは彼等をして永く長人の朝鮮たるを誇り得せしめよ。

△曾禰子と朝鮮の政治

田川大吉郎

私は今より廿二年前初めて曾禰君の顏を見、爾來屢々其令聞を耳にし、且つ其行動進退の跡についても注意して居つたけれども、ゆつくり話をするの機會は未だ一度も得ずに居る。廿二三年前に私は初めて東京に出て同郷の先輩岩崎小二郎氏の門に食客となつてゐた。其時岩崎氏は法制局の第一部長で、曾禰君は第二部長で、平田東助君が第三部長であつたと記臆する。て當時岩崎氏からして曾禰君及び平田君の評判を度々聞いた。岩崎氏は曾禰君を大變尊重してゐた。仕事の出來る、小腕の利いた人ではないけれども、沈着にして度胸あり、大事を斷ずるに足る人だといつてゐた。翌年の冬、私は房州北條に遊びに行つてゐたが、其時遞信省の燈臺船明治丸といふのに乘つて岩崎氏も曾禰君も同地に遊びに來た。豫て令名を聞いてゐた曾禰君の風采を此時初めて見、又話もして見て、岩崎氏の話の如く何となくエラサウな人だと感じた。帝國議會の開けた時、彼は下院の書記官長として議場整理の第一日目の技量の卓越であつた事はよく世間のいふ事であるが、當時の官界の大評判となつた事と見えて岩崎氏は幾度となく其事を語つて居つた。其以來の事は要するに世間に多く傳へられた噂であつて、自分が聞いて居る中にも別段話す程の新らしき事もない。

て世間の噂と自分の聞いた所を綜合して考へると、彼は要するにボンヤリした、圭角のあらはれてない中に斷乎たる勇氣を持つてゐる人であらう。其政務を處

理する方針は大綱を摘んで小事に齷齪たらぬ風であり、其人と爲りは趣味が多方面に亘つて如何なる煩雜の中にも餘裕を存するといふ方であらう。例へば彼は菊を養ふに長じて居ることは洽ねく世間の知る處であるが、自分が初めて曾禰に使に行く頃から熱心に栽培してゐた。朝鮮の統監として適任であるかどうかは今後の働振りを見るより外はないけれども、自分は矢張り其れに適した一人であらうと思ふ。但しそれは前の統監及び今日の朝鮮の政局に對していふのであつて、必ずしも理想上の統監とは思はない。私の考へる所によれば朝鮮に對しては日本の官民朝野が餘りに熱し過ぎてゐる。從て朝鮮の隅から隅まで洽く日本風を吹き込まうと希望して居る。元來日本人の氣象は性急にして潔白である。細節に拘はり過ぎる。桂内閣も亦朝鮮に對して蓋しさういふ感情を抱いてゐるであらう。然し曾禰君は前に述べたやうに細節に拘らぬ人であるから日本人の望に添うて隅々まで日本風を浸込ますやうな細かい事は爲すまい。此點私が曾禰君に最も喜ぶ處であつて、現在の朝鮮には此大綱を統べるといふ事が最も適したやり方と思ふ。然しながら自分の聞く所によれば、曾禰君の友人中にも曾禰君を餘り重く見ない人がある。今度曾禰が統監になつたのは、曾禰は結局失敗するだらうから、其失敗の結果朝鮮の事が大いに都合がわるくなつた時に、武力を以て威壓の政策を行ふ、曾禰は其政策の前驅となつたのだといつて居る相である。即ち曾禰君をして失敗せしめて、日本が前年以來屢々朝鮮に向て加へんとしたる威壓の政略をいよ〳〵加へる機會を作る、其器械として曾禰君を統監としたのだと奇怪の說をなすものがある。私は此噂が齊東野人の言ならんことを希望する。そして如何にまかり間違つても朝鮮に武力を加ふるの機會が再び來らざることを祈るのである。

曾禰君の統監たることについて特に注意を拂はなければならぬ、若くは一片の苦言を呈しなくてはならぬ事は、曾禰君の賭博の癖―さういふ流行に對して曾禰君の道義上の觀念が嚴格でない。花合、賭博、競馬等をや

る癖がある。其氣質について最も注意して貰はねばならぬ。日本人は一體屬領地保護國を如何にすべきかの智識を持たぬ。屬領地保護國に對する宗主國民の資格は第一道義に於て優り、第二資本に於て優り、第三智慧に於て優らねばならぬ。此事は各國の殖民史家が萬口一致して居る事實である。て朝鮮に對しても無論其考てなくてはならぬのだが、今迄の朝鮮に對する日本國民の態度はこういふ點に於て非常に缺けて居る。智識に富まず、資本も饒かならず、又品性も缺けて居る。かゝる國民が單に武力に秀てたといふ一點を以て、一千萬に餘る二千年の歷史ある國民を支配するといふ事は至難の事である。曾禰君は從來の成行を變化せしむるといふ大いなる決心を以てやらねばならぬことは勿論であるが、特に道義上の觀念については曾禰君自ら最も深く顧みてやらねばならぬと思ふ。私は曾禰君の將來を氣遣ふといへば專ら此一點についてゝある。而して此點に關する日本國民の思想が餘りに無頓着又は幼稚なるを悲むのである。

又私は此機會を利用して、朝鮮に對する政治のやり方を一言して見たいと思ふ。前にも一寸いつたが私は日本のやり口は餘りに細か過ぎると思ふ。例へば日本風の市街を建設するにしても朝鮮八道の適當の一箇所を選んで其處に、規模の雄大なる、建築の堅牢なる、模範的市街を作る。一度之を仰ぎ視たる八道の民をして流石文明なる宗主國の市街であると目覺しい感じを起させるやうにしたいのである、資力餘りあれば斯の如き市街を朝鮮に數多く造ることも出來やうが、今日の如き資力にては望むべからざる事故、中心的一箇處を選び、全力を盡してやつて貰ひたい。當局者はさういふ事には一向に考がつかず、八道到る處に小規模のものを作り、在來の朝鮮の建築に比して何等の勝りたる處なく、朝鮮の民をして、日本の文明の程度を怪ましむるやうな事になつてゐる。此事例を以て日本の朝鮮に對する經營を考へれば私は膠州灣に對する獨逸の經營に遙かに劣ると思ふ。膠州灣の廣さは朝鮮に比すれば實に彈丸黒子に過ぎない。而かも約十年の間に

獨逸の造りたる市街、建設したる港灣鐵道の規模經綸は實に凄まじいものである。私は獨逸が支那に對して商業上の勝利者たるを信ずるのみならず、又實に政治上の勝利者なりと思ふのである。苟も施すに宜しきを以てすれば一膠州灣を以て支那人の感嘆を博するに足るのである。然るに日本の朝鮮に於ける經營はバラバラにして些とも纏まりがない。これを甚だ殘念に思ふ、曾禰君は小事に疎くして大綱を取るに適した人なる故に私は此言を勸めて其實行を求むる。諸般の經營を集中的に統一的にやれ、一端を擧げて全體を動かす方針を取て欲しい。曾禰君は世人のいふ通り、性急な人でないに相違ない。止むを得ない機會には猛然として斷ずるかも知れないが、平常はボンヤリして餘裕ある態度を取るであらう。朝鮮に對する策は要するに忍の一字にある。何でも焦らずにやることが第一であるが、此點は曾禰君に對してはいふの要があるまい。事の序だからいつて置くが、伊藤公が統監となつて赴任する際に、自分は偶然の機會を得て勸めた一言がある。それを述れば私の朝鮮に對する考も一層明かになるであらうと思ふ。私は公に向て「朝鮮にお出になつたらお晝寐をなさい」といつた。其心は伊藤さんは聰明絶倫の人である、又不世出の功業をなしたる人である。而して齢も已に老いた人である、從て物事に早く氣が附いて氣が高ぶり易い。聰明絶倫で物事に氣が附いて氣が高ぶつて居る人が、あの文化の低い、氣ののろい國民に臨んだなら、國民が眼が廻す程追ひ使はぬと追着くまい。て公が氣に障ることがあつても辛棒して欲しい。辛棒するには晝寐に限る。朝早く起きて眼を丸くして居られては朝鮮人は堪へらるゝものでない。といふ意味であつたのである。處が其後の經過に徵すれば、世間は伊藤公が懷柔政策で失敗した、武斷政策を取らぬ故失敗したといふて居るが、此點私は世間と全く見解を異にして居る。伊藤公の武斷政策を取らなかつた事には私は同意し且つ感謝する。只公の最も誤つたのは法令雨下といふ事であつた。私は公の失敗の原因は恐らくは玆にあるまいかと疑つて居る、曾

爾君たるもの懷柔の政策を維持すること宜しく前統監の如くなるべし。然しながら法令雨下の政策に至では決して前統監を學んではならないのである。

最後に私は一進會の事について一言したい。私は一進會を毛嫌ひするのではない。然し一國の存亡危急の秋に當て歷史的の邦土の爲めに命を捨てることが出來ず、其邦土と多少利害關係の異れる邦土國民を率先して迎へたといふ形跡に對して、よし頑迷の嫌はあつても邦土に向て飽くまでも忠實なる連中から其愛國の感情を疑はれるのも無理もない事である。時の便利からして日本は一進會を利用したかも知れぬが、眞に朝鮮を治めんと欲するものは、平和の今日に於ては幾許か斟酌する處がなくてはならぬ。然るに若し伊藤公の時には志を得ず曾禰子の時には志を得る局面を展けば朝鮮人民をして黨同伐異して內紛を起さしむるにはよいだらうが、然し治ねく朝鮮人民の心を攬る政策ではない。一進會員であつても中には力量あるものがあらう。夫等は勿論用ふべきである。然し何處までも其力量あるが爲めに用ふべきであつて、嘗て日露戰爭の時に日本の爲めをした一進會員といふ爲めに用ひてはならぬ。又人物を採用するにも一進會員と合はぬからといふやうな理由で其人を嫌ふやうな事をしたくない。爲政者の眼中には一進會もなく對韓協會もなく、一視同仁で、誰が最も見識に於て勝り、誰が最も朝鮮を愛するかの見地からして人物の取捨を極めて貰ひたい。私は朝鮮の將來について氣遣ふ一端は略々此中に盡した。從て新統監の施設に望む處も略ぼ此中に盡した。此心配が除かれ、此望が充たさるるか否かは、日本の盛衰にかけて、心永く又熱心に見んと欲する處である。（完）

短册の世界巡り

澁川玄耳

僕に愛藏の一幅がある。子規氏の筆で「雨はれて春

の日光る野山かな」「僧客し本堂わきの茄子畠」「洞穴や圓座人なく鹿白し」「凩や枯木の中の星一つ」といふ短册が四枚表裝されてある。

三十年の春、長崎に居た頃、右の短册は偶然送つて越されて「御一覽の上は御引破り被下度」とあつたのを、直様一幅に仕立てゝ褻にも晴にも我家の床の間を飾るべき唯一のものと爲つたのである。

其後熊本に住んで居た。當時子規氏の地方俳人間に於ける勢望は非常なもので殆と人間以上であつた。僕は二十九年より二年間ばかり絶えず郵便に依つて句の添削は乞うて居たが、お眼に掛たのは一度しか無い、其爲人や何かは本人若くは門下生の書かれたものに依つて想望するばかり半は自分の胸中に形成つた偉大の偶像に自ら崇拜して居たものだ。其頃東京の或靑年雜誌に「爲りたい人」とかいふので投票を募つたのに古今の英雄豪傑より子規氏に高點が落ちたのでも、渴仰者は獨り地方のみで無かつたことが知れる。隨つて氏の斷簡寸墨も珍重せられて、僕が有して居た手紙封筒年賀狀の類まで悉く同好の間に分取せられて了つた、僕は唯殘る此の一幅を連城の璧と愛護した。それすら四枚は贅澤だ半分で好いとか、一枚づゝ四人に配る方が愛藏の途に叶つて居るとか、種々なる口實の分割論は僕が家の句會毎に提出されたものだ。

日向の宮崎に俳淫がある、杉田作郎と云つて俳人仲間には隨分廣く知られて居る人である、僕とは書狀の贈答に止つて面交は無いのだが、何となく竹馬の友の樣な感が有る。蛇の道で何時か僕の一幅を嗅ぎつけて、所望を始めた、段々執念くやつて來る、色々の辭柄を設けて强請つて寄越すけれども、いや此ばかりはと堅く辭つて居た。

明治三十六年の暮より例の滿洲問題が喧ましくなつて來た。やれさて戰爭に行きたい計りに、是迄窮屈な陸軍に奉公して小うるさい擧手注目の禮もして來たのだ、何でも早く談判破裂だ開戰だと祈つた甲斐が有つて、誰もまだ忘れまい、旅順口の水雷攻擊から急轉直下の勢で倏忽に戰雲東亞の野を蔽ふといふ段に爲つ

た。さァ五師團が出た、もウ十二師團が動員したと氣が氣で無い「早く〳〵、早く行かなけァ無くなつちまふ」と駄々子のお祭騷同様、せがみ立てあせり立てて二月許をがれ昏して、五月の末いよ〳〵動員の命に接した、第六師團萬歳。

さて我師團運命は定まつたが、我同僚中誰が野戰師團附たるかの問題が仍ほ殘つて居る、而かも是れ最も重要なる問題だ、勿論出師準備で豫定されて有つたのだが、肝心の部長が突然第四軍兵站監部の要員に取られたから、部員中で誰が補缺と爲かゞ定められなければならぬ。十年一劒々磨すの意氣で居たものを此の期に及んで萬々一留守を言ひつかつて見よ、辭職だ、辭職の上人夫と爲つても是非從軍して見せると本氣に力んで居たが、幸ひ出征の命は僕に下つて半生の志望は遂げられる事となつた。去りとて戰爭に就いて格別重要なる任務もない功名手柄を現す地位でも何でも無い、唯譯なしに左様思つたので子供の時から蓄へられた一種の戰爭趣味が滿足を得るに過ぎない、或は平生の病軀をして好死處を得させようといふのが從軍の熱の一原因だつたらう。

兼て覺悟はあるもの丶、いよ〳〵と爲れば更に家事上の顧慮もある、身支度も不十分な點が有る、師團の事務も忙しい、遲くも廿日後には戰場の人とならねばならぬ、公私多端の中に俳句會も催される。

例の一幅だ。怎麽せう、戰地に持つて行かうか、いや鉛筆でさへ小さいのを選んで行く際に此の長物を攜へるわけには行かぬ。不圖思ひ付いた、其れに決定した。どうするよりも例の俳淫にやるに限る、多分乃公は死ぬのだ、家に殘して置ても何にもならぬ、其より愛好する人に渡するのが至當だと、直に作郎氏に宛てたる手紙に「兼て御懇望の子規子筆一幅、解除條件付を以て貴兄に贈與致候、萬一生還の日あらば早速御返却可被降者也」といふ意を認めて、一軸と共に小包郵便に付した。決死の裏にも倘生還の望を繫ける。

大連附近から昌圖迄足掛三年の間大小數十戰隨分恐い目辛い目にも遭つた、其の艱難の多かつたほど今よ

り思へば仕合せな従軍であつた、「我々は生きて還つて炬燵かな」と、異郷に屍を埋めた人々には氣の毒ながら、再び熊本の地を踏んだ。凱旋々々歡迎々々方々に引張廻される、唯くつついて行つてくつついて歸つた迄の自分まで一角の勇士の樣な取扱を受ける、自分も亦幾何か其ンな氣になつて數日を夢中に過した。

日向から小包が着いた、凱旋を祝すの文句は簡短だが、別封は例の一幅が、確かに、條件が到來して贈與は解除されて、再び我手に戻つて來たのである。約束ては有るが、僕は氣の毒に為つた、去りとて此を再び贈るのも氣が利かない、是非共之に代るべきものを獲て作郎氏の愛慕を滿たさずには濟まされないと覺悟した。

間もなく東京に轉任の途次、大阪に寄つて月斗氏の宅を訪うた、二階の一室の襖も屏風も短冊や色紙に貼り塞かつて居る中に燦として眼を射るのは子規子の筆而かも幾枚もある。直に作郎氏に對する件を想ひ起して割愛を求める「一枚で好いから是非貰ひたい、子規子のが一枚あれば是から東京に行つて鳴雪虚子碧梧桐三氏のを各一枚づつ戴いて四季を揃へて作郎氏にやりたい」と、熱心に前からの行掛りを話した處、月斗氏は案外氣易く快諾して、「今でも好い、剝がして行きたまへ」と言つて呉れたのは嬉しかつたが、何だか直に剝がしともない樣な氣がして其時は約束だけにして別れて了つた。其後屢下阪して月斗氏を訪ふ毎に、剝がして行け〳〵と言つて呉れるのが何時も奇態に剝がす氣になれなかつた。其間に鳴雪翁等三君に右の因緣を話て揮毫は賴んで置きながら、遂に空しく二年を過ごした。

處が突然此度の外遊談が起つた、其れを聞いてか聞かいでか、月斗氏より到來の一封、封筒に短冊入り開封注意とある、披いて見れば正しく子規子の筆、恰も予が愛すると同時代の墨績で、

料理屋を兼ねたる春のやとやかな　　升

の一句、之に添へたる文に曰く

三井寺へ歸らうと鐘は鳴いた、

男の口で約束した事を果す

短冊畫あるか如何にしても屏風を離れず、云々成程無理に引ぺがしたと見えて少し斷れて居る。さア此だ、是非共出發前に四枚揃へねばならぬことになつた。先づ虛子氏を訪れて一句を乞ふ、因緣話しは無論繰返されたのである、暫く子規氏の句を見て居られたが、何れ後から送るとの事で別れた、出立の前々日虛子君の書翰が着した、短册が入つて居る。

兄弟の心異る寒さかな　虛子

さア此て春と冬との二枚は揃つたが、もう中一日と迫つては本鄕に鳴雪氏、根岸に碧梧桐氏を歷訪して跡の二枚を乞ふ暇が何としても出來ないのである。作郞氏には別段約束をしては無いのだから、濟まないことは無いが、自分自身に殘念で〳〵堪らない。とう〳〵子規子の短冊も月斗の手紙も虛子氏のも一切そつくり其儘ポケツトに入れて來て、大平洋を渡り落機山を越えスカイスクレバーに登り今又大平洋を横ぎりつゝある。（六月十六日セルチツク號にて）

帝都の新聞經營者（六）

黑頭巾

其一

●野球、庭球が、勢力ある社交機關となりつゝあるは、最近の趨勢也。

●金髮碧眼は、雲鬢皓齒に雜はり、「コーセツト」は「やの字」の隣り、花やかなる羽帽傘影、綺羅びやかに、運動場を飾りつゝあり。

●應援の叫は、內外各國の語を以て表出され、來賓席の到處、國際私法は行はれつゝあり。

●吾輩は、這般の趨勢を以て、啻に「運動」の發達を促がすのみならず、又實に、社交機關の展開として、喜ぶべきの傾向と爲さずんばあらざる也。

●今春は、殊に、關西軍の東上は、社交界に趣味ある話題を提供せり。

●關西軍は悉く敗衂して、帝都の運動界未だ關西男兒の蹂躪するを許さずと雖も、此の對抗戰に依て、帝都

の人氣は引立ちたる也。

●就中早、慶兩軍と一高健兒との對戰は、近年稀なる興味を以て迎へられ、觀衆の中帝都の名士の半を包有するに至れり。

●吾輩は、新聞經營者が這般の趨勢を察し、單に運動記者を派遣して、專ら專門記事を擔當せしむるに留まらず此の運動場に向つて一廉の注意を拂つて、一たびは、必らず此に來り視察するあらんことを望む者也。

其　二

●早、慶、一高の野球は、啻に運動としてのみならず、種々、觀察に値するの趣味を有す。

●實に崇大にして、變化に富める野球は、高尙なる觀物たらずんばあらず。野球は野外運動の王なり。

●『早』の豪壯なる、『慶』の華麗なる、而して『一高』の勇猛なる、各、特殊の校風を發揮す。

●『早』は力を以て、『慶』は技を以て、而して『一高』は氣を以て勝つ。

●故に、其缺點を言へば、『慶』は細にして弱き處あり、『早』は大にして粗なる處あり。而して『一高』は樸にして土臭き處あり。

●『早』は渡米し、『慶』は布哇にゆけることあり、いづれも海外仕込なり。然れども、世人は、『慶』に對する時にのみ、『米國式』を聯想す。

●緋羅紗の外套の翩々として、グラウンドに舞ふは『慶』のバラント也。

●彼等撰手が、敵を彌次るときには巧みに英語を操つり、『燒小手の縮髮』、『緋羅紗の外套』或はグラウンドに逆立す。

●日本の學生、未だ此の如く輕妙に、敵手を『ヂラシ』得るものはあらず。

●『早』が黑衣は、戰鬪艦を聯想せしめ、而して『一高』の白衣は、拔刀隊を追懷せしむ。

●練習の極めて見事なるは『慶』也。頑にして野なるは『一高也』

●『取こぼし』の多きは『早』也。「取こぼし」の無きは『慶』也。

●「慶」には順當の勝負多く「早」には番狂はせあり。「一高」に奇捷あり。

●「慶」は操縦し、「早」は壓迫し。而して「一高」は突貫す。

●逆境に立つや、「慶」は技に過ぎて弱く、「早」は力に任かせて脆し。

●然ども其も好境に向つて、油の乘り來るや條章燦然として觀兵式の如きものは「慶」也。「早」は澎湃として湧く潮の如く、「一高」は疾風に襲來する槪也。

●小敵を取りこなすに妙を得たるは、「慶」の廐場也。恰も、稽古場の「ブッカリ」を見るが如く、底力の測り知られざる心地す。

●而して大敵に恐びれざるは「早」の美點也。敵を擇ばず奮戰するは、「一高」の特徴也。

●下町式を發揮するものは「慶」也。「早」と「一高」とは山の手を代表す

●「慶」は花やかにして精采あり。宛然パノラマ也。これを園遊會場に展開するも、美觀を添ふに足る。

●「早」は剛健にして氣燄あり。成敗に係らず、つねに人意を強くす。「一高」は則ち勇憤熱烈の氣あり、殊死して敵壘に肉薄する戰士の風を帶ぶ。

●極めてハイカラなるは「慶」也、極めて蠻勇なるは「一高」也。

●萬事行屆きたる運動場に、美しき幼年部の兒童が、Keio を聲援するは、錦上の花の感無んばあらず。

●「一高」が、白金布の大旗小旗を押立てゝ、沙塵に塗みれたる白衣撰手を掩護するは、また花の都の一異觀たらずんばあらず。

●「慶」は稽古場の大關にして、「一高」は土俵の勇士也。

●「早」は重ねて「一高」に挫せられ、「一高」は「慶」に敗らる。此三者は陰然三スクミの觀を具す。

●蓋し、氣は技に致され、技は力に壓せられ、而して力は氣に挫かるゝ也。

●此三者が、技量は、世間既に評論あり。勝敗に至つては容易に豫見す可らざる處に妙味は存す。

●或は言ふ、「慶」は梅ヶ谷にして、「早」は常陸山也。

而して輓近の勢を以てすれば、新大關太刀山は、即ち「一高」也

●太刀山が横綱の榮冠を戴くは、必ずしも明年を期す可らずと雖ゞ、今に於ても、一氣に突張り進むときは、横綱に向つて、鼎の輕重を問ふに餘ある也。

●早、慶のいづれたるを問はず、一方に、『勝つた善い、勝つた方が善い』の響くところ、帝都の人氣試合たらずんばあらざるべき也。

●而して吾輩は、『早』『慶』が舊習を一洗して一快戰するの日あらんことを期待す。

其三

●吾輩は、一の古きカフスボタンを有す。英國製にして、裏に July. 19. 1881 と刻す。極めて頑疊にして、腕は千切るゝとも、破れずと思はる。

●一箇のボタンのみ、取出して言ふに足らず。然れども、吾輩は之に依て、和製の、繊麗にして、極めて弱き金釦を聯想し、以て吾が商品の無責任に驚かずんばあらざる也。

●英や米や、カウスボタンの安物は、速かに鍍金は剝げるともボタンの用を爲さゞることあらず。

●吾國の製品に至つては、一見頗る美にして案外に安し。能く顧客をチャームするに足る。而して之を用ふること、一朝一夕にして、ボタンの部分崩潰し去つて、人をして呆然たらしむ。

●マコーレイ卿の所謂、モダーン、ルインなるもの、日本製のカフスボタンを指すにあらざるを得んや。

●此の如きは吾商工界の特徴にして、又た最大特點也。讀者は、帝都の大なる勸工場に於て、屈指の老舗の店頭に於ても、モーダン、ルインの候補者を發見するに苦しまざるべし。

●或は、數百年老舗の看板の下に此の如きモダーン、ルインを鬻ぐもののあるは必ずしも理事者の惡意あるに非ず。商品の吟味足らず、畢竟、監督制度の發達せざるに起因せずんばあらず。

●徒らに、目先きを變へて、顧客を魅すれば、則ち商人の能事畢ると思ふ可らず。

●錦綾を纏ふて、「素町人根性」を飾るは、二十世紀大商人の態度にあらず。

●「素町人根性」「モダーンルイン」の絶滅は、商人自ら振つて、之を擔當すべきのみならず。有志者は、つねに之が監視を怠る可らず。

●新聞は、廣告機關たるに留まらず。進んで商工業に對して、活眼を開きて、眞實なる忠告者、匡正者たるの覺悟あるを要す。

●新聞と商人とは、相互に「お得意」也。畢竟、相見互也。商人は、新聞に材料を供給し、而して新聞は、商工業の有力なる監査者たらざる可らず。

●商人の尤も恐るゝ者は新聞也。而して恐怖の感情は、素町人根性の發達に正比例す。

●「素町人根性」者の粗製濫造に向つて、痛棒を與へ得る者は、新聞を適任とす。而して、新聞が之を爲すには、十分、眞摯にして且つ親切なる態度あるを要す。

●吾輩は、帝都の新聞が、啻に商工界の耳目たるに留まらず、指導者として、地歩を進めんことを希望する者也。

其四

●帝都の新聞が、今に至つて、露國の研究を熱中せざるは、吾輩の慊らずとする處也。二葉亭四迷の死は眞に惜むべし。

●將來に於ける日露の關係を豫想する者は、今日に於て、露國研究を急ぐべきは論無し。

●軍防、政治及び農業國としての露國は、十分研究に値す。

●日本の農民興起の問題は、最近經濟界の一大要項也。其の對照として、露國の農事狀態は、委曲に之を研究するを要す。

●今日の際、這般の意味に於ける露國研究を敢てする者あらば將來に向て先鞭者の名譽を博取すべし。

●農民の味方を以て自ら任ずるの新聞は、須らく露國の研究を擔當せざる可らず。

●而して商工の皷吹者を以て許す多くの新聞も、亦た獨逸新興の商工界の實情を、十分適切に報道せざる可

らず。

●吾輩は、帝都の大新聞が、三面欄の日に進むを認む。然れども、内外商工界の情報を一層緊切有力ならしめ、以て國富國力の培養に貢献する所以に至ては、多大の嘱望無くんばあらざる也。

其五

●大阪の「蚊」は東京に旅行す。蚊は、三百里を遠しとせず、一路鐵車、五十三驛を踏破し來る也。

●天津橋上の不如歸は時運の變遷を豫報す。大阪の「蚊」は、大阪の空氣を帝都に將來す。

●東西二大都が日々に接近しつゝあるは事實也。而して二者の間、尙ほ鴻溝を劃す。

●之を新聞に徵するも、『財界』の記事、東京は、つねに大阪に及ばず。帝都の有力者は、其爲に大阪新聞を購讀しつゝあり。

●東京は、趣味の都也。而して大阪は財の都也。

●東京人は、趣味を以て新聞に斯待し、大阪人は黃金を以て新聞に對す。

●吾輩惟ふに、新聞は、『娼妓の二の腕』『貧乏寺の過去帳』とは異なり、金力のみを銘記すべきものにあらず。

●乃至、金力にて集められたる種計りを集錄すべきものにもあらず。

●趣味と黃金との外、超然として、一代の趣味と金力とを指導するの、高邁なる識見を以て、經營者に望まずんばあらざる也。

●然らずんば、如何に敏速なる輪轉機の百臺を使用すとも、昔の死版の讀賣と、何の擇ぶ所あらん。

●『主張』と『觀察』とは、新聞の生命也。

●帝都に二箇の注目すべき橋あり。而して日本橋新橋は與らず。

●其一は一石橋也。昔後藤と後藤と橋を隔てゝ相對せし故に、かく名づくといふ。

●人は言ふ、此橋上に立ちて展望すれば、十箇の橋を見るべし。

●「丸の内」を隔てゝ富士山を拜すべし、日本銀行、三井、三越を控へて、常磐橋より數寄屋橋に至る一帶の

電車路と、橋とを見渡すべく十丈の紅塵の中に虹と現する日本橋を越して、遙かに海運橋を望むべし。海運橋は、東京郵便局、三菱倉庫に倚りて、昔も今も交通の中心を標榜す。

●此橋よりは、啻に多數の橋のみならず、尤も多く問屋の庫を眺望すべし。

●則ち知るべし。此の一石橋や以て、帝都の半面を代表することを。

●其二は、白魚橋なり。白魚橋は白魚河岸に架す。溝渠交叉するの處にあり。是亦、橋上に立ちて、十箇の橋を望むべし。

●白魚橋の名、何んぞ美にして婉なる。或は曰ふ、此の橋、「白魚の如き指」の人の居處に近し、故に名づくと。

●想ふに、白魚橋上涼風月夕、欄に倚りて羽化登仙するの客、少からざることならん。

●一石橋は金力を代表し、白魚橋は趣味を代表す。

●暫らく、觀察を此の二橋に集注するも、亦以て、帝都に於ける日新の新聞種を採集するに餘あるならん。

（完結）

頃日、世事多忙、半夜の閑を偸みて、僅かに此稿を草す。月光、銀杏樹の若葉を透し、卓上に落ちて、吾が半面に反射し、左手は白く右手は黒かりき。

黒頭巾記

本邦に於ける最初の政治年鑑

元帥 山縣有朋公題辭
內閣總理大臣 桂太郎侯題辭
內閣書記官長 柴田家門君校閱
貴族院書記官長 太田峯三郎君校閱
內務省警務局長 有松英義君校閱
外務省政務局長 倉知鐵吉君校閱
會計檢查官 中山寬六郎君校閱
農商務省商工局長 大久保利武君校閱
文部省參事官 田所美治君校閱
陸軍教授 橫山雅男君校閱
宮內省樂部々長 宮地嚴夫君校閱
韓國內部次官 岡喜七郎君校閱

世の大勢を審かにして劃策其の誤り無きを期するは必ずや數字に據らざる可からず數字の基礎なきは空中の樓閣のみ暗中の模索のみ粗枝大葉のみ理義の明徹・計圖の精確・斷じて之を得べからず歐米諸國何れも年鑑の刊行ありて爲政家・實業家・各種事務員・學者・論客其他一般人士の活用に供せり獨り本邦未だ這種の書を見ざるは洵に昭代の一大缺陷と謂はざるを得ず今や此の缺陷を補はんが爲め爰に「日本政治年鑑」出づ以て諸君多年の渴望を慰すべく豁然として朗清の一路を開くを得んなり

兩陛下御眞影、皇太子殿下・皇孫殿下・內親王殿下御肖像、現內閣員・元老元勳・兩院正副議長・各政黨領袖・在外本邦大使・本邦駐劄各國大使肖像（以上口繪）
世界形勢圖、亞細亞現勢圖、東洋現勢圖、帝國版圖地圖、政黨地圖（政友會・進步黨・大同派）、教育地圖、米作地圖、蠶作地圖（以上地圖）
外國貿易累年比較地圖表、公債增減圖表、各國公債比較圖表、列國歲出比較、歲出累年比較圖表、列國歲出百分比例、列國歲出一人當負擔、東洋海上勢力比較圖表、列國海軍力比較圖表、列國陸軍力比較圖表（以上比較圖表）

見本進呈 郵券二錢送附あれ

東京神田 同文館 電話本局四三七 振替口座東京一三五

日本政治年鑑

同文館編輯部編纂

脊革全一冊千二百頁 定價金六圓

特價四圓五拾錢 郵稅內地四十二錢

御奈良天皇恩賜
本派本願寺所藏

宮内省御歌所寄人　坂　正臣先生序
宮内省御歌所寄人　大口鯛二先生撰及跋

三十六人家集寫眞帖

裝幀用、コロタイプ印刷、用紙菊倍判、純良鳥の子、一奉書、江戸川別漉、
上質洋紙等各種　一組六十葉特別實價金拾圓(但用帋鳥の子に限り一圓增)
遞送料金貳拾四錢(但東京市内無遞送料)

本帖歌集の原本は、藤原氏時代の舊物にして、長年月の間幸にも蠹魚の災を免れ、料紙の下繪に聊かの變色剝落なく、墨痕亦淋漓たれは、寫眞印刷極めて鮮明にして、一帖の裏、直ちに平安朝時代の書と畫とを併せ見るを得べし、其の如何に天下の貴重品なるかは、乞ふ左の撰者の跋文に就きて知らるべし、本帖は本願寺に乞ひて百部を限り、世の仝好者に頒つものなれば速かに申込まざれば、直ちに賣切となるべし

大口鯛二先生の跋に曰く

去明治二十九年の八月、おのれ賜暇にて、京都に遊びたりし頃、故明如上人の許にありて本願寺の庫裡に藏せらるゝ古書ども、これかれ取調べし中に、家集と外題したる一函あり、ひらき見れば卽ちこの**三十六人家集三十九**帖なりけり。筆者の名もなく、傳來の故由もみえねど、その書は、**道風**、**佐理**、**行成**の**三蹟**をはじめ、**公任**、**俊賴**などの**筆蹟**とおぼしくて、料紙など、目もあやにいみじうめてたければ、先うちおどろかれつゝ、かく貴き**天下**の**寶物**を、なにとてよのつねの圖書の中に、うちまじへてはおかれたるならん、といぶかりあやしみつゝ(**中略**)時なるかな、時なるかな、天文日記とて六十餘卷あるを

上人がとうでられてこは經如上人（光敎）の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそか中なる一卷をうけて、ひらきみしに、そのはじめ程に、ふと目にたまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月

二十日從禁裏以女房奉書三十六人家集令拜領、門跡經乘へ以御書被仰越候、僧正事來二日以前御申沙汰有度下山被仰候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘卷の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一卷の初にしも、この事を見いでたるは、まづ不思議の緣なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるしわざにこそ、とかしこくおぼえたりき（中略）やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その說をもとめしに、誰も未だ見聞せざる珍書なり、寶物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、（中略）本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の最古最良の證本たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、本朝三蹟とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙はたゞ世にたぐひを見ざる結構にて、藤原氏全盛代時の美術の粹を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、無比の重寶たるものなり。本書中の一片にして、また〳〵世に傳れるは、千金の價値あり、然るに、後西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠣喰のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵不思議の至ならずや、おのれはからずも、これを發見して、かく世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしともうれしきことのきはみになん。○本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば今又いはず。○又おもふに本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどもありて、いかにもてはふらかしけんも、はかられざるを、なか〳〵に絕えて知るものなかりしは、今日まで滿足に傳はれるもとゐなりけんかし、とにもかくにも天下の至寶なれば、神佛の加護ありしなるべし（中略）

又本書は、もと御室關白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならや、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることどもは、坂ぬしの序文にもいはればもらしつ、さてこの寫眞版は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあれはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが手習の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖のうちより、一葉二葉あるは五六葉あるはまでづゝえりいで寫しとり、かくはものしつるなりけり。

東京市本郷區西片町十番地は/十四

發賣所 婦人社

電話下谷九百十九番
振替口座東京卅四番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

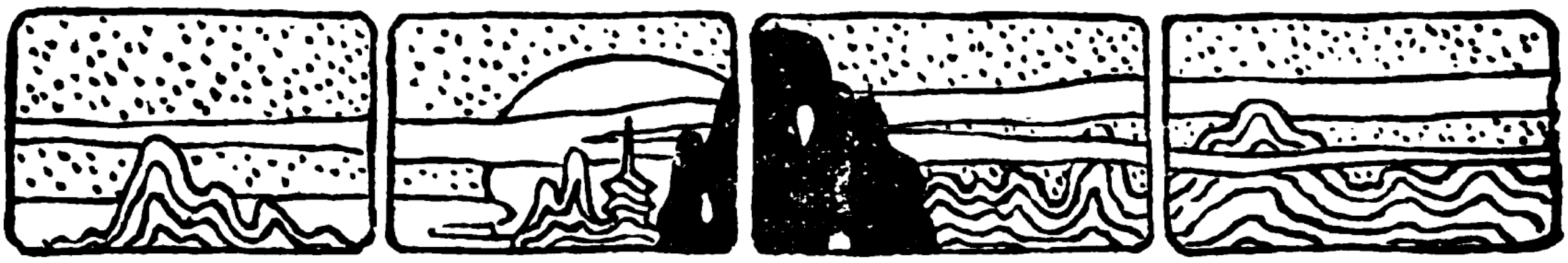
丸善新著案内

AUS NATUR UND GEISTESWELT. Preis, je. 63. Porto, je. 06.

Möller, K.—Deutsches Ringen nach Kraft u. Schönheit I.
Volbehr, Th.—Bau u. Leben der bildenden Kunst.
Braasch, H.—Die religiösen Strömungen der Gegenwart.
Boehmer, H.—Die Jesuiten.
Walzel, Dr. O. F.—Deutsche Romantik.
Kahle, B.—Henrik Ibsen. Björnstjerne Björnson u. ihre Zeitgenossen.
Kirn, Dr. O.—Sittliche Lebensanschauungen der Gegenwart.
Pfankuche, A.—Religion u. Naturwissenschaft in Kampf u. Frieden.
Pabst, A.—Die Knabenhandarbeit in der heutigen Erziehung.
Mehlhorn, P.—Wahrheit u. Dichtung im Leben Jesu.
Pott, A.—Der Text des Neuen Tstamentes nach seiner geschichtlichen Entwicklung.
Weber, O.—Von Luther zu Bismarck. I
——— ——— II.
Fischel, R.—Leben u. Lehre des Buddha.
Bloch, L.—Soziale Kämpfe im alten Rom.
Kirchhoff, A.—Mensch und Erde.
Trömner, E.—Hypnotismus u. Suggestion.
Maier, G.—Soziale Bewegungen u. Theorien bis zur modernen Arbeiterbewegung.
Weise, O.—Schrift-u. Buchwesen in alter und nueer Zeit.
Soden, Prof. Dr. H. F.—Palästina u. seine Geschichte.
Bruinier, J. W.—Das deutsche Volkslied.
Auerbach, F.—Die Grundbegriffe der modernen Naturlehre.
Külpe, O.—Die Philosophie der Gegenwart in Deutschland.
Hesse, R.—Abstammungslehre u. Darwinismus.
Schwemer, R.—Restauration u. Revolution.
Ziegler, Th.—Allgemeine Pädagogik.
Günther, S.—Zeitalter der Entdeckungen.
Weise, O.—Die deutschen Volksstämme u. Landschaften.
Tews, J.—Schulkämpfe der Gegenwart.
Negelein, J. V.—Germanische Mythologie.
Richert, H.—Schopenhauer.
Steinhausen, G.—Germanische Kultur in der Urzeit.
Stein, L.—Die Anfänge der menschlichen Kultur.
Geffecken, J.—Aus der Werdezeit des Christentums.
Giesebrecht, Fr.— Gundzüge der israelistischen Religionsgeschichte.
Weinel, H.—Die Gleichnisse Jesu.
Flügel, O.—Hertzrts Lehren u. Leben.
Richter, R.—Einführung in die Philosophie.
Külpe, O.—Immanuel Kant.
Heigel, K. Th.—Politische Hauptströmungen in Europa im 19. Jahrhundert.
Ziebarth, E.—Kulturbilder aus griechischen Stätden.
Miehe, H.—Die Erscheinungen des Lebens.

大阪市心齋橋筋 丸善大阪支店 振替口座大阪七四番
東京市日本橋通 丸善株式會社 振替口座東京第五番
京都市三條通リ 丸善京都支店 振替口座大阪一七三番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



牡丹の客

永井荷風

小れんと云ふ藝者と二人連、ふいとした其の場の機會て、本所の牡丹を見にと兩國の橋だもとから早船に乘つた。

五月も末だから牡丹はもう散つたかも知れない。實は昨日の晩、芝居て計らず出會つたまゝ代地の待合へ泊つて、今朝は早く歸るつもりの處を、雨に止められたなり、其の晴れるのをば晝過ぎまで待つてゐたのだ。一日小座敷に閉籠つてゐたゞけに、往來へ出ると覺えず胸が開けて、人家の間を河から吹き込む夕風が、何とも云へず爽に醉後の面を吹くのに、二人とも自然と通りかゝる柳橋の欄干にもたれた。

次第に近く夏の氣候の、殊に雨上りの故でもあるか、日は今日から突然長くなり出したやうに思はれた。丁度寺院の天井に渦卷く狩野派の雲を見るやうな雨後の村雲が、空一面

幾重にも層をなして動いて居る。其の間々に光澤のある濃い青空の色と、次第に薄れて行く夕炎の輝きが際立つて目を喜ばす。神田川を眞直に上汐の黒く濃い綠色の水の面は、遠い明神の森に沈んだ夕陽を受けて、今だに磨いた硝子板のやうに光つてゐたが、荷船や小舟の殊更に幅湊する川口から、正面に開ける大河の面は眺望の遠いだけに色よりも唯一様に、夕暮の水の輝きばかりが目を射る。角度の正しい石垣の兩側に痩せた柳の繁りが、絕えず風にゆられて居ながら、如何にも懶く靜に見えて、岸に近い藝者家の稽古三味線も今は途絕えた。あたりは一刻々々、雲の動くにつれて夕方ながらに却つて明くなり往來の人の顏や衣服の縞がはつきり見えるばかりか、雨に塵を洗はれた後の街全體が、如何にも淸らかに落ち付いて心持よく見える。湯歸りの女が化粧道具を手にして行交ひざまに話して行く、其の眞白な襟筋が驚くほど美しい。早くも蝙蝠の飛出したのを素早い子供が見付けて、追掛けて居る。近くに絕えざる電車の響。遠くに汽船の笛の音が長く尾を引いて消えたが、すると川口へ大きな屋根を突出した龜淸の二階で幾挺の三絃が一度に調子を合して鳴り出した。濡れた雨のまだ乾かない柳光亭の板塀の外には蹴込に紅い毛皮を敷いた漆塗の新しい人力車が二臺ばかり置いてあつた。黒い紋付の裾模樣の褄を取つた藝者一人と、目覺るばかりな友禪染の半玉が、早足に柳の垂れた門口へ這入つて行く。其れをば通りがゝりのものが珍しさうに振返つて見て居た。

「行きませう。」

小れんが云ふので自分は大通を兩國の方へ歩き出した。

「すぐ家へ歸るかい。車をさう云はうか。」

小れんは輕く首を振つたまゝずん／＼歩いて行く。

自分は大通から大川へ廣る夕方の空を仰げるだけ廣く仰いだ。橋の手前は近所の飲食店から物煮る匂の立迷ふ中を、電車の行交ひ、其れを待つ人、橋を渡る荷車などで非常に混雜して居る。ふいと其の瞬間、自分は女をつれて待合から出て來た自分と此のやうに休まず活動して居る世間との間には、全く交通しない隔離があつて、自分と世間とは別々の運命に支配されて別々の方向に動いて行くやうな心持を深く感じた。いつも日の暮れに感ずる心の靜まりが重な原因であらうけれど、譯もなく力拔けがして心が落付いてしまつて、其れて何處にか云ひ得ない幽愁が蟠つて居る。別にわかれを惜しむと云ふでもない。一日の遊蕩を悔悟するでもない。水の流に感動するでもない。唯だ、都會と云ふものが、都會に生れた人にのみ與へる人工の歡樂を、自分は今日までに見盡した其の夢のさま／＼を一時に思返すやうな氣がしたのだ‥‥

「あぶないよ。」

手を引いてやつて電車の線路を横切つたが、すると小れんが河端に立てた高札の文字を、

「早船、四ッ目の牡丹‥‥大人四錢。」と讀んだ。

「行つて見やうか。」

女はいつもにない若々しい元氣な聲を出して、

「えゝ行きませう。まだ私一度も行つた事がないのよ。」

さう云ふわけて、自分等二人は其れなり石垣へ掛けた板の歩みを渡り、古い傳馬船を傳つて、薄べりを敷いた荷足舟へ乘つたのである。

メリヤスの着古したシャツの上に十文字に腹掛を締めた二十二三の若い船頭、並んて繋いだ隣りの空船の船頭と話をして居たのが、自分達の乘つたのに元氣を得て、背を圓くして蹲踞んて居たのを急に立上つて、まだ片手には吹ひかけの煙管を持つたまゝ、

「さア出ますよ。本所の牡丹行、出ますよ、出ますよ。」と水の上から見上げると、石垣の向うに足ばかりしか見えない往來の人をば大聲て呼びつゞけた。

自分はこの分で待たせられたら折角向うへ着く時分には日が暮れ果てゝしまはう、二人買切りにして二十五錢……此の一聲で船頭はすぐと櫓を水に入れたばかりか、

「旦那、いゝ氣候になりました。」と云つて薄べりの上へ煙草盆まで持ち出してくれた。

丁度夕潮の滿ちた頃、河水の流れはゆるやかて、小舟は船頭が若い腕の力で前後に櫓を押す其の力だけに輕く搖れながら進んて行く。子供の時分、乳母がよく、ギコ〱お舟はどうこ、と云つて搖つて呉れたやうな何となく遠い懷しい、現代を離れた一種の軟い感情が浮んて來る。

電車と車の烈しく往來する中をぼんやり鐵の欄干にもたれて通行の人が幾個も、箱を浮したやうな棧橋へ、絶え間なく着いては出る河蒸汽船、其れから上り下りする人の混雑を眺めて居る。日本橋の方の

河岸は次第に遠く、濱町の方まで見通されるやうになると、橋向うの屋根の上に、夜は電燈のつく廣告の拙い畵面がはつきり見え出す。今だに夕陽を遮つて黒い雲の動いて居る大空は、岸の低い川下の方に蔽ひ冠さつて、眼のとゞく其のはづれに木製の新大橋が匍ふやうに水を渡り、其の向うには製造所の烟筒が黒い煤煙を長く棚曳して居る。丁度河の眞中で、濱町から一ッ目へ通ふ渡船と舷を揃へた。淺黄木綿の大きな四角な包を背負つた番頭らしい男と、袷の胸を腹當の見える程に引きあけて、帽子も冠らぬ遊人らしい若い好い男が乘つて居た。其の時通り過ぎる蒸汽船の横波で、自分等の早船も、底の平い渡船は猶更に烈しく左右に搖れる。横波は河面を滑つて行つて、土塀の中に恐しく若葉の茂つた濱町の石垣から往來までも匐上りさうに白い泡を立てたのが能く見えた。早船は舷の尖つた漁船の事で、横波でゆられる最中に渡船より先になつて、竪川の入口に近付く、以前よく長唄の會などの開かれた井生村樓の時分とは河岸の模樣がすつかり變つて、突出した空地へ二階立の小料理屋らしい家が新しく出來た。待合かも知れない。二階の欄干に蒲團が干してあつて、銀杏返の女が二人水の流れを見て居た。すると船頭が突然大聲で、

「今晩、いゝお天氣で。」と叫んだ。

女は返事するどころか怖るゝ如く引込んでしまふ。

「何だい。」と自分がきくと船頭は嘲つた調子で、「旦那、三軒とも淫賣屋でさ。いゝとこへ巣をくひましたよ。」

小れんは厭な顏をして自分の膝をつき、「あなた、煙草頂戴よ。」

グッと一ッ力强い取梶で舟は石垣の下を廻つて堀割へ這入つたが、直ぐに一ノ橋と木札を打つた橋をくゞる。狹からぬ堀割の岸邊には、堀割の水のつゞく限り、さま〴〵の形して、さま〴〵の荷を積んだ荷船が幾艘となく繋がれて居る。其日の仕事が丁度終つた處で、どの船でも船頭は舷へしやがんで煙草をふかしながら空を見て居る。川水で汗を拭いて居るのもある。女房は兒を背負つたまゝで、船板の上に置いた竈に火を焚き、飯櫃を洗ひなぞしてゐる。重に石炭殼を焚くので煙の匂が强く立迷ひ、赤い焔がちら〳〵川面に映る。小れんは珍しさうに其れを眺めて、

「船の中に寢るんでせうか。」

「さうさ。」

「おつだわねえ、浮世離れて。」と自分の顏に眼を移した。

「いけないよ。又思ひ出しちや。出來ないものは仕樣がないさ。」

さう云つたけれど然し自分も妙に悲しかつた。自分は小れんと二人で一時築地へ家を持つた事もある。然し半年ほどで相談の上女は又元の藝者になつた。

「あなた、もう一度私と家を持つて見ない事　いやですか。」

「いやな事はない。だけれども矢張り駄目だよ。先見たやうに直き飽きてしまうよ。」

「さうねえ、でも私、藝者して居てもつまらないから。」

「何をしても、もうつまらないんだよ。女房になつて暮しの苦勞なんかしたら猶つまらない。お前が三十、僕が三十五六になるまで、もう三四年は矢張若い氣で浮いて暮した方がと云ふので、お前も承知の上で彼處の看板を借りて見たんぢやないか。」

「それアさうですけれど、どうかすると家を持つてる時より却つてあなたにも御厄介をかけるから、私矢張りもう内儀さんてくすぶつて仕舞はうかと思つたの。」

「其れも惡くはないがね、一度道樂したものには、茶屋小屋の勘定は惜しくないが、蟻が物を喰ふやうに一秒一分休みなしにやつて來る生活の苦勞と來たら實際馬鹿〱しくつて出來たもんぢやないよ。お前だつて、何々さんの總見だとか、何々さんのお弘めだとか、どこそこの付屆だなんて云ふと、隨分よく氣をつけるが、やれ、水道部の屆書だとか、やれ認印だとか云ふと、到底うるさくつて閉口しちまつたンぢや無いか。」

「だから。私達は何時まで經つたつて夫婦になれッこ無いわね。」

「さう云つたものでもないさ。つまり、もう少し年をとればいゝのさ。惚れたくも惚れられたくも無くなつて、世の中の樂しみに未練がなくなればいゝのだ。お互に浮氣でもされやしないかと心配したり苦勞したり厭味を云つたりする餘地があるから、顏も見たくなる、戀しくもなるんだアね、だから、二人とも夫婦なんぞになつてもならないでも、何うでもよくなれば自然と沈着て一緒になつて居られるさ。」

「つまらない世の中ね。」

「あゝつまらないさ。」

電車の通る二ノ橋を越してからは、何處まで行つても眞直な河筋の、一度び木製の低い橋をくゞりかけると、其のアーチが八重になつて直ぐ又行手に、同じやうな橋が見え、何れの欄干にも近所の子供が蟻のやうに集つて騒いで居る。橋の上のみならず、水に添ふ物揚場のやうな空地には矢張り惡戯盛りの子供が群集り、其の中には男に劣らぬ女の子までが加つて、兩方の岸から、負けず劣らず、

向う河岸の
金太郎
頭が三寸
長いな・・・・

と聲のかぎりに喚き合ふ其の金切聲は、水を渡り岸に傳つて、後から追掛けて來て自分等が舟の進みを急すやうに思はれた。物賣る荷船の焔の色が幾分か赤さを増したやうな氣がするだけ、風の絶えた夕暮は沈み返つて、水に映る倉庫の白い壁の色が鮮かに澄む。屋根の形に美しく薪を積上げた物陰はもう薄暗い。橋の袂の處々に竹屋の竹竿が幾束にもなつて立掛けてあるのが、夕方の空に對して如何にも高く黒く鋭く聳えて見える。然し何處まで行つても眺望は少しの變化をも示さないので、最初は珍しかつた舟にゆられる心持も今ては倦み疲れて薄べりの腰が痛くなつた。

「この川、何處まで續いてるんてせう。」

「龜井戸まで‥‥。」

「牡丹まてまだ餘程あつて‥‥。」

「あれが三ノ橋だらう。もう大した事はあるまい。」

自分は小れんと共に欠を噛みしめた。

「どうだね。もう役者なんぞ買つて見る氣はないか。」

「馬鹿々々しくつて。先からお金貰つたッて眞平よ。先の中は人から冷笑かされたり何かすると、内心嬉しくッて堪らなかつたけれど、この頃ぢや時たま、あなたの事なんぞ云出されたつて、へえさうてすかとばかりてね、もう可笑しくも面白くも何ともないわ。」

「全くさ。人の噂なんざ珍しくもない。然し其れて居て、いざ一緒になつて見ると矢張駄目なんだね。」

「心中てもしちまいたいわね、寧そ‥‥。」

「出來たら、其れもいゝね。」

「世間ぢや何て云ふてせう。」

「いろ〳〵に勝手な事を云ふだらう。然し三日たゝない中に忘れてしまうさ。」

「ぢや、つまらないわ。」

「つまらないさ。」

二人て又欠をした。

「だから、其様事考へるよりいつそ男も色も何にもなして暮すやうに量見をきめた方が、餘程利口かも知れないぜ。」

「あなた見たやうに、道樂しぬいた人なら、女なしても暮せるてせうね、考次第て。」

「お前はどうだ。役者も買ひ飽きたと云つたぢやないか。」

「役者はいやさ。役者と亭主とは違つてよ。」

「ぢや、唯だ男として置かう。」

「それアね、皆なから捨てられちまつてさ。外に誰れも此れッて云ふ人が見當らなければ、却て氣樂に獨りて暮せるてせうよ。だけれども世間の人が面白さうに泣いたり笑つたりしてるのを見ると、ほんとうに癪だわねえ。あなた、田舍て暮して見なくつて、どこか遠い山ン中て、世間離れて‥‥。」

「それもほんの當分だ。箱根にだつて一週間と我慢が出來なかつたから‥‥。」

「仕様がないねえ。ぢれッたい。」

船頭が「旦那。」と聲をかけて、荷船の間に浮べた傳馬船に早船を着けた。河岸は倉庫の間が少しばかり物揚場になつて居て、其の向うに人力車の溜り場が見えた。上ると狹い往來を隔て、直様、建仁寺垣の門口に牡丹園と書いた札がかけてある。

唯さへ濕氣の多い場末の事て、往來は隨分泥濘つて居る。自分は女と二人て水溜りをよけながら門を這入り、大きな古木の鉢物を置き並べた敷石を傳つて行くと、雨を避ける低い葭簀の天井に、夕暮の光

を遶つて奥庭一面は驚く程眞暗であつた。丁度二三人の女中が數多く釣した石油ランプに火をつけ廻つて居るところで、列をなして植付けた牡丹の花は、鈍く黄い灯の光の達く處だけ朦朧として、僅に夕闇の影の中に浮出して來る。然し大方は散つてしまつて、然うでないものも憂はしく色が褪めて、蕋ばかりが黒く大きく開いて居る。強い日の光や爽かな風に曝して置いたなら疾に潔く散つて了つたものを、人の力で無理やりに今日までの盛りを保つた深い疲勞と倦怠の情は、庭中の衰へた花の一輪づゝから湧出して、丁度其れに能く似た自分等二人の心に流れ通ふやうな氣がした。佇んで見て居ると、風もなければ歩く人の足音もないのに、彼方の花も此方の花も、云合したやうに重さうな花瓣を絶え間なく落す。花瓣は黒い葉の面に止まるのもあれば、其處はもうランプの光の達かない葉陰の土に滑り込んで了うのもある。時間が遲いのと時節が過ぎたのとて、見物の人は一人も這入つて來ない。外の河岸通りでは依然として子供が囃す唄の聲が、折々は人數の夥しく増えるらしく高まつて聞える。

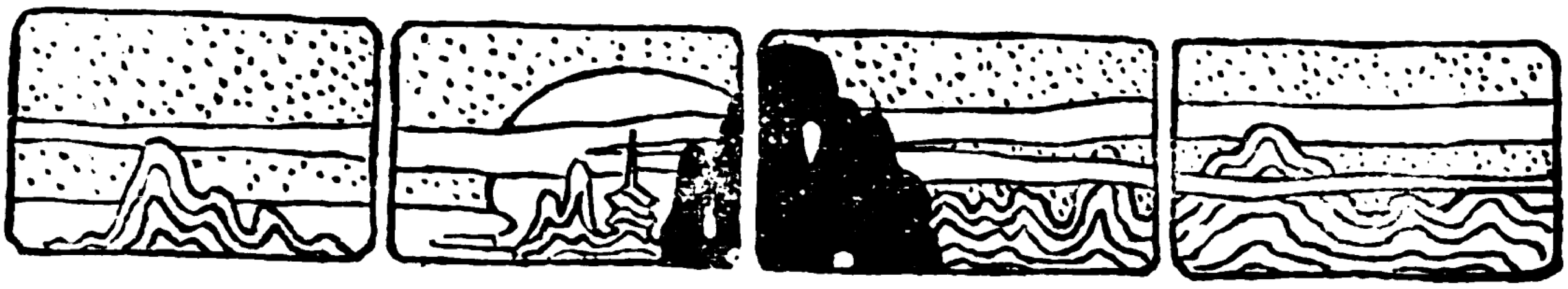
「本所の牡丹てたつた此れだけの事なの。」

「名物に甘いものなしさ。」

「歸りませう。」

「あゝ。歸らう。」

（完）



親類

上司小劍

一

朝から飯(めし)も喰はず、今夜寢るところもないので、葉山德三は途方に暮れて、砂塵の多いダラ〳〵坂を歩いてゐた。其處(そこ)は或る大都會の郊外で、鐵道線路に村の南北を限られた其の北の部落の入口であつた。

道(みち)の兩側はまだ穗の青い麥畑で、其の青い色が見渡す限りズーッと續いて、ところどころに藁葺の家と、一かたまりづゝの森とが浮き出したやうに見えた。道は鐵道線路と十字形に村を貫いて、青い畑の中を長々と隣り村に達してゐた。

德三の二番目の姉は、この北の部落に住んでゐる會社員の妻になつてゐた。其の家は森の蔭の寂しいところにあつた。半ば破れた垣根に取り圍まれた廣い屋敷の眞ん中に建つた

古い百姓家、それを修繕して硝子障子なぞを入れたのが姉の家であつた。廣い庭の半分は不規則にいろいろの樹木を植ゑて、他の半分は荒れたまゝのところを碌に耕しもしないで、豌豆なぞが芽を出してゐた。

德三が姉の家の門の前に立つたのは、午後の三時頃であつた。晩春初夏の稍暑い日光は、キラキラと軒燈の硝子を照らして、四角張た楷書で黑々と書いた『植竹』の二字が鮮かに讀まれた。德三は『植竹』の二字から眩しい光がさして來て眼を射られるやうに思つた。彼れは幾度か門の戸を開けやうとして、幾度か躊躇した。向ふから頭の上に盥を載せた女の飴屋が大鼓を叩きながら來たので、何氣なき風を裝ふて步み出したが、飴屋を行り過してまた後戻りする時に、伸び上つて垣根の中を窺ふと、家は靜かで、一杯に日の當つてゐる緣側には、洗濯物や解き物が取り散らしてあつた。姉の夫はまだ歸つてゐないやうであつた。德三は勢ひよく急ぎ足に步き出して、門の前まで來ると、思ひ切つて潛り戸を引き開けた。響きの好い鈴がチリンチリンと、村中に自分の來たことを觸れ廻はるやうな音を立てたので、彼れは覺えず身を竦めて、心臟のあたりを抑へた。

障子が五寸ほど開いて、姉の白い顏が見えた。德三は黑い顏にニヤリと笑を浮べて姉を見たが、姉は怖い眼をして德三を睨んだ。德三が近寄つて物を云はふとすると、障子が閉つて、『幾や、幾や』と下女を喚ぶ聲が聞えた。德三は茫然と緣側に腰をかけて、畑の方を見た。汚れた飛白の綿入れの襲ね着が暑さうであつた。彼れは、まだあまり人の被つてゐない――恐らくは彼れが眞ッ先きに被り始めたと思は

る、――麥稈帽を脱いて、額に染む汗を拭いた。

五歳になる姉の兒が棒切れを持つて裏庭の方から來たので、手招きをしてみたが、むつかしい顏をして德三を見ただけて、近寄らうとはしなかつた。縮れ毛の下女が來て、態とらしい、人を馬鹿にしたやうなお辭儀をした上、

『德さん、奥樣が大變に怒つてゐらつしやいますし、今に旦那樣もお歸りになりますから、……』と云つた。

『旦那樣――義兄さんが歸る……そら自分の家だから歸るだらう』と德三は弱身を見せぬやうに空嘯いた。

『何ですか私はよく存じませんが、奥樣が大變お怒りになつて居りますから、今日はお歸りになつた方がよろしう御坐いませう』

『貴樣、下女ぢやないか、乃公は此家の親類だ。貴樣に追ひ出されるものか』と德三は取り合はなかつた。

『德、お前は此處の家へ來られた義理ぢやあるまい。今度こそ辛抱しますとあれほど堅く云つて置きながら、またあの銀行を失策つたさうぢやないか。姉さんからも、お父さんからもチヤンと通知が來て、お前が來ても寄せ付けてはいけないッてことになつてゐます。……早くお歸りなさい』と姉が障子の中から強い聲で云つた。障子の腰硝子を透して、派手な縞物の膝のあたりが見えた。德三は自分の不都

合が早くもこの家へ傳へられて、自分を警戒してゐたことが分つたので、親類中が聯合して自分を苛めるやうに思つた。
『僕、腹が空いたし、寢るところもないから、今夜だけ義兄さんに隱して泊めて貰いたいな』と彼れは急に哀はれな聲を出して姉を說いた。
『いけません、お前を寄せ付けてはいけないと云ふことに親類中の相談が決つてゐるのだから。私が何うすることも出來ない。グヅ〳〵してる中に義兄さんが歸つて來ますよ。早くお歸りなさい。お腹が空いても、泊るところがなくても、皆自分の心からだから仕方がありません。……幾やそんなものは構はずに此方へ來て晚の仕度をしなさい』と云ひながら、姉は障子の穴から覗いたやうであつた。
德三は疲れた足を引き摺つて姉の家を去つた。門の鈴がまた高い音を立てゝ、飢えた腹に響くやうに思はれた。トボ〳〵と一丁ほども步くと、急に眩暈がするやうになつたので、路傍の小笹の上に腰を卸して、兩手に額を抑へた。後から下女が駈けて來て、白い紙に小さく包んだものを默つて德三の膝に投げて、ヂロリと顏を見て、またスタ〳〵と駈け去つた。紙には金が包んであるやうであつた。德三は紙包みを拾ひあげて、其のまゝ下女の後姿に投げ付けてやらうかと思つたが、思ひ返して紙を擴げて見ると、新しい五十錢銀貨が一つ光つた。紙の皺を舒べると、見馴れた姉の手蹟て『心を入れかへてしんぼうをしなさい』と書いてあつた。
德三は五十錢銀貨に力を得て立ち上つた。眩暈も癒つた。彼れは步きながらさまざまのことを考へ

た。――小學校教師の妻になつてゐる一番上の姉は子供の時から嫌ひであつたが、二番目の姉は齡も四つ違ふだけて、子供の時には二人て寐たり、一所に惡戯をしたりした。稍大きくなつてからも二人は仲が好かつた。一番上の姉が片付いた時には、ガミ〳〵小言を云ふものが居なくなつてよいと思つたが、二番目の姉が人の妻になつた時は、自分の物を奪はれたやうな氣がして悲しかつた。父の放蕩て、多くもなかつた家の財産が段々減つたのも其の頃からてあつた。母が姦通の疑ひを受けて實家へ歸つたのは、二番目の姉が大きな腹を抱へてゐる時てあつた。住み馴れた家を出て、父と共に狹い貸二階に移つた時は、怖い夢に襲はれてゐるやうてあつた。この貸二階へはいろ〳〵の女が父に連れられて來たが、自分の好きなのは一人もなかつた。父も酒が好きだ、自分も酒が好きだ、家は代々飮酒家で、自分の腦が惡くて根氣が續かないのも、酒の毒てあるさうな。――

考へながら歩いてゐると、物を煑る匂いが、ぷんと鼻を撲つた。其處は居酒屋の前てあつた。彼れは一秒の躊躇もなく、其の薄暗い店に飛び込んだ。

『もろ白を上げますか』と、煑物の汁の染み込んだやうな薄汚い着物の女が聞くのを、

『そんなものが飮めるか』と叱つて、彼れは怪しい正宗の瓶を取寄せた。

二

其の夜徳三は木賃宿に一夜を明して、蚤に喰はれた兩腕の鹿の子斑を氣にしながら、また市へ入つて行つた。

彼れの父は海に近い埋立地の、ゴチャ〳〵とした町に、二室の長屋を借りて住んで居た。じめ〳〵と濕つた溝板に、菜の切れ端や飯粒の粘り付いてゐる上を、穿き耗した薩摩下駄に踏みしめながら、燻つた格子戸の前に立つと、鐵工場の門番に出てゐる筈の父が、上り口に突ッ立つてゐた。

「何しに來た、歸れ」と、父は德三の妻を見ると直ぐ毎もの太いボラ聲に怒鳴つた。目も鼻も口も皆人並みよりは大きくて、赫黑い肉のたるんだ顏が平常よりも恐ろしく見えた。あの顏と自分の顏とが瓜二つだ、酷く似た親子だと人が皆云ふのを思ひ出して、自分も年を取ればあんなになるのか、父の若い時は自分のやうであつたのかと、德三は厭な厭な氣になつた。

「貴樣でも神妙にして家に居ればこんな災難はなかつたのだが、工場へ出てる留守に何もかも持つて行かれてしまつた。海野の奴太い奴だ、貴樣のやうな奴だ」と父はまた怒鳴つた。

德三は父が工場を休んだ理由を知つた。一人者に二室の家は廣過ぎると云つて、父は同じ工場に出る夫婦者に奧の六疊を二圓で借して、老いた夫が夜勤の小使で、若い妻が晝の職工なのを幸ひ、其の妻に晩酌の相手をさせたり、年甲斐もない馬鹿話を聞かしたりするほどに親しんで、喰ふものを喰はずに貯めた小金を借してやつたり、取り付けの米屋に保證をしてやつたりしてゐたのが、今日圖らずも其の夫婦者に持ち逃げをされたのだなと思ふと、德三は覺えず莞爾と笑つた。

「これだ見ろ」と父は薄暗い壁に添ふて置かれた頑丈な用簞笥を指した。其の抽斗の錠前は捻ぢ切られてあつた。中には父が虎の子のやうに大事にしてゐた革財布の入つてゐたことを德三は知つてゐた。

「一日だつて休んだことのない女房めが、今日は出ないと云つてたから可笑しいと思つたのだが、眞逆こんなことをしやうとは思はなかつた。……隣りのお妻さんから樣子が變だと知らして呉れたので、急いで工場から歸つて見ると、これだ」と父は齒噛みをしたが、急に思ひ出したやうに、

「こら早く歸れ、歸らんか。……この上貴樣なんぞに捻ぢ込まれて耐るかい」と父はまた怒鳴つて、手の甲で額の汗を拭いた。

「歸れッて、此處が僕の家ぢやないか」と、德三は口の中で云ひながら、また溝板の上を悄然と、來た方に引き返へした。

三

一番上の姉の家は、市の或る小學校の隣りにあつた。父の家からは一里、郊外の姉の家からは二里ほど距つてゐた。德三は電車にも乘らずに歩いた。途中で大福餅を三つ買つて、歩きながら喰つた。一番上の姉の家へ近づいた時は、もう正午を餘程過ぎてゐた。小學校の運動場から姉の家の樣子を窺はふとすると、放課時間で、子供が大勢遊んでゐた。其の中に混つて姉の夫が、八字髯の顏に手拭ひの眼かくしをして、西洋鬼事の遊戯をやつてゐたので、德三は驚いて後戻りをした。

小學校の後を廻はつて、姉の家の前に出ると、其處に張り物をしてゐた姉とバッタリ顏を合はせた。彼女は小皺の寄つた眦を吊り上げて德三を睨んだ。

「お前まだ生きてたのか、さッさと死んで仕舞ふと親類中が助かる」と云つた聲は、低かつたが鋭かつ

た。儀三は默つて俯いた。

「向島から身を投げる筈ぢやないか。……何處の馬の骨だか知らないが、あんな男を使ひによこして、あんな狂言をしたッて、阿母さんかお雪（二番目の姉の名）ならかゝるか知れないが、私が引ッかゝるかい、この馬鹿めが、……向島を通り合はせましたら、若い男が袂に石を入れて川へ飛び込まうとしてゐますので、背後から抱き止めて、仔細を聞くと、親類中に散々不義理をした揚句、雇はれてた銀行の金を使ひ込んで、生きてることが出來んからこのまゝ死なして呉れ……なんて、壯士芝居にでもありさうなことが能くも仕組めたものだ。あの男もあの男だ、この馬鹿に頼まれて、……兎に角僕の家に寐さして置きましたが、神經が興奮してゐますから、何時どんなことになるやら知れません、今度こそは僕が保證しますから、銀行の方の償ひを十圓だけ御調達願ひます、……なんてペラ／＼喋舌つてたが、あんなものは死なうが懲役に行かうが少しも構はないんですから、あなたも餘計なおせッかいをせずに往來へでも交番へでも突き出して下さい、ッて云つてやつたら、驚いて歸つたが、馬鹿でづう／＼しい者の合棒には矢張り馬鹿でづう／＼しい男がなると見えて、歸りがけに袂を探つて、……あッ墓口を掏られた、お氣の毒ですが明日返濟に出ますから、歸りの電車賃だけ拜借を願ひます……ッて云つた風の巧かつたこと、嘘と知りながら、到頭五十錢騙られた」と姉は糊だらけの手を揉み／＼息も續かずに喋舌つて、最後に、

「この馬鹿、早く歸れ」と叫んだ。寂しい横町ではあるが、たま／＼通る人は皆不思議さうに二人の姿

を見て過ぎた。

四

德三は母の許に行つて見やうかと思つた。母は父と別れた後も、法律上の離婚は承諾しないて、戸籍を其のまゝにして、實家に歸つてゐたが、この頃は或る華族の家に仲働きのやうなことをしてゐる。德三はこの母を強請つては小使錢を貰つてゐたが、人に雇はれてゐる母が無理な算段をして五十錢或は一圓と自分の手に握らせながら、『私は葉山の家を出ても戸籍は其のまゝだから、子供の爲めに出來るだけの面倒を見てやらねばならん』と云つたり、『このお邸を出たらお前と一所に居るんだから、辛抱して早く一人前の男になつとくれ』と云つたりしたことを思ふと、流石にまた母に心配させるのが氣の毒になつた、母は常に二人の姉から『德三が墮落したのは阿母さんが甘いからだ。隱しては小使錢を與へて、酒や女の味を覺えさせたのだ』と云はれてゐることを知つてゐる。今、母の許へ行つて一狂言やれば何とかして呉れるてあらうが、後てまた母が姉に責められるのが痛々しいと思つた。

德三は一番上の姉の、早口の小言を聞き流して、母の許へと向つたが、また考へ直して、後返へりをした。南京豆の袋を買つて、ポリ〳〵と喰ひながら寂しい町を歩き廻はつたり、お宮の境内に入つて、拜殿の緣側に腰を掛けたり、古い繪馬なぞをぼんやり眺めたりしてゐる中に、日は漸く暮れかゝつた。晩霞が美しく、大きな西洋館の白堊に映つて、明日もまた上天氣だと思はれた。路傍に茂つた椎の樹が、僅かな風にガサ〳〵と枝を鳴らした。夕刊新聞の配達人が勢ひよく鈴の音をさして駈けて來た。

日が全く暮れた時、德三は姉の家の隣りの小學校の運動場に立つてゐた。木造の粗末な大きな建物が死んだやうに眼の前に横はつて、それに續いた姉の家からは薄く灯がさした。近寄ると話聲も聞えた。

「……ほんとに、死んで仕舞つたらいゝと思ひますね……」と、姉の聲は稍高かつた。德三は自分のことを云つてゐるものと一人で決めて、其の後を聞かうと耳を聳てたが、何とか答へたらしい姉の夫の聲は判然と分らなかつた。おほかた「そんなことを云ふものでない」とでも云つたのであらうと、彼れの温厚な人柄から推して、德三はこれも一人で決めた。姉らしい影法師が窓の障子に映つて直ぐ消えた後は、家の中が滅入つたやうで、咳一つ聞えず、立聞きをする身には呼吸をするにさへ氣が引けた。暫くすると十歳になる長女が眠さうな聲で父に何か問ふのが聞えた。

二十分間ほどを立ちつくした德三は、足音を偸みつゝ姉の家を遠ざかつた。彼れは運動場の垣根を越えると意を決して急ぎ足に母の許に向つた。

母の雇はれてゐる家は其處から半里ほどあつた。若葉に蔽はれた石の柱の表門には、電燈が鮮かに光つて、馬車が一臺軋り出るところであつた。裏門に廻はると、其處にも電燈が稍小ひさく光つて、人力車が二臺横付になつてゐた。物に怖れる風をして德三が入つて行くと、車の蹴込に腰をかけて眠つてゐた車夫が、眼を覺して怪しむやうに見送つた。

勝手口から廣い臺所を覗くと、電燈の幾つも點いた下に、白服の料理人や、赤い帶を締めた女等が忙しさうに働いてゐた。喰べ殘りの入つた食器や杯盤がゴチャ〳〵と取り亂されてあつた。瓦斯焜爐には

青く塗つた鍋がかゝつて、白い湯氣を立てゝゐた。

「増田屋さん、遲いぢやないか」と云ひながら、一人の女中が德三の姿を見付けて、近寄つて來た。德三はきまりのわるい思ひをしつゝ一禮して、『仲働きの葉山を喚んで下さい』と云ふ意味を丁寧に述べた。

「何だ、八百屋ぢやないのか」と女中は不機嫌な顔をして引ッ込んだが、それでも賴まれたことだけは取り次いだと見えて、暫くすると、行く度に出て來る顔馴染の女中が現はれて、『裏門の外に待つてゐてなさい』と云つた。

德三は云はれた通りに裏門を出て、樫の樹の高く茂つた下に立つてゐると、塀の内にはピアノの音なぞが遠く聞えた。三十分ほども待つたと思ふ頃、小ひさな丸髷に電燈の光を浴びた母の老ひた姿が、墨畫のやうに裏門から現はれて、小走りに德三に近づいた。

「何うしたのだね、ほんとうにお前のお蔭で阿母さんは痩せたよ」と云つた母の低い聲は情なさうであつたが、一種の溫か味は冷え切つた德三の心をとろりとさした。

「僕も今度はほんとに困つちやッた」と彼れは母の痩せた腕に抱き締めて貰ひたいと思つた。

「お前さへ堅くしてゐて呉れると、阿母さんも苦勞がないのだがなア」と母は袖で涙を拭いた樣子であつた。德三も流石にほろりとした。

「お前今度は五度目ぢやないか、何處へ住み込んでもお尻が落ち付かないんだもの、ほんとに仕樣がない、其の度毎に親類中に迷惑をかけるのだから、姉さん達が怒るのも無理はないよ。昨日來たお前の手

紙て困つてることは知つてるが、私もさう〳〵は世話が出來んよ。姉さんだつて皆口では強いことを云つても、心の中ではお前の爲めを思つて氣を揉んでるのだが、亭主の手前や故郷の姑に對しても、實家の道樂息子の世話ばかり燒いてる譯には行かんし、阿父さんがあんな見つともない生活をして月に三度ぐらゐづゝ娘の片付いた先へ意地汚くお酒を飲みに行くだけでも、どんなに姉さん達の心の引けになつてるか知れやしない。其の上にお前だらう、お力（一番上の姉の名）とお雪の心の中を考へると、私は氣の毒で仕樣がない。ほんとにお前も少しは考へて、何處でもいゝからお尻を落ち付けて辛抱して呉れないと、私や姉さんは苦勞死に死んで仕舞ふよ」と、母は鼻を鳴らしてしみじみと說いた。

「僕、こんなところに居ても面白くないから、寧そ遠方へ行つて親類に迷惑を掛けずに、一辛抱しやうと思ふ。今度こそは人間になるつもりだから、旅費だけを拵へて貰ひたいと思つて、姉さんに相談に行つたんだが、二人とも頭から怒鳴り付けて話を聽いて呉れない」と德三は悲しさうに云つた。

「お前この前にも朝鮮へ行くとか云つて、親類中を騙してお金を集めて、皆な惡い遊びに使つて仕舞つたことがあつたらう。それだから今また遠方へ行くなんて云ひ出したつて、誰れがほんとにするもんか、阿母さんだつて信用しないもの」

「今度こそ噓は云はない、疑ふなら行く時に停車場へ見に來たつていゝや、組合て行くんだもの」

「其の組合ちうのは確かなのかい」と母は直ぐ乘り氣になつた。

「確かだとも、△△の大きな水產の商會の仕事を受け負つて十人ほどで行くんだ。旅費だけ此方で出せ

ば向ふ飯て日に五十錢呉れるんだ」と德三は吃りながら云つた。母は遠方の田舍へでも遣つて置けば誘惑も少なからうし、頼る親類もないから本人の勵みにもなり、尻も落ち付いて辛抱もするだらうと思つた。さうして彼女は二三日の中に旅費を都合してやることを德三に約束した。

別れる時に母はまた帶の間の巾着から、小ひさく折つた一圓紙幣を出して、

「二三日の間これて何處かに泊つてゐて、立つ日が決つたら私が旅費を持つて停車場まで送つてあげる」と云つた。さうして德三が其の一圓紙幣を受け取つて二間ほど歩み出したのを背後から呼び止めて、

「二人の姉さんの許へもう一度行つて暇乞ひをして置くんだよ。大きい姉さんはあんなガラ〳〵で小言ばかり云つて威張つてゐる呑氣者のやうだが、心の中ではお前のことて始終涙を溢してゐるのだから、有り難く思はなけりやいけないよ」と云つて、少し間を置いてまた、

「お前、もう二十歳ぢやないか、今度こそ確りしなけれやならん」と云ひ足した。さうして彼女は、長い塀の白壁に淡く影法師を映しつゝ遠かつて行く德三の姿を、曲り角に消へる時まで瞬きもせずに見送つた。

五

四五日の後、德三は母に送られて市の北の停車場から遠い田舍に向つて立つことになつた。母が四苦八苦して拵へて呉れた袷せに袷羽織は、梅と櫻と桃と李とが一時に咲くと云ふ北の初夏に、まだ少し寒

くはあるまいかと思はれたが、裁り立ての紺の匂ひが快くて、だらけ切つた少年の身體をキリ、とさして見せた。邸の用事が氣になるので、母は德三をプラットフォームまで送らずに、切符を買ひ與へて別れた。

今日あたりは、もう田舍から無事に着いたと云ふ葉がきでも來るであらうと、母が心待ちに待つてゐる頃、德三は郊外の姉の家に近づいて歩いてゐた。母に拵へて貰つた新しい袷せは、膝のあたりが汚點だらけになつて、卷煙草の燒穴らしい痕も見えた。同じ物の羽織はもう着てゐなかつた。白メリンスの新しい兵兒帶も黒金巾の古いのに更つてゐた。けれども麥稈帽子だけは相變らず新しい艶を見せてゐた。

曇つた夕方で、四邊が薄暗かつた。德三は垣根の外から姉の家を覗いたゞけて、門の戸に手をかける勇氣はなかつた。朝から方々を歩き廻はつて疲れ切つてゐる身體を引き摺るやうにして、後の森の藁葺きの小屋に入つた。其處には肥料溜の大きな桶が置いてあつた。德三は其の傍の藁の上に身を横へ、思ふ存分に手足を伸ばして欠をした。惡い臭氣が鼻を衝いて頭の重くなるのを覺えた。

藁の上に一睡りして眼を覺すと、雨が降つてゐた。空氣が濕つたので臭氣が殊に強くなつた。こんな臭い、こんな寒いところに一夜を明すことは兎ても出來んと德三は思つた。四邊はしいんとして、向ふには姉の家の軒燈が、雨を帶びた若葉の中に寂しく光つた。德三は寒さに慄へながら立ち上り、姉の家に忍び込んで押入れの中でゞも寢やうと考へた。

彼れは垣根を破つて潛り込み、足音のせぬやうに軒下まで歩み寄つて、雨に濡れた頭や顏を拭いた。て、暫く其處に立つて、家の内の樣子を窺つてゐたが、雨の音に妨げられて能く分らなかつた。農家造りの外椽側の家で、去年初めて來た時に、便所の方へ通ふ戸と家根裏との間が一尺も空いてゐるのを見て、泥棒が入りはしないだらうかと氣遣つたのを思ひ出し、意を決して其の隙間から戸を越えて、便所の前に忍び下りた。夜だけは内へ取り込んである鐵製の手水鉢の中へ片足を突ツ込んで、ガタンと音を立てたので、德三はぶる〳〵と慄へて身體が固くなつた。濡れた足袋を脱ぎ棄てゝまた樣子を窺ふと、一家はもう寢たらしかつた。

德三は更に中の入口の戸を引つ張つてみた。其處には締りが無くて、スル〳〵と開いた。中は廊下のやうな長四疊で、夫婦の平常着なぞが脱ぎ棄てゝ置く室になつてゐることを、德三は熟く知つてゐた。彼れは暗に蹲つて、次の室の氣色を窺つた。隔ての襖の隙から豆ランプらしい弱い光が漏れて、此方の押入れの戸に縱の一文字を引いた。次の室が八疊の坐敷で姉夫婦の寢床のあることも德三には分つてゐた。微な寢息が聞えるやうで、脂氣のある女の肌の香が、濕つた空氣に浮んで、德三は其の低い鼻をひこつかせた。

中腰に立つと、肉を刺襲するやうな暖かな毛織物が、フワリと頭に被さつた。手を伸ばして探ると、男の外套であつた。彼れは手早くそれを柱の釘から取つて、濡れた袷せの上に着た。

男の鼾が高く聞えたので、德三は急に恐ろしさを感じた。こんなことをしてゐて若し見付けられたら

何うしやうかと云ふ不安が、假に彼れを襲ふた。彼れは周章てゝ逃げ出さうとした。さうして其の途端に宛も手に觸れた一抱への衣類を、殆んど無意識に持ち出した。

彼れは前の藁小屋まで逃げ延びて、ホッと息をついだ。後を振り向くと、姉の家は夜氣と露とに包まれて、便所の窓からは一道の燈光が虹の如く闇の雨に搖いだ。彼れは姉夫婦が早くも自分の入つたことに氣付いたのを知つてギョッとしたが、此處まで追つて來ることもあるまいと度胸を据えて、出がけに攫つて來た一抱への衣類を暗に透して調べて見た。衣類は男物の袷せに紋付の羽織を重ねたのと、品は分らぬが手觸りの柔い女帶とであつた。女帶は姉のにきまつてゐるから、窃つと持つて行つて、外椽側にでも置いて來やうかとも思つたが。また考へ直して男の着物とゝもに嵩張らぬやうにクル／＼と捲いて、外套の袖に隱してみると、人に怪まれぬだけの自信が付いたので、其のまゝ雨の中を森の小路から街道に下りて市の方に急いだ。

六

德三が郊外の姉の家へ泥棒に入つたといふことは、翌日中に親類中へ觸れ廻はされた。泥棒が德三であることは、彼れの逃げて行く後姿を、姉の夫が便所の窓から見屆けたと云ふのと藁小屋に置き遺れてあつた新しい麥稈帽子とて確められた。帽子の裏の白絹に書いてあつた T. Hayama と云ふ下手な字は、人々に德三の罪を疑はしめる餘地を與へなかつた。いよ／＼泥棒とまで成り下つては棄てゝ置くことが出來んといふので、親類中の相談會を開くことになつた。小學校敎師夫婦、鐵工場の門番を勸める

老爺、華族の仲働きをしてゐる老婆が、郊外の會社員の家に集つて、襖の汚い八疊に、會社員夫婦を合はせて、六人の顏をズラリと並べた。其の日も雨であつた。

濕つた重い空氣に煙草の煙が澱んで、眞面目臭つた六人の顏が、彫刻像のやうに各々の特色を浮き出させた。色の白い眼の細い小學教師の顏には薄い八字髯があつた、色の黑い眉の太い會社員の顏にも八字髯があつた。肉の弛んだ大きな顏の父は、煙草に噎せて咳ばかりしてゐた。痩せた母は白髮混りの小ひさな丸髷を見せて俯き氣味に細い煙管をいぢつてゐた。小學校教師の妻は肥えた膝に兩手を置いて、母に似た吊り上つた眼で人々の顏を見廻はしてゐた。一番若い會社員の妻は、束髮に白いリボンが似合つて、醜くからぬ其の顏には、處女のやうな光があつた。

「あんまり八釜しくし過ぎると、却つてこんなことになりはしまいかと私は初めから心配してゐた。お前達が只懲りさせればいゝと云つて、出て來ても寄せ付けなかつたり、會つても口をきかなかつたりするので、燒腹になつて今度のやうなことを仕出かすのです。……泥棒が若し德三であつたとしてだね……」と、母の言葉には稍疑念もあつた。

「何が八釜し過ぎるもんですか、阿母さんがそんなつもりでゐるから彼奴が墮落するんです。元はと云へば皆阿母さんが惡いんです、隱して小使錢を與つたり、嘘を吐いて無心に來れば、苦しい工面をしてお金を拵へて與つたり……阿母さんが私達のところへ、やれ朋輩の義理だとか、やれ芝居見物に誘はれて厭だが斷れないとか、主人のお供で溫泉へ行くとか云つて、お金の相談に來たのも、大抵は嘘で、

徳三に貢く爲めだつたんてせう。此方て幾ら嚴しくしても、阿母さんがせッせと墮落の入費を拵へて與るんてすもの、仕様がないぢやありませんか。……向島の投身の狂言だッて、今度の田舎行の計略だつて、彼奴の詐欺に引ッかゝつたのは、阿母さん一人ぢやありませんか、何處が好いのか知らんが、阿母さんは徳三にかゝると眼が眩んだから仕方がない。……阿母さんはまだ泥棒が徳三ぢやないと思つてるんてすか、甘いにも程がある。」と小學校教師の妻は母を睨んだ

「お前のやうに云つても仕様がない。家があんな風になつたので、碌に學校へも行かれず、小ひさい時から給仕なんぞに出されたので、ツイ私は徳三が不憫てね」と母は涙もろく折れて出た。

「なあに、家は何うでも、彼奴の心柄が惡いんてす、彼奴と一所に給仕に入つた人が今てはあの銀行て腕利きの事務員になつて、皆なに可愛がられてゐるぢやありませんか。それに彼奴は何うてす、一年と經たん中に銀行を逃げ出して、靴屋へ行く、魚河岸の問屋へ入る、呉服屋へ住み込む、それが皆半年とはお尻が落ち付かないて、朋輩に借金を拵へたり、給金の前借りをしたりして逃げるんてせう、其の度毎に親類の厄介になつて、臀拭ひをして貰つて、今度こそは辛抱するから、させるからと阿母さんまてが一所に涙を溢して、親類中の金を集めて身元保證金まて入れて、元の銀行へ勤めさして貰つたのが、何うてす、三月とは續かないて今度の始末ぢやありませんか。彼奴の云ふことは何だつて皆嘘てすから、取り上げてはいけません、寄せ付けてはいけませんとあれほど云つて置くのに、阿母さんが性懲りもなく甘い顔を見せるから、また騙されるんてす。騙されるのは仕方がないとして、其のたんびに彼奴

が墮落して行くんだから、阿母さんの甘い顔は彼奴に何より毒です。彼奴が可愛いと思ふのならこゝ一二年の間決して寄せ付けないで、尋ねて來ても突ッ放しておやりなさい。あんな意氣地無しの、馬鹿の、ブラ／＼しい奴は、始終親類で何うかして呉れるだらうと云ふ依賴心があつて、厭がられても叱られても、頭から小便を引ッかけられても、矢張ノコ／＼遣つて來るから、寧そ警察へ突き出して、監獄で苦しませるのが藥かも知れません」と、小學校敎師の妻は嵩にかゝつて母を責めた。母は默つて襦袢の袖口で眼を拭いた。

「さうだ、先妻があんまり甘くするから惡い」と父が間の拔けたボラ聲で娘に味方をした。

「阿父さん、先妻とは誰れのことです、……阿母さんのことなら、戶籍を御覽なさい、立派に葉山の妻と出てゐますよ。阿父さんは離緣したつもりでも、娘の私が承知しません」と、小學校敎師の妻は眼の色を變へて父に喰つてかゝつた。

「お力止さんか、……」と小學校敎師は妻を制して、

「偖德三の一條ですが、急に本人を探し出して、差し當り私の家にでも置いて、嚴重に監督することにでもしては如何です、……親類の家へ忍び込んでる中は辛抱も出來ますが、他人の家へ入るやうになると、自然私達の顏にまで關はるやうなことになりますから」と、分別顏に一坐を見渡した。

「結構ですな、さう願へますと」と父は一も二も無く贊成した。

「それより外に方法はありますまいな」と會社員も同意した。それを機會に會社員の妻は晚飯の仕度

にと臺所へ立つた。

「私は厭です……」と小學校敎師の妻はまた父を睨んだ。

「親のないものなら仕方もありませんが、現在父がありながら、他家へ片付いた兄弟が彼奴の世話を一手に引き受けると云ふのは筋違ひでせう」と彼女の聲は高かつた。

「幾ら親でも乃公にはあんなもの丶世話は出來ない。第一あんなものを乃公の許に置いて見ろ、何をするか分りやしない。海野に持ち逃げをされて弱つてる矢先きに、また彼奴にやられて耐るかい。」と父は首を振りながら云つた。

「阿父さんの其の根性が間違つてるのです。私の家や此家では、德三が惡いことをしたから寄せ付けないと云ふことも云へますが、阿父さんは彼奴の親ぢやありませんか、たとへ九尺二間でも阿父さんの居るところは彼奴にも自分の家ぢやありませんか、寄せ付けないと云ふことが云へますか。海野は他人ぢやありませんか、慾と色に眼が眩んで見ず知らずの他人を信用するから、あんな目に遭ふのです。他人と生みの子が一所になりますか」と、小學校敎師の妻は疊みかけて云つた。

「何がなんても乃公は厭だ」

「昔から子供に情愛のない人て、十五六にもなると、もう奉公に出したり、銀行へ住み込ましたりすることばかり考へて、子供を邪魔にするから、德三のやうなものも出來たのです」と母は情なさうな顏をして云つた。

其處へ晩飯の膳が出たので、話は途切れた。主人役の會社員は膳に添ふてゐた燗徳利を取り上げて、
「さア一つ」と先づ父に酌をした。人々は食事をしながら、また徳三のことに就いていろ〳〵と語つた。
「徳三は十四の年から女を知つてゐた」と云ふやうな話も出た。さうして、皆なが飯を終つて茶を飲んでゐるのに、父は獨り意地汚く燗徳利を振つてゐた。彼れが便所に立つた時、小學校敎師の妻は、
「ほんとに阿父さんと徳三は酷く似てる、顔から身體つきから、聲から、性質のづら〳〵しくて下劣なとこまで瓜二つだ」と云つた。
「あれて、似てゐると云はれると、兩方で厭がるから面白い」と、會社員の妻は笑つた。一坐も共に笑つたが、母だけは獨り苦り切つた顔をした。

七

其の後暫く、徳三は親類に姿を見せなかつた。
或る日の新聞に、遊廓の在る町に無頼漢の喧嘩があつて、一人の若者がナイフで脊中を斬られたと云ふ記事が見えたので、名前は違つてゐるが若しや徳三が斬られたのではあるまいかと云ふことが、親類の人々の頭に齊しく浮んだ。

（をわり）



戀二題

佐藤紅綠

其一 投書

世間には僞善者の例に乏しからぬが、僞惡者といふものは稀であらうと、S君は例の月曜會の食卓で、珈琲に濡れた口髭を手巾に拭きながら、次の事を語り出した。

其頃は私が漸やく廿歳を過ぎた位で、第二高等中學校に生徒のストライキがあつた時代て私は仙臺の某私立學校へ通ふて居た、其時數學の教師に赤尾先生といふのがあつた、生國は出雲で、語尾になといふのを付ける御國訛があるので、私共は今日は一時間にながら三十あつたとか、四十あつたとか勘定したものだ、赤尾先生は學校中での長身で、瘦せた肩が祉袢を着けたやうに薄く角ばつて居る、考へ深さうな細い眼を絶へず瞬いて講義に興が乘れば乘る程瞬きやうが激しくなる、能く人に綽名を付ける武田といふ男が電光石火先生といふ號を奉つた、先生の細君は照子さんといふ、先生の長身に引代へて照子さんは丈が

矮い、其頃は廂髪が無い、英吉利巻といふて扭ち麵麹のやうなものを後ろから扭ち上げるのが照子さんの好みであつた、髪が好いので其れが如何にも其の色の白い瓜實の明断した二つの眉に似合つて居た、美人の少ない仙臺の事とて、男女の區別なく照子さんの姿を振返つて見ぬものが無かつた、先生はもう四十に近かつたのに照子さんは其時二十八、色白と小柄の故て見た眼には五つも六つも若く見える、五尺七寸といふ赤尾先生と四尺五六寸の照子さんとの對照は、世間から何等かの冷評を受けずには濟まぬ、其れに校内ては若い奥様といふ呼聲が非常に喧しく、奥様を拜見せんが爲めに態々先生の御機嫌伺に罷出る者もあつた、私なぞは敢て其那手數を要さなかつたといふものは、同級の秋元貞次郎君が赤尾先生の玄關番てあつたのて。

先生の噂、照子さんの噂、其度毎に秋元は苦がり切た顔をして濟まして居る、中には赤面に堪えぬやうな話が出るのて折り〳〵窃と座を外す事などもある。

或時、例の武田は教場の黒板に無駄書をした事がある、先づ最初に赤尾と書いたので何が出る事だと思つて一同眼を睜つた、すると武田は先生の身振よろしく、眼をぱちくりさせて考一考し、前のを拭き消して琴瑟諧和と書いたが、次に大琴小瑟と書き、次に長琴短瑟、最後に老琴若瑟天下太平と書いた、一同拍手喝采すると、其れを拭消してAと書いた赤尾の頭字だと皆が思ふと直ぐにA＝T＋Yと書いた、これも相當に拍手を受けたが、Tは照子といふ事に想到らなかつた人々は只だ理由なしに笑つて居た、次に武田は自ら噴飯して「秋元君」と呼んだ、秋元は又始まつたといふ風に窓の外を眺めて居た顔を黒

ず劣らずの長身である、彼れはやつと窓から出して居た首を引込めて訝かしさうに黒板を眺めた。

「Mの未知數だよ」と再び武田が問ふ。

「わからんな」と秋元は沒意さうな顏をする。

「ぢや説明しやう」と武田は恁う書いた

M＝A＋T＋A

私共も何の事だか解らなかつた。

「諸君わかりましたか」と武田は假聲ていふ

「わからん〳〵」と二三人が言ふ

「はゝゝ」と笑つて武田は白墨を捨て、

「赤尾と秋元の間にTが介まつたら丁度Mの字になるぢやないか」と壇を下つた

「君は實に失敬だね」と秋元は氣色を變へて詰め寄つた。

「なにがさ」と武田は澄まして居る

「外の事なら兎も角も、奥樣と僕とを……君が……」

「奥樣と君とをか？」武田は落着いたもので白墨に穢れた指の先を洋袴の衣匣の處に拭いて居る

「爾ぢやないか、僕が何時奥樣を」

「あゝ爾か、介んだと言たのが惡いのだね、併し先生と君のやうな長身の間に奥樣が立てば中央が凹んでMといふ字になると言つたのだが、其れが君の逆鱗に觸れたのだね、惡かつたら勘辨して呉れたまへ」と武田は笑ひながらぴよこ〳〵頭を下げて「同じ一家に居るんだからな、介まる事もあるだらうさハヽヽ」

と自分の席に着いた、秋元は何かブツ〳〵言ひながら是れも席に着く、と何時の間にか赤尾先生が教場に來て居るんで一同吃驚した、先生は黒板を眤と見て

「何か冗戯かな」と言ひながら、さつ〳〵と拭いて了つた

自分の專門の事の他は凡てに無頓着なので、數學の教師といへば大抵生徒に憎まれるのだが赤尾先生丈けは何となく德望があつた。

官立と違つて私立學校には同級でも年齡の差の甚だしいのがある、肩揚の取れぬ子供つ中にモミアゲと鬚と連續しさうな爺面をした者が交つて體裁惡げに體操をしてるなど、能くある圖だ、秋元貞次郎は赤尾先生と同鄉で、彼は頗る晩學だ、我れ〳〵が漸やく廿一歲位の時に彼は廿六歲である、數の上では僅かに五歲の違だが、廿六と言た丈けで私共には十歲も違ふ位に思はれた、小兒の時には一つ年上でも餘程多いやうに感ずるものなので、實際秋元は年の上ばかりでなく、何だか怎う老人じみた、一分別ありそうな男であつた、开は彼が經歷の然らしむる處であらう、彼の言ふ處に依ると、彼れに一人の許嫁

があつた其れは同年であつた、單に許嫁のみならず既に夫婦の關係をも結んだのだとも言ふ、此點に就ては彼の語る處は毎も曖昧であつた、許嫁の女は四年前に死んだ、彼は身も世もなく悲んだ、其れから彼は病を得て殆んど足掛二年といふもの烟霞に親しんだ、其中に一人の母親を喪ひ、全く寄邊なき身の上となつた、牛乳の配達をしたり、縣廳の筆生に雇はれたり具さに艱苦を嘗めた揚句、遂に赤尾先生に救はれる事となつた。

　彼は机の抽出に一葉の寫眞を藏してあつた、其れは亡き許嫁の寫眞で、彼は人無き折を窺つては、其れを出して見るのを樂みにして居たが或時、先生の奥樣に見付かつて、其んなに戀しい人の寫眞なら何も隱して見なくとも宜い公然と出して見るがいゝぢやありませんかと言はれたので、其れから度胸を決めて机の上のニツケルの寫眞架に掛けて置く事にした、これは彼が私に語したとてである。

　見た處では極めて遠慮勝で、人と打解け難い質らしいが、其れでも時によると隨分長物語に時を移す事がある、其れは重に自分の身上話で、彼は牛乳配達の辛い事、牛乳屋の不正手段、得意先爭奪の困難、縣廳役人の怠慢、上官の横柄、小使の横着、給仕のホマチなど私共は一種の好奇心を以て同一の事柄まて喜んで聞いた、彼は進んで許婚の話になると、如何にも感に堪へぬものゝ如く幽かな吐息を交ぜて、松江宍道湖の風景絶佳な事から袖師が浦の月夜に芦の穗綿雪と散る處を二人て散歩した事やら、其の病死の時には自分は試驗準備で忙がしくて備忘錄を幾度も〳〵繰返したが如何しても頭腦へは入らず、顏が逆上あがる氣が苛々する、少し風にても吹かれたら宜からうと窓をがらりと明けると大きな月が水も

滴る許りに正面に顔を照らすのでハッと醉が覺めたやうな氣がする拍子に翼車輪の如き雁が一羽たつた一聲長く淋しく鳴いて過ぎたので、總身粟立つばかりに何かしら物の恐怖を感じた、丁度此時女の死んだといふ報知が來たなどと、彼は低い聲で其の浪慢的な話を續ける時には私共は小說を讀むよりも興味深く聞いた。

彼は恁う語り終ると毎ても私の顔を見詰めて。

「君等は若いからいゝさ、僕なんかもう老人だ、人間自分の過去を語るやうになると最終さね」……と歎息する。

或は當人の言ふ如く全く最終かも知れんと私共も思ふた、彼は始終胃病に苦んで苦味丁幾だの胃散だのといふものを飮んで居た、其の瘠せた肩と、筋ばつた手の甲と、蒼黑い顔色と、地肌が見ゆるまで薄い髮の毛と、是等を綜合すると彼はもう最終に近い。

武田の黑板事件があつてから、何人も御照さんの事を口にするものが無くなつた。

或日の事である、一通の葉書が第二年御中として舞込んで來た、葉書に曰く

「嗚呼健全なる五城義塾の校風は地を掃へり諸君知らずや校內姦通を働くものあるを願はくは帝國學生の風紀を擁護せんがために斷々乎として此の破廉耻漢を彈劾せよ今故らに其名を公にせざるべし如何となれば姦者の姓名を明にせんか、其良人たるものを傷けざるべからず、只だ一言以て判斷をなはん

「AはAの妻Tに通ぜり、Tは良人のAよりも姦夫のAを愛せり」

此の葉書を受附の手から受取たのは級長の野澤と私共四五人の居る廊下であつた、野澤はそれを武田に見せた、武田は直ぐ葉書の意味を覺つた、AとかTとかいふ符號は彼が作つたのだから。

「フン」と武田は笑つて葉書を板の間に棄てゝ行過ぎやうとした、

「まあ待ち給へ」と野澤は引止めて葉書を拾ひ

「無論虚構だらうとは思ふが、君は」

「誰が信ずるものか、ねえ山田君」と私の方を向く

「無論だ」と私が答へる

「爾すると是れは他の人に見せんで破つた方がいゝね」と野澤が問ふ

「破いて了い給へ」と武田は無造作に言て

「併し待てくれ、秋元を眼の敵にして揶揄ふのは僕だから、後日此事が知れて僕が此那葉書でも書いて秋元を中傷しやうと企てたやうに思はれては僕が迷惑するから、せめて秋元丈けには見せるがいゝ、投書者の手跡を秋元が知てるかも知らんからな、若し其れが分つたら僕は秋元に代つて其奴を制裁するさ」

平常に揶揄ひこそすれ、武田は毫頭秋元の品性を疑はないのだ。

「其れが宜からう」と相談一決した

課業が濟んでから私共四五人——葉書を見た者ばかり——が控室に殘つて葉書を秋元に見せ野澤は武

田の意のある處をも傳へた。

「誰が此那惡戲をするんだらうな」と秋元は葉書をくる〳〵と隅から卷いて、隱やかならぬ眼配りて武田と野澤をちらりと横目に見たまゝ俯向いて居る

「誰が書いたかわからんか」

「わからん」

「些も見覺がないかな」

「ない」

「此通り鉛筆て書いたのは手跡を知らせまい爲めだね」と私が言ふ

「全く爾だ」と秋元は餘程氣が落着いたらしい素振て言ふ

「困つたな」と武田は落膽する

「併し何か君が疑はれるやうな事でもあるのかい、若し何の疚しい處がなければ我れ〳〵は出來得る限りの手段を盡して此那陋劣な中傷なんかする奴を探し當てゝ制裁を加へんといかん、第一赤尾先生の名譽にも關するからな」

「疚しい處つて何があるものか」

「爾だらう」と野澤が首肯く

「無論だハヽヽ」と武田は笑つて、「君に野心があつてもTの方が大丈夫だ

「僕だつて君」と秋元が言掛るを遮つて
「第一其の面では姦通の資格が無いさ」
と武田が被せて言ふ、秋元は苦笑した。
「其れぢや手を分けて投書者を探すとにしやう」と野澤が言ふ
「ぢや此の葉書は僕が貰つて置く」と秋元が袂へ入れかけるを野澤は
「いや、僕が保管して置から、後日の唯一の證據品だから」
「爾か」と秋元は非常に大事なものを奪はれる時のやうな態度で野澤に渡したが、何か言い度さうにして又恍と考へ
「心配さして濟まなかつた、失敬」と慌だしく出て行つた、後で私共は仍且此の事件に就て相談をした。
姦通なんて問題は大問題である、私共は新聞の三面で屢々見るが、其那事はずつと大人になつてから痛痒を感ずる事で、今では殆ど他界の事のやうに思つて居たものが、突然に自分の友人――同級生――學校内に起つたので、其の不意に驚くと同時に何だか自分が急に大人になつて此那問題にも關係するのかと思ふと妙な自重心のやうな好奇心のやうな、二つのものが混交つたやうな氣がして兎も角も有り丈けの智恵を絞つて我れ〳〵の手で此問題を解決しやうと決心した。
併し私共が別れて校門を出た時には、秋元の問題は私の念頭を離れて居た、四五人寄た時には互に大事件のやうに言つたが、一人〳〵に離れると沒意らない事になつて了ふ。

私は何か他の事を考へながら土樋の方へ行掛ると其處に秋元が立て居る、私を見て
「先刻から待て居たぜ」と言ふ
「何か用だつたのか」
「僕が出てからの樣子を聞かうと思つて」
と共に歩み出す、彼れの態度は極めて活潑で、寃罪に憤つて居る人らしくはなかつた、
「て、どんな樣子だつた」
「どんなつて君、何ても無いさ」と私共の相談の話を逐一語ると彼は低い聲て
「實に怪しからん奴だ、あんな投書を、あんな」と二三度繰返して
「一體あの葉書を見たものは何人だ」と問ふ
「彼處に居た五人丈けさ」
「何、たつた五人丈け、其れ丈けか、たつた」
と言つて
「あゝ其れて宜かつた」と言ふ
「皆なに知れると困るからな」と言へば
「なあに知れだつて構はんさ、僕は俯仰恥る處がないんだから」と言葉を途切らして
「其れてあの葉書を書いたものに就て心當りがあると言てたかね」

「無いと言てたよ」

「爾だらう、其りや無からうさ、併し君奥樣は美人だね、美人て親切て、爾だ親切が過るものだから恁那事になるんだ、奥樣は僕と同じ年位に見えるからね、僕と一緒に緣日へ行くのは體裁が惡いと言ふんだよ、人が何とても言ふがいゝさ、併し寃罪といふ奴は實に癪に障るものだね」と殆んど四途路な調子て恰も酒に醉ふて居るかの如く私に見えた。

角て別れた、私は何だか秋元の不謹愼な態度に一方ならず不愉快を覺えた。

葉書の一件があつてから、武田は秋元に椰揄ふ事を弗りと止めた、私共も二三日は投書者の探索をしたもの丶全て雲を攫むやうなので忘るゝとはなしに忘れて了つた、秋元對奥樣の話は殆んど夢のやうに消え去た。

すると、或日又々投書が舞込んだ、开は各級に通じて一枚づゝであつた。一年級へのは上級生に斯る破廉耻漢を戴いて默つて居るかなどの激昂的文句もあつた。今度のは歷然と秋元や赤尾先生や御照さんの名を記してある。

私共が秘密に葬らうとした苦心も水の泡となつて、此の噂が全校に擴まつた、各級の級長が會談をした、秋元は校長室へ呼ばれた、私共は正午の休憩時間に、人目に付かぬやうにと寄宿舍の應接室へ集まつた。

私が校長室へ秋元を迎へに行た時には秋元は其處に居なかつた、控室の方へ行くと廊下やら窓側やら

に或は二十人或は三十人と黒い輪を描いて頭を寄せ合い、例の投書を讀て居る、事件は赤尾先生に關係むでる爲めか流石に大きな聲も立てず、眼を見合はして呆れたやうな顔をして居る。中には其那事は一切御構なしといつた風に、備忘錄を兩手に捧げながら眼を開いたり閉ぢたりして懸命に暗記に凝りながら歩いてるものもある、是れは多くは新入學生である。

其の群集の中を臆面なく彷徨いて居るのは秋元である、彼れは窓の處に行て外を見たり又た思ひ出したやうに衣匣を探つたり、手巾で顔を拭いたり、爾かと思ふと深い物思に沈んだやうな樣子をしたり、身の一大事を忘れたかのやうであつた。

私は恁う思つた、彼は自分に何の疚しい處のないのを示すが爲めに力めて群集の中へ入つて平氣を裝ふてるのであると。人々は氣の毒さうに彼を尻目にかける許て「飛だ御災難で」と云ふ人も無かつた、偶には「よう色男」と言て過るものもある、彼は何の意味なしに其れを見送る

私は彼を應接室へ導いた、其處に野澤や武田の他二三人が彼を待て居た、外には野球の音が聞ゆる、五月の若葉時の天氣て、球の音が氣持よく冴へて居る

「最早悠うなつては仕方がないね、君は同級會を開て辨明し給へ」と野澤が言ふ

「其那に喧ましくなつたのかな」と秋元は埃たらけの卓子に指て何やら書きながら

「併し僕は敢て自分を辯護はしたくないさ」

と附加へる

「君は構はんでも赤尾先生や奥樣が氣の毒ぢやないか」と野澤がいふ

「其れも窮だな」と煮えきらぬ返事だ

「おい他人の事ぢや無いんだよ、君の事だよ」

と武田は稍々焦れ氣味である

「併し其れは分る時には分るから」と秋元は語尾を濁らす

「秋元君」と野澤は詰態となつて、

「分る時に分ればいゝつて濟ます問題と問題が違ふんだ、君が辯解を好まんのは君に何か理由があるのだらう、僕は此間から調査した事に就て君に聞きたい事がある、いゝか失禮に當る事もあるだらうけれども腹を立てずに聞てくれ給へ、そして明らかに答へてくれ給へ第一に君の室へ奥樣が夜深も構はずに出入するといふ話は本當か」

「本當だ」と秋元は明斷答へる

「何の用だ」

「其りや用はいろ〳〵だが、用のない時にも無駄話に來られる事もあるさ」

「奥樣と君と同じ傘に入つて夜晩く清水小路を歩いて居たといふが其れは如何だ」

「其れも本當だ」

「投書で見ると奥様が君に惚れてるといふが其れは如何だ」

「さあ其れは如何だか分らんけれども奥様は親切だ」と武田の方をちらりと見る

「君には惚れてると受取れんか」

「其那事を言つたつて仕様が無いぢやないか」

「仕様があるさ、若し其那形迹があるとすれば、赤尾先生に離縁を勸告するのだ」

「でも僕の罪ではあるまい」

「無論だ、併し、其れては其那形迹があるから君が辯明に苦むんだね」

「若し惚れてるとした處て姦通には當るまい」

秋元の答辯は毫も要領を得ぬ、彼は力めて要領を避けて居るのだと私に思はれた

「僕だつて淋しいさ、僕には君等の如く親があるてなし兄弟はなし、親戚もなし便る處は奥様だけだ、奥様は親の如く姉の如く思つてるんだから自然隔てがなくなるし、其れに僕は曾て妻帶をした身だから猶更ら……奥様に親しくなるんだ」と言て仔細あり氣に口を噤んて顔を低れた、彼の例の浪漫的な情熱に富だ語りやうが少なからず私の心を動かして、姦通なるもの丶性質を忘れて單に秋元がどんな事をしても其れは同情に値するかの如く思はしめた

「大抵分つた、ねえ武田君」と野澤は落膽したらしく武田を顧みた、此時秋元の眉には一片愁いの雲もなかつた、彼は寧ろ滿足の面持て私共を見廻した。武田は默つて首肯いたが、

「其れぢや仍且奥様が秋元に憑れたのかなはあ爾かな」と此の奇蹟に驚いたらしい。

「併し葉書の差出人は」と野澤は氣が付いたらしく、衣匣から四葉の葉書を出し、と見恁う見較べた、私共も頭を突出して皆な其方に摺寄つた、過日のは鉛筆て書いてあつたが、これは一枚は黒インキ一枚は赤インキ一枚は毛筆て片假名てある、確かに同一人の書いたものとは六人とも一致した、秋元も爾だらうと言た。手迹も同一人が故らに違へて書いたのだといふ事に一致した。

「筆癖を見給へ」と武田が言ふ。

「爾だ、一枚なら分らんが三枚以上だから直きわかるだらう」と野澤は言ひながら、四枚を並べて見た、一同首を重ねて同じ方面から見下し、此字と此字と、これは態と肩を下げて、これは上へ上げてるが同じものだ、と恁ういふ風に數え出して五六十の文字を並べた時に皆なが申合せたやうに顏を見合した。

と、野澤は突然手を伸ばして秋元の衣匣に挾んである備忘錄を拔き出し、册と見較べた時私共は一樣に秋元の顏を見詰めた。

秋元は急に悶掻き出した、隱さう〱としても底から湧て來る羞耻の紅らみが既に頰を染め出した

「馬鹿野郎」と武田は秋元を撲り倒した。

秋元の姿は翌日から學校に見へない。其後彼を書生俳優の群の中て見たといふものがある。

其二　みなし兒

S君の話が濟むと、隣席のK君は次の話を述べ出した。

S君の話で、私は昔の友萩原修君を憶い出した、萩原は秋元君の如く仍且人の食客であつた。

私が萩原を識たのは、萩原の主人瀨下謙吾氏を識たのと同日であつた、其頃私は支那から歸つて職業を求て居た時て、或る知人の添書を持て瀨下氏に面會を請ふた、其時玄關て取次いたのは即ち萩原である。

玄關の呼鈴を推すと、長身は僅かに四尺位、堅縞の薄汚れた袷の上に藍縞の皺だらけの袴を穿いた小さな男がひよこりと出て出て丁寧に御辭儀をした私は其時廿一二位と思つたが、後て聞て見ると廿六であるさうだ。

主人は來客と用談中だといふので私は暫時玄關の三疊に待たせられた、此の三疊は萩原の居城である玄關口の植込と隣りの高い土塀の爲めに日光を遮られて居るので、室は陰氣に薄暗い、其れに私が入ると直ぐ障子を閉めて了つたので猶更ら鬱陶しい、何處の家ても必らず赤兒の啼く聲や、女中の笑聲、煙草盆の叩く音、但しは椽側を歩く音位は聞えるものだが、此家は殆ど無人境の如く靜かである、入口を右にして右の壁の下にキヤラコの布を掛けた机が一脚と本箱が二つ並んで、本箱は整然と蓋をしてあるが、机の上は、僅かにものを書き得る丈の餘地を殘して其處には太政官出版時代のものと覺しき西周譯の分厚な心理學が背皮の金文字を見せて、其上に革表紙の新約全書が乘せてある、其れと差向に硯箱、インキ壺、

ビスケットの鐵葉箱——内容はわからぬ——などが陣取て居る、凡が規矩整然として歪みが無い、机の下に五六種の新聞紙を重ねたのがあつたが其れすら本紙の間から附錄が食み出したり何かはして居ない。

何だか器械のやうな家庭だ、と私は思つた。暫時して萩原は赤銅掟の茶卓に溫茶を載せて持て來た、私に會釋をしたきり無言て机の前に坐つて聖書の栞のある處を披て默讀した。

軈て奥の方て大きな咳が聞ゆる、萩原！　と圖太い聲がする、ハアと言て萩原は奥へ行く、萩原の行くや來るや疊に足音が聞えない、支那の妖怪譚に幽靈や化物の女の歩く事を形容して冉々乎と書くのが多いが、萩原は正に其れだと自分は微笑むだ。

冉々乎として萩原は再び來て

「どうぞ」と言たきり先になつて行く、私も其の跡に跟いた、私が襖を入ると萩原は既に冉々乎として出て行て了つた。

主人の居室を見て私は吃驚した、未だ暑いといふ頃でもないのに椽の障子は明け放されてある、床の間には花瓶もなければ置物もない、其筈だ床の間の半ばは山なす書籍て塞がれてある、無論掛軸などの餘地を殘さぬ、十疊の眞中に卓子の脚を切り詰めたやうな大きな机が一つ、机の上とも言はず下とも言はず書籍やら雜誌やら英字新聞やら、切拔帖のやうなもの、亂暴に封を切つた狀袋、葉書、凡て混亂になつて、上を下への亂れやう、私は入口と奥の室との相違の著るしいのに呆れた。

瀨下謙吾といへば今こそ實業界に下つたもの丶其頃は××學院の校長として朝野に知られた事は諸君

も御承知の筈だ。

私の職業も此日即座に決まつた、其れは瀨下氏が主幹して居る雜誌「時代評論」は從來教育の方面ばかりてあつたものを今度から政治文學方面にも發展しやうといふので、瀨下氏は曾て私の書いた支那概論を讀んだ事があると言て私に重に政治及び歷史の方面を受持たす事となつた、其時私に紹介されたのは文學者の今西刀水といふ人だ、私は其雅號と言葉訛で直ぐ水戸の人だと覺つた。

瀨下先生は既に五十の坂を過ぎた斑白の頭の髮を短かく刈て、肥り肉の悠然した顏て、恐ろしく度の強い眼鏡を掛けて居る、一體に應揚に見えるが犯し難さは眉の間に深く刻んだ三本の皺、其れは家人が御機嫌をトする晴雨計だといふ。

先生は非常に大食で、又非常に運動家で、其れて非常に不養生て、寢る時間も起る時間も食事の時間も一定して居ない、其癖家族に對しては規律を勵行する、極めて矛盾の多い人だが、併し義務の觀念の非常に強い人て、未だ曾て約束に背いた事がない、先生の門下から豪い人が輩出するのは此爲めだと後て今西から聞いた。

雜誌の編輯室は玄關の三疊の隣の六疊て、先生は編輯の方針を聞かした上て、萬事は今西君と二人て相談してくれと言たまゝ、今日は約束があるからと出て行た。

私と今西は六疊に移つた、此處は一間の窓があつて、庭の若竹がさや〳〵と格子を打つ、日暮になると夕日が射すので眼が疲れると今西が言つた。

二人が近頃の雜誌の噂などして居ると、突然向ふの座敷でオルガンが聞えた、初めブーと言つたかと思ふと直ぐ黄色な聲が凡そ五六種も交つて破裂し出した。

「やあ」と私が驚いて窓を開けると、若竹の隙漏れに向の座敷が見ゑる、赤い帶、青い帶竹の動く度に帶の種々な色がちらつく、種々な帶の下から立縞、飛白、おりいぶ、焦茶の着物がちらつく、其下に白い足袋、灰色の足袋、小さな素足などが見える、腰から上は日除の板に遮られて見えぬ。

唄は段々面白くなつたかして金切聲が次第に高ばる、私は此聲を聞て曾日芝居で追剝に逢た女が人殺しいと長く叫んだ其聲を思ひ出した。

「何ですあれは、隣ですか」と私が問ふた

「いや內です、爾だ今日は土曜日だつた」、と今西は窓から去て椅子に掛け

「土曜には必らず彼如して家族一同讃美歌をやるのです」、といふ

「隣ぢやないんですか」と私は繰返した

「彼處は奧樣の御室です、奧樣は熱心な基督敎信者です、先生は嫌だけれども家族の敎會へ行くのは寧ろ奬勵してる方です、御覽なさいこれから祈禱が始まります」

「あゝ爾ですか」と私も窓を離れる

「實にあれても困りますな、兄姉五人の中、今に洋行中なのが男で、あとは廿二を頭に十九のと十四のと其れから今ま三つになるのと四人とも女ですからね、其間に男が出來ても皆な死で了ふんです」

と今西は再び窓の方へ寄り

「御覧なさい、祈禱が始まりました、やあ失敗つた」と言棄てゝ今西は慌たゞしく玄關の方へ行き直ぐ戻つて

「まあ宜かつた、履用を用心せんと不可ませんぜ、此間家中が祈禱をやつてる中に泥棒が這入りましてな、萩原君の靴と僕の靴と其れから萩原君が御孃樣のクリスマス贈物だといつて虎の子のやうにして居た毛絲の肱突を盜て行きました、泥棒除けの祈禱でもすればいゝのに、實際油斷がなりません」と窓の向ふを見る

「萩原君も祈禱をするんですか」と私が聲を掛ける

「爲てすとも、頗る熱心なものです」と言て彼は緩やかに敷島の煙を吹き、瀨下一家の事を私に詳説した。今の奥樣は非常な賢婦人て先生の戀女房である事、先生は同情に富て居ながら門下生に對しては獅子が其子を谷へ墮すやうな態度を執る事、萩原は意氣地なしだから一日に三度以上は必らず先生に怒鳴られる事、洋行中の息子さんには先生から一文も仕送りせぬ事第一の御孃さんを鞆音といふ事、鞆音さんは少しく腦病持ちとだいふ事、奥樣は一家の宰領を鞆音さんに任してある事、第二のは園枝て、第三のは眞澄、第四のは一字て菊子さんといふ事を聞いたが、第一が鞆音さんやら第二が鞆音さんやら何番目は何やら私には明瞭わからなかつた。

其れから今西は次に萩原の孤兒であると、十歳の時に先生に拾はれたのだといふ事抔を話し、最後に

萩原は目下靜音さんと相思ふ仲であると言つた。

「あんな小さな男が?」と私は眼を瞬つた。

「小さくても二十六だ」と今西は笑ふ。

「併し其那事を仕さうにも見えんが」といふと

「爾です、萩原は眞素目な男です、眞素目な男だから戀も眞素目です、彼れは聖徒ですからな」とにやにや唇を動かして煙草を啣へる

軈て祈禱が濟んだと見へて再び黄色な聲が天井を突き上げる、いかさま其中に呟やぐやうな折り〳〵突拍子もない聲を出すのは萩原であらう。

私と今西は再會を約して室を出た、丁度此時玄關口が騷々しくなつた、娘さん達が祈禱を終えてやつて來たのだと思つた。

と見ると萩原は玄關の式臺に腰を掛けて居る、其の頭の上に後ろから負さつて兩手を萩原の懷の處にぶら下げて身體を搖つて居るのは十五六の娘さんで、荒い紡績絣の袷に巾の狹いメリンスの赤い帶を卷き付けて、裾短かだから眞直な白い脛が膝から下は大方露はれて居る、兩足を閾に踏張つて負さつたまま萩原の背中をぐい〳〵推す度に眞黑な洗髮の毛が肩の處に波を打つ、白いリボンが覺束なく頭の眞中に止まつて居る。

「萩原やい、萩原だから御萩だ、まづい御萩だこと」とぐいと推す

「潰れます」と萩原が下から唸る。

「やあい、御萩が潰れるつて、御萩潰れろ、御萩潰れろ」

と調子を取て揺かす、泣き出しさうな顔をして萩原は蜘蛛の糸に巻かれた蠅のやうに手足をもぢ〳〵さして居たが、

「其ら先生が御歸りです」と遂と妙計を考へ出した。

「どれ」と娘さんは吃驚したが、私が今ま靴を穿きかける處なので體裁惡さうに

「噓つつき」と萩原の方に頤を突出して逃げるやうに引込んだ。

「眞澄さん〳〵」と此時勝手口の側の竹格子の硝子窓が、すうと開いた、眞白な顔と黒い廂髪と、籠目のやうな結城飛白に白い襦袢の襟、其れ等が一度に見へて、只だ若い娘さんといふ觀念丈けを私に與へた。

「眞澄さんは」と繰返す

「只今彼方へ」と萩原は自分の襟元を直しながら答へる

「爾?」と言て今度は今西君に一寸會釋をして窓を閉めた。

眼のぱつちりしてる事、唇の紅い事は印象に殘つた

門を出る時私は

「あれか」と訊く、

「あれは二番目で園枝さんといふのだ、一番目はもつと瘠せて居る」と今西が答へた。

其れから間もなく私共は全く一家族の如く親むやうになつた　今西も私も、貴方とか私とかいふ言葉の隔を撤して、君僕といふやうになり、瀬下の娘さん達とも自然戯言を言ひ合ふやうになつた。

萩原だけは私共を先輩扱して丁寧な言葉を用ひる

萩原の事務といふものは雑誌の發送、賣捌店との交渉、會計上一切の經營で、其れは實に忙がしいものだ、先づ朝に起ると郵便を調べる、編輯宛、事務宛、爲替、切手、其等を整理して帳面に附ける、其が濟むと自分の獨學に掛る、元來物覺の惡い方なので英和字彙を二度ほど手垢で擦り毀したといふに拘らず今だにアラビヤンナイトに頭を惱めて居る、午後は市内の賣捌店を廻る、序に先生の用も辨ずる、本郷から神田、銀座を廻つて牛込の宅へ歸るのだが、大抵は電車代を儉約して貯金に打込む、内で財産のあるのは萩原丈けだと瀬下先生が毎も笑ふ。

彼は自分で好い事だと思ふと必らず人に勸めるといふ博愛者で、硼酸水で眼を洗ふと大變に眼に利くといふ事を實驗してから、人を見る度に硼酸水を勸める、近頃は頻りに間食の害を説く、もう一つ彼の日課は朝夕必らず冷水摩擦をやる事である。

或る金曜日の夜であつた、今西と私は編輯締切の爲めに徹夜の意で原稿を書いて居た、先生は風邪を引いて早く寐て了つたので、家中は夜の更くると共に靜かになつて來る、秋近い頃なので、いろ〱な蟲が雨の如く啼て居る、窓の竹が思ひ出したやうに折り〱婆娑と窓を打つ、二十騎町は人通り少ない

處なので、四隣只だ死せるが如く寂しい、外は暗からうと私は思た。

　すると、今西は不圖頭を上げて、ペンの尻を唇に當てたまゝ穏かならぬ眼で屹と外に氣を配つた

「何だ」と私の聲も忍び音であつた。

「君に聞へんか」と今西は耳を欹てる。いかさま窓の外に人の跫音だ。

　私と今西は襖をそつと開ける、萩原の机に心を細めた洋燈が蚯蚓の鳴くやうな音を立てゝ薄ぼんやりと三疊を照らして居る、二人は何といふ事なしに竊かに玄關から奥庭への枝折戸の前に行た、推して見ると戸の鍵が鎖して居ないので益々不安に思つた、何日の月か知らぬが最早や西へ沒して了つて僅かに名殘の光が植込の頭丈けを撫てゝ居る、晝に見ると此處は青苔が鱗のやうに生えてる處で、萩が一面に其上に飜れてるのだ、突如に室から出たので、腋の下はぞく／＼する程冷たい、向ふの籬に一簇の白菊が咲いて居る、白菊の向ふに蹲まつて居るものを見付けた時には二人は申合したやうに腰を曲げて其處に蹲んだ、人影は石の如く動かない、彼れ亦た私共の動靜を窺つてるのだなと私は思ふた、二人は蹲みながら一歩／＼近付いた。

　軈て吐息が聞えた。

「愛する神よ」と再び息を吐く、今西は落膽したらしく私の耳に口を當てゝ何やら言つたが、其れは「萩原だよ」と言つたのだと思つて私は首肯いた。

　いかにも彼は萩原であつた、二人は默つて菊の一簇を隔てゝ耳を澄ました。

「願はくは此の僕の切なる訴を聞き給へ、若しも此事が貴方の聖旨に副はざるものならば僕をして此の悩みを忘るゝの道を教へ給へ、主よ、僕は自らの心に照らし又た彼女の心に照して此事必らずしも貴方の聖旨に逆ふものにあらずと思はれます、さらば願はくば恵みを垂れ給へ、主よ、主從の別こそあれ、養育の恩人たると養育されたる孤兒との別こそあれ、愛の泉は何人も掬び得べきものではありませぬか、僕は十歳の時より彼女の父に養はれ彼女の六歳の時より寢食を共にしました、そして貴方は二人の上に一様に愛の泉を滴らし給ひ、二人の上に……」

と言て彼は暫時息を吐いた。

「あの男がよくあんな誇大な感情的な文句を列ねる事が出來るな」と私は驚いた、軈て欷歔の聲が聞ゆる、涙に交る訴が再び逆り出した。

「主よ、此戀若し副はずば僕を御傍に召し給へ、主よ願はくは我が此思を怯めず憶せず彼女に打明くる勇氣を與へ給へ、そして明らかに彼女の胸中を聞くとを得せしめ給へ、彼女にして若し一點僕を思ふの情あらば願はくはより深くより聖く其愛を育たしめ給へ」

此處まで言て、彼の胸は餘程沈着いたらしい

「主よ、願はくは僕が恩人の上に祝福を垂れ給へ、一家の上に恵を垂れ給へ、彼女の病益々癒るべく御手を置かせ給へ、教會にある兄第姉妹に祝福を垂れ給へ、海外にある兄弟姉妹に祝福を垂れ給へ……」

「こんなに願はれては神様も嘸忙しからう」と私は口を抑えて笑を殺した。

私共二人は足音を忍んで、漸やく編輯室へ歸つた時には、腰の骨が可なりに痺れて居た
「驚いたね」と私が言ふと
「驚いたね」と今西も言ふ
「どうも、あれて見ると鮑の貝の片思ひかな」
と續ける
「兎も角も、あの熱心には感服せざるを得んね」と語つて居ると、次の室からこと〳〵音が聞ゆる、冉冉として萩原が歸つたらしい、軈て寢具を敷く音がして、襖をそつと開け
「御先に失禮を」と言て引込んだ。私は其時ちらと彼の顏を見たが、今までのやうに熱した氣振は更らにない、私は其れが不思議てならなかつた。

鞆音さんといふのは年から見ると老けた方て、細面の瘠せぎす、鼻が高く眼の切れ目が長く、其れは母の若い時を想はせる、額は狹いが襟足が長く鬢が豐滿で昔の美人繪を見るやうな氣がする、持病の故か萬事内輪てはあるが、どうかすると男ても言い兼ねるやうな事をいふ、曾時、萩原を相手に男女の生慾問題に就て議論して居たのを私が聞た事がある、其時に萩原は眞赤な顏をして例の低い調子て何か言て居た。

祈禱の立聞から一月ばかり後に私が編輯に行くと、玄關の横合に三越呉服店の箱車があつた、景氣のいゝものだと思つて中へ入ると萩原は外から今歸た許りの樣子て雑巾て足を拭いた居た、奥は珍らしく

笑聲湧くが如く、女客があるらしい。

今西も來らず、ぽつねんとして居ると、萩原が鼠色の茸形のした帽子を手に持て、私の處へ來て

「これから又行く處です」といふ

「何處へか」といふと

「仕立屋へ催促に行て、其れから料理屋へ行て、其れから……」と數え出す

「料理屋？」と尋ねると

「料理屋なんて初めて行くんですが、墮落の商賣ですからな」と帽子で自分の頭を拂ふ

「そんなに忙しいのか」

「何に、歩く事は慣れてますから、今日も午前に六軒ほど廻りました」

「何て其那に廻るのだい」

「どうも日本の商人は時間を守らないから困ります」と妙な返答をする。

「あゝ爾か」と私は構はずに編輯宛の封書を解くと

「御孃樣の結婚は日取が繰上げになりましたので、全く忙がしいんで」

と言て引込みさうにする、私は吃驚して彼の顏を見詰めた。

「御孃樣つて鞆音さんか」

「爾です」

「何處へ嫁くんだ」

「外交官で島田といふ人です、御孃樣の爲めには實に幸福です」

「あゝ爾か」と私は呆れて再び彼の顏を見た。

「大學を出て間もなく領事になつた人ださうですから餘程俊秀る人なんでせう」

「爾だらうね」

「貴方は料理屋へ行た事がありませうね」

「うむあるさ」

「肴を誂へるんですが電話で爾言たら此方へ來るでせうか、可成は爾したいんだけれども」

「其りや來るとも」

「爾でせうか」と安心したらしく

「嫁道具といふものは實に品數の多いものですな、僕は驚きましたぜ、ゴムの垢摺りといふのは何處にもありませんが、何處へ行たらいゝでせう」

「君が行くのか」

「え、女のものを買ふのは面白いものですな」

「爾かね」と私が取合はぬを見て

「ぢや行て參ります」と引込んで了つた。

「あんな祈禱までして居たのに面白半分に嫁道具の使に出歩りく、ゴムの垢摺のある店を探し廻るとは何だ」と私は腹立たしいやうな氣がして霎時考へて居ると、軈てゴシリ〳〵と禿下駄を引ずつて出て行く音が聞えた。

夕方になると萩原が歸て來た、瀨下先生の大きな咳も聞え出した。

「どうも不思議な男だ」と私は絕へず萩原の事が氣になつた、諦めがいゝのか、馬鹿なのか、但しは自分の戀を犧牲にして鞆音さんの幸福を喜んでるのか、其那事を思ふて居ると。

「萩原」と先生の大きな聲が聞ゆる。

「はあ」と次の間から出て行た、又叱られるのだなと私は思うた、一日に二三度は必らず叱られる、今西は之れを落雷と名付けた、と軈て先生の叱咤の聲、萩原のもぐ〳〵した聲が三言四言起る、其れが止むとドシン〳〵と先生の足音が近づいて、萩原の机の邊りを搔き廻す音がする

「何だこれは」と先生が言ふ

「どうも惡うムいました」と萩原が言ふ

「帳面の附けやうが分らんか、切手一枚でも財産ぢやないか」

「はい」

「郵稅を差引いて五厘丈け多かつたら何故其れを返してやらんのだ」

「郵券代用はあの・・・・」

「郵便局で一割増で金と引換へるならばの話だ、一錢の切手は一錢で替へてくれる特約があるのぢやないか、爾すると其れは不正の收入だ」

「はい忘れまして」

「氣を付け」と先生は去つたらしい。萩原は引繰り返された机の上を整理してるらしい、其れも例の極めて靜かに音を立てまいと注意してるやうに思はれた。

「萩原」と二度び先生の聲が聞える。

「はあ」と出て行く、再び何か先生に叱られて居るらしい、其れが濟むと、もう足音なしに此方へ來てるだらうと私が思つた。

すると又々先生の足音が近く聞えた。

「廣告の方はどうした」

「あの廣告は」と萩原の答が鈍る。

「行たのか行かんのか」

「はい、參りません」と今度は明斷。

「何故行かんか」

「はい」

「何故行かんのだと聞いてるんだよ」

「他に用事がありましたので」
「廣告の用事は君の用事てないのか」
「はい、つい忘れまして」
「何故忘れた」
これは無理な質問だと私が思つた、忘れたといふ事に理由のあるべき筈がない。
「あの他へ廻りましたので」
「何處へ廻つた」
「ゴムの垢摺が見當りませんので」
「ゴムの垢摺つて何だ」
「あの御孃樣の」
「馬鹿」と先生は大喝した、同時に。
「へい」と萩原は返事をする、馬鹿と言はれて返事をするのは珍らしい事だと私は思つた。
「誰が其那ものを買へと言つた」
「はい、御孃樣に賴まれまして」
「靹音か」
「はい」

「頼まれても何故拒絶せんか、雑誌の事務は君の職業だよ、いゝか、垢摺を買ふのが君の職務ぢや無いんだよ、わかつたか、自分の職を怠るやうに誰が君を教育した、君は何故其那に義務を疎末にするのだ、何故自分を疎末にするんだ。」

先生の聲は慄えて居る、ばたり〳〵と掌て本の表紙を打つ音が險しく響く。

聞きかねて私は室を飛出し、萩原に代つて謝罪をした、先生の眼には充溢の涙が漲つて居る。

「構はんてくれ給へ、自己に忠實てない奴は死ぬ方がいゝんだ」と言て先生は立ちながら泣き入つた、大きな涙がぼろり〳〵疊へ音して落る。

「實に惡うムいました」と萩原は疊に伏して泣いた。先生は默つて奥の方へ引込んだ。

「どうも濟みません」と萩原は私に御辭儀をした。萬筋の袷の折目もひしやけだ襟元から日に燒けて黒ずんだ細ひ筋が際立て慘らしい。

「私が惡いのです」と再び繰返して彼は起上つて膝の出た居前を直し、横を向いて机に兩腕を組み其上に顔を伏せた。

先生の萩原に對する態度は昔の主人と奴僕の關係同樣だ、先生は何故萩原を恁那に虐待するのだらう。恁那考へは始終私の頭を去らなかつたが、今日始めて先生の教育法を覺つた、其れて私は萩原を慰めて

「決して先生を恨み給ふなよ」と云ふと萩原は僅かに顔を起して、

「私は先生に叱られる度毎に先生が懷かしくなります、恨むなんて事があるものですか」

と言て今度は聲を出して泣いた。

私は室へ歸つた、不圖此那射照を思ふた。

「何もかも萩原が惡い事に決めて了ふ先生も先生だが、何もかも自分が惡い事に決めて了ふ萩原も萩原だ」

併し其日は先生から蕎麥の御馳走が出た、先生の落雷の度が烈しければ必ず後で御馳走が出る、今西は之れを雷の臍祭だと云つて居る。

稱音さんは結婚した、其翌年の秋は五月の纐纈帶だといふ事も聞いた。

秋雨のしよぼ〳〵降た日であつた、私は雜司ケ谷の借り座敷の窓から顏を出して、何時霽るべくも見へぬ雲の行方を眺めたり、垣根の朝顏の最早や隙間がちに衰へて、人間でいふと骨ばかりの皺手て僅かに杖に縋つてるといつたやうな蔓ばかりの垣根を何となく哀れ深く感じたりしてる處へ、表の方から番傘を重さうに差して來た者がある、雨の飛沫に袴の下の方が濡れて、足駄の爪革はパクリ〳〵と歩く度に口を開く。傘を窄めたのを見ると萩原であつた。

此頃は私は「時代評論」を止して他の職業に就て居た時分、自分の身上は多少變動したが萩原は依然として藍縞の袴で、てくり〳〵歩いて居るのかと思ふと、一層懷かしいやうな氣に打たれた。

先づ先生の安否を問ひ其れから家族の事に及び、今西君は仍且不相變ペン軸の尻を嘗めながら原稿を

書いてる事などを聞き、其れから四方山の話をしてる處へ、宿の婆さんは、三角な新聞袋に包んだ南京豆を澤山に振舞つたので、私は其れを萩原に勸めた。

「どうも間食は」と辭つて居たが何時の間にかポツリ〳〵殼を割て食べて居た。

話が宜い加減に盡きた頃、萩原は何か言ひ度氣に幾度か膝を組み直して居たが、軈て思切た風に、

「實は折入て御願があつて參りましたので」

と私の視線を避けるやうに庭の方を向いた。

「あゝ、どんな事でも僕の出來る事なら遠慮なく言ひ給へ」

「併しまあ此次にしませう」といふ。

「いゝぢやないか、此次といふより今日の方がいゝさ」

「爾ですな」と忸怩して「實は手紙を一つ書いて貰いたいんで」とちらと私の顏を見る。

「手紙？手紙なら君でも……」

「私にや書けないんです」

「爾か、何處へやる手紙か」

「なに沒意らないんですけれども」と首を低れて袴の膝頭を撫てながら、

「ラブレツターなんて」と幽かに笑を含む。

「ラブレツター？ハヽヽ」と私は笑た、笑はなければ彼が體裁惡からうと思つたので。

「妙な御願てせう」と恐る〳〵私の氣色を窺ふて居る。

「冗談だらう」

「冗談ぢやありません」と口を結んだ。

「僕は堅い文章なら書くが、其方は拙い、今西文學者に頼むがいゝぢやないか」

「文學者は」と彼も釣込まれて「あの人は不可ません」、

「何故だ」

「私が其那事を言はふものなら交ぜつ返したり冷評したり大變な騷になりますから」

「困つたな、一體相手は誰か」

「はあ」と困つて居る。

「君は信者でも戀をするのか」

「信者でも大抵やつて居ます、私はあの……」と聲が段々聞取れなくなる。

私は其の眞素面な返事が氣に入つた、彼はいかにも謹愼な態度で、

「いつか貴方が讀て下すつたハイネの詩てすな、あれを其中に入れて頂きたいんです、其れて貴方でなければ不可ませんので」

「あゝ爾か、ハイネの詩、何だらう」

「月の光と戀とを歌つた」

「あれか、あれは尾上柴舟といふ詩人の譯したものがある、それが爾だらう」と言て私は本箱から「ハイネの詩を取出して讀上げた。

てる日の影に堪へかねて
惱みがほなる花はちす
そのかしらをばうち低れて
待つなり夜を夢みつゝ

月こそ花の戀人よ
やさしさ彼れが光もて
夢より花をよびさまし
照らしいてたりそのおもわ

花は開きぬあからみぬ
しづかに空を仰ぎ見ぬ
愛のおもひの痛みより
かほりぬ泣きぬをのゝきぬ

「其れてす其れてす」と彼は私の手から詩集を取て、末の二三句を口の中て誦しながら、

「こんな本があるとは知りませんてした、其癖始終本屋へ行くのに」

「其れがあつたら、いゝだらう」と私が言た。

「てすけれども、手紙はどうか」

「相手はどんな人か」私は好奇心に誘はれた。

「貴方の御存じの人てす」と彼は私の眼を見上げて直ぐ横に外らした。

「私の知てる？」と私は私の知てる女を考へて見たが、一向其れらしいものを懐ひ出せない。

「園枝さんてす」と私が何か言はふとする前に確乎言て了つた。

「園枝さん」と私は眼を瞬つた。

「はあ」と俯向く。

「不思議な男だな」と私は胸の中て思つた。此思は丁度去年鞆音さんの嫁道具を買ひに歩いてるのを見て起つた思と同じてあつた。

「一番目に落第して二番目」と恁う口の中て言つた。

「これは貴方だから申しますので」と私の返事を促がすやうにする。言て了つたので勇氣が出たらしい。

「園枝さんなら自身に話したらいゝぢやないか、手紙なんかいかんよ」

「其れは私の口から言へません、幾度も言はう／＼と思つても、どうしても言へませんのです、其れて

私は寧ろ諦めやうと思つたのです、然ほど身體の疲れるものはありません、晝起きて居ても夢見てるやうな氣がします、私は毎日仕事を錯誤て先生に叱られますのでどうしても早く決めて了はなければ不可ません」

「そんなに急かんでもいゝぢやないか」

「はあ」と當時言ひ淀んで。

「だけれども決まらないと實際困るんです、長びく位なら死だ方がいゝと思ひます」と涙ぐんで居る。

「辛抱しきれないのか」

「はい」

「根氣がないんだね根氣が終きたら止すさ」

「其れが止されません、私は懺悔をします私は、私は女が好きです」、ときちんと膝を折直した、此人にして此の大膽な言葉は全く思掛ない。

「だけれども、園枝さんの方では、どうだらう」と私は話頭を轉じた。

「私には分りません、多分……斯、知らないと言た方がいゝです」

「其れが本當の戀だらうか、君には戀だと思へるかね」と私は何氣なく爾言た。

「戀です、姉妹のやうで爾てないやうな氣がしますから」

「爾かね」と私は彼の言た直ぐ根氣が盡きるといふ事を不思議に思つた。

不圖、
「君は現在に戀をした事は無かつたか」と言た時に、彼は愕然として眼を瞠つたが、見る〳〵顔は朱を濺た。
「そ、そんな事決してありません」
「何時か」と言たきり私は再び彼の戀は何ものであるかを深く考へた。彼も亦た何やら考へて居た。
兎も角も私はラブレッターの代筆を斷つた。彼は悄然として、其の痩せた小さな身體を大きな外套に入れて去つたが、私は其の後ろ姿を見送つて、
「哀れなる孤兒よ」と呟やいた。
翌々日彼れからの葉書が着いた。
「一昨日は失禮仕り候、南京豆食過ぎのためか一昨夜より非常な下痢を催し目下臥床罷在り候、委細は追日」
としてあつた、聖徒の墮落しかと私は胸に思つて可笑かつた、けれども其後何の消息がない。
其年も暮れて翌年の春、日露の戰爭が愈熾烈に進行して、平和克復の談が起り出した頃であつた、今朝より一通の書狀が來た。
「謹啓　陳者御互の安否を問ふより先づ彼の聖徒の消息を報告仕り候、聖徒は近頃二十日を止めて三番目の要塞砲臺に見張を付け被申出し候、從つて聖徒に先生の叱咤も少くなると益々其度を加へ申し候、目下

孃の外多血にして内冷やかなるに反し眞澄孃は御轉婆なれど同情深しとは彼の評言にて候、序に申添候眞澄孃は今年十六歲と相成り申し候、願はくは兩人の爲めに祝福を祈り給はんことを」

「不思議な男だ」と私は又も爾思つた私は今西への返書を認め、更らに萩原へ左の如く認めてやつた。

「御近狀今西君より承り申候、謹んで眞澄孃の健康を祝し申候、今度の戀若し不成功に終り候とも決して御落膽なされまじく候、後には目下幼稚園へ御通いの菊子孃相控え居候　草々」

書き終つてから私は不圖爾う思つた。

「菊子さんが年頃になる時には萩原の頭の毛が大方禿げて了ふてあらう」

和歌選

○　青山清華

この思ひたやすく君に云ひ得られむ心地せられぬ一人ある時
しばしわれ眼をは細めて灯の光四方にちるを見つめてはをる
われとわが云ふ言の葉も悲しまる捨てたる君と對ふ灯のもと
唇の顫ふをおぼゆ甘からむ彼の青空のいろ眺め入り
茫として柱に倚りぬ日のあたる庭のしめりのこちよき朝
何故に惱みきつるかそれすらも分らずなりぬ心疲れて
さま〳〵のことを思ひし思ひまたいつしか君にかへり來しかな
閉ぢし眼よ萎えし手足よわれしづによこたはりゐて今嘆きなし
今朝となれは君も忘れてある如し泣きて嘆きしさきのことばは
怨まれて罪の人としなりて夜を遲くかへるに淋しくもなし
ふとしては急ぎ忘れてならぬやう君をこゝろに描き見る日よ
これまでにいくたび吾を悔いしめしと思ふ性も父によく似る
われ一人こゝろなやめり乘合の人はまどろむ夜の汽車の中

○　梶原重雄

蒼き顏涙かれにし靑きかほひとみにうつるさは月なりき
白鳥の眼しづかにうるほへり青海にみつ春の光りに
うら家住(やず)み鉢の櫻の花散るを見てうたふてふ巧はもたず
しづやかに月いでにけむ何處(どこ)となくさびしき歌

のまたきこえくる
涸れはてゝ涙いづべきかたもなき夕ぐれもかくなげかるゝかな
かなしめど涙はかざる吾をみて空にかゝれる日のなげき知る
此頃のわがかなしさは老木の杜の大樹のきられたること
落ちはつる月をこそ見て泣きあざれよごれしかほを窓にいだして
いちはやく夕べに暮む杜の樹のすがたなつかし君よりはいと
落月の餘光に青む靄空のほのあかるさや涙ながるゝ

○　百田千里

たゝかひに破れてかへるさびしさを今日も味ふあはれなる子よ
かぎりなく熱せよと云ふわがこゝろ冷たくゐよと云ふわがこゝろ
ふと睡眠より醒めて寝床中の冷たき壁のわが影をみる
掘割の夏の夕のくらやみに對して獨り物を思へり

みなれたる君が顏なれど初夏のみどりの陰にあるときはよき
やはらかき春の光につゝまれて小鳥のごとく君は唄へり
くるしみもかなしみごとも知らぬがによそほひて立つ日のさびしさよ
みつるもの海もうれひもえらばざり胸のうつろのあまりさびしき
その云はてわが生涯をはたさむと悲しきときはいたに思ひぬ
さびしさやまことのわれを歌ひ得ずにごれる胸を抱きてある日
おそろしく心おびえて夕ぐれの街のどよみをのがれ來しかな
いかにしてまことの我をうたはんとなやみて今日も獨りすごせり――師の君に――

○　小島なす子

陽見れはわりなく涙流るゝをさもなきことにかこつけてゐぬ
うき事に堪へすは命はてぬべしたゞ靜やかに物

は思はむ

只一聲背館みかね聞きたさに物のかぎりをいひつくしたる

いつしかとたよりまつ家の明暮を山ほとゝぎす殊更に鳴く

あさやかに開きし一語をうれはしみうれしみ我ぞふる樣に泣く

物思へは我にもあらでつく息をつゝみかくして桑切り積みぬ

憐の言葉しぞけばかりにだも人伺ふをゆるさぬこゝろ

君いはず我はたいはぬ美しき謎を靜に解どけ行く哉

忘れては日に幾度か指折りぬ月日の歩みもどかしきかな

もどかしき月日の足早くりよせて明日にも君を見むよしもかな

何といふよわ／＼しさぞ天地にみ胸一つがより所なる

ぬれ／＼し松の若葉に月さして皐月つめたき丸柱かな

せき心十年の事を一日に終らむとして十たびまみき

○ 山村龍子

紫のあせたる如き色の花わづかに夏の野面飾れる

我れとても少女のたぐひ經よりぬ甘き涙は持ちつるものを

何ならぬ事より二なき御心をうたがふ迄に心弱りぬ

我れおろか戀ふる心を偽らず告ぐるをなどてかくはたゆたふ

夏は來ぬ三ひろにあ[illegible]る[illegible]の[illegible]なる文字をよみ終へし時

悲戀はさ人にいだかれいつの日かおもしにやあらぬ春の日の宿

來ます度耳いたきこと多く[illegible]何なりし汝忘れ得ぬかな

何處となく憂ひのひそむ美くしき面影に似る紅げしの花

嫌ひなる人をも笑みてむかふ[illegible]たまはらためよ神

幾百日經ぬれど君に賜はりし我喜びはよろこばしかり

女とはたゞ美くしきものとのみ思ひ給はばあやまちぞ生ふ

吾子の事しるせしのみに日記帳の定めの紙は今日も終りぬ

○　岩崎雨洋

我がうたふ悲しき歌とやゝ高き波の音とに夜はふけてゆく

なぐさむる物とては無したゞ青うなぎたる海に白鳥を見る

うす暗き海のはてより名も知らぬ鳥あまた來てわが前をとぶ

うす暗き海はいとよし悲しみの歌うたふ子にふさはしくして

日は空にかゞやきてありあゝ胸に憂ひなき子の瞳の色に似て

春の月おぼろに照れり街をゆく人のおもわのうれしき色よ

あり〳〵と眼にてそうつれ過去（こしかた）のわがおかしける罪のことごと

春は來ぬたゞ何となうなつかしき物ある心地日を仰ぐかな

君まさぬ夜はいとさびし大海に人なき船のうかべるかごと

世の中はひとり行くべきものぞとて母は少さき子に敎へけり

靜かなる海に來りぬさあれなほ耳にのれる街のひびきよ

ほゝえみて君をむかへし日もありきなど思ひつゝ眼をとぢてあり

けふもまた東より出て西に入る日輪のごと軀をば動かす

街にゐて街のひびきを人々と聞きうるまでに心なれけり

○　關本梁村

何となう心和みて日を待てば希望あるべき心地せられぬ

運命の果てふものをおもふ時死ぬより外に道なかりけり

口惜（くや）しさに死なむとおもひ計らずも賢（さか）しき我となりにけるかな

何時待しかわからぬほどのちいさなる悲しびを持つ忘れはてずて

此上になほ何物か得むといふわびしき慾をおぼえけるかな

かなしみはまた新らしう甦るただそれのみにをののきて居り

生活の全部のうちの八分を占めたる君とのみおもひ居り

今も尙小兒の如きたのしみをたのしみとして君に訴ふ

○　町田不破

心さびしさびしき我れの性ながら夕べとなれば堪へ難きかな

いと赤き月こそ昇れ世のはての悲しき闇に我れをのこして

人の世は淋しからずや白日の前にことごとさらさるゝとき

生れ乍ら目盲ひし人の物の色きくにも似たる心細さよ

寝ねながら暗き獄に運ばるゝ心安さを我が幸として

我がすかぬ性に生れて或時は好まぬ果にも口づけて見る

悲しみの一つ一つに泣きし星またよろこびの一にぞ輝る

あゝ虚し虚しと嘆く中にしも君あり君が足らへる心

○　橋口暮山

ほととぎす君遠き身は丘のべの一木に倚りて涙ながしぬ

ほととぎす生の不安にもだえつゝ涙ながせし一瞬をなく

いま月はま白くさしぬ眼あぐればあなみ窓より君が面見ゆ

新らしき愁にまたも囚はれし身を嘆けどもせん方もなし

耳に入るはまづ濤の音來よ來よとまねぐがごとし君去にてより

わが若さ奮ふと恐れチクタクと刻む一室に座する能はず

さらばわれ涙ふるひてこのつよき壓迫になほ生をほりせむ

何となく暗き心に君を見るさびしき性となりはてにける

○　伊藤双流

すみれ薔薇回想多き宵々に綴る日記のおもしろうして

耳かしてうなづきつゝもふとしてはさだかならざる君がおもざし

足らずして今日も過しつ春の日をいつまでかくて老も知らずに

○　日下天香

今日よりはわれも鍬とり田に出でゝ静かに君と秋をば待たん

数多き世のたゞ事に追はれつゝ日もなほたらず苦しさに居ぬ

故里はよき名なれどもなつかしき人等かたらず冷たき石と

○　古川ゑにす

果ての日の來と知りながら我が心なほも何をか欲りして止まず

幾人の人を思ひて幾たりの人を忘れしあゝ生に倦む

幾たりの人と語りて若干の文讀む日々の單調に飽く

○　法月紫星

ほしいまゝにふけりし頃はわれといふものを覺えぬ我ありしかな

相向きて二人ゐの〳〵ことなれる心え云はず又他をば責む

○　井出八井

野の花はみな空仰ぎ雨ばれのみづ〳〵しさを見せてかがやく

君が身をおほふばかりの大いなる情をわれはひたに欲りする

○　芹澤忠太郎

ぜんまいのほうけたる野をさまよひてうち開き見し武藏野の卷

○　下山青放

美作や久米の平に野あらしの守り火見えて世は秋に入る

○　高橋源一郎

雨の日はものみな悲しくろがねのひとやの中にゐる心地して



螢

寢ぬ家と見しは喪家や飛ぶ螢　碧雲居
水馴棹雫が飛んで螢かな　同
賣卜の灯に來れば居ぬ螢賣　同
樋漏水雨飛ぶ草の螢かな　同
雨淋し八ッ手の闇に螢ゐる　同
垣の外闇めかし飛ぶ螢かな　同
夜水守ねむき目にとぶ螢かな　同
水吹けば光るが嬉し螢籠　同
消えとんで水の上行く螢かな　同
螢賣京の夜頃を淋うす　同
古道を驛のさびれや飛ぶ螢　同
飛ぶ螢扇屆かぬ橋の上　苫の家
紙袋頒ち貰ひし螢かな　枕橋
土もろき此畦狹し飛狩　照楓

行宮に名所の螢献じけり　迷々
四つ手張る人の篝火や飛ぶ螢　蘆人
飛ぶ螢蓮の浮葉のほの見ゆる　野華
國亡びて山河猶在り飛ぶ、螢　季順
練塀の杭打つ墓場飛ぶ螢　青萍
螢見の歌妓の奢りや屋形船　水竹
旅暮れて近道暗き螢かな　冬青
螢狩京は水よし女よし　田鶴群
洲に皺のある大川や飛ぶ螢　儺川
神木の蔦に螢の光りけり　脊山
落飾のその夕淋し飛ぶ螢　猴孫
瀧しぶきしたるゝ松や飛ぶ螢　漏月
里の子の暮を螢に唄ひけり　人生
螢や幼き戀も里川の　竹幹
里の子の芝居戻りや飛ぶ螢　丁字樓
門しめに出づる納所や飛ぶ螢　瓜青魚
草枕螢名所につきにけり　溪外
千居れば萬映るなり河螢　孤梢
跨ぐには廣き門川螢とぶ　ヽ水
如茂人や門前十歩螢狩　一星
水汲めば溺るといふ沼の螢かな　蛙聲

螢賣る翁や橋の風涼し　峡花
庭一樹桐の葉裏の螢かな　佐月
飛ぶ螢とばぬ螢も草の闇　如星
山椒むしる手に這ふ晝の螢哉　樵子
藻の花の白きが見ゆる螢かな　起堂
舟入れし川の狭さやとぶ螢　四絃郎
螢狩る君に似し子の慕はるゝ　素水
夜祭の人の上とぶ螢かな　李童
苗代の苧殻斜めや飛ぶ螢　李雨
飛ぶ螢十戸の村の早や寝ねて　萍々
棚の闇に人あり螢籠　抱虎兒
御法話の寺に數ある螢かな　十七公
里寺の庫裡の灯による螢かな　北窓
張りいそぐ四つ手や土手の宵螢　養人
螢賣小路の闇に呼ばひけり　不言
汽車下りて家へ近道螢とぶ　老杉居
隣村は祭太皷や螢狩　槐山
呼べど來ぬ螢に風のある夜哉　雨圃
橋の上往來の人や飛ぶ螢　梁村
見えぬ犬を呼ぶ口笛やとぶ螢　茶青
螢狩闇の湖上に棹しぬ　春溪

飛ぶ螢笹の闇行く水の調　太郎
山裾の墓地に飛びとぶ螢かな　萩里
芋の葉の螢に畑ふまれけり　同
橋に來て帆倒す船や飛ぶ螢　郁芝
垂れ上げて風入るゝ駕や飛ぶ螢　同
螢居ると女騒がし垣の内　榴炳子
湖心亭螢飛び來る夜なりけり　同
呪ひ杉の杜の暗さや飛ぶ螢　外峰
うき人にも參らせん螢の句　同
城内の物見櫓や螢とぶ　圓黒堂
御手洗をすいと抜けたる螢かな　同
沙彌死んで寺門の草や飛ぶ螢　抽二
眞菰刈つて沼新たなり飛ぶ螢　同
對陣の闇の河とぶ螢かな　無爲坊
夜泊りの富士川船や飛ぶ螢　同
川口を返へす螢や下り船　曉川
凪の夜の海樓に來る螢かな　同
苫はねて陸と語るや飛ぶ螢　古笠
親船に風呂の煙や飛ぶ螢　同
城の名に殘る小川や飛ぶ螢　青海波
螢それし團扇や輕く袖を打つ　同

畑ありて庭なき家や飛ぶ螢　青雲
捨舟の底に水あり螢とぶ　同
町の子に螢は逃げてしまひけり　句樓
低く飛ぶ螢に町のふけにけり　同
風鈴の空しき舌や飛ぶ螢　麥門冬
螢飛ぶになほある沼と思ひけり　同
外風呂を草にこぼすや螢とぶ　燕石
相撲つて螢水田に落ちにけり　同
馬屋口の秣に光る螢かな　湖村
戀塚に飛ばぬ螢の光かな　同
河骨の葉裏に雨の螢かな　其蜩
川風や螢吹かれて船の窓　同
町中や一つ螢の高く飛ぶ　かほる
草を離れ柳にとまる螢かな　同
汽車の窓横をつい／＼螢かな　雷音
匕首落す女間者や螢狩　同
草原を灯さぬ樋や螢とぶ　破魔弓
緣日の灯に遠し螢賣　同
草の戸や草より出てゝ飛ぶ螢　小々
螢追ふて納涼の門を遠ざかる　同
捨城や細江の雨にとぶ螢　柿腸

段々の田毎の水やとぶ螢　同
とぶ螢馬市はてし里さびれ　茶畫
馬鹿のびの屋根草に居る螢かな　同
新田の水見廻るやとぶ螢　三聲
螢見る端居も病おこたりて　同
振袖にとまる螢を興じけり　桃紅
船形の籠に螢や島の長　同
さりげなく人待つ門や飛ぶ螢　方外
忘れたる水汲む闇や螢とぶ　同
行燈の柱這ふなり逃げ螢　々山
庭に干す桑の濡れ葉の螢哉　同
船庫の裏の暗さやとぶ螢　丹羽郎
そゞろ來て村の限りやとぶ螢　同
群れ螢玉となりける河心かな　尺水
水車場の高樋に草や螢とぶ　同
螢籠庭木の闇に吊るしけり　不可知
寺に入る門前橋や螢飛ぶ　同
滓に吹き落とされし螢かな　梧桐
螢とぶや橋の袂の家二三　同
納涼に螢に橋の名ありけり　大哲
思案橋もつれ柳や飛ぶ螢　同

夜網打ちに簑着て出でぬ飛ぶ螢　同
竹林を貫ぬく川やとぶ螢　糸水
墓守の市に夜々賣る螢かな　同
藪根水に濕る畑地やとぶ螢　同
賣れぬ馬曳いて戻るや飛ぶ螢　狼子
堀川のへな／＼橋やとぶほたる　同
とり入れぬ酒肆の旗かやとぶ螢　同
物怖ぢに木榴も顔や飛ぶ螢　成功
舟よせんもどちらの岸や飛ぶ螢　同
螢捕つて茶ほうじ籠も早速哉　同
乘遲る仕舞渡舟や飛ぶ螢　同
野の宮の祭行燈や飛ぶ螢　掉棠郎
數光る螢の籠や盥に吊す　同
高渡る小さき螢や藏の屋根　同
夕食や背戸田も見えて螢とぶ　同
炊ぎ水賣る島の井や飛ぶ螢　窓馬
舵子が見て時言ふ星や飛ぶ螢　同
塔裏を蓮地に飛ぶ螢かな　同
馬洗ふ後ろ我が家や飛ぶ螢　同
しづ心門田の螢見て寢まる　田千畝
うたひ女に誘はれ顔や螢狩　同

此水は御茶屋の流れとぶ螢　同
螢賣りに鈴虫の事も頼みけり　同
出水跡たま／＼螢居て淋し　琴星
一入の屋根に來て飛ぶ螢かな　同
畑の闇瓜盗人に螢とぶ　同
すいと來て螢とまりぬ釣葱　同
明日刈らん藺草の延びや螢飛ぶ　荻風
渡舟なくて橋へ廻るやとぶ螢　同
籠螢落ち殘りしを放ちけり　同
鍬鍛冶の家の灯遠し飛ぶ螢　同
筏師の言ふ命岩飛ぶ螢　鳴象
街を流るゝ川に水車や飛ぶ螢　同
舟輿を添ふ管絃やとぶ螢　同
蘆陰に舟あるさまやとぶ螢　同
京は五條人出を螢夜市かな　玄々郎
螢光る藜の泥葉や雨はれて　同
柳暗の雨に螢の飛びにけり　同
樋の口に溜り芥や飛ぶ螢　同
螢飛ぶや島の灯火早や消えし　東窓
野の墓に怖ぢて兒等來ぬ螢かな　同
里寺の門出れば田やとぶ螢　同

水亭の闇に人居る螢かな　同
螢火に彩り古りし繪卷かな　暮雨
草に寄す戀に螢を思ひけり　同
空籠をかくに一人やとぶ螢　同
とつぐこと姉にきまりぬ螢籠　同
藥のむ時をめざめぬとぶ螢　同
螢籠金魚の鉢の上に置く　五得
夜振の灯或は見えて螢かな　同
棕梠の葉の戰げば螢とび交はす　同
松ぬけて藪に消えたる螢かな　同
螢火のうつるうつらぬ潦　同
螢追ふてつまる徑や戻りけり　同
去り來る螢や堂の慈悲水に　總子
咏み古りし池の螢や狩りにけり　同
手の中の螢に籠を呼ぶ子かな　同
螢狩振袖人は舟の中　同
心願の辿る峠や螢とぶ　同
とぶ螢妹が笹眉てらしけり　同
螢狩夜振の人と語りけり　同
沼螢田舟こがせて狩りにけり　同
水雞の神祭る灯や飛ぶ螢　同
水小屋に灯を借る雨や螢とぶ　同
窓の雨一の田二の田螢飛ぶ　同

本號應募者百十二名、　句數二千三十二句

募集課題

風蘭　七月十五日締切
殘暑　八月十日締切

本誌前號發賣禁止の爲め八月號課題を得知ろに至り給はざりし方多からんと思ひ本月に限り特に締切期日を十五日に延期せり

定め

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事、
句數は一人十句以上三十句以下の事、
締切當日までに當方へ届くやう郵送の事、



出版物の取締について

星雲子

此頃になつて「發賣禁止」といふ事が俄かに多くなつたやうである。現内閣は風教の刷新といふ事を唱へてゐるから、之によつて幾分其目的を果たさんとするものであらう。いふまでもなく社會には秩序がなければならぬ。又良風美俗は之を養成助長せねばならぬ。秩序を紊り風俗を害するやうな出版物を差止める事は爲政者としては正當の事といはねばならぬ。但し何が秩序を紊り風俗を害するものであるかの事實問題になれば、之を決することなか〳〵容易でない。社會に千載變ずべからざるの制度組織あるなく、又萬古移すべからざるの風俗習慣あるでもない。歴史上の革命改革は古きものゝ悉く破壞し若くは多く變改せざるべからざるを示して居ることは勿論、社會は寧ろ毎日〳〵少しづゝ變化して居るものと見るのが適當である。而して社會には古きものを悉くよしとするものと、新らしきものを悉くよしとするものと、さう極端まで行かざるまでも何れか一方に偏れるものと、其中間を行かんとするものといろ〳〵の分子があつて、此等の分子が互に相爭うてゐるのである。然し大觀して見れば、非常にエライ人にあらざる限り、所謂當局者となれば大抵古きものを悉くよしとするの仲間に入つて了つて、新しきものは何でも危險と見えるやうになり易い。古きもの、今あるものは千載不變、萬古不易の秩序であり、良風美俗の如く見えて來て、社會は毎日推移するもの、之に適應する制度なり、文物なりも少しづゝ變形して行かねばならぬものだとの考が薄らいで來る。惡意あつてすることではないだらうが、境遇が氣を動

かすといふ事を自覺せないのは愚である。例へば坊主になれば死人あらんを望み、醫者になれば病人あらんを祈るは人間の免れ難き弱點とすれば、圖書檢閲掛にでもなれば無意識ながらに何か差止めるものがあつて呉れゝばよい位に思ふのも止むを得ぬ事であらう。當局者になれば已に頭腦が保守的になり易いのに持て來て、知らず〳〵禁止したい位の考が潜んで居るんだから、何を見ても危險なものゝ如く思はれて來るのであらう。サアさういふ人が秩序を紊り、風俗を害するものと認めて、やる仕事に向て、さらでだにいろ〳〵考の違つてゐる人間が、默從してゐられなくなつて來るのも、是れ亦止むを得ない譯である。當局者が自ら反思し、謙抑して餘り手出しをせぬ中はよかつたが、今日の如くウルサク手出しをするやうになつて來ては此發賣禁止といふ事が天下の論題となつて來るのも至當である。三宅博士は和强學堂に於てこの事を講演せられたし與謝野鐵幹氏は「二六」に於て堂々と論じられた。今後も亦之を論ずる人がボツ〳〵出て來るだらうと思ふ。

同じ一つの作物に對しても、當局者と一般の文藝に携はる人とは當然考が違ふべきものだといふ人もあるやうだが、僕はさう思はない。寧ろ兩者相一致すべきものだと思つてゐる。成程現在は違つてゐる。將來も暫らく違つてゐやう。然し社會が現想的に進んで行けば一致すべき筈のものだ。作物の與ふる感じが全體として人生を益すべきものであるか又は害するものであるかは常識に於ても一致せなくてはならぬ事と考へる。口熱甚しければ砂糖も苦く思はれることもあるが、砂糖は甘いものと意見が一致するやうに文藝の作品に對しても人間として略ぼ類似の意見を有し得べきである。今日の如く當局者に文藝の素養乏しく、作家に亦社會的良心の熾んならざる時代には互に相乖離するが如き現象を呈して居るが、之れは寧ろ變調といひたい位である。宰相にして小説を作り戯曲を作る位の例は外國には間々あるが、作ることは扨置き、主もなる作物に一通り眼を通す程のメン、オブ、カルチユアが爲

政者となるやうになれば衝突する事は今より少くなるであらうと思ふ。

人によつては極めてリベラルな者を以て出版物は何に限らず一切禁止するの要なしと說くものもある。然し之れは僕は不贊成である。何故なれば世の中には人の迷惑などは何とも思はず、唯自分さへ儲ければよい。名譽など何うでもよいといふ人間も居る。かういふ奴が劣情を挑發し、俗人を誘惑せんが爲めにどんな事をするかも知れない。そんな奴は取締る必要あること勿論である。又無名若くは隱匿してやる無責任のものは取締る必要があるが、天下に知られてる位の社會的地位を有する人が記名して責任ある出版物に作物を掲げたやうな時は放任して、社會的制裁に委ねた方がよいと說く人がある。これは僕もよからうと思ふ。立憲政治の特徵は人民の各個〱に責任を感せしめるにある。人は責任を持たせられると案外眞劍になつてやるものである。若し出版物の取締を社會の輿論的制裁に委ぬれば、其方面に對する社會の神經が鋭敏になつて、今日の警視廳以上に咎め立てするかも知れない。今日は出版物を取締るのはお役人の仕事と思つてゐるから社會は何等の責任を感ぜず、禁止にでもなれば、却て好奇心を起してワイ〱競ひ讀まうといふ風をなしてゐるのであるまいか。之について面白い例がある。日本の電車では車掌がお客を監督して、お錢を出さずに誤魔化す奴がないかと見てゐるが、米國あたりではお客が車掌を督監する、といふのは車掌はお客から錢を受取る毎に乘客數を示す器械に客が乘つたことをしるして置かねばならぬ。若しそれをしないと會社に勘定する時に、しるしをつけない丈け車掌が儲かる事になる、であの車掌がずるい事をするんぢやないかとお客の方で車掌の擧動を注視して居る相である。制度がかわるとこういふ風に物事が變つて行くのである。若し出版物に對する取締を社會民衆に委ぬれば民衆却て出版者及び作者に注意し、あんな下劣なる新聞雜誌買ふべからず、あんな下らぬ作者宜しく葬るべしなどいふ事になるかも知れないと思ふ。今日から見れ

ば何だか空想のやうにも思はれるが案外さうでないかも知れないと思はれる。

夫れから英國に於て曾てマーテルリンクの「モンナ、ヷンナ」の興行を差止めた時に、メレヂス、ハーデーなどが連名して「タイムス」に意見を掲げ、當局に向て決して差止むべきものでないといふ事を抗議した相である。日本でも文學者が少し團結してこういふ風にやつて見るのも面白いと思ふ。

然し、記名の責任ある記事は社會の制裁に放任するとか、文士が一致して團體的運動をなすとかいふ事は、今の日本にはなかなか行はれまい。暫らくの間發賣禁止といふ事が嚴乎たる一事實として存在するであらう。

從來雜誌などは大抵發賣してから五六日後若くは十日後に禁止されたもので、其れ迄には大抵雜誌が賣れて了つて、出版者も大した損失をせなかつたが、それでは禁止の効能がないといふので、今の警視總監は極めて敏速に禁止命令を發する方針を執て居る。此點流石敏腕家の名稱に愧ぢない。雜誌を止めるなら此方針でなくてはならぬ事全く異議がない。但し之に伴ふて起る弊害は檢閲の粗雜杜撰に流るゝの恐である。卒讀して表面の文字若くは外觀の事實に眩惑し左程でもないもの、若くは却て敎訓を含める如きものを慌てゝ禁止するやうな事あつては、當局の受くる批難は自業自得として諦めるとしても、侵害せられたる、蹂躪せられたる出版者及び作者の權利は如何せんとするか。我國の爲政者には人民の權利を重んずるの思想甚だ乏しい。何でも權柄づくで押し通せば當局の威嚴を保てるものと思うて居る風がないでない。是れ實に爲政の本義に違ふものと信ずる。吾輩は當局者の取締の權力と人民の權利との調和を計る爲めの一方法として假差押といふ一事を案出したのである。即ち雜誌の禁止は敏速であらねばならぬ。敏速ならんとすれば勢ひ卒讀して之を決行せねばならぬ。粗雜杜撰の見は多く卒讀に伴ひ易い。故に當局が卒讀して禁止すべきものと思ひしものは假差押をして熟讀の後其事の當否を決する

のである。此際に文壇に於て最も信用するに足る先輩三四人を顧問として其意見を參考にすることを最も望ましいがそれが出來なくても止むを得ない。當局者でも三讀四讀した上の判斷は卒讀のそれよりも必らず勝る。然し當局者はそんな面倒臭い事は出來ない。又出來ても一旦押へてから許すことが出來るものかといふかも知れない。是れ日本の爲政者の根本的謬見であつて、面倒臭いといつて不當に人民の權利を侵害して恬然として居るか、誤りを改めて正に復することを以て威嚴を損ずるものと思つてゐるやうでは誠に困つたものである。僕は現下に行ひ得べき方法としては假差押より外になかるべきを思ふのである。(完)

「姉の妹」に對する新聞雜誌の批評

「東京毎日評」 肉慾描寫といふ事が一時盛に論難せられたが、眞面に文藝を鑑賞する人々の間には素より是認せられてゐた。併しやはり肉慾の爲めに肉慾を書くと云つた風の淺薄な作品が少からずある。其の中に在つて風葉氏の『姉の妹』は肉慾の爲めに肉慾を描かず、眞面目に一面の生活と一箇の性格とを書いた近來出色の作であると思ふ。肉の巷を書いた事を以て直ちに發賣を禁止するなどゝいふ狽狽方は餘りに短見浅慮に過ぎはしないか。作の筋は若くして後家になつたお徳といふ女が殴味屋を商賣としてゐる處へ、妹で、横濱の税關に出てゐる薄給者に片附いてゐるお銀といふのが、子供を連れて東京見物に來た。其の時に大變客が立て込んで一晩だけと云ふので妹に手助を頼んだ、そして翌朝歸る時に二圓包んで妹に渡した。それが初まりて二度三度、却つてお銀の方が客に對する微妙な感情を動かす樣になつた、短い時日の事を書いたのだが、勿論お銀の家の生活が背景になつて、女子の虚榮心が非常に纖細に刻まれて書いてある。其夫に對して、其の子供に對して、又自分の生活に對して又新しい職業(?)に對して、それ〴〵感情が縮れて動いて行くところ、又一度二度の中に反省しながら、抑へがたい内心のぞゝくられるやうな樂しみ、これらの淺い婦人の情緒が餘程自然的に表はれてゐる。それ丈では問題が小さいが、小さいながらに好く纏つて氣持好く讀まれた。近來の佳作だと思ふ。(燕香)

「國民新聞評」 心理的徑路を纖細に描いた處に、世相の一片が好く顯はれて居る。唯だ女の性格が類型なのと內省的の苦悶が好く出て居ぬので深刻が足らず、且つ家庭の全體も型に入り過ぎ、全體に明る過ぎて調子が低い。(霹靂火)

「讀賣新聞評」　平凡ではあるが決して惡人ではないお兼といふ女、夫は税關の官吏の薄給者、只さへ家計の不如意であるのに女に、否寧ろ人間といふ動物に通有性のヴァニチーもある、姉のお德の誘惑に遂つて濟まない濟ないと思ひながらも、一分は夫思ひ子思ひの心も混つて遂覓道に陷ち込んで行く、その道行を極めて客觀的に自然に描寫したもの、文、事と即して渾然たる情趣が現はれて居る、淫靡と見るべき點は固よりある、が際どい所は奇麗に避けてあるのみならず、着眼點が其處に無いから毫も實感挑發の跡は無い、實感挑發が發賣禁止の目安であるなら、予は性慾描寫の作物中之は最も理想的に能く純潔なる部分に止まり得たと斷言する。大觀すれば此の世の罪惡は富と虚榮の爭から多く醸出されて居るではないか、日糖事件なども之である、此の小說中の事象の如きは正にその一幅の好縮寫圖と見てよかろう通讀して情を遣ると一段の人生の悲愁が文字の間から迫り出されて居る、風葉の作としては如何にゴタメタしても當分此れ以外に新境地を開拓し得まいと思ふから、氏に取つてのベストだと思ふ、之を禁止するとは當局者の手加減の那邊にあるかを疑ふ、事實は一種の有夫姦であるから非倫理といつたら的は外れぬ、が非倫理な事が書けぬとなつたら現代の小說を擧つて盡く德川期の勸善懲惡文學に逆戻りさせずば已むまい、故二葉亭が直ぐ渡航前の事、一露人と氣脈を通じ置き、アンドレーフ者の鋭いのを發賣禁止見込で日本で飜譯刊行し、豫想通に禁止となつたら直に海外に於て世界文壇の批評を躱はさうと目論んだといふ事だが、我當局者の厳覗みの對症療法には、其様な大袈裟な運動も或は必要かと思ふ（K T生）

「京都日の出」評　姉の妹は貧乏世帶に飽きたる平凡なる女性が自己の虛榮心と他の誘惑とに因て不知不識の間に墮落し行く徑路を作者の精緻洗練の筆を以て極めて眞面目に描寫したるものにして現代社會の不完全沒條理なる經濟組織が如何に平民の子を强ひて所謂罪惡の陷穽に擠れ幾多惨毒を流すかを說明して餘りあり流石現代的なる文學者の腦裡には最も明かに之等時代の缺陷の映ずるものあるに似たりしも常に本誌中の白眉なるのみならず近時の文壇に於ける佳作たるや疑なし、然るに當局何の怖るゝ所あつてか此篇を以て風敎に害ありとなし本誌本號の發賣頒布を禁ぜる俗吏の俗酷吏の酷復もや文壇迫害史上更に一項を加へ來る彼等の沒分曉や畢竟桀狗吠堯の類に過ぎず百千回の禁止遂に徒事に屬するは明白なりと雖も禁令の頻々たる又社會の爲文壇の爲慨す可きものなしとせざらんや、

「無名通信」評　〇〇署の刑事巡査の妻お德は、亭主が脚氣衝心でポックリ死んだ後、後家で暮してゐて、其の中に何ういふ後盾があつたか、曖昧屋を始めた。其家へ横濱の税關へ勤めてゐる薄給者へ片附いた妹のお兼が、七歳になる女の子を連れて東京見物に來た。お德はうまくお兼を引き込んで、客が立て込んでゐて困るから手助をして呉れと云つて、强ひてお兼を座敷に出した。而して翌日お兼の歸る時に二圓包んで渡した。始めて座敷に出たお兼、は生際から冷い汗が流れる程の思をしたが、二度三度無理に座敷に出されるにつれて、遂に度胸が据つて、人

擦れない客などを此方から弄ふぐらゐに爲向ける事が出來るやうになつた。これが略筋だ。始めて濁水を潜つた時には、一時苦しい思をしたが、馴れるに從つて案外平氣で其の濁水を呑むやうになるお兼の心の移り行きが、非常によく出てゐる。夫や、子供に對する感情や、座敷に出た時の感情が、非常に纎細によく描けてゐる。然し七歳になる女の子が、鳥渡も母親の行動に氣が附かずに居る所は如何だらう。兎に角此作は風葉氏近來の佳作だと思ふ。肉慾描寫と云つて肉慾の爲めに描いたやうな所は一寸もない。これを發賣禁止にした警視廳は、何うして前號の「祝杯」を默つてゐたらう。單に肉慾描寫だからと云つて、あまり狼狽へずに今少しく讀んでからにして貰ひたい、などと云つた所で警視廳には無理な注文かも知れぬ。



漫ろ言

酔美生

○西園寺侯の文士招待の時に、麥藁帽を被つて行た人は島崎藤村氏一人であつたと新聞に書いてある。今の文士は大抵生活に困しんでゐるが第一流の文士中藤村氏の如く收入少く、眞面目に倹やかに暮らしてゐる人はあるまい。吾輩に金でもあれば月々五十圓位も氏にやりたいと思ふ。西園寺侯もかういふ人には御馳走などするよりも月々いくらか宛補助する譯に行かないものか。

○平田内相と小松原文相とが主人となつて文士招待をするといふ噂がある。之を聞いた某文士の言ひ草が面白い。『西園寺さんの文士招待は何となく似合はしく感ずるが、平田小松原では何だかお門違ひのやうな氣がするれ。又例の調子で「吾々は門外漢で文學の事は一向分らぬので、諸君の御高説を承はつて置きたい」と如才なく敬意を表して置いて、そ

ろ／＼風俗のわろくなつた事を慨嘆し、「諸君にも一臂の力を假りたい」など丶オダテ、暗に筆先を加減するやうにといふ事を注意するだらう招待の時にみんなが斷はつて一人も出席せないやうだと面白がれ」といつてゐた。

○紋の助は「七月一ぱいで休業しますと」盛んに觸れ廻つてゐるやうだ。どこまで自惚が強いのか。あんな下手な義太夫語なんか癈業した方が却てヂン界の爲めであらう。

○羽左衛門の切られ與三は二幕目の慌て丶逃げ出す處の仕草が一番旨い。三幕目のゆすりの場も無論わるくないが、力の入る科白の所に來ると俄かに調子を高め過ぎて、木に竹を接いだやうになるのが疵だ。

○松助の蝙蝠安は天下の一品。いろ／＼いふ丈けが野暮であらう。

○團藏の光秀も無論わるからう筈なく、假小屋の場の鐵扇を見詰むる眼の凄さ、馬盥の場の廊下の仕草、切腹に點く態度、到底他人の及ばぬ妙はあるが十段目で、母と子の臨終の間に默々としてゐた、あのなんにもせない處が一番よかつた。動かない處に旨味を見せるやうでなくては第一流の役者といはれない。けれども僕は全體として此前の赤垣の方が味があつた。

○所謂劇評家とかいふ淺りに通を振り廻はす先生の説も左程演劇に効能あるまいが、全く芝居の智識なき人の批評も一向つまらぬものである。藝術は之を愛するの熱情と、之を研めたる智識と併せ有する人のみより眞正の助言を得るのである。

新刊批評

▲ドーソン蒙古史（第一卷）

田中萃一郎譯補
富山房發行

成吉思汗一代の偉業を中心として蒙古民族勃興の事情を說きて詳密也。ドーソンの蒙古史は斯界のオーソリチーとして定評あるもの、譯文亦明晰なれば學界を益するも尠少にあらざるべし。（定價一圓七十五錢）

▲花ことば

田寺寛二著
民明堂發行

諸種の植物についての智識を趣味あるやうに記載したるものにして文學と理學との調和を計らんといふが著者の主旨也。吾人は著者の目的の幾分か遂げられたるを認む。（定價一圓廿錢）

▲信玄と謙信

春秋蕪城著
如山堂發行

「機山と不識庵」と題して「大阪毎日」に連載せられたるものを一册としたるもの也。史的人物を藉りて著者の氣を吐けるものとも見るべく、青年の讀物とするに足る（定價六十錢）

▲俠足袋

塚原澁柿著
左久良書房發行

澁柿叢書第十一篇として出でたるもの也。現今唯一の歷史小說家なれば、歷史小說に興味を有する人には歡迎せらるべきも、文章及び結構總て舊式にして新代の讀者を喜ばすべき分子の少きを惜む（定價一圓十錢）

▲佐保姫

與謝野晶子著
日吉丸書房發行

與謝野晶子女史は明治短歌壇の鬼才なり。此篇に收めたる五百餘首、

玉石混淆にして、今少し精選せられたらばとの感なきにあらざれども、縦横の覇氣は如何なる駄作の中にも認め得べし。概していへば女史の前著に比して佳味少なきを恨とすべきも又以て短歌に志ある人の一讀に値せん(定價金一圓)

▲小説勞働　木下尚江著　昭文堂發行

尚江氏一流の思想を書綴れる小説也。筆は次第に堀拔して、一時の如き粗雜誇張の箇處多からざるに至れるも、尚、場面と場面、事件と事件の間の隙間餘りに目立ちて、どうしても素人なりとの感あるを免れざらしむ。此點今一段の工夫を望む(定價金四十五錢)

▲山陽道中草鞋日記　伊藤銀月著　梁江堂發行

所謂草鞋日記の第三篇也。山陽一帶の地理風俗等を銀月流の筆にて記せり。處々に秀吉に對する感想を挾み、又山陽道風景論等をも試みたり。(定價金五十錢)

▲福翁訓話　三田商業研究會編纂　實業之世界社發行

慶應出身の名士百七十餘氏に對し、福澤翁より受けたる忘れ難き教訓、福澤翁の學ぶべき點、今若し福澤翁が在世ならば如何なる言行をせらるべきか、初めて社會に出らるゝ時翁より如何なる訓戒を受けられたるか等の問を發し、之に答へたるものを集めたるもの也。翁は一大偉人也。翁の研究は何人にとつても興味あり又利益あり。吾人は此篇に收められたるものを以て翁を研究し盡したりと信ぜざると共に、翁の研究に多大の材料を增加したることを思はざる能はず(定價金五十錢)

▲イカモノ　内田魯庵著　前川文榮閣發行

收むる所短篇四つ、孰れも諷刺たつぷり、十分手答へのある痛快の筆、特に會話の巧妙にして自然なる、此かる修辭なや形式内容の過不及なき調和と言ふべきものだろうと思ふ、マウパッサンその他の燒直して飜譯とも飜案とも付かぬものとは著者自らの選ぶる所だが、兎もあれスッグリ創作としても味はるべき佳い作である、附錄二篇是れ亦著者の時事問題に觸れたる文藝談でその犀利なる眼識が現れて居る(定價金八拾五錢)

▲作と評論　坪内雄藏著　早稻田大學出版部發行

作にはエニスの商人、新曲常闇、喜劇「登ろ〳〵」の三篇がある、其中喜劇だけは左程にも思はぬが、自餘二篇は實に老功な筆遣ひ、此作者ならでは現はし得ぬ一味の情韻と聲調とを有して居る、評論には希臘古代の演劇に就いてより以下二十三篇が收まつて居るが、その大部分は劇、若くは劇を中心として之に關係の多き藝術に就いての意見である、流石は全幅の精神をその方面に傾注せられ居る著者の事とて、言々句々仇矢は無い、讀んで教へらるゝ所鮮少て無い、(正價金壹圓四拾錢)

頁數超過の爲め新刊批評十數項は次號に組置としたり

附錄

本誌前號の發賣禁止に就て

六月一日發行の本誌は、其所載小說小栗風葉氏作「姉の妹」が風俗を害するものなりとの廉にて、同日午後九時警視總監龜井英三郎の名を以て發賣及び頒布を禁止せられたり。

發賣當日の出來事なる上、地方にも早く手を廻して取押へたる模樣なれば、平素本誌を愛讀せらるゝ諸彥にして同號を手に入るゝ能はざりし人も少からざりしならん、吾人は深く之を遺憾とし、且つ深く謝せざるべからざる也。

「姉の妹」の文藝上の價値及び果して風俗を害すべきものなりや否やは、次に掲ぐる諸名家の高見及び評論欄に載錄したる新聞雜誌の批評之を證して餘りあるを以て吾人敢て茲に之を呶々せず。只一言したきは、世間往々本誌所載の小說を、其取扱へる材料其物にのみ注目し、是れ世人の好奇心を釣らんとするものなりと思惟し又は言明するものあり。現に五月號所載小說永井荷風氏作「祝盃」の如き右の趣意に出でたりとなすものあり、殊に甚しきは「祝盃」の處々に置きたる伏字は、何でもなき箇處に○○を附けて讀者の好奇心を惹きたるものなりといひ、あれにて大當りを占めたれば次號には更らに盛んに伏字を置きたるヒドイものを載すべしなど誣ひたるものあり。吾人は其誣妄の餘りに甚しきに惘れもし、又笑止にも感じ、かゝる誣妄の記事を揑造して自ら恥ぢざる記者の良心の痲痺にも驚きたる次第なるが、更らに驚きたるは、警視廳の今回の擧は、かゝる記事を信じて本誌の發行を今か〳〵と待受け、發行するや否、直ちに小說に目を附け、「姉の妹」の材料好ましからぬ故、扨こそ御坐んなれと、慌てゝ發賣禁止の命令を發したるものなりとの噂あることと是れ也。若し此噂を眞なりとすれば其輕躁や驚くべし、若し眞ならずして熟讀したりとすれば其沒眼識や惘れむべし。龜井總監は敏腕家の聞えある人也。成程雜誌を取押へたる手腕は機敏なりとい

ふべし。併しながら斯くの如き輕躁か又は沒眼識より生ずる機敏は人民に不利をこそ及ぼせ、天下の爲めにはならじ。抑〻又斷じて爲政者の名譽とすべきにあらざる也。勿論屬吏共の爲したる事なるべけれど、其責の歸する所は總監にあるべきを以て敢て此苦言を呈する也。

文藝の爭は多く趣味の爭也、趣味の爭は、論議を以て奈何ともなし難きこと尠からず。故に吾人は「高度(ハイアー)の常識(コンモンセンス)」に照して差支なき程度の文藝を採錄し來れり。吾人は一面、熱烈なる、文藝の崇拜者なると共に、一面、穩和なる國法の遵奉者也。故に吾人は文藝上の批判よりして何等の差支なしと見たる「祝盃」の如き佳作に向て、國法との調和を計らんが爲めに處々に伏字を置けるのみ。而かも此伏字を置くに就ては一字一句苟もせず、半日に亘て社員論議の末、辛やくにして決したる程也。「祝盃」が沒眼識なる一部人士の批難したる如きものにあらざるは、「早稻田文學」「文章世界」等最も眞摯なる文學雜誌が五月小說界の白眉なりとし、又田山花袋氏が「永井荷風君の祝盃に對する批評の中に、實際の材料の上から非難を加へたるものが可なり多かつた。私は今の讀書社會が、自然主義に對して、充分の理解が出來ぬのも無理もないとつく〴〵思つた。ヤヽ進んだ批評家でさへからうである。普通の讀者が單に作者の描く事實に興味を持つて、くだらぬ道聽塗說の種をつくつて面白がるのも止むを得ない。」(文章世界六月號)と嘆ぜられたるにても明か也。吾人は今後と雖も常に有識具眼の士を相手として文藝の事に携はらんとす。是れ本誌從來の態度にして、我愛讀者諸彥に向ては今更ら辯ずるの要を見ざれども、世には前述の如き謬見を抱くものあるを見、茲に一言を贅し置くもの也。

吾人は今回の事件につき、事の當否を法廷に訴へて、爭を當局と開くことを好まず。默して其制裁に服すべし。只天下自ら正理正論あり。故に廣く文壇諸名士の公平なる批判を乞うて之を次に揭げ、茲に吾人の態度及び所感を記して、世間具眼者の諒察を仰がんと欲するのみ。

反省社同人

「姉の妹」の發賣禁止に對する諸名家の意見

はしがき

「姉の妹」を掲載せる本誌前號は發賣禁止となれり。依て次の如き書面を以て之に對する文壇諸名家の公平なる批判を仰ぎたり。以下蒐錄するもの即ち是れ。玆に謹んで貴答を賜はりたる諸名家に謝す。

謹啓時下益々御清祥奉賀候。偖而今月發行弊誌『中央公論』所載小說、小栗風葉作「姉の妹」は不幸にして當局の忌諱に觸れ、爲に發賣禁止の厄をも蒙り候が、右の作物が果して惡文藝の列に擯斥し去るべきものか否か、そは純文藝觀上、與衆をして趨跡を誤らざらしむる上に極めて吃緊の事と可申、且つ當局者の文藝取締上一の參考とも可相成と存ぜられ候間、御多忙の折柄恐縮の至に候へども、公平なる御感想をば來る十五日迄に御洩し被下度所上候。敬具。

六月十日

反省社

島崎藤村

○

拜復

『姉の妹』が發賣禁止の厄を蒙つたことを慨し、文壇諸氏の意見を徵集し發表しやうといふ貴紙の企ては、時機に適つた處置で、吾儕に取つても甚だ有益なことだと思ふ。

『姉の妹』に就いては、讀賣記者K、T氏が六月の時評で公平な意見を發表した。あれには私も同意見だ。要するに、『姉の妹』の發賣禁止は、當局者が往々にして陷る益なき心勞と、文學上の作物に對する粗雜な見解とを示したもので、文藝院を興さうといふ程の抱負を持つた爲政者の遣口とも受取れない。

吾儕の當局者に望むことは、もうすこし離れた態度で今の時代に臨んで貰ひたい、大觀する政事家の心で居て貰ひたい、そして、種々雜多な文學と思想とを包容して貰ひたいことである。明治維新を以て始つた改革の精神を忘れない爲政者ならば、區々たる一時の平和に拘泥して、社會の表面に膏藥を塗抹するごとき手段をば執るまいと思ふ。善政を行はうとするものは時代の精神を知らねばならぬ。それには青年の心をも讀まねばならぬ。一概に今日の青年を侮り、文學を墮落せりと爲し、誤れる社會の報告を信ずるがごときことは、吾儕は當局者の爲に執らぬ。文學者をして自由に人生研究の途に上らしめよ。是は必ずしも『姉の妹』にのみ就いていふのではない。

思ふに、當局者の庶幾するところは社會の秩序であつて、眞理の探求ではない。吾儕は文學上の見地よりし、當局者は爲政上の見地よりする。吾儕はベストを盡さうではないか。そして、そのベストを盡したものが社會の秩序を重んずる當局者から見て猶風俗壞亂に當ると言ふならば、進んで處罰を受けやうでは

ないか。

昨日今日の二六新聞紙上には『ゴウゴリ銅像除幕式』の記事が連載してある。露西亞は專制政治を以て聞えた國である。それですら彼の記事て見ると、如何に彼地の爲政者が人間の思想を重んじ文藝に對して深き注意を拂ふかを知ることが出來る。民衆の指導を以て任ずる吾國當局者は、彼の記事などに對して、奈何なる感想を抱くてあらう。『姉の妹』の發賣禁止を機として、當局者の一考を煩はしたいが爲に、聊か平素思ふところを述べる。六月十一日。

○　內田魯庵

「姉の妹」は此種の材を使用したるもの丶內筆路最も婉曲にして此間暗黑の消息は捕風捉影の妙を極めたれば風紀上より見て毫も寒心すべき個處なし。

○　長谷川天溪

兎角世間には小說中に描寫されたる事柄其の物を以つて小說の善惡を判定せむとする人多きには閉口仕り候「姉の妹」の如きも斯かる批評法によりて非難せられたる一例にて作其の物は寧ろ讀者をして道德的思索をなさしむる一刺戟なるべしと存じ候。

○　永井荷風

日本の小說發賣禁止については、自分は文學者としては別に何等の感想をも有して居ない。何故なれば

當局者は吾々の發表する小説を、文學、藝術として觀て居るのでない。凡て活字を以て印刷された出版物として取扱つて居るのであるから。當局者は其發賣を禁止したいと思ふものは春本でも小説でも講談筆記でも、何でも構はない、隨意に發賣を禁止する。如何なる條件如何なる方針如何なる主意に基いて禁止するかと云ふ事も今日まで明白に發表された事はないから、吾々は知る事が出來ない。又知る必要もない。つまり、小説を發表するものと此れを禁止する當局者とは各自異つた世界に立つて居る人であるから、自分は文學者としては更に言ふべき議論がないのは當然であらうと思ふ。今回中央公論の發賣禁止になつた小栗風葉氏の著作についても、自分は唯だ當局者が發賣禁止したいと思つたから然うしたのであらうと甚だ無造作に看て居る。無論此の如き事件の起るのは日本の文藝上嘆ずべき事ではあるが、然し其れは吾々少數の文學者社會だけの話で、小説其の他凡て藝術の存在を認めない國家から見れば其の位の事は有り得べき事だと思ふ。教育家は學生に小説を讀む事を禁止して居る日本に於ては、もし善良なる國民、法則を遵守する臣民であつたら、永生小説を讀むべき筈はない。さう云ふ點から論じて行くと、少くとも日本の小説全體は、國家から見れば不正な產物である、迷惑なる發生物である。不潔なる腫物に等しいのだ。かゝる國家に對して、自分は發賣禁止の是非や正否を論ずるのは當を得て居らぬと思ふ。もし眞面目に爭はうとするならば、國家と藝術と云ふ根本問題から掛かつて行かねばならぬ。さうすれば枝葉の禁止問題などは自づと改善される譯である。國家をして藝術の存在を認めさせるには、先づ國民の一個々々が藝術を解しないまでも其れに對して尊敬の念を抱くやうにならねばならぬ。藝術上の問題は同時に社會一般の問題になるやうな世の中になつて來ねばならぬ。何時になつたら然うなるべきか自分は何とも將來を豫言する資格がない。唯だ、一國にはそれ〴〵の歷史があつて、希臘は誰も知る通り藝術を喜んだ。其の文明に學

んだ今日の歐洲各國に藝術の尊ばれる事は少しも無理でない、かくあらねばならぬと自分は思つて居るばかりてある。日本には楠正成や西郷隆盛も出た、日本は飽くまで日本らしい特別の麗しい發展をなすてあらう。

○

坪内逍遙

斯樣な作をさへ禁ぜねばならぬとは究屈千萬に候善惡共にさしたる力のある作とは不存候草々。

○

千葉江東

あらゆる事象を、風致道德の上に及ぼす、利用の眼より觀ずる當局者の文藝觀と、一切に超絕して、只管に眞人生の研究に參ぜんとする、專門藝術家の文藝觀とが、根本より異るは元より論無し、斯て小生は斯の如き目的に驀進する官憲が、其の目的を障碍する藝術を迫害するは、或は之れ有る可き事象たるを豫想し得、將た是認し得べきものと存じ候。而して歐米とは「國俗異る」我國民の、「今日の如き」思潮の時代にありて、「今日の」當局者が「姉の妹」に發賣禁止を命じたるは、以上の見よりして、充分是認すべき根據あるものと存じ候。

然れども一面に於て、曩にも申述べたる如く藝術は萬象の一切に超絕したるものに候、夫れをユーチリテーの眼より見て、面白からぬと云ふ所以を以て、眞の藝術の價値を一片たりとも害せられしと思ふは、猶ほユーチリテーの眼より見て歡迎されたりとて、天晴の傑作なりと狂喜すると其の愚を等しうするものと存じ候。然るに一度發賣禁止の事起るや江湖が藝術の權威を挾んて、呶々官憲の非を天下に鳴らさんと

する如きは、畢竟何の積りに候や、こんな事はつまらぬ事と申すよりも、寧ろ一向筋違ひの、眞に天下の無用の事と存じ候、元來官憲は官憲、藝術は藝術、互に勝手に其道を行くが好く候、道異なれば相與に謀らずとかや、兩者根本が相和すべきものでも無く、又た夫れを和さしむ可き必要も無之藝術の價値を定むるは、藝術自身以外何物も之れ無きものなればに候。

單に「姉の妹」を文藝的作品として見れば、其擇ぶべきは斯る女性の、斯る折の心理を巧妙に描きたる點にのみ有之べく候、唯だ次第に魔道に耽溺し行く動機が、或る特殊なる性格の婦人が、陷る可き悲劇として描かれず。「好くある普般型の婦人が、貧に處したる場合、貧に倦みて虛榮心を飽かしめんとする」徑路を巧みに是認し得るやうに、描寫されたるのみ、別に反感を起す程の處は無きも、猶ほ多少の興味を以て描かれし個所あり、且つ其の根底に横はりて、何等の深く人生を提斷し、暗示する處無き、要するに巧みに描かれたる調子の低き作物と申す外無之を憾み申候のみ。若し夫れ發賣禁止と云ふ如きは、此場合に於て、何等の價値をも與へざるものに御座候。

之を要するに文藝は性質として善文藝惡文藝に區別すべきものにあらず、唯藝術、非藝術に別つべきもの、而して「姉の妹」は、其品等は兎も角、立派に藝術として取扱ふべきものたる勿論に御座候。

○

守田有秋

拜復

貴誌御掲載の小說、「姉の妹」一篇が當局の忌諱に觸れたる由を傳聞し、小生は深く貴誌及小栗氏に對して同情を表せし一人に御座候。

其れに就けても小生は、當局者が果して小説を讀み得る能力と資格を有するものなりや否やを疑ひ申候。元來斯の種の創作及飜譯は各大家の手に依て既に業に幾篇となく世に公にされあるに拘らず、今となりて、俄に周章狼狽の態にて、發賣禁止を勵行せらるゝは、滑稽と云ふ可きか、醜態と申すべきか、小生頓と言句に窮し申し候。殊に同誌上に公にされある泡鳴氏の「亭主の留守宅」は何等のお咎めをも蒙らず却て風葉氏の作のみが忌諱に觸れたりとは益々滑稽に御座候。小生は二篇の中何れか禁止命令を受くべきやと假りに質問され候はんには、「後者をこそ」と申すべきに、却て前者が其の筋の忌諱に觸れたる由を聞きて、當局者が何等一定の標準をも定めずして禁止令を發せるものなるを推斷するに躊躇せざるものに候。兎に角、斯る頑迷不靈なる人々に依て文藝の取扱はれ居り候間は、到底日本文壇に大作は期待し得可らずと、只管痛嘆に堪えざる次第に候。右不取敢貴答迄。敬具

○

樋口龍峽

拜復

「姉の妹」の發賣禁止に就て卑見御求めに相成候につき一言申述候、同篇は小生も一讀仕候へどもその文藝上の價値若しくは描寫の巧拙に就ては異議も有之お兼が最初に姉の勸誘に應ずる心的經過などあまりに唐突にて物足らず又その初のお座敷にての光景など無意味の描寫が多少無分別なる血氣盛りの人間に誘惑の氣味なきにも非じとは存候ものゝさりとて極めて寛大なる小生等の道德的意識にその前號の荷風君の作または同號の泡鳴君の作ほど不快を與へ不申藤公や桂侯の艶聞が新聞記事に現はるゝが公許さるゝ限り、この篇の發賣禁止は到底腑に落ちぬ所に候、尤も當局の對文藝の態度の如きは別物故、貴誌の不幸と御あ

きらめありて、やかましく文藝上の大問題として御考究なさる値もあるまじきかと存候。匆々

○

鈴木三重吉

「姉の妹」が發賣禁止を受けたのは變だと考へてゐる。私は醜猥な破倫な事件を讀むと書き方に依ッては直ぐに胸が惡くなる方の部類にゐる者て、創作上の趣味に於ても際どい方面の事柄はいかに其れが人生の事實でも直接經驗の事態でも、さういふ方面を寫し出す事は厭て出來ない。且つ、絕對的に言へば眞價ある文藝の名を失はない限りは何事を如何樣に取扱はうがそれは作家の自由である事は勿論だが、文藝の實際の約束上、作物が文藝家又は眞實に文藝を解し得る讀者以外に、社會の產物として一般の耳目の前に開披せらるゝ以上は、作家は社會に對する道義の觀念から、「風敎」といふ事に再應の顧慮を費すべき義務を有してゐるものと信じてゐる。從來出た作中には隨分文藝の領域外に蹈み込んだ劣惡なのを見受けたと記臆する。作の體度、部分的配材、描寫の度合等に於て、只單に性慾を挑發するとか、或は醜事實を寫すといふ事其れ自身以外に何の目的もないとしか取れないやうなのが有ッたと思ふ。私はこう言ッた個人的趣味と作家の對風敎義務の主張とを持ッて、「姉の妹」が惡文藝の仲間に入れられたのを意外と考へる。此作品の文學的評價は差し當り別問題として此作は通俗の意味に於ての綺麗な事實を寫したものとは言へないが、併し私は此れに風敎上の論議に上すべき點を何所にも見出せない。當局者は「姉の妹」は風敎に危害を加へるものだといふ單なる其言葉以上に何か首肯するに足る纏ッた具體的の理由を有するのだらうか。予の目には此作の敍述的體度、部分的配材、描寫の度合に何一つさういふ方面からの非難を受くべき箇所を認めない、第一、作の體度は素直に上品に、事實の有りの儘だけを話すといふ淡白な客觀的敍體で、更に主張

的又は征討的體度を交へてゐない、平ッたく言ひ足すと「見ろこの通りだ」とか「どうだい、かうならなくては駄目だぜ」とか言ッたやうな煽動したり得意になッたり人を嗾したりする如き色合が少しも漂うてゐない。高等な文藝的體度の一つである。第二に部分的配材を見るも、作者は文藝として足りるだけの程度までに踏み止ッて、無用な局面の描出を避けてゐる。姉の内の場面、自宅の場合等の外に閨中を取り出すとか、客と巫山戯る待合の場面的活動とか、さういふ、事によッては風教上いかゞはしい結果を持ち出し得るやうなシーンを避けて一寸も寫してゐない。一ケ所か待合の場面が出てる事は出てゐるがしかしそれは、第三に移ッて言ふと、場面は使ッてあッても其場面の描寫の度合が極めて淡い。單に待合の二階へ上ッて客と對坐するといふ報告のやうなかき方て、譬喩て言ふのだが此一句が持ち來す印象以上に格別何の活現を與へてゐない。部分的取材といふ事はそれが小さくなると描寫の度合といふ事と同じになるのだが何れの小局部を探しても心的又は具象的徑路の描寫に風敎問題を生み出すに足る程深入ッた濃厚な印象を呼び起す度合の所は寸毫もない。反對の例を拵へて言へば、はじめて淫賣といふものをした、しかも人の妻女て一寸だけ盜むやうに淫賣をした女が、待ち合から歸ッて洗湯へ出て行く途中の心持ちなぞは、私が創作的趣味が下劣て且つ警視廳の干渉に觸れる事を目的として書くなら一句二句で文學的に印象の鋭どい同時に充分禁止に價する描寫をして見せる事が出來る。

こゝまで檢索した上て考へると當局の排斥する所は人の妻女が淫賣をする……淫賣といふ事實を寫したといふに存するのだらうか。まだ當局の理由を聞かないから又到底聞く事が出來ないかも知れんのだからさうだと極めて議論をする譯には行かないが、假りにそんな事だとして考へるとそれては何の理由にもならないから困る。假令へ問題は姦通だらうが局面的に强姦事件が出してあらうがそれが文藝の名に耻ぢ

ない作品で讀後人生の高尙なる理義情緒を持ち來し又は其方面に暗示を與へるものならば……單に淫慾を挑發させるばかりだとか又は其他の陋劣な或は害惡な印象を起すもので其印象以外に其作の意義はないといッた如きものでないならば、……そして前述の如く態度、排材、描寫の度合等に於て風敎を毀害する程の事情がないならば、大體上、寫出する事件其物の種類といふ事が何等の厄をもなすべき譯のものでない。これがいけないと言へば極端は「彼女は不品行の結果遂に梅毒にかゝッた」といふ一文章も此不品行、梅毒といふ文字が意味する事象のために遂に刊行物の上には載せられなくなるやうな事になッて了ふ。人間の神經は病的でない以上はいくら惡方面に對して過敏なものだッて此一句又は進んで「姉の妹」位に炎せらるゝ程發達してはゐないものである。もし病的の人間のために怖れるなら婦人の外出をも禁止しなければならない事に立到る筈だ。少し言ふ事が極端に走せたが要するに作の取扱ふ事實の種類といふ點だけでは決して風敎上の問題に觸るわけはない。私は右に辨じた理由で、「姉の妹」は禁止を喰はさなくて充分だと考へる。冒頭にも言ッた如く作家は社會に對する道德上の義務からして、出さんとする作物と風敎といふ關係に就ては一と通り考索しなければならん。同時に當局が作物に禁止を命令する心意は其根本動機に於ては正當である。しかしながら作物が確的に禁止條件に適合してるか否かの判定は充分に根底ある判斷の下に行はれないと、其正當な動機から結果が極端に行き過ぎて眞個の文藝品をまで叩き潰して了ふやうな事が起る。もしさうなッては人文發展の上の大問題である。文藝が所有る方面に向ッて其正しき名の下に恣に發達する事を阻害されて足をむしり取ッた蟹のやうな活動に止められて了ふ恐れがある。私は決して一個の「姉の妹」のためにのみ患へるのではない。正直にいふと「姉の妹」は作者に取ッては恐らく出ても出なくてもさした痛痒もない作だらう。私は小栗氏を知らないが、氏はこれが禁止されたッて反省

社の損が氣の毒だといふ事と、不當の禁止だといふ主張と、恐らくはまた文藝對禁止問題についての一般文藝の爲めの危惧の念以外には、別に體して何も爭ふ心もないだらうと推測する。又文壇も此作を失ッたからと言ッて一つの比較的小さき佳作を奪はれたと考へる位のもので、此作者を失ッた程の損害は此作一つのためには感じまい。こゝで予が少しく述べ立てたわけは此序を以てこうした、文藝の「結果から來る迫害」に對する心配を漏らすのである。何か工案をして文藝がかういふ方面に受ける危害に對して、正當な禁止を判定する設備又は手續を堅固に合理的にしたいと考へる。聞く所によれば先般朝日に連載された森田草平氏の作「煤烟」は其筋の干渉があッた爲めに本屋が出版する事が出來ないといふ話だが果して本當か。煤烟は小說的價値に於て完全無缺の作とは言はれないけれど已に定評ある如くわが明治文壇の大なる誇りの一つで後代に垂れるべき傑作である。特に私が從來の大作の最多くを壓倒してゐると考へる點の第一は媒烟を包んでゐる所の創作的體度の深重、眞實、熱誠なる點と作に示されたる文學的良心の凛烈たる事である。私はわが文壇に於てかくの如き「藝術のために盡くした崇高な苦心と努力の靈ある結晶」を見ない。これが何故に發行を禁止されるのか。讀書界は此がために正當に受くべき重大なる配當を奪はれた。私は「姉の妹」に對して私がなしたる辯護の言辭はそれに百千倍の强度と合理とを持ッて煤烟のために轉用し得るのである。もし一般社會に出すについて患ある部分を認めるといふならば作者の道義心に命令して道德上からの讓步を迫ッたら足りると考へる。たゞ漫然と全體を否定し去ッて其詳しい根柢ある理由を告げない限りは、これも茲に言ッた單なる事實の種類に捉はれてるのではないかと疑はれる。予はしかし茲にも附言せねばならぬ、決してたゞ獨り「煤烟」のためにのみ說を吐くと取られてはならない。わが文藝の前途のために當局の一考を促すのである。

感想の一。あの小說には別段發賣禁止にする程の分子なきやうに思はれたること。
感想の二。多分前號の『祝盃』の惰力ではなきかと思はれたること。
感想の三。さうすると當局者は可笑しな事をするものだと思はれたること。
感想の四。然しあの小說はあまりよき小說てなはきやうに思はれたること。
右御返事申上候。

吉井勇

○

「姉の妹」は、風葉氏の近業中、最も整へる作にして、小生は作中どこにも風俗を壞亂しさうな點を、發見いたさず候。是は思ふに、よく社會主義者をいぢめる、例の、「認定」を下したものなるべきか、而して其「認定」は、官吏の細君が淫賣をしたと云ふ點に下されたるものなるべきも、官吏の細君なればとて、食ふに困れば、いろ〳〵なことをするは、官吏ならざるもの丶細君と擇ぶ所なければ、畢竟是は、官尊民卑根性の發露かと存じ候。それに、前號の荷風氏の「祝盃」に一杯食はされたる復讐ゝ手傳へることも思はれ候

安成貞雄

○

認定を下すは、月給を貰ふ人の權利なれば、行使するとせざるとは御勝手なれど、その代りこちらでも、正式裁判を仰ぐ樣にいたし度く候。法律のとは不案內なれば、それが出來るかどうかは存ぜず、若し出來なければ英國の戯曲家團體が提議したる例に傚ひて、出來る樣にいたしたしと存じ候。

德田秋江

拜復、小栗風葉氏作「姉の妹」は、斯の如き題材を藝術化する上に於ても、或る程度まで優れたる作と存じ居り候。國家の宰相は、風が吹くにも雨が降るにも責任を感じ候とか、一社會に「姉の妹」の如き生活狀態あるは、即ちまた國家の宰相たるもの丶責任に候はずや。作家としての風葉は、即ち斯の如き社會上の陷缺を指摘し表出したるのみ。作家に其の責任なし、况んや雜誌に何の責任か、これ有り候はんや。草々

○

沼波瓊音

反省社「姉の妹」に就ての感想を求む、余は反省社と萬更知らぬ間にもあらず該小說作者小栗風葉君は余の親友の一人たり、余この小說惡文藝たるを認めむには余は親友の爲に忌避して感想を沮さゞるべし、余はこれを眞摯なる作物と信ず故に反省社の求めに應ずるなり。

妄りに淫心を挑發し或は妄りに破壞主義を說き以て或一部の讀者に阿諛する類の文藝は惡文藝なり惡文藝は發賣を禁止すべし。

眞を描くは理想の文藝なり眞を描くは必ず風教にも益あり（作者はこの方面を顧みずとも）必ず多量の敎訓を含む、淫事の連續とも云ふべき源氏物語が一國の寶典となり今も大學に講ぜらるゝはその「眞」あるが爲なり、「姉の妹」は眞摯なる態度にて眞を描きたるものなり、故に當然の結果として風敎上益ある多量の敎訓を含む、余を目して敎訓を以て文藝の價を定むる標準とする者と誤る勿れされど眞を描くものは其影として必ず敎訓の伴ふものなるは確なる事實なり、この小說の如何なる點が惡文藝の素なる、余はこれを發見せず。

無敎育なる女税關の小吏の妻たり生活頗る困難なるより以上の困難を避くる爲に夫婦間の肉交をも避け

て慘憺たる日を送りつゝありこの女肉の快樂と金錢を鼻尖につきつけられこれを得るも夫に知られずと信じたり、而して思はず一歩を墮落の坂に踏入る、墮落の坂は常に急なり限りなく彼は落ち行けり、作者はこの徑路を描けるなり。

作者は篇中何人にも同情せず何人をも嫌忌せず唯眞を描けるのみ。

作者はこの女即ちお粂が心の不安、體の不安を寫せり、これ自ら教訓を成せり。

作者は結末に俳優を現はしたり、お粂は斯くて後役者買をも覺え墮落は積極的の色を帶び來らむとする勢を明確に示したり讀者をして心を寒からしむこれ自ら教訓を成せり。

作者はこの小説に題するに「姉の妹」の名を以てせり、醜業を營む女を姉に有つ者はやはりその感化を早く受くるものなり暫時眞摯の態度をとり居たるも遂に醜き者の妹なり醜き者の血族なりとの意味にてこの名を題としたるなり、これ亦一の教訓たり、決して醜業者の血族と婚する勿れてふ教訓なり。

これを讀む女貞操を輕んじて家庭を根本より覆すに至らば、一大事なり、成程社會を毒するものなり、されどこの小説を讀み得る程の教育を受けたる者はこれによりて自戒の念を起しこそすれ惡結果を被ると無し、これを讀んで貞操を輕んぜむとする程度の女は抑初めからこの小説を讀み得る能力無き程度の女たるべし即ち不存在なり、故にこの小説は社會を毒せずと斷じ得。

余は法律を知らざれども當局者が今少し眞摯に文藝を見むを切望す、眞を寫すを目的としたるものか阿諛を目的としたるものかを判別する丈の眼識を備へむを切望す。

「姉の妹」の如き小説を讀みたる當局者は宜しく有夫の淫賣婦に就て研究し相當の處分を爲して社會の暗點を少しにても少なからしむる責任を有す、社會も亦この責任あり、なほ社會は薄給の吏に對して十分の

研究を爲し彼等をして安定ならしめむと努むべし。

眞を寫す小說は當局者に對しても社會全般に對しても敎ふる所あるものなり、警醒する所あるものなり、余は思ふ當局者は右の點に於て眞摯なる作家より恩澤を蒙るものなりと、これを思はずして、單に舞臺の淸からざるが爲に淺薄にもこの作物に迫害を加ふるは恩知らずともいはゞいはれむ。

○

野上臼川

拜復。「姉の妹」は最初一讀した時はうまひと思ひ候。風葉氏の作にては近時よく出來てる物の一つと思ひ候。內容は隨分人情を傷けるやうな事も書いてあり候へ共、そんな事を主なる題材としたもので無き事は明かに候。あれ一つを取り出して禁止するには及ぶまじく候。當局者などは餘り分る人はない事と存じ候以上。

○

服部嘉香

風葉氏の「姉の妹」が當局の忌諱に觸れて發賣禁止になつた噂を聞いて僕は少からず驚いた。丁度新聞の方へ批評を書かうと思つて社て書きかけてゐると、二面へ通信が來た。『中央公論』が發賣禁止になつたさうだと云つて社の人がみんな好奇心を以て話し合つてゐる。僕は當局者の心狀を想像して見て妙に冷笑を禁じ得なかつた。

多分「姉の妹」だらうと云ふ事であつたが、貴社のハガキで見ればやつぱり然うだ。當局者の神經過敏も呆れざるを得ない、否、當局者は寧ろ神經が痴鈍なんだ、だから相當の讀書力が無い、勿論明快な判斷力

などのあらう筈が無い。禁止にする事が決して判斷力の存在を意味してるのでは無い、盲斷だ、向ふ見ずだ。作品として「姉の妹」が六月の雜誌小說の內の佳作である事は多くの人が一致してる意見のやうだが、あれが決して風俗に害あるものとは思はれない。當局者が害せらるべく迷信してゐる社會の人は、あれに依つて初めて墮落の動機を見出す程に淸淨なものでも無い、モット立派に風俗壞亂を實行してゐるのだ。風俗壞亂を嫌ふならば、而して眞實に所謂社會風敎の墮落を憂ふるならば、まだ〲當局の力量の範圍內で決斷すべき事が澤山ある。反抗といふ事が有力に當局者を動かす事の出來ない絕對の權利であるからと云つて、盲目的に發賣禁止をしてゐては唯だ世間の物笑になるばかりだ。

「純文藝觀」などと云はないでも、よしんばあの小說が春畫の中に書かれてあつても、僕は決して風俗に害があるやうな作品で無いと思ふ。風葉氏の作としては、割合に中味のゆたかな、生活の一面を或る程度まで具象的に出し得たものと信ずる。そしてこれらの社會の空氣を、說明しないで旨く浮ばしてあると思つてゐる。女の心理にも割合に徹底した所がある、際立つてどこが旨いと云ふ事は無いが、いつもの文章で讀ませると云ふ風のものでなくて、眞面目な觀察がしてある。

「姉の妹」といふ題でも知れる通り。風葉氏はお兼と云ふ女を書かうしたものであらうが、若し淫賣宿を描いたゞけのものとしても、淫賣宿から袖の下を貰つて却つて色んな便宜を與へてゐる刑事巡査などを養成してゐる當局者の方が却つて罪が深い。「姉の妹」を發賣禁止にするならば、先づこれらの刑事巡査の首を斬つてからすべき事と思ふ。

作に付ての意見は、前に批評を書かうとした時に所感を述べた原稿があるからお目にかける。此の御返事をする時にもう一度讀み返してみると可いのだが、時間が無いから單に第一印象のまゝを申上げる。忠

實なお答て無いかも知れぬが、思つてる事は決して僞りは無い。以上。

（氏の「東京毎日」に載せたる批評は別に新聞雜誌批評掲載の頁に收めあり）

○　片上天弦

拜復。小栗風葉氏の「姉の妹」は發賣を禁止すべき程のものとも思はれませんが、又立派な作品とも思ひません。

○　岩野泡鳴

「姉の妹」は風葉氏近來の佳作だ。して有夫姦を描いたと云へば云ふものの、筆を曲げずして書いてあるだけに、それを奬勵、挑發、是認などする點がない。發賣禁止には殆と全く理由の正當なのはなからう。風葉氏が作家として注意人物だから、酷に取り扱はれるといふのでは、氏に取つて氣の毒の至りだ。

○　生方敏郎

▽小栗さんの「姉の妹」て本誌も不意に發賣を差停められたさうですネ。誠にドーもお氣の毒さまですが、人間ならあなた病みわづらひつて事も有りますさあ、ペストにでも取付かれたと觀念すりや、些とも愚痴る必要はありますまい。

▽永井君の時もださうですが、何ても素敵と迅速に手際よくやられたさうですね。全く油斷は成りませんよ。役人なんてものは悠久なお方許り（若し平民なら馬鹿とかドヂとか頓間とか云ふが相應な所でせ

う）かと思つてましたら、近頃の方は仲々凄いもんですね。尤も私と來たら禁止喰とても云はふか、ただなら見ずに通すものも「夫れ禁止されだぞ」と聞くとヂッとしては居られない。とんだ道樂とは思ひ乍らもドーにかして屹度一讀するんです。斯うした人間ばかりだつた日には折角の御禁止もへちまの皮だ。ハハ我乍ら不屆き至極ー

▽今月の小說て早稻田文學所載藤村さんの弟子に次いで面白く讀むだのは、白鳥さんの碁敵と此「姉の妹」です。花袋さんの布團に於けるが如く白鳥さんの塵埃に於けるが如く、之は最も巧に遺憾なく且つ厭味なく風葉氏の特色を發揮した作です。一體氏の作には敎へるとか刺すとか云ふ方は全く無い。從つて今度のやうに特色的に行つたものには誇張の痕は殆んど無い。唯だ描いてある。我等は唯美しいとか面白いとか云つて眺めてる丈けだ。

▽婀娜ッポイのは事實だ。挑發的に書いては無い。

▽「當局者は何故に之を咎めたか。落語や新聞の三面記事には最つと甚だしい事が澤山、而かも挑發する目的を以て挑發的に書いてあるではないか。其等を顧みずして却つて文藝を迫害せんとするは何故ぞ」とは恐らく文士及び雜誌社側の言ひ分てあらう。

▽去り乍ら挑發も程度の問題だ。女子の肉體を非常に愛好される人は、歌麿の浮世繪ても實感を起す。否、中將湯の看板を見ても或は單に女と云ふ活字を見ても堪らなく成る。若しくは女の生むだ男を見ても女の父なるお爺さんを見ても挑發される。だから當局者の肉慾に對して有する興味の深淺次第て、バイブルと雖も論語と雖も發賣禁止を命令される、つまりは爭つて見る丈けが野暮さ。

▽長恨歌を讀むと、玄宗皇帝などは柳を見ては其眉と思ひ花を見ては其唇と思つたとある。女を求むる

の子、眼を擧げて望む、天下到る處實感挑發ならざるなし、况んや風葉子の小說をや。

▽それに發賣禁止係の人だつて、苟も飯を喰つて何もせずには居られまい、例へば私にしろあの係りを拜命すれば文藝イヂリでもしなくつては第一怠屈でやりきれまいと思ふ。

▽そこで今、文藝家及び讀者雜誌社諸君の爲めに計るに三つの計がある。其第一は政府へ願つて禁止係を拂下げて貰ひ、民業にするなり全廢するなりして終ふ。之を以て上策とす。次は近頃流行の買收とやら生捕りとやら云ふ方法で、先づ禁止係を親類筋とする。そして申譯の爲めに一ヶ月一回宛禁止向きの小說を皆な持廻りて義務的に書く。此方法は近來諸方面でやつてるやうだ。之を以て中策とす。而して第三は從來の通り眞面目な作品を時たましてやられて、蔭で當局者をツベコベ言ひつつ泣寐入る。之れ勿論下の下策也。ただし上策は今日實現さるる見込みが付いてゐないから、やるなら中策がいい。表向きは善くないやうだが之が尤も容易で且つ安全である。したが其軍用金の出所は…………

○

小川未明

▽獨り此作に限らず、風葉氏の作は繪畫的だ。アート、フオア、アーツスクールである。派手やかで、柔かであるが、パッショネートでもなければ、センチメンタルでもない。勿論深刻……痛切……ともいふ鋭い處がない。從て時に輕い煽情的な部分があつても、實感を呼ぶ迄には至らぬ。是は氏の性癖にも因るが一は所謂自然主義の主張に觸れてゐないことだ。氏が世相を實寫せんとして、倘ほ霞を隔てた趣があるのは是がためだ。

▽「姉の妹」もやはりさうだ。成程幾分か脂粉の匂ひはあるが、實感を挑發する作でない。此の作を禁止

する位なら、是迄他に禁止さるべき作が幾何もあつた筈だ。怪しいのは當局者の批評眼である。何を標準に文藝を批判するか？　第一純文藝を淺薄なモラリズムで彼是言ふのが根本の間違であると思ふ。

○　吉江孤雁

當局の取締といふ事と純文藝の立場とは當分のうちは一致しがたきもの丶如く見え候、文藝の鑑賞と當局の權威が離れ〲になつて居る姿に候、批評の限りにあらずと存じ候、「姉の妹」は小栗氏の近來の傑作、本年の前半期半の佳作と存じ候。

○　野口米次郞

將來日本の藝術の價値は作其物に世界的價値なりや否で決せられねばならぬと思ふ、之を文藝のみでいふと、日本の作と世界語（英語とか其他一二の大陸語）に飜譯してみた上で其作の價値を決せねばならぬ、日本人一人たりとも風葉氏の『姉の妹』を英譯でもして見やうと思ふ人はあるまい、惡文藝などといい立てて之を擯斥する程の作とも思はないが、何も斯かる作を與かつて作るにもあたらぬし、作家に斯かる問題のみが得意とすれば風葉氏も變つた人だ、外國語で苟も文藝といはれるもの丶作中に見るとの出來ぬ材料であつたと思ふ、事實其物は日本では所謂三面雜報以上の價値がないが、其の材料で風葉氏が如何に藝術化し得たかは自分は逐次熟讀したのでないから批評は出來ぬ、大體からいふと、發賣禁止は愚であつた、然しこれは作の上からいふのでない。

○　薄田泣菫

謹啓。中央公論御登載の小栗君の「姉の妹」またしても當局の忌諱に觸れ候由小栗君と貴社とともに御迷惑の甚しきものと蔭ながら察入候其れに就いて拙生の卑見に徵せられ候へども實は毎々御惠投に與かり居候雜誌本月は遂に到着せず候ため一覽の榮をえず是非の意見申上かね候されど新聞紙の報道いたし候通りの程度にて描かれ候事ならば發賣禁止などは不條理の甚しきものと存じ候、これを機として申すには候はねど文藝にたづさはり候士は相助けてかやうなる取締に對して堂々たる運動ありて然るべき事と存じ候

林田春潮

○

發賣禁止の僻事たるは申すに及ばず、昔、幕府の頃には、如何敷書物を著はし之を板行致候ものは、版元は出版物沒收の上過料十五貫文、作者並に畫工は吟味中入牢、出牢の上各五十日の手鎖に所せられ候ひき、今は文明の世の有難さ、斯く入牢や手鎖などに所せられぬをせめてもの幸ひとして、謹んで其筋の手加減とやら申すものを遵奉仕るべきにて候か、呵々、

小杉天外

○

風葉君作「姉の妹」は其の際甚だ面白く卒讀いたし候、其の後發賣禁止の新聞に驚きそんな處が有つたか知らと小生も職業柄精讀し置かんと思ひ居候へども未だ餘暇を得ず其のまゝに致し居り候從て取まとめて感想と云ふやうなものを申上ぐる材料も出來居らず候。早々。

相馬御風

○

拜復。風葉氏の「姉の妹」が發賣禁止された事は作者並に貴誌の爲め、大にしては文壇の爲めに大に憤慨す

べき事と存じ候。あの作を讀んで悲慘な女の運命に對してさまざまな苦しい思に打たれこそすれみだらなる感などを覺える餘裕などは寸毫もなかるべきは普通の人情と存じ候。これに對して風俗壞亂などの惡名を負はす當局者の心事こそみだりがはしき至りと存じ候へ。兎に角風葉氏近來の作としては第一等の佳作とも認むべき程の此の作がかゝる災厄に遭ひ候は作者の爲め何と申候やうも無之程の氣の毒さを覺え候。

○

徳田秋聲

近來の作物に對する其筋の態度が、七八年前のそれに比べて迥かに神經質になつたのは爭ふべからざる事實である。一ト昔前の作物を取つて今の作物に比べると、作のモチーブが明かに讀者の劣情を挑發するやうな品物が澤山あつた。多少道德的觀念と云ふやうなものが交つてゐるにしても、一面には男女の劣情に興味を持つて書いたやうな厭味なものが澤山あつた。近頃の自然派の作物には、肉慾描寫はあつても作家の材料を取扱ふ態度が、昔のそれと迥に違つてゐる事は、今更らしく論ずる必要もない。にも拘らず、近頃の作物が頻々として發賣禁止の災に罹るのは、當局に初めから一定の標準のない證據で、同じ近頃の出版物の中でも、それが隨分亂調子に行はれてゐる。「姉の妹」なぞも確かに其災害にかゝつた一つで作家と出版業者の此上ない迷惑である。「姉の妹」を讀んで、多少その內容を檢べて見たものは、其筋が唯作家が取扱ふ材料と文字面のみを見て、少しも作物其物の內容、題材を取扱ふ作家の態度に思及ばないと云ふとが解る。少くとも藝術品としての作物を檢閱する仕方とは言へない。よし又、風紀取締上、それが必要であるとしても、恁云ふ風にして、一部藝術のうへに加へる當局の壓迫の如きは、今の社會全體のうへから見ると、眞に一場の兒戲に類してゐる、莫迦々々しくもあれば、滑稽でもある。

○

風葉氏の「姉の妹」の惡文藝であるか否かは只今小生には返事致しかね候併し御役所で月給三十圓若くは五十圓を頂戴し風俗に關する作物に注意する責任のある人があつたとすれば先づこれ等は當然差しとめるべき類のものと考へ候不得要領を極め候へども乍延引右まで。

戸川秋骨

○

頑冥不靈なる當局者の眼には「姉の妹」は惡文藝と見ゆべく候左れど日本の一般讀書界は少なくとも當局者よりは鑑賞眼に富み居り候へば御役人樣共が如何に壓制な眞似を致し候ても我等は平氣にて候或る女が淫賣を働きたりといふ一事で以て風俗壞亂と斷定し、作品の內容、技術の如何を顧みざる當局者は描ける美人を見て心を動かす助倍人種にて候。

佐藤紅綠

○

芳墨拜誦、貴命に依り兎も角も一應檢讀仕候、此頃の少閑を幸ひにツルゲーネフ卒業を想ひ立ちて彼是繙讀の折柄なればにや、氣の毒にも作家風葉子忽然として侏儒に化し、彼を以て人生といふ大空を伸び伸び翱翔する鵬に譬ふれば、是を以て待合といふ岩間に首を突込みて手足を踠く泥鰌にも似たりと言はざるを得ざる次第に候、待合の人生を描かずして人生の待合を描く作家ならしめば、必ずや吾人をして倒せばトルストイの短篇を讀む時の如く深酷にして面を向くべからざらしむる筈に候はずや、馴れるにつれて濁

畔柳芥舟

水を平氣に呑み行く心の推移を描くばかりては是れ果して何の意味ぞや、所詮姉の妹一篇、出すの引くのと立ち騒ぐ程のものにあらず候、寧ろ作家が始めより書かざるを可と致し候、書いたものならば自ら鼻をかみ候方然るべくと存じ候、若しまた世に發表したる以上は、時の警視總監三宅雄次郎が時の文藝院長坪内雄藏、時の文部大臣森林太郎と協議して此一小篇を鹹るとも拙者に於いて毫も異存無之候、社會は文學家のみの社會にあらざれば也。

右之通り相違無之、後日の爲め仍て如件。匆々不宜。

○

上司小劍

『姉の妹』は、風葉氏の作の中でも傑れた部に屬すると思ひました。あんな種類のことは今の世に幾らもあることで、あの描寫は純文藝觀上、毫も汚いところがないと思ふのみならず、も少し深入りして汚いところを手際よく出して貰ひたいと思ふくらゐでした。風葉氏があれを書く時に、餘程今の世の地上の權威に對して、筆加減をした痕が見えてゐます。材料に比して描寫が明る過ぎたり、事の捗びがキチンとし過ぎたりしたのも、一つは其の爲めだと思ひました。

○

青柳有美

何のこッた、馬鹿々々しい。

僕は、一體全體、小說と名のつくものは、誰の書いたものでも、特別に讀んでくれと賴まれたもの丶外には一切讀まぬ。

風葉君の『姉の妹』も、又素より讀まなかつたのだが、特に賴まれたから讀んで見た。『風俗壞亂』だといふので、大に樂みにして讀んで見た。處が何のこつた、馬鹿々々しい。

實に馬鹿々々しい。全く以て馬鹿々々しい。あんなものを『風俗壞亂』だといふて、發賣頒布を禁止した警視官憲の量見は、到底、僕のやうな凡人には察しがつかぬ。

何のこつた馬鹿々々しい。

日露戰爭の當時、露西亞の東航波ルチック艦隊は、北海で英國の漁船を日本水雷艇と誤認して砲擊を開始し、天下の物笑ひとなッた事がある。これは、神經過敏の致す處だッたさうな。

『姉の妹』を『風俗壞亂』だといふので發賣頒布を禁止するなぞは、漁船を水雷艇と間違えて砲擊したよりも、更に一層天下の物笑ひてある。大方、開卷第四行目に『〇〇署の刑事巡査』の二〇六文字があるので、警視廳の檢閱官先づぐッと上せあがり、逆上の氣味となりて神經過敏に陷り、萬人普通の分別力を喪失するに至ッた爲め、こんな大した沙汰にしたものだらう。

何のこッた、馬鹿々々しい。

實に馬鹿々々しい。全く以て馬鹿々々しい。餘り啞然れて殆んど物を言へぬ程だが、檢閱官の心では、『姉の妹』を讀む女は、皆な淫賣の利益多きを思ふて、辛勞多き正業に勵精し眞面目に貞節を守る事の馬鹿馬鹿しきを感じ、日本全國の有りと有ゆる女人を擧げて、悉く淫賣婦たるに至るを恐れたのだらう。

然し、如何に女は馬鹿なもの虛榮を悅ぶ者と開闢以來の相場が立ッてゐるにしろ『姉の妹』を讀んだくらゐで、妾も然らば今夜より淫賣婦になつて一ト稼ぎして見やうといふまでの氣を起すほどな馬鹿者では無い。女の神經は警視官憲の神經よりは稍々痴鈍て、しかく過敏では無い。

第一これは作者の風葉君には失禮の言かも知らんが、全篇を通じて夫れ程に讀む者を動かす力が無い。挑發的なセンセーショナルな處は少しも見當らぬ。僕などは『姉の妹』にあるお兼が、僅か二度目に客に出た丈けだのに、淫賣宿の女中を捉まへて『私未だ髷が似合つちや可哀そうよ』といふたり、二度目の客が若い自分よりも齡の二つ下な大學生てあつた丈けの事て、之を送り出す時に『近い中に是非來て下さいな、可い事？』と熱心に囁いたりしたといふのを讀んで、お兼は淫賣の利益多きものたるに動されるとか、淫賣に趣味を感したりするとかして墮落し、正業や貞節に眞面目になるのを厭ふやうになッたものとは思はず、寧ろお兼を以て墮落すべき先天性の傾向を有して居た女と鑑定する位てある。

のみならず、お兼が墮落の淵に片足を突ッ込んでながら、胸中に無限の苦痛を感して讖悔の一念に責め立てられ、身も心も置くに處無きまて悶き苦み『でも……勘忍して下さいね！是までの事は』と良人にそれと無く謝罪するところまて、この處丈けは其他の部分に似合はぬほど力があッて讀者を動かすやうに書かれて居る。これては、風俗壞亂どころか寧ろ却て勸善懲惡てある。

それを、何のこッた馬鹿々々しい。『風俗壞亂、發賣頒布禁止』とは。

全く以てチャンチャラ可笑しい、お臍が茶を湧すとは、これの事てある。

何のこつた、馬鹿々々しい。全く以て馬鹿々々しい。

●本號に限り　特價金貳拾五錢

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋舘屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二、三、一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　**博報堂**

○壹册定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

册數／國別	內國	外國
六册	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二册	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年六月廿六日印刷
明治四十二年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野鈃一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

